

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第425集

すき どう
杉の堂遺跡発掘調査報告書

国道4号水沢東バイパス建設関連遺跡発掘調査

国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
財岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

すぎ どう 杉の堂遺跡発掘調査報告書

国道4号水沢東バイパス建設関連遺跡発掘調査



遺跡上空（南から）



調査区上空（北から）



豎穴住居跡発掘 (S108)



平角材を用いた柱穴 (S107)



遺物出土狀況（S103）



板狀炭化材出土狀況（S103）



方形周溝完掘（S D 0 1）



出土したかわらけ（S D 0 1）

序

本県には、旧石器時代の遺跡をはじめとする、数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地に分布しております。これら先人の貴重な文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、私達県民に課せられた重大な責務であります。

一方、現代社会を豊かにし快適な生活を送るための地域開発も、県民の切実な願いであります。発掘により遺構が消滅することはまことに惜しいことではありますが、反面それまで間に包まれていた先人の営みに光明があたるものも事実であり、埋蔵文化財の保護・保存と地域開発という相容れない事業の調和のとれた施策が今日的課題となっております。

当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

本報告書は、国道4号水沢東バイパス建設工事に関して、平成14年度に発掘調査を行った岩手県水沢市杉の堂遺跡の調査結果をまとめたものであります。調査によって、遺跡は奈良から平安時代を主体とする居住域であったことが明らかとなり、該期の貴重な資料を提供する事ができました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究に寄与するとともに、埋蔵文化財に関する关心と理解をいっそう深めることに役立つことを切に希望いたします。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書の作成にあたりご協力とご支援を賜りました国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、水沢市教育委員会、水沢市埋蔵文化財センターをはじめとする関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成16年1月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 合 田 武

例　　言

1. 本報告書は、岩手県水沢市神明町2丁目58-4ほかに所在する杉の堂遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。
2. 本遺跡の調査は、国道4号水沢東バイパス建設工事に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所と岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課との協議を経て、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所の委託を受けた財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 本遺跡の岩手県遺跡台帳における遺跡番号、遺跡略号は次の通りである。
杉の堂遺跡 … (遺跡番号) N E 27-0100
(遺跡略号) S D-02
4. 野外調査の期間と面積、調査担当者は次の通りである。
調査期間：平成14年4月16日から9月4日　　調査面積：6,626m²
調査担当者：丸山直美・齋藤麻紀子
5. 室内整理期間と整理担当者は次の通りである。
整理期間：平成14年11月1日から平成15年3月31日
整理担当者：丸山直美・齋藤麻紀子
6. 報告書の執筆はIを国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、そのほかを丸山直美と齋藤麻紀子が担当し、文末に名前を付した。
7. 各遺物の鑑定・分析は次の方々にお願いした。
石質鑑定：花崗岩研究会
炭化材樹種同定：日本木炭協会
放射性炭素年代測定(AMS)：パリノ・サーヴェイ株式会社
炭化穀子同定：高瀬克範(東京都立大学)
羽口鉄滓の成分分析：赤沼英男(岩手県立博物館)
鉄製品保存処理：岩手県立博物館
8. 座標原点の測量及び空中写真撮影は、次の機関に委託した。
座標原点の測量：株式会社中央測量設計
空中写真撮影：東邦航空株式会社
9. 野外調査及び報告書の作成にあたり、次の方々からご指導・ご助言を頂いた(五十音順・敬称略)。
赤沼英男 伊藤博幸 井上雅孝 宇都剛保 小島敦子 斎野裕彦 佐藤良和 関俊明 高瀬克範 高橋千晶 津野仁 能登健 島山剛 平塙幸人 八重権忠郎 吉川純子
10. 発掘調査資料は、全て岩手県立埋蔵文化財センターが保管している。
11. 調査成果は現地説明会資料ほかに発表してきたが、本書の内容が優先するものである。

目 次

序
例言
目次

[本文]

I. 調査に至る経過	1	IV. 検出した遺構と遺物	13
II. 立地と環境	3	1. 積穴住居跡	13
1. 遺跡の位置	3	2. 遺物集中区・積穴状遺構	97
2. 遺跡周辺の地形と地質	3	3. 方形周溝・溝跡	107
3. 基本層序	7	4. 土坑	113
4. 周辺の遺跡	7	5. A・B区小柱穴群	117
III. 調査の方法と室内整理	9	V. 遺構外出土遺物	117
1. 野外調査の方法	9	VI.まとめ	141
2. 室内整理	10	VII. 分析・鑑定	161

[表目次]

第1表 周辺の遺跡一覧表	5	第7表 遺物観察表(羽口)	139
第2表 A・B区小柱穴群計測値一覧	120	第8表 遺物観察表(鉄製品)	139
第3表 遺物観察表(土器類・須恵器)	126	第9表 遺物観察表(石器・石製品)	140
第4表 遺物観察表(かわらけ)	138	第10表 積穴住居跡一覧	142
第5表 遺物観察表(国産陶器・磁器)	139	第11表 岩手県内炭化種子出土遺跡一覧	144
第6表 遺物観察表(土器製)	139	第12表 床面・カマド内出土遺物構成一覧	149

[図版目次]

第1図 周辺地形区分図	2	第35図 S I 08 積穴住居跡 (6)	43
第2図 周辺遺跡分布図	4	第36図 S I 08 積穴住居跡 (7)	44
第3図 基本土屢柱状図	7	第37図 S I 09 積穴住居跡 (1)	45
第4図 グリッド配置図	9	第38図 S I 09 積穴住居跡 (2)	46
第5図 図版周辺現況地形図	11	第39図 S I 09 積穴住居跡 (3)	47
第6図 遺跡周辺現況地形図	12	第40図 S I 10 積穴住居跡 (1)	48
第7図 S I 01 積穴住居跡 (1)	13	第41図 S I 10 積穴住居跡 (2)	49
第8図 S I 01 積穴住居跡 (2)	14	第42図 S I 10 積穴住居跡 (3)	50
第9図 S I 01 積穴住居跡 (3)	15	第43図 S I 10 積穴住居跡 (4)	51
第10図 S I 01 積穴住居跡 (4)	16	第44図 S I 10 積穴住居跡 (5)	52
第11図 S I 02 積穴住居跡 (1)	18	第45図 S I 11 積穴住居跡 (1)	53
第12図 S I 02 積穴住居跡 (2)	19	第46図 S I 11 積穴住居跡 (2)	54
第13図 S I 03 積穴住居跡 (1)	20	第47図 S I 11 積穴住居跡 (3)	55
第14図 S I 03 積穴住居跡 (2)	21	第48図 S I 12 積穴住居跡	56
第15図 S I 03 積穴住居跡 (3)	22	第49図 S I 13 積穴住居跡 (1)	57
第16図 S I 03 積穴住居跡 (4)	23	第50図 S I 13 積穴住居跡 (2)	58
第17図 S I 04 積穴住居跡 (1)	24	第51図 S I 14 積穴住居跡 (1)	59
第18図 S I 04 積穴住居跡 (2)	25	第52図 S I 14 積穴住居跡 (2)	60
第19図 S I 04 積穴住居跡 (3)	26	第53図 S I 14 積穴住居跡 (3)	61
第20図 S I 04 積穴住居跡 (4)	27	第54図 S I 14 積穴住居跡 (4)	62
第21図 S I 05 積穴住居跡	28	第55図 S I 14 積穴住居跡 (5)	63
第22図 S I 06 積穴住居跡 (1)	30	第56図 S I 14 積穴住居跡 (6)	64
第23図 S I 06 積穴住居跡 (2)	31	第57図 S I 15 積穴住居跡 (1)	64
第24図 S I 07 積穴住居跡 (1)	32	第58図 S I 15 積穴住居跡 (2)	65
第25図 S I 07 積穴住居跡 (2)	33	第59図 S I 15 積穴住居跡 (3)	66
第26図 S I 07 積穴住居跡 (3)	34	第60図 S I 15 積穴住居跡 (4)	67
第27図 S I 07 積穴住居跡 (4)	35	第61図 S I 16 積穴住居跡 (1)	68
第28図 S I 07 積穴住居跡 (5)	36	第62図 S I 16 積穴住居跡 (2)	70
第29図 S I 07 積穴住居跡 (6)	37	第63図 S I 16 積穴住居跡 (3)	71
第30図 S I 08 積穴住居跡 (1)	38	第64図 S I 17 積穴住居跡 (1)	72
第31図 S I 08 積穴住居跡 (2)	39	第65図 S I 17 積穴住居跡 (2)	73
第32図 S I 08 積穴住居跡 (3)	40	第66図 S I 18 積穴住居跡 (1)	74
第33図 S I 08 積穴住居跡 (4)	41	第67図 S I 18 積穴住居跡 (2)	75
第34図 S I 08 積穴住居跡 (5)	42	第68図 S I 18 積穴住居跡 (3)	76

第67回	S I 18堅穴住居跡 (2)	75	第93回	S X 02堅穴状遺構 (2)	101
第68回	S I 18堅穴住居跡 (3)	76	第94回	S X 02堅穴状遺構 (3)	102
第69回	S I 18堅穴住居跡 (4)	77	第95回	S X 02堅穴状遺構 (4)	103
第70回	S I 19堅穴住居跡 (1)	78	第96回	S X 03堅穴状遺構	104
第71回	S I 19堅穴住居跡 (2)	79	第97回	S X 04堅穴状遺構	105
第72回	S I 19堅穴住居跡 (3)	80	第98回	S D 01方形周溝 (1)	106
第73回	S I 19堅穴住居跡 (4)	81	第99回	S D 01方形周溝 (2)	107
第74回	S I 20堅穴住居跡 (1)	82	第100回	S D 01方形周溝 (3)	108
第75回	S I 20堅穴住居跡 (2)	83	第101回	S D 01方形周溝 (4)	109
第76回	S I 21堅穴住居跡 (1)	84	第102回	S D 02・03方形周溝	110
第77回	S I 21堅穴住居跡 (2)	85	第103回	S D 01・03方形周溝 (遺物)	111
第78回	S I 21堅穴住居跡 (3)	86	第104回	S D 04溝跡	112
第79回	S I 22堅穴住居跡 (1)	87	第105回	S K 01・02土坑	114
第80回	S I 22堅穴住居跡 (2)	88	第106回	S K 03・05土坑	116
第81回	S I 22堅穴住居跡 (3)	89	第107回	S K 06・08土坑	118
第82回	S I 22堅穴住居跡 (4)	90	第108回	A・B区小柱穴群	119
第83回	S I 23堅穴住居跡 (1)	91	第109回	遺構外出土遺物 (2)	121
第84回	S I 23堅穴住居跡 (2)	92	第110回	遺構外出土遺物 (3)	122
第85回	S I 23堅穴住居跡 (3)	93	第111回	遺構配置図	123
第86回	S I 23堅穴住居跡 (4)	94	第112回	床面・カマド内出土遺物集成 (1)	150
第87回	S I 24堅穴住居跡 (1)	95	第113回	床面・カマド内出土遺物集成 (2)	151
第88回	S I 24堅穴住居跡 (2)	96	第114回	床面・カマド内出土遺物集成 (3)	152
第89回	S X 01遺物集中区 (1)	97	第115回	床面・カマド内出土遺物集成 (4)	153
第90回	S X 01遺物集中区 (2)	98	第116回	床面・カマド内出土遺物集成 (5)	154
第91回	S X 01遺物集中区 (3)	99	第117回	床面・カマド内出土遺物集成 (6)	155
第92回	S X 02堅穴状遺構 (1)	100			

[写真図版]

写真図版 1	遺跡遺景・調査区全景	193	写真図版35	S K 05・08土坑	227
写真図版 2	遺跡全景・土層断面	194	写真図版36	S I 01堅穴住居跡出土遺物	228
写真図版 3	S I 01堅穴住居跡	195	写真図版37	S I 01・02堅穴住居跡出土遺物	229
写真図版 4	S I 02堅穴住居跡	196	写真図版38	S I 03堅穴住居跡出土遺物	230
写真図版 5	S I 03堅穴住居跡	197	写真図版39	S I 03・04堅穴住居跡出土遺物	231
写真図版 6	S I 04堅穴住居跡	198	写真図版40	S I 04～06堅穴住居跡出土遺物	232
写真図版 7	S I 05堅穴住居跡	199	写真図版41	S I 06・07堅穴住居跡出土遺物	233
写真図版 8	S I 06堅穴住居跡	200	写真図版42	S I 07堅穴住居跡出土遺物	234
写真図版 9	S I 07堅穴住居跡	201	写真図版43	S I 07・08堅穴住居跡出土遺物	235
写真図版10	S I 08堅穴住居跡	202	写真図版44	S I 08堅穴住居跡出土遺物	236
写真図版11	S I 09堅穴住居跡	203	写真図版45	S I 08～10堅穴住居跡出土遺物	237
写真図版12	S I 10堅穴住居跡	204	写真図版46	S I 08～10堅穴住居跡出土遺物	238
写真図版13	S I 11堅穴住居跡	205	写真図版47	S I 10・11堅穴住居跡出土遺物	239
写真図版14	S I 12堅穴住居跡	206	写真図版48	S I 13・14堅穴住居跡出土遺物	240
写真図版15	S I 13堅穴住居跡	207	写真図版49	S I 14堅穴住居跡出土遺物	241
写真図版16	S I 14堅穴住居跡	208	写真図版50	S I 14・15堅穴住居跡出土遺物	242
写真図版17	S I 15堅穴住居跡	209	写真図版51	S I 15堅穴住居跡出土遺物	243
写真図版18	S I 16堅穴住居跡	210	写真図版52	S I 16堅穴住居跡出土遺物	244
写真図版19	S I 17堅穴住居跡	211	写真図版53	S I 17・18堅穴住居跡出土遺物	245
写真図版20	S I 18堅穴住居跡	212	写真図版54	S I 18・19堅穴住居跡出土遺物	246
写真図版21	S I 19堅穴住居跡	213	写真図版55	S I 19堅穴住居跡出土遺物	247
写真図版22	S I 20堅穴住居跡	214	写真図版56	S I 20・21堅穴住居跡出土遺物	248
写真図版23	S I 21堅穴住居跡	215	写真図版57	S I 21・22堅穴住居跡出土遺物	249
写真図版24	S I 22堅穴住居跡	216	写真図版58	S I 22・23堅穴住居跡出土遺物	250
写真図版25	S I 23堅穴住居跡	217	写真図版59	S I 23・24堅穴住居跡出土遺物	251
写真図版26	S I 24堅穴住居跡	218	写真図版60	S I 24・S X 01出土遺物	252
写真図版27	S X 01遺物集中区	219	写真図版61	S X 01・S X 02出土遺物	253
写真図版28	S X 02堅穴状遺構	220	写真図版62	S X 02堅穴状遺構出土遺物	254
写真図版29	S X 03堅穴状遺構	221	写真図版63	S D 01～03方形周溝・ 遺構外出土遺物 (1)	255
写真図版30	S X 04堅穴状遺構	222	写真図版64	遺構外出土遺物 (2)	256
写真図版31	S D 01方形周溝	223	写真図版65	遺構外出土遺物 (3)	257
写真図版32	S D 02・03方形周溝	224	写真図版66	遺構外出土遺物 (4)	258
写真図版33	S D 04溝跡・作業風景他	225			
写真図版34	S K 01～04土坑	226			

I. 調査に至る経過

「杉の堂遺跡」は、水沢東バイパス改築工事の施工に伴って、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することとなったものである。

一般国道4号は、東京を起点として、福島県、宮城県、岩手県を経て青森県に至る主要幹線道路である。

水沢東バイパスは、水沢市真城字大深沢を起点とし、同市佐倉河十文字を終点とした国道4号の交通混雑解消と、交通安全の確保、沿道環境の改善を図ると共に高速時代の一端を担い地域経済発展の横幹となる道路として昭和60年度より事業化し進めてきた。

現在までに、終点側より延長3,600メートルについて暫定2車線の供用を行っており、延長は9,600メートルである。

又、バイパス整備の効果として特に次の4点を目標としている。

1. ゆとりのある交通

交通混雑が解消され、スムーズな通勤・通学が出来るようになる。

2. 生活環境の改善

交通がスムーズに流れため騒音、振動が改善され、住みやすい町づくりに貢献する。

3. 安全な交通

交通量が分散減少され、沿道の人々や通過する人々の交通の安全性が高まる。

4. 地域活性化の支援

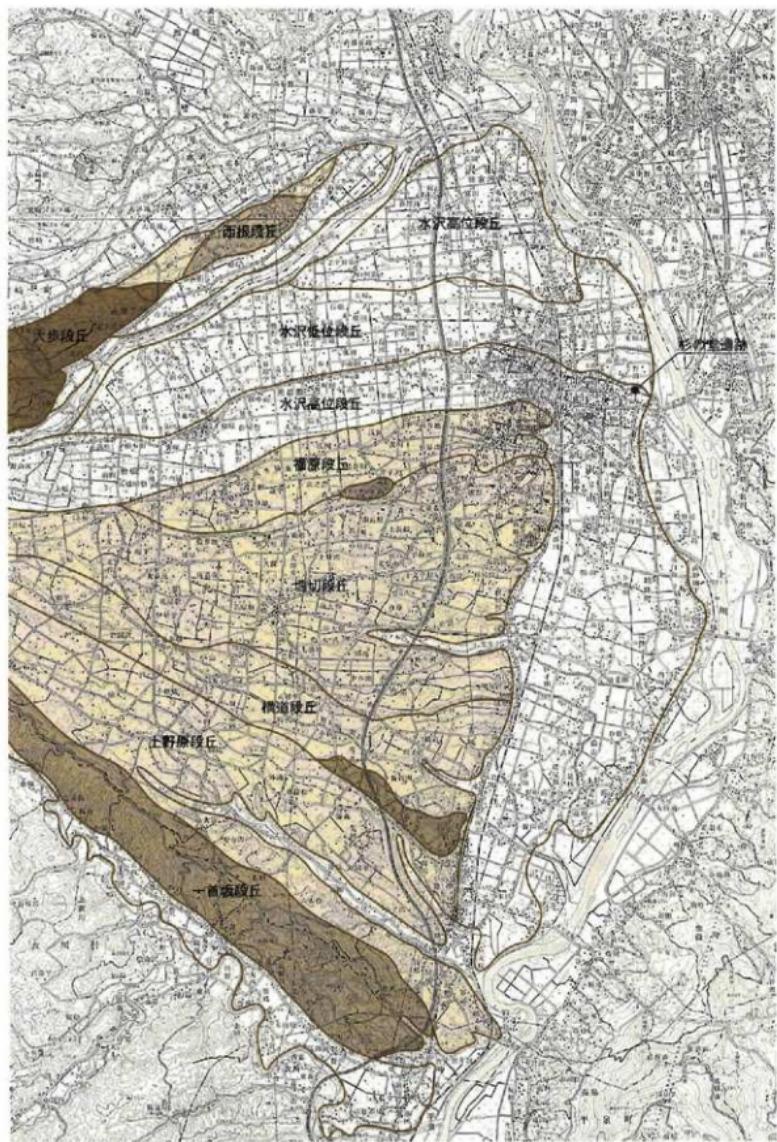
産業・観光を支える道路の機能が強化され、地域が活性化する。

この区間の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が昭和62年度に分布調査を実施し、「杉の堂遺跡」も確認されている。

同遺跡の試掘は平成13年度に実施され、その結果に基づいて岩手県教育委員会は国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所に対し、事業について照会した。回答を得た岩手県教育委員会は岩手河川国道事務所と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

これにより、岩手県教育委員会は、平成14年度事業について、財団法人岩手県文化振興事業団へ通知した。これを受けた財団法人岩手県文化振興事業団は平成14年4月1日付けで岩手河川国道事務所長と受託契約を締結し、「杉の堂遺跡」の発掘調査に着手した。

(国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所)



第1図 周辺地形区分図

Ⅱ. 立地と環境

1. 遺跡の位置

杉の堂遺跡は、岩手県南部の水沢市神明町二丁目58-4他に所在し、東日本旅客鉄道東北本線水沢駅の東約1.4kmの地点、北上川西岸の河岸段丘上に立地する。本遺跡は、国土地理院発行の5万分の1地形図「水沢」(N J-54-14-14)の図幅に含まれ、その地点は北緯36° 08' 21" 東経141° 09' 45" 付近である(世界測地系に基づく)。標高は42~43m、遺跡の東方約700mを南流する北上川との比高は約11mである。

遺跡の所在する水沢市は、岩手県南部の北上山地と奥羽山脈に挟まれた低地帯に位置し、県庁所在地盛岡市までは65kmの距離にある。北は金ヶ崎町、南は前沢町、西は胆沢町、東は江刺市と境を接しており、その面積は約96km²である。水沢市街地は北上川と胆沢川の合流点にも近く、南北に東北新幹線、東北本線の鉄道網と東北縦貫自動車道、国道4号が、東西には国道343号と397号が走っている。同市は胆沢地区の交通上の要衝、中心的役割を果たしていると同時に、本県唯一の穀倉地帯としても有名である。

2. 遺跡周辺の地形と地質

水沢市は、東北最大の大河北上川中流域に位置し、市のほぼ中央を北上川が南流する。川を挟んだ東西の地形は、大きく異なる様相を呈している。東岸の地質は主として古生層からなり、北上山地に連なる丘陵が迫る。西岸は新第三系と呼ばれる地層からできいて、奥羽山脈の隆起と胆沢川の浸食、堆積によって形成された胆沢扇状地が広がる。県内最大、北上川流域最大の面積を持つこの扇状地の上には、広大な段丘群が展開している。この段丘群は南から北に向かってだんだんと低下しており、高位のものから人首段丘・胆沢段丘・水沢段丘に大別される。さらに胆沢段丘は、上野原・横道・堀切・福原の各段丘に、水沢段丘は上位面と下位面に分けることができる。水沢市では市域の多くの部分が水沢段丘に属している。

本遺跡は、北上川に架かる小八木橋の北西約700m、水沢高位段丘の段丘崖縁辺部に位置している。下位面との比高は3~4mである。花園町、神明町から杉の堂付近へと続く段丘崖には多数の湧泉が湧き出でており、その周辺には縄文時代以来、数多くの集落が形成され密集している。

低位段丘にあたる遺跡の北側には、堰を挟んで一面の水田地帯が広がっているが、南側の高位段丘上では、表層土が1m前後と薄い上に地下水の水位が低いこと、表層地質が細砂からシルト質の土壤であることなどから水田には適さない土地であるとされている。そのため、遺跡の現況は宅地やリンゴ畑として利用されており、水田開発による破壊を免れた。周辺は住宅地であるが、国道4号水沢東バイパスの伸長に伴って、今後の発展が予想される地域でもある。

《参考・引用文献》

- 水沢市教育委員会（1984）：水沢市文化財調査研究年報1984『水沢の自然と文化』
(財)水沢市埋蔵文化財調査センター（1996）：水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書第7集『杉の堂遺跡』
(財)水沢市埋蔵文化財調査センター（1998）：水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書第10集『杉の堂遺跡群』
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（2000）：埋蔵文化財調査報告書第314集『悠前町遺跡発掘調査報告書』
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（2002）：埋蔵文化財調査報告書第395集『北田Ⅱ遺跡発掘調査報告書』



第2図 周辺地質分布図

第1表 周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	種別	内 容
1	八ツ口	奈良・平安	集落跡	土師器・須恵器
2	北貴前	奈良・平安	集落跡	土師器・須恵器
3	北貴	奈良	集落跡	土師器・須恵器
4	勝性	古墳・平安	集落跡	土師器・須恵器等
5	勝状城	平安	城跡	國指定重要文化財
6	北館	奈良・平安	散布地	土師器・須恵器
7	佐留	平安	散布地	土師器
8	後発堂	金	散布地	土師器・須恵器
9	伯雨寺	中世	散布地	土師器・須恵器
10	御子島	早	散布地	國文土器・土師器等
11	富田(A)	繩文・平安	散布地	須恵器等
12	藤古	繩文・平安	集落跡	須恵器等
13	白井坂 I	中世	城跡	空堀・復郭
14	白井坂 II	中世	城跡	空堀・復郭
15	福ノ内館	中世	城跡	平地居宅
16	戦堂	平安	散布地	國社土師器
17	戦堂 II	中世	集落跡	
18	東大塚 I	平安	散布地	須恵器
19	東大塚 II	繩文・平安	集落跡	土師器・須恵器
20	東大塚	平安	集落跡	土師器・須恵器・石器
21	面坂	古墳・奈良	散布地	土師器・須恵器
22	次坂 I	平安	散布地	土師器
23	次坂 II	平安	散布地	土師器
24	東前 I	中世	散布地	陶器
25	東前 II	平安	散布地	土師器
26	仙人西	平安	集落跡	土師器・須恵器
27	佐野原	繩文・平安	散布地	土師器・須恵器等
28	下河原蓋石	平安	散布地	土師器
29	曉経西	繩文・平安	散布地	土師器・須恵器等
30	道木	平安	散布地	土師器・須恵器等
31	西光田 I	平安	散布地	土師器・須恵器
32	久田	平安	散布地	土師器・須恵器
33	南久田	平安	散布地	土師器・須恵器
34	西郷	平安	散布地	土師器・須恵器
35	福井田	平安	散布地	土師器・須恵器
36	仙人東	弥生・平安	集落跡	土師器・須恵器等
37	沢田	繩文・平安	散布地	土師器・石器
38	東前治遺	繩文・平安	散布地	土師器・石器
39	蟹沢	平安	集落跡	土師器・須恵器
40	矢中	平安	散布地	土師器・須恵器
41	南坂沢	平安	散布地	土師器・須恵器
42	高谷	繩文・平安	散布地	土師器・須恵器等
43	曉船	中・近世	城跡	塹・土塁
44	豊前町	繩文・平安	散布地	土師器
45	移ヶ瀬	繩文・平安	散布地	土師器・フレーク
46	石橋	平安	集落跡	出生土器・土師器
47	中前田	弥生・平安	集落跡	土師器・須恵器等
48	曉社	繩文・平安	散布地	土師器
49	東神ノ日	平安	集落跡	赤色クロコ土師器等
50	久根裏	奈良	散布地	漢更器
51	北田 I	平安	散布地	土的同・候洋
52	北田 II	弥生・奈良・平安	散布地	弥生土器・石器・菅玉
53	新藤庄町	弥生・奈良・平安	散布地	土崩器・須恵器
54	女子高塚跡	平安	散布地	土崩器
55	木山	平安	散布地	土崩器・須恵器
56	藤田	平安	散布地	土崩器・須恵器
57	一本杉	平安	散布地	土崩器
58	南矢中	平安	散布地	土崩器・須恵器
59	北田	繩文・平安	散布地	土崩器・須恵器
60	高屋敷	平安	散布地	土崩器・須恵器
61	蛇坂	不 明	塙跡	メノウ勾玉
62	野田	繩文・平安	散布地	土崩器・石器
63	北田 II	弥生・平安	集落跡	弥生土器・土師器
64	跡呂井塚(劉源塚)	奈良・平安・中世	城	塹・復郭
65	沿房	平安	散布地	土師器
66	大学 I	繩文・平安	集落跡	土師器・須恵器等
67	大学 II	繩文・平安	集落跡	土師器・フレーク
68	垣ノ内 II	繩文・平安	散布地	國文土器・土師器等
69	垣ノ内 I	中・近	散布地	陶器
70	鬼坂	繩文・平安	散布地	國文土器(中崩)等
71	小山崎	繩文・中世	散布地	國文土器(中崩)等
72	現原	平安	集落跡	土師器・須恵器
73	美谷地	繩文・平安	集落跡	土師器・須恵器・フレーク等
74	附野森	繩文・中世	散布地	國文土器・海田器
75	黒ヶ馬場	平安	散布地	土師器
76	須江	平安	集落跡	土師器・須恵器

No	遺跡名	時代	種別	内 容
77	林前	平安	集落跡	土師器・須恵器
78	林前南跡	平安	城郭跡	土師器・石器
79	林前施	中世	城郭跡	單刃
80	上御体跡	中世	城郭跡	空堀・甫那
81	大内田前	平安	散布地	土師器・須恵器
82	林前日	平安	散布地	土師器・須恵器
83	水ノ口	平安	散布地	須恵器
84	上野	平安	散布地	土師器・須恵器
85	大堤	平安	集落跡	土師器・須恵器
86	向田	平安	散布地	須恵器
87	北野丁	平安	散布地	土師器・須恵器
88	小水ノ口	平安	散布地	土師器・須恵器
89	施体東堂Ⅲ	平安	散布地	土師器・須恵器
90	北白山	平安	散布地	土師器・須恵器
91	元天神南丘	平安	散布地	土師器・須恵器
92	水ノ口前來	平安	散布地	土師器・須恵器
93	北野日	平安	散布地	土師器・須恵器
94	北野日	平安	散布地	土師器・須恵器
95	金田丁	平安	集落跡	土師器・須恵器
96	高田	平安	集落跡	土師器・須恵器
97	富特丁	平安	集落跡	土師器・須恵器
98	中林A	平安	集落跡	土師器・須恵器
99	中林下	平安	集落跡	土師器・須恵器
100	中林B	平安	集落跡	土師器・須恵器
101	中林B	中世	散布地	土師器・須恵器
102	境ヶ沢丁	平安	集落跡	土師器・須恵器
103	境ヶ沢丁	平安	散布地	土師器・須恵器
104	折居跡(要素)	中・近世	城館跡	單郭・濠・土島
105	二ノ瀬	平安	散布地	土師器・須恵器・陶器
106	真城花合	平安	散布地	土師器
107	中野城	中世	城館跡	環濠復舊
108	中平原	中世	散布地	單郭・堀
109	中平東	平安	散布地	土師器・須恵器
110	中平東	平安	散布地	土師器・須恵器
111	寺ヶ森日	平安	散布地	土師器・須恵器
112	日根	豆	散布地	土師器・須恵器
113	北白山日	平安	散布地	土師器・須恵器
114	櫛ノ口	平安	散布地	土師器・須恵器
115	土手所	平安	散布地	土師器・須恵器
116	三ツ瀬南	平安	散布地	土師器・須恵器
117	東林	中・近世	散布地・散落跡	一字・石絆
118	谷地	平安	城館跡	單郭
119	六日城	平安	城館跡	連郭・土島・空堀
120	西城	中世	城館跡	單郭・牛場
121	内前(下野作城)	中世	城館跡	單郭・平場
122	新川川	古代	散布地	土師器
123	後中野	鵜文・古代	集落跡	鵜文土器・土師器・須恵器
124	高地	古代	集落跡	土師器・須恵器
125	朴ノ木	古代	散布地	土師器
126	下悠田	鵜文・古代	散布地	鵜文土器・土師器・須恵器
127	寺田Ⅱ	鵜文・古代	散布地	鵜文土器・土師器
128	寺田	弥生・古代	散布地	弥生土器・土師器・須恵器
129	後田丁	古代	散布地	土師器
130	五位塙古墳群	古	塙	塙
131	力石畠	鵜文・古代	散布地	鵜文土器・冰化土器・土師器・須恵器
132	浦ノ毛植	(平安)・古代	城館跡・集落跡	土師器・須恵器・住居跡・堀
133	大堤	古代	散布地	土師器・須恵器
134	荒広田	古代	散布地	土師器
135	中尾敷	古代	散布地	土師器・須恵器
136	四井	古代	散布地	土師器
137	鹿野	鵜文・古代	散布地	鵜文土器
138	羽黑東古墳	鵜文・古代	城館跡	須器・平場・空堀
139	外浦洗田	平安	城館跡	須庭跡
140	雷田	平安	散布地	土師器
141	旧羽田中	鵜文・平安	散布地	鵜文土器・土師器・須恵器
142	北海木方八丁	鵜文・中世	城館跡	鵜文土器・復器・平場・堀
143	高ノ木斎田法師塚	中世	塙	塙
144	鶴城跡	中世	城館跡	連郭・平場
145	鶴城	鵜文・平安	散布地	鵜文土器(後・晚期)・須恵器
146	妙の堂	古墳・飛鳥・平安	集落跡	土師器・須恵器・かわらけ・陶器

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター (1996) : 「龍ヶ馬場遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書第243集

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター (1997) : 「白井坂丁・Ⅱ遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書第248集

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター (1998) : 「北野丁遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書第272集

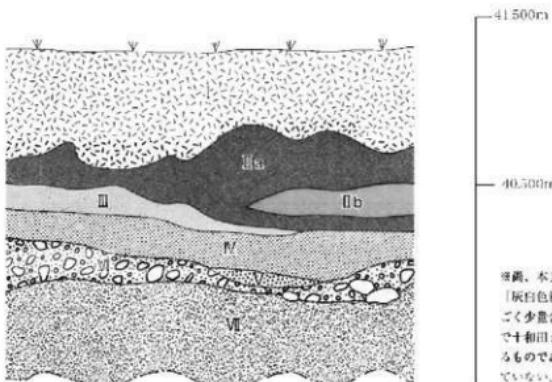
(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター (2000) : 「笠前町遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書第314集

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター (2002) : 「北田Ⅱ遺跡」埋蔵文化財発掘調査報告書第395集

3. 基本層序

調査区内では以下のような層序が観察された。調査区は南西の隅から北側段丘縁に向かって緩い下り勾配で傾斜している。

- I. 10Y R2/3 黒褐色シルト 粘性やや強 しまりやや強
10Y R4/6 深褐色シルト斑状10%含む 雜物多い (耕作土)
II a. 10Y R2/2 黒褐色シルト 粘性中 しまり密
II b. 10Y R3/3 暗褐色シルト 粘性中 しまり中
III. 10Y R3/2 黒褐色シルト 粘性やや強 しまり密
IV. 10Y R3/4 暗褐色シルト 粘性やや強 しまり密
10Y R2/2 黒褐色シルトが混じる (漸移層)
V. 10Y R4/4 深褐色シルト 粘性やや強 しまり中
10Y R4/3 にぶい黄褐色砂質シルト混じる
VI. 10Y R4/6 深褐色の砂礫 粘性弱 しまり密 径10cm大の砾含む
VII. 10Y R3/4 暗褐色の砂 粘性弱 しまりやや強 径1~3cm大の砾含む



注記。本文図版註記中で記載のある「灰白色粒」は、遺構の埋土のみにごく少混合されるテフラ状の混入物で十和田山降下火山灰の可能性のあるものである。科学的分析は実施していない。

第3図 基本土層柱状図

4. 周辺の遺跡

水沢市には古い時代から人々の生活の痕跡が残っており、岩手県教育委員会生涯学習文化課遺跡台帳によると計320ヶ所の遺跡が登録されている。そのうちもっと多いのは平安時代の遺跡であり、ついで鎌文時代、中世となっている。鎌文早期など古い時代の遺跡は上位の段丘や、北上川東岸の丘陵地を中心に分布するが、里窓跡などに代表される後・晩期には下位の水沢段丘面に、さらに弥生時代には水田として利川可能な畠地へと分布が広がっていく。

古墳時代から奈良時代では遺跡の数は比較的少なくなるが、7世紀に入って増加の傾向を見せる。この時期の代表的な遺跡は21面塚遺跡・4賀性遺跡・20東大畑遺跡・3玉貫遺跡などである。6世紀前半の面塚遺

跡からは、4. 5世紀には見られなかった、カマドを持つ住居が見つかっている。唐性遺跡は古墳時代後期から平安時代を中心にして、中世まで続いている。集落や住居の変遷が辿れる貴重な遺跡である。またこの遺跡では奈良時代の住居跡から主頭大刀の柄頭が出土している。同様に8世紀の東大寺遺跡からも中央政権の位を示す石帶が出土しており、この地方と中央との交流を示すと共に社会の階層化を示す資料となっている。

8世紀から9世紀初頭にかけての時期は、胆沢地方が大きく混乱した時期である。中央政府の進出による恒常的な戦争状態が続いた後、その結果として律令体制に組み込まれていくのである。136四丑遺跡はこの古戦場の擬定地であるとされている。このような中、現在国指定史跡とされている5胆沢城が作られた。胆沢城は杉の堂遺跡から北西約4.5kmの地点に位置しており、延暦二十一年（802年）坂上田村麻呂によって、軍事・行政の機能を併せ持つ東北支配の拠点として作られた施設である。約150年に渡ってこの地を支配しており、この地域の平安時代は胆沢城を中心に発展していったと言っても過言ではない。

胆沢城が作られた9世紀初頭以後は集落数が増加して居住域も広がり、同時に遺跡に現れる集落の形態が大きく変化する。奈良時代までの自然発生的な集落ではなく、人為的に作られ支配された計画村落・政治村落が見られるようになり、規模も大集落よりは中小の集落が中心となる。それらの集落跡では造構が計画的に配置・区画されており、土地利用の制約と地元勢力の分断を意図した中央の方針を読み取ることができる。このように計画的に作られた村落は、先に挙げた唐性遺跡・77林前遺跡・袖谷地遺跡・58南矢中遺跡に見ることができる。

集落の変化と同時に生産に関わる遺跡の増加も見られるようになる。農業生産の面では9~10世紀頃に集中し、124宮地遺跡・中林遺跡などで畠跡が、53常磐広町遺跡・中半入遺跡からは水田跡が確認されている。また須恵器の生産も行われるようになり、胆沢城の官窯とされる江差市の瀬谷子遺跡・水沢市の見分森窯跡などが作られている。

10世紀後半頃になると胆沢城の機能は失われ、それ以後は在地武士団の台頭に関わる造構・遺物が見られるようになり、11世紀に台頭した安倍氏や平泉の藤原氏の支配を経て、中世へと進んでゆく。

杉の堂遺跡は以前から縄文時代晩期と奈良・平安時代の造構・遺物が検出される遺跡として知られており、今まで本調査も含め25次に亘って調査が行われている。今後も国道4号水沢東バイパスの伸長に伴い、遺跡の領域はさらに広がるものと推定される。水沢市では今後も杉の堂遺跡の発掘調査を続ける予定であり、遺跡の全容の解明が待たれる所である。

（齋藤麻紀子）

《参考・引用文献》

- 水沢市教育委員会(1984)：水沢市文化財調査研究年報1984『水沢の自然と文化』
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター(1996)：埋蔵文化財調査報告書第243集「龍ヶ馬場遺跡発掘調査報告書」
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター(1997)：埋蔵文化財調査報告書第248集「白井坂Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書」
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター(1998)：埋蔵文化財調査報告書第272集「北野Ⅳ遺跡発掘調査報告書」
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター(2000)：埋蔵文化財調査報告書第314集「悠前町遺跡発掘調査報告書」
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター(2002)：埋蔵文化財発掘調査報告書第380集「中半入遺跡・般夷塚古墳発掘調査報告書」
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター(2002)：埋蔵文化財発掘調査報告書第395集「北田Ⅱ遺跡発掘調査報告書」
河出書房新社 国説 日本の歴史3 「国説 岩手県の歴史」

III. 調査の方法と室内整理

1. 野外調査の方法

(1) グリッドの設定

グリッドの設定は、国家座標第X系に合わせて基準点2点を設定して基準線とし、これを通るような補点2点を設定した。これらの点は、平成12~13年度に亘って当センターが調査を行った北田Ⅱ遺跡のグリッドにならうものとした。

大グリッドは、これらの点を通るような形で、西から東に50m間隔でA・B・Cとアルファベットの大文字を、北から南にX・XⅠ・XⅡと昇順するローマ数字をあてて区画した。またA区より西側の部分に関しては、-A区として表した。小グリッドは大グリッドを5×5mの間隔で細分し、東西にa~jのアルファベットの小文字を、南北に1~10の算用数字をあてて区画した。グリッドの基点は北西に置き、調査区の名称は大グリッドと小グリッドの組み合わせでXA1a、XB2bというように呼称している。

基準点、補点の国家座標第X系の座標値は以下の通りである。

	日本測地系		世界測地系		標高
基準点1	X = -95,770,000	Y = 28,780,000	X = -95,461,821	Y = 28,479,697	H = 41.150m
基準点2	X = -95,820,000	Y = 28,780,000	X = -95,511,821	Y = 28,479,697	H = 40.480m
補点1	X = -95,820,000	Y = 28,730,000	X = -95,511,821	Y = 28,429,697	H = 42.197m
補点2	X = -95,850,000	Y = 28,780,000	X = -95,541,822	Y = 28,479,696	H = 40.653m

(2) 粗堀・遺構検出

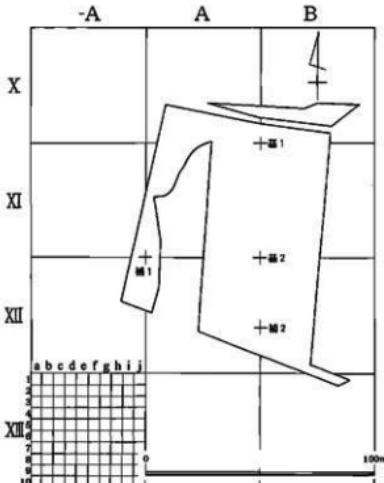
調査は、雜物の除去後に表土の厚さや遺構の有無・遺物の出土状況を確認する目的で、調査区全体に人力により数本のトレンチを入れ、その後重機を使用して表土除去を行った。次に試掘結果に基づき、人力により遺構の有無を確認しながら地山まで掘り下げた。

(3) 遺構の命名・精査と遺物の取り上げ

検出された遺構は、検出履・種別ごとにS I 01堅穴住居跡、S K 03土坑というように命名した。基本土層の層位はローマ数字、遺構埋土の土層は算用数字で表した。

遺構の精査は4分法を原則として土層を観察しながら進めたが、必要に応じて他の方法も併用した。精査の各段階において必要図面の作成や写真の撮影も適宜行っている。

遺物の取り上げに当たっては、遺構内では埋土上位・中位・床面等で取り上げ、遺構外遺物については小グリッドと基本層序で取り上げた。



第4図 グリッド配置図

(4) 実測・写真撮影

各遺構とも平面実測はグリッド軸に合わせた1mのメッシュを基準として、断面実測では水平水糸を張り基準として行った。原則として20分の1縮尺を用い、必要に応じてその他の縮尺も用いた。

野外調査における写真撮影は、35mm判2台（モノクローム・カラーリバーサル各1台ずつ）と6×9判モノクローム1台を使用し、遺構・遺物の検出状況や出土状況を中心に撮影した。他ポラロイドカメラ1台、デジタルカメラ1台をメモ的に使用している。

2. 室内整理

図面の点検・合成・遺物の洗浄・写真的整理は、原則として野外調査と並行して行った。

(1) 遺物の処理

遺物は、洗浄後に全出土遺物を点検し、実測や拓本の必要なものを選択した後、遺構内外に分けて登録し、注記・接合・復元の順に進めた。その後、写真撮影・実測・トレース・図版作成と作業を進めた。

(2) 遺構図面

遺構図面は、平面図・断面図の照合、土層注記・レベル等の確認後に第二原図を作成し、その後トレース・遺構図版組みの順に作業を進めた。

1. 遺構図の用例は下記の通りである。

(1) 遺構実測図の縮尺は基本的に竪穴住跡・遺物集中区・竪穴状遺構・方形周溝1/60、土坑1/40、柱穴状小ピット群1/120である。ただし遺構規模の関係上これに合わない図面もあるため、その都度スケールおよび縮尺を付した。

(2) 推定線は原則として破線で表記した。これに沿わない場合は挿図中に記した。

(3) 色画の観察に当たっては、農林水産省農林水産技術会議事務所監修「新版標準土色帖」を使用した。

(4) 図面中の土器は「P」、礫は「S」の略号で表記した。

(5) 挿図中で使用したスクリートーンの用例は下図の通りである。それ以外の物についてはその都度挿図中に記した。

2. 遺物実測図の用例は下記の通りである。

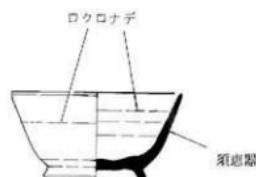
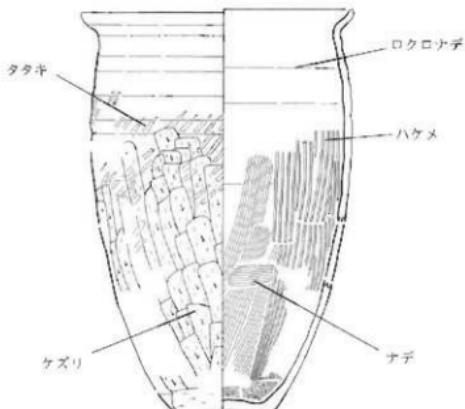
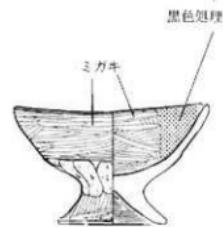
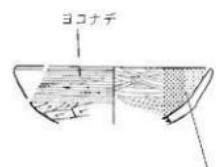
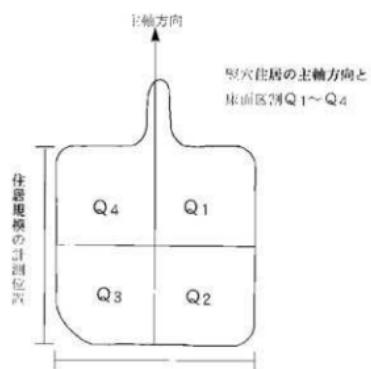
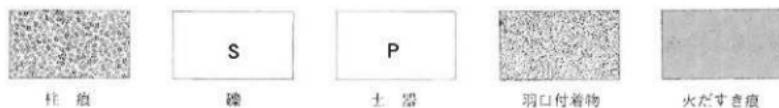
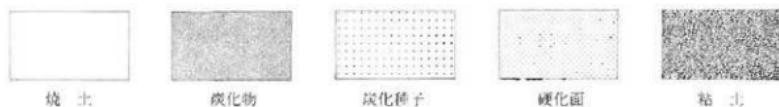
(1) 縮尺は土器・礫石器が1/3（大形の土器1/4、1/6）、古錢が1/1、その他が1/2である。尚、同一図版上に異なる縮尺の遺物が混在する場合は、その都度スケール及び縮尺を付した。

(2) 土器の実測にあたり、口縁部1/5以上残存する場合は努めて図上復元を試みた。

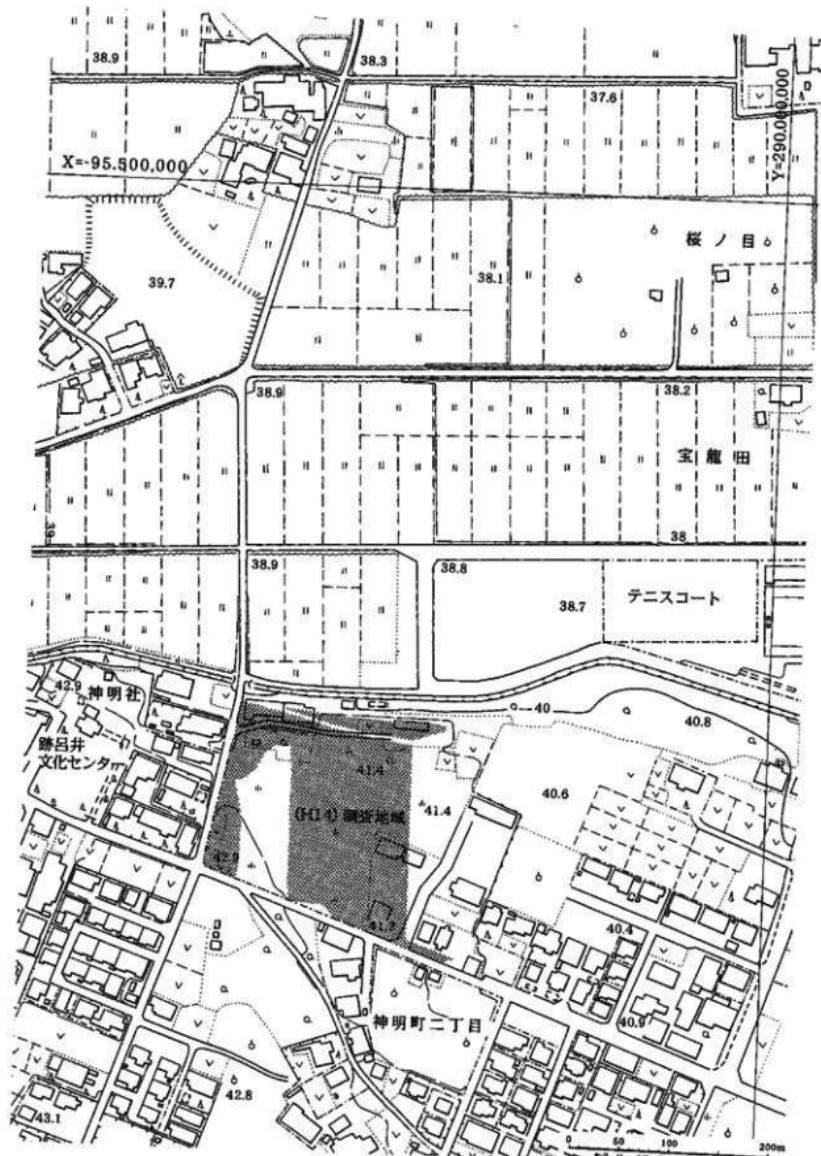
(3) 本文および遺物観察表の数値に冠した（ ）は推定値を、ーは残存値を示している。

3. 国土地理院発行の地形図を複製したものは、図中に図幅名と縮尺を記した。

4. 引用・参考文献は各章末に記した。



第5図 図版凡例



第6回 遺跡周辺現況地形図

座標系は日本測地系による。

IV. 検出した遺構と出土遺物

1. 穴住居跡

S I O 1 穴住居跡

遺構（第7～9図、写真図版3）

＜位置・重複関係＞X I B10cグリッド、検出面はⅣ層の暗褐色シルトである。東壁は本調査前試掘時の削平により消失している。北東側で24号穴住居、4号土坑と重複しており、これにより切られる。

＜規模・平面形＞東辺6.2m、西辺6.4m、南辺6.2m、北辺6.19mのほぼ開丸方形を呈する。

＜埋土＞黒褐色シルトを主体として構成され、全体に焼土粒、炭化物粒を含む。

＜壁＞暗褐色シルトを振り込んで構築している。壁高の残存高は15～28cmである。

＜床面＞床面上4～15cmほどのところで拳大の礫が多量に認められた。床面そのものはほぼ平坦でしまっており、東西と南北の壁際には溝溝が巡る。8層は黒褐色シルトと明黄褐色シルトの混合土で、貼り床と考えられる。

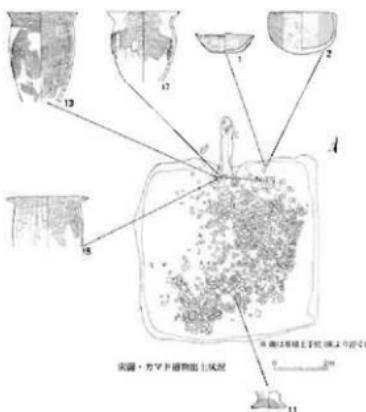
＜カマド＞北壁の中央に構築されている。煙道、撲出し部は近接する24号住居跡による削平を受け、残存状態は不良である。カマド本体は黒褐色と暗褐色のシルト主体で造られ、左右の袖には拳大の礫や土師器長脚甕が芯材として用いられる。火床面は76cmほどの梢円形で、酸化面は弱く、赤褐色焼土ブロックが混入する程度である。燃焼部中央には拳大の礫に土師器甕の底部を被せた支脚が検出された。煙道部は残存部で幅45cm、長さ184cm前後の溝状に振り込まれる。煙道部は撲出孔に向かう徐々に深くなっている。確認面からの深さは26cmである。煙道の構造など詳細は残存不良のため不明である。

＜柱穴・ピット＞床面の四隅から計4基の柱穴と、北東隅にピットを1基検出した。柱穴は径40～55cm、深さ30～40cm前後で平面形は円形を呈する。これらは配作により、住居内の主柱穴を構成するものと考えられる。ピットは径42cm、深さ19cm、平面形は同様に円形を呈している。

遺物（第10図、写真図版36・37）

21点が出土した。床面から土師器片10点、カマド芯材として土師器片4点、支脚に転用された土師器片1点、住居地積土から土師器片6点である。器種は壺、高壺、甕で構成され、製作に際してロクロは使用されていない。3は土師器杯でS I O 2カマド周辺床面から出土した破片と接合した。17はカマド構成材となる土師器甕でS I O 2の1層から出土した破片と接合した。

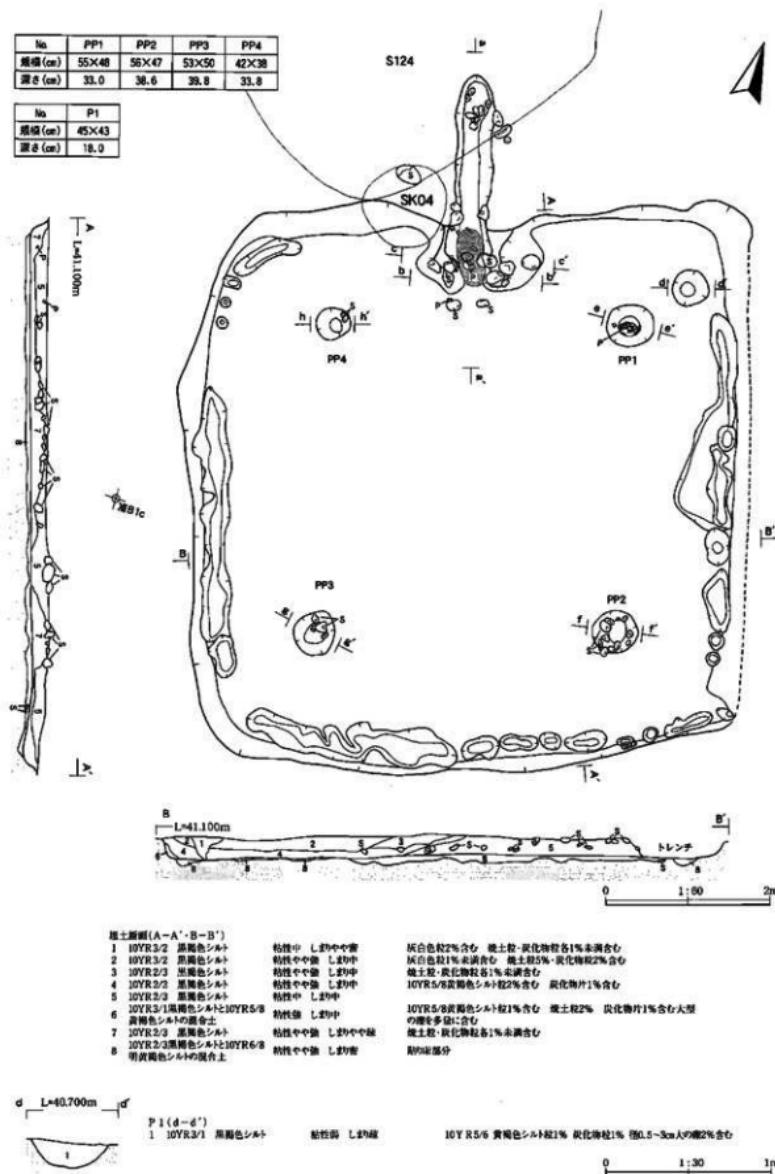
【小結】床面直上で多量に認められた礫は、拔出状況から判断して一括して廃棄されたような状態を示すものと推測された。礫は周辺の基盤礫層のものと類似することから、隣接する2号住居を構築する際の基盤礫が本住居跡の廃絶後に投げ込まれたものである可能性がある。遺物の特徴から本遺構は奈良時代に属するものと推察される。



第7図 S I O 1 穴住居跡 (1)

No.	PP1	PP2	PP3	PP4
幅(㎝)	55×48	56×47	53×50	42×38
深さ(㎝)	33.0	38.6	39.8	33.8

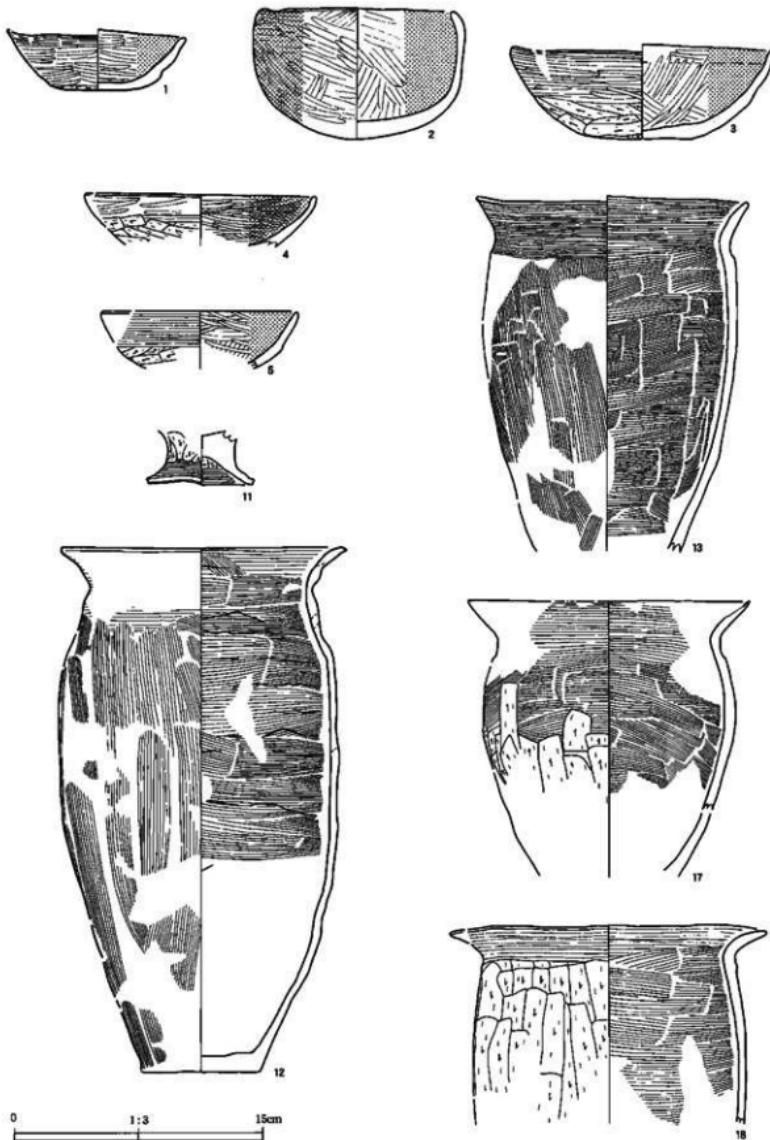
No.	P1
幅(㎝)	45×43
深さ(㎝)	18.0



第8図 S101堅穴住居跡 (2)



第9図 S101製穴住居跡 (3)



第10図 S101堅穴住居跡(4)

S I O 2 積穴住居跡

遺構（第11・12図、写真図版4）

＜位置・重複関係＞X II B 1 e グリッドに位置する。東隣は調査区外にかかるので、この部分については未調査である。検出面はIV層下位である。東壁は本調査前試掘時の削平により消失している。検出された段階で上部は削平されており、床上数cmを残すのみとなっていた。

＜規模・平面形＞北東辺-4.12m、北西辺6.9m、南西辺6.48m、南東辺-3.0mのほぼ隅丸方形を呈するものと推定される。東隣が調査区外にかかるため北東辺、南東辺の値は残存値である。

＜埋土＞黄褐色シルトを含む黒褐色シルトを確認したのみである。これより上位は削平されており不明である。

＜壁＞壁高の残存値は2~8cm前後である。

＜床面＞段丘基盤疊まで掘り込んで床面としており、堅くしまる。西~北西の壁際の一部に壁溝が巡る。貼り床は確認できなかった。

＜カマド＞北西壁の中央に構築されている。煙道、煙出し部はトレンチ窓による搅乱を受け、残存状態は不良である。カマド本体はにぶい黄褐色、黒褐色~暗褐色のシルトで造られ、左右の袖には径18~26cmの窪が芯材として用いられる。火床面には径60×45cm、厚さ10cmの範囲で焼土が形成され、強い酸化面を形成する。支脚は検出されていない。煙道部は残存部で幅36cm、長さ180cm前後の溝状に掘り込まれる。煙道部は煙出孔へほぼ平坦に続いており、煙出孔は径55×40cm 深さ17cmの土坑状に掘り込まれる。煙道の構造など詳細は残存不良のため不明である。

＜柱穴・ピット＞床面から計4基の柱穴および土坑が検出された。規模は径50~80cm、深さ34~45cm前後で平面形は円形を呈する。P P 1~P P 3は配列により主柱穴の一部を構成するものと考えられるが、P 1に関しては位置・形状から判断して土坑と考えられる。柱穴は更に東側の未調査部分にも存在するものと推測される。

遺物（第12図、写真図版37）

残存状態が悪く、出土点数は少ない。床面から土師器片1点、堆積土中から土師器片3点、須恵器片1点が出土した。器種は壺、高壺、甕で構成される。26は床面から出土した甕で、カマドの右袖脇からつぶれた状態で出土した。25は堆積土中から出土した大甕で、外部からの混入と考えられる。27は床面から出土した羽口片である。本遺構に伴うものであるかは不明である。出土遺物から判断して、本遺構は奈良時代に属する可能性が高い。

S I O 3 積穴住居跡

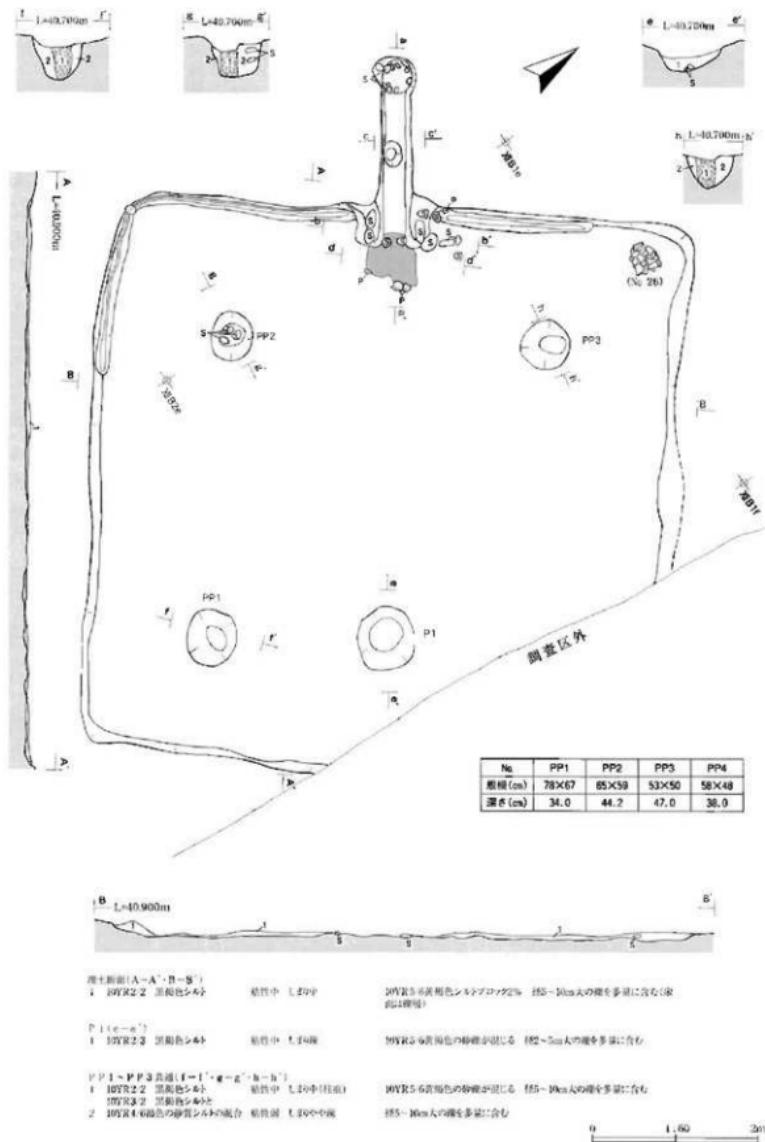
遺構（第13~15図、写真図版5）

＜位置・重複関係＞X I B 3 c グリッドに位置する。1号溝跡と重複し、これにより切られる。検出はIV層で、多量の炭化物を含む黒色のプランとして確認した。

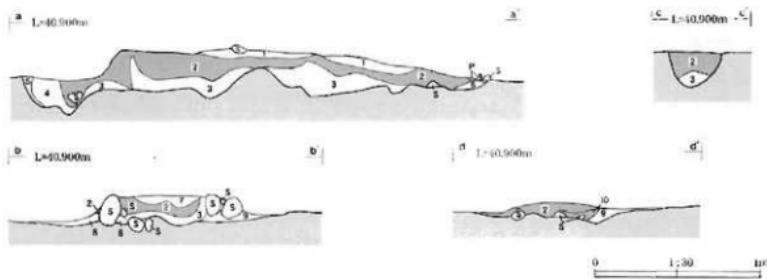
＜規模・平面形＞北東辺5.95m、北西辺-3.5m、南西辺-1.35m、南東辺6.26mのほぼ隅丸方形を呈するものと思われる。北西辺、南西辺は残存値である。

＜埋土＞3層からなり、黒褐色シルト主体で構成される。全体に焼土、炭化物を含む。床面直上に炭化材、移地性の焼土が多量に分布する。

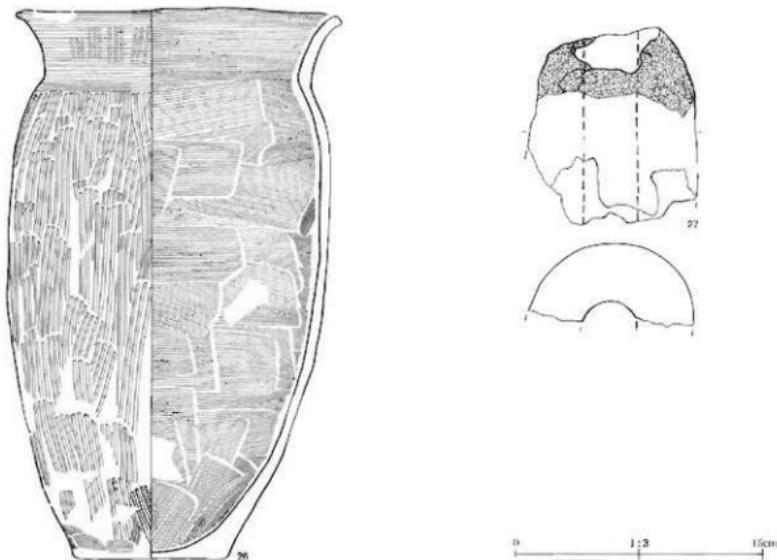
＜壁＞壁高の残存値は10~20cm前後である。



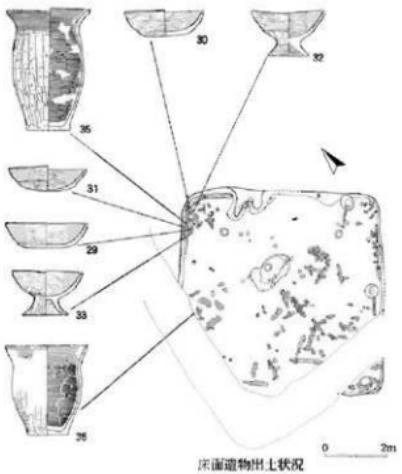
第11図 S 102 積穴住居跡（1）



- 今宮町遺跡地図 (a = a', b = b', c = c', d = d')
1. 10YR 3/2 黒褐色シート 硬性中 しのやや硬
 2. 10YR 3/1 黒褐色シート 硬性少 しのやや硬
 3. 10YR 3/2 黒褐色シート 硬性やや強 しのやや強
 4. 7.5YR 2/2 黒褐色シート 硬性やや強 しのやや強
 5. 10YR 2/2 黒褐色シート 硬性中 しのやや強
 6. 10YR 4/6 黑褐色シート 硬性少 しのやや強
 7. 10YR 1/3 黒褐色-褐色シート 硬性強 しのやや強
 8. 10YR 3/4 黑褐色シート 硬性やや強 しのやや強
 9. 10YR 2/2 黒褐色シート 硬性少 しのやや強
 10. 7.5YR 5/8 可視色の後上 硬性やや強 しのやや強
- IPYR 10YR 3/2 黒褐色シートプロット 10% 地上部1%未満、炭化物1%含む
植生上-灰褐色灰岩質、根被無し
IPYR 5/8 黑褐色シート層状に含む 地上部-灰化物約5%含む
成土母-石炭物質各1%含む
炭化物約1%未満含む
炭化物約2%含む (0.1-1mm) 灰岩質
炭化物約1%未満含む (0.1-1mm) 大の根巣4%含む
IPYR 5/8 黑褐色シート層状に含む
炭化物約1%未満含む
IPYR 2/2 黑褐色シート層状に含む



第12図 S 10.2 窟穴住居跡 (2)



第13図 S103 穫穴住居跡（1）

P1は住居の中央部に位置する。径135×75cm、深さ35cmで平面形は不整な梢円形を呈する。

P2は北東隅の壁際で位置し、径51×42cm、深さ30cmを測る。平面形は円形を呈する。

遺物（第16図、写真図版38・39）

良好な一括遺物が得られている。床面から土師器片12点、カマド構成材として土師器片3点、堆積土中から土師器片1点が出土した。器種は壺、高壺、鉢、碗で構成され、製作に際してロクロは使用されない。

壺は、体部下半において削り段を形成するもの（29～31）と、無段のもの（28）で構成される。32・33は高壺で、壺部の下半に弱い段が形成され、脚部が広く開く。35は壺で体部弱く膨らみ、口縁部に最大径を持つ。外面はハケメナケズリ調整される。41は床面から出土した安山岩製の円錐である。出土遺物から判断して本遺構は奈良時代に属するものと推察される。

S104 穫穴住居跡

遺構（第17～19図、写真図版6）

位置・重複関係：調査区北側段丘段のXIB1eに位置する。検出面はIV層で暗褐色のプランとして確認した。南側の一部は塗化ビニール管敷設時の搅乱を受けている。

規模・平面形：東辺4.63m、西辺3.85m、北辺4.84m、南辺4.46mの割丸方形を呈する。

埋土：13層からなる。焼土、炭化物を含む黒褐色シルトを主体として構成され、下位に黄褐色シルトが少量含まれる。また、中位に径5～10cm大的窓を多量に含む。

戸数：壁面の残存値は12～20cmである。

床面：IV層を掘り込んで形成されている。床面はほぼ平坦で堅くしまるものであるが、中央部～北側にかけては若干凹凸が認められる。床面の金城には黒褐色シルトと黄褐色シルトの混合土によって貼り床が施される。東辺を除く三方の壁際には壁溝が施切れながら廻る。

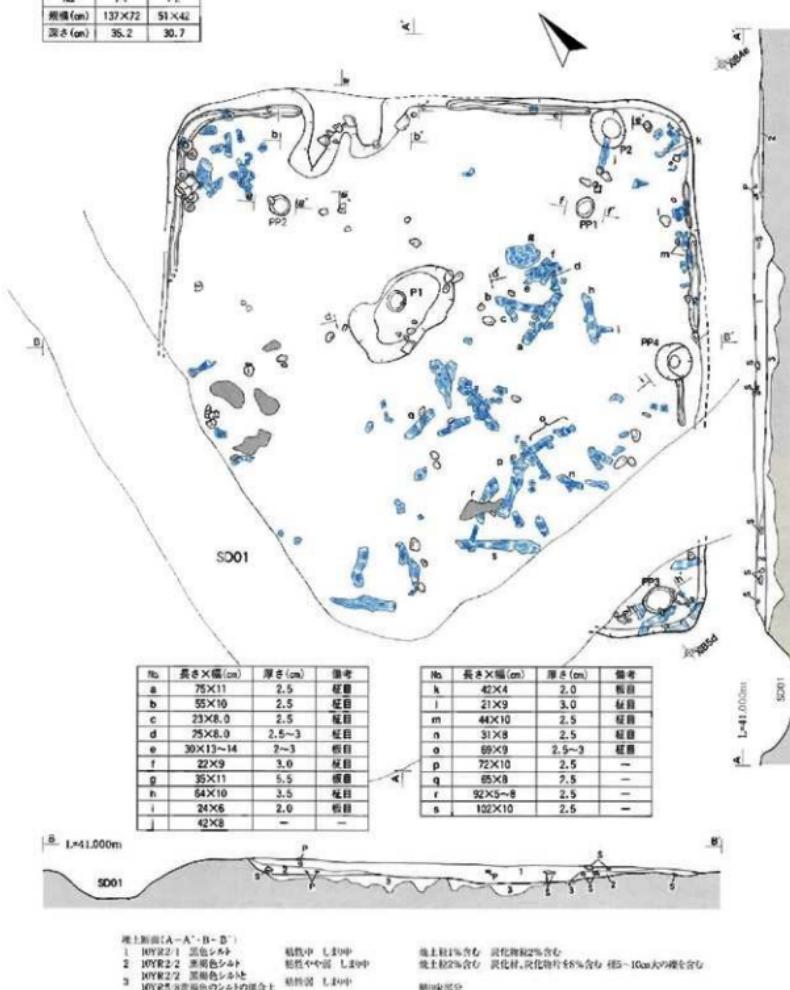
床面：多量の炭化材と焼土が散在し、焼失住居の様相を呈する。床自体はほぼ平坦でしまっており、黒褐色シルトと黄褐色シルトの混合土により貼り床が施される。北西、北東、南東の壁際には壁溝が巡る。

カマド：北東壁の北寄り、壁辺1/3の場所に構築されている。全体的に残存状態は不良である。カマド本体は黒褐色～暗褐色、黄褐色シルトで造られ、左右の袖には大型の窓が芯材として用いられる。火床面は明確に認められず、全体的に赤褐色の旋土ブロックが5%ほど混入する程度である。煙道部は削平のため残存しておらず、構造など詳細は残存不良のため不明である。

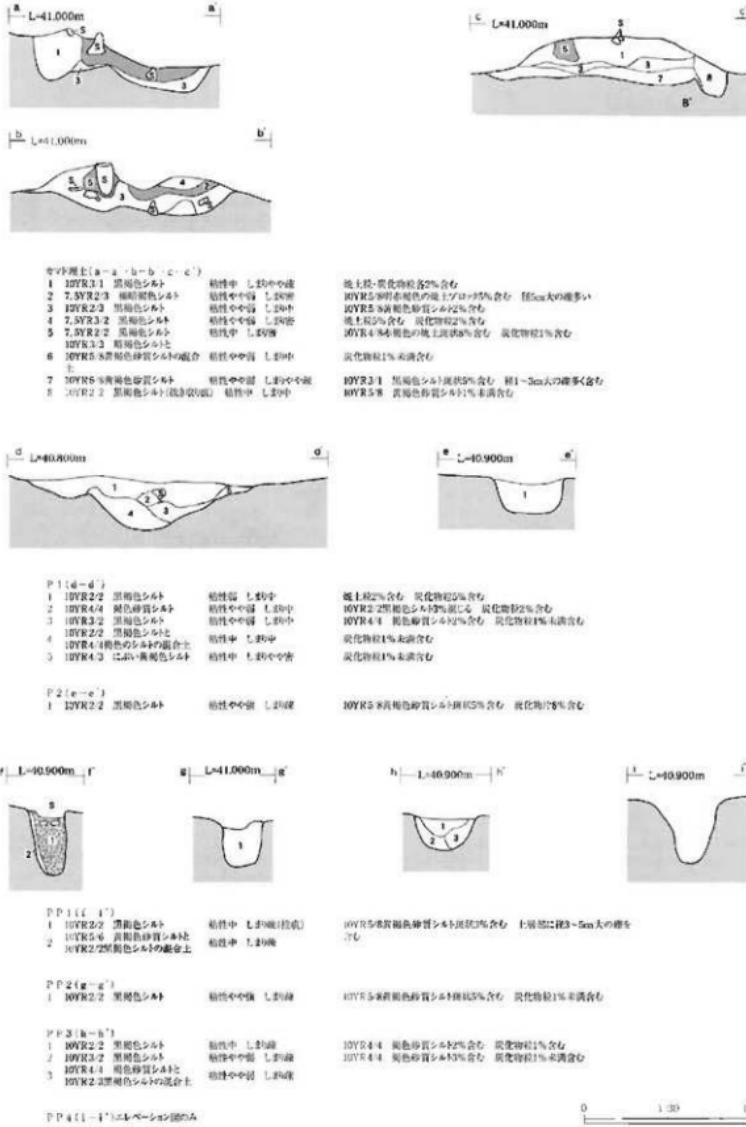
柱穴・ピット：床面からピット2基、柱穴4基を検出した。柱穴は径24～44cm前後、深さ25～40cm前後で平面形は円形を呈する。これらは配列から住居の主柱穴を構成するものと考えられる。

No	PP1	PP2	PP3	PP4
頸槽(cm)	25×23	24×23	36×30	44×43
面高(cm)	33.9	39.7	26.6	35.1

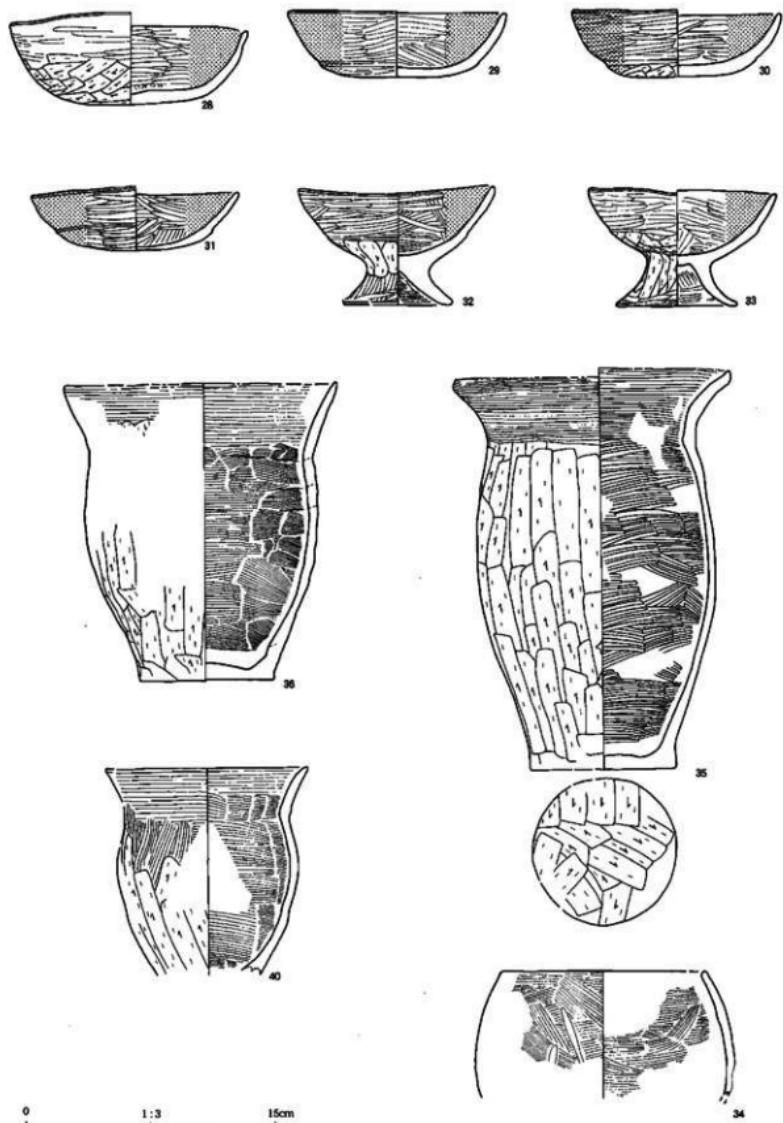
No	P1	P2
幅幅(cm)	137×72	51×42
深さ(cm)	35.2	30.7



第14圖 S I O 3 整穴佳居跡 (2)



第15図 S I O 3 穴住居跡 (3)



第16図 S 103要穴住居跡 (4)

＜カマド＞北壁の中央やや東よりに構築されている。カマド本体は黒褐色～暗褐色、黄褐色のシルトで造られる。燃焼部には $60 \times 45\text{cm}$ 、厚さ8cmの範囲で焼土が形成される。燃焼部中央には土器器の壺を伏せた支脚が検出された。煙道は長さ210cm、深さ35cmの溝状に掘り込まれる。煙道部底面は煙出孔へ向かい約9°の角度をもって緩やかに深くなっている。確認面からの深さは37cmである。煙道の構造など詳細は残存不良のため不明である。

遺物（第20図、写真図版39・40）

床面から土器片4点、カマド構成材として土器片3点、支脚として土器片1点、堆積土中から土器片4点が出土した。器種は壺、小形土器、鉢、甕、球胴甕で構成され、製作に

際してロクロは使用されていない。46は床面から出土した土器片で内面に軽痕状の圧痕を持つ。鉄製品として堆積土中から刀子が1点出土した(57)。出土遺物から判断して、本遺構は奈良時代に属するものと推察される。

S 105 穴住居跡

遺構（第21図、写真図版7）

＜位置・重複関係＞調査区北側段丘縁のX B10dグリッドに位置する。検出面はIV層で、遺物の分布状況とごく薄い暗褐色のプランにより確認した。検出の時点で床上数cmを残してほとんどが削平されており、段丘縁にかかる北側部分では壁が確認できなかった。

＜規模・平面形＞東辺-1.7m、西辺-1.18m、北辺(2.7)m、南辺3.26mの隅丸方形を呈するものと推定される。北側部分は削平され消失している。東西辺は残存値、北辺は推定値である。

＜埋土＞大部分が削平されており、確認できたのは暗褐色シルトのみである。

＜壁＞壁高の残存値は確認された部分で4~9cm前後である。

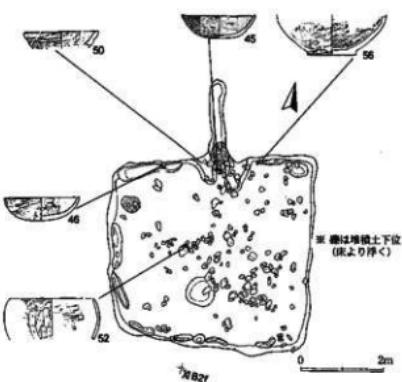
＜床面＞床面はほぼ平坦で堅くしまる。西壁、南壁、東壁の壁際には壁溝が途切れながら巡る。貼り床は確認できなかった。

＜カマド＞カマドは削平によりほとんど残存しておらず、西壁中央部でごくわずかな酸化面を認めるのみである。このため、西壁中央部付近にカマドが設置されていた可能性が高いと推測される。構造など詳細については不明である。

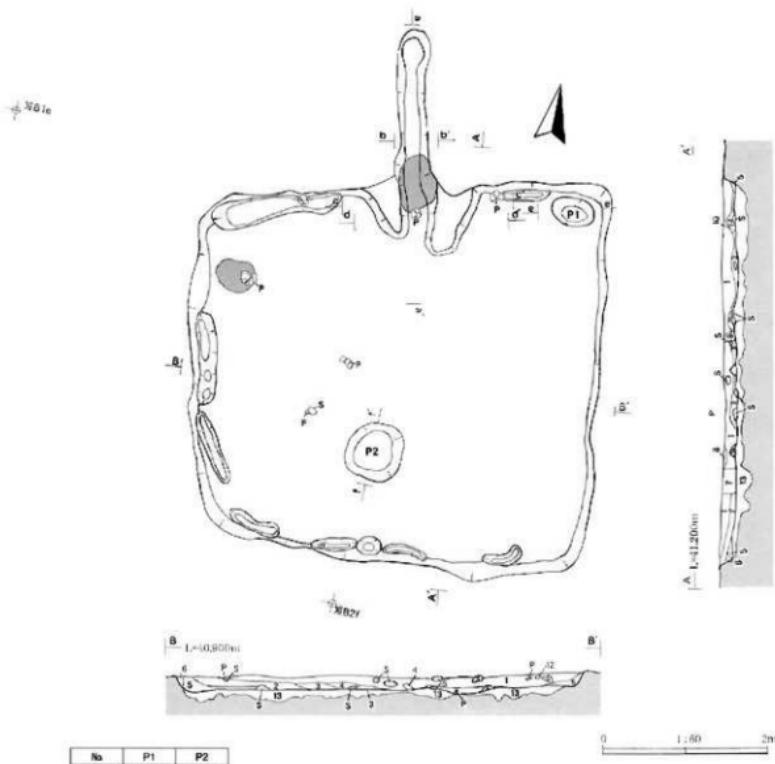
＜柱穴・ピット＞床面から柱穴は検出されなかった。

遺物（第21図、写真図版40）

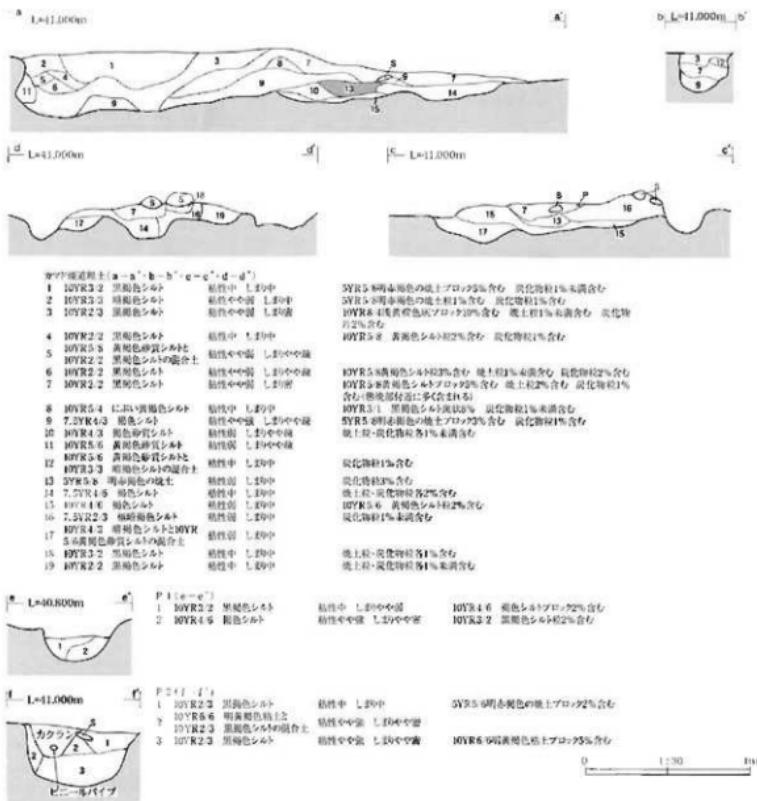
西側床面から一括遺物が得られている。58は土器片で口縁部と体部との接続部分外側に接線が形成されている。59は土器片で外面ナデ・ケズリ調整される。60は土製の筋鉗車である。鉄製品は堆積土中より刀子が1点(61)出土しているが、本遺構に伴うものであるかは不明である。出土遺物等から総合的に判断して、古墳時代に位置付けられる可能性がある。共伴遺物が少ないとから詳細は不明である。



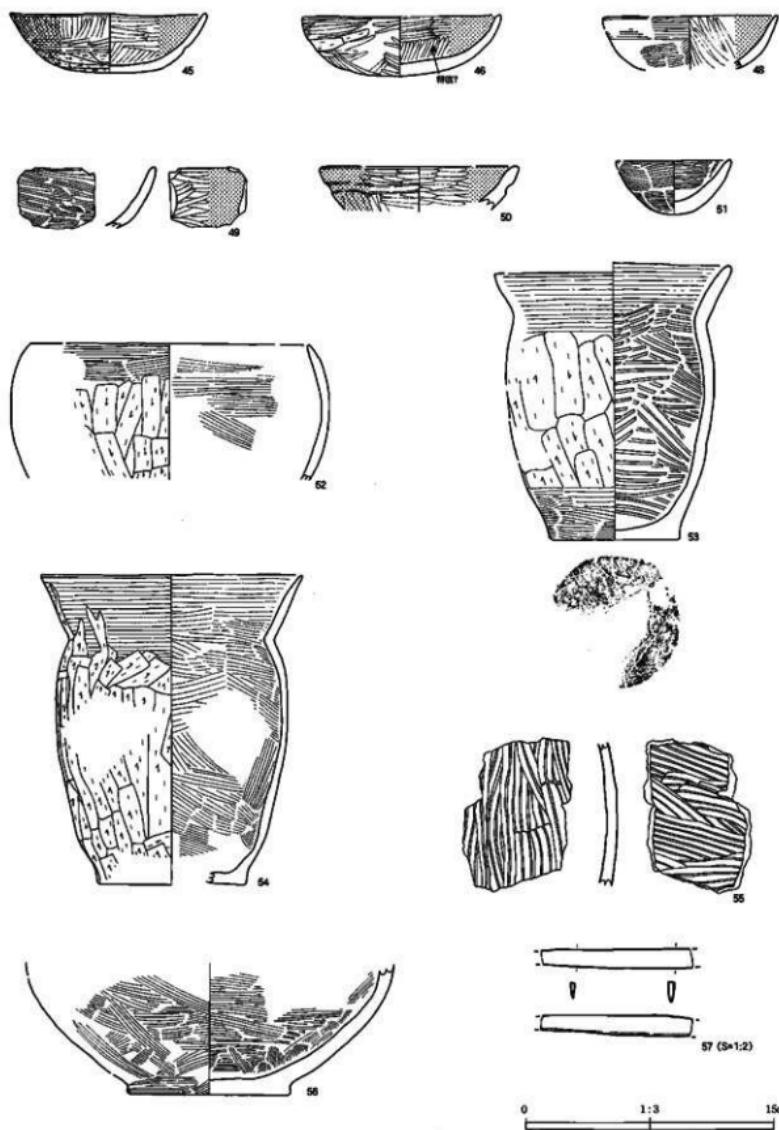
第17図 S 104 穴住居跡 (1)



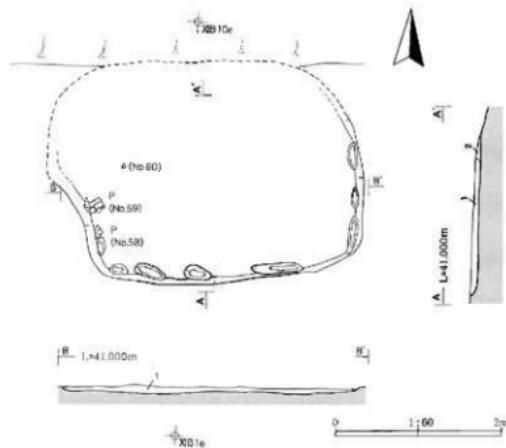
第18回 S104堅穴住居跡（2）



第19図 S I O 4 竪穴住居跡 (3)



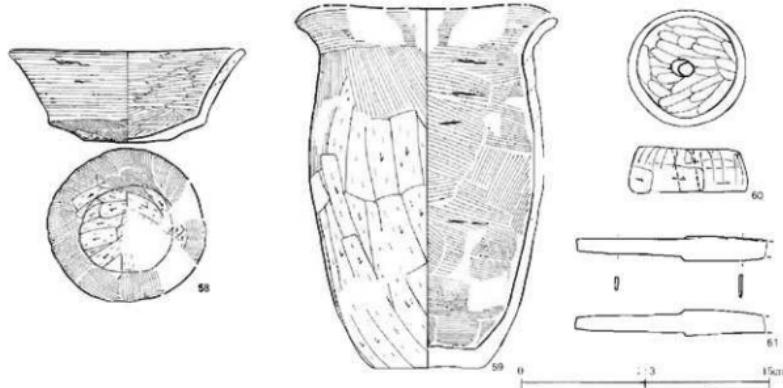
第20図 S I O 4 穹穴住居跡 (4)



地上断面(A-A', B-B')

1. MYR3/3 黄褐色シルト 岩孔やくぬぐし土(60)
2. MYR3/6黄褐色砂質シルト 岩孔土(59)
3. MYR3/4暗褐色シルトの混合土 岩孔土(58)

MYR4/4暗褐色シルト3%含む 白色粘土1%含む 硫化物0.1%含む
(柱底の埋土は1層のもの)



第21図 S 105 穂穴住居跡

S I O 6 壁穴住居跡

遺構（第22図、写真図版8）

＜位置・重複関係＞X I B 5 e グリッドに位置する。検出面はIV層で、本調査前試掘トレンチを挟んで広がる黒褐色シルトの範囲として確認した。東壁は民家の土台によって搅乱、削平され消失しており、住居の中央部も試掘トレンチによって一部が破壊されている。

＜規模・平面形＞東辺4.4m、西辺4.8m、北辺(4.79)m、南辺(4.29)mの隅丸方形を呈する。南辺、北辺は推定値である。

＜埋土＞6層からなる。黄褐色シルトを含む黒褐色シルト主体で構成され、下位には焼土、炭化物が混じる。＜壁＞壁高の残存値は14~17cmである。

＜床面＞床面はほぼ平坦で堅くしまり、一部に礫層が露出する。壁際には壁溝が途切れながら全周する。全域にぶい黄褐色シルトを主体とした貼り床が施される。

＜カマド＞カマドは北辺中央部に設置されているが、試掘トレンチによって上部を削平されており、両袖の痕跡と、燃焼部と見られる部分に現地性の焼土の痕跡を認めるのみである。酸化の範囲は50×42cmを測る。煙道、煙出しは確認できなかった。

＜柱穴・ピット＞床面から4基の柱穴と2基のピットが検出された。柱穴は規模が径44~65cm、深さ12~30cmを測り、平面形は円形、または不整円形を呈する。これらは配置により、住居内の主柱穴を構成するものと考えられる。P 1は北東隅で検出された。規模は47×45cm、深さ18cmを測り、平面形は円形を呈する。P 2は南西隅で検出された。規模は155×72cm、深さ18cmを測り平面形は不整な梢円形を呈する。

遺物（第23図、写真図版40・41）

床面から土師器片3点、須恵器片1点、カマドの構成材として土師器片3点、堆積土中より土師器片6点、須恵器片9点、貼り床埋土より土師器片1点が出土した。器種は壺、高台壺、小形土器、鉢、蓋、甕、壺蓋類で構成され、製作に際してはロクロが使用されている。壺は須恵器が卓越する。73は須恵器の蓋である。内面に摩耗痕を持ち、器面が滑らかであることから転用便として使用されたものと考えられる。出土遺物から判断して本遺構は平安時代に属するものと推察される。

S I O 7 壁穴住居跡

遺構（第24~26図、写真図版9）

＜位置・重複関係＞X II B 1 b グリッドに位置する。検出面はIV層で黒褐色のプランとして確認した。21号住居跡と重複しており、これより新しい。西辺の一部は現代の搅乱によって破壊されている。

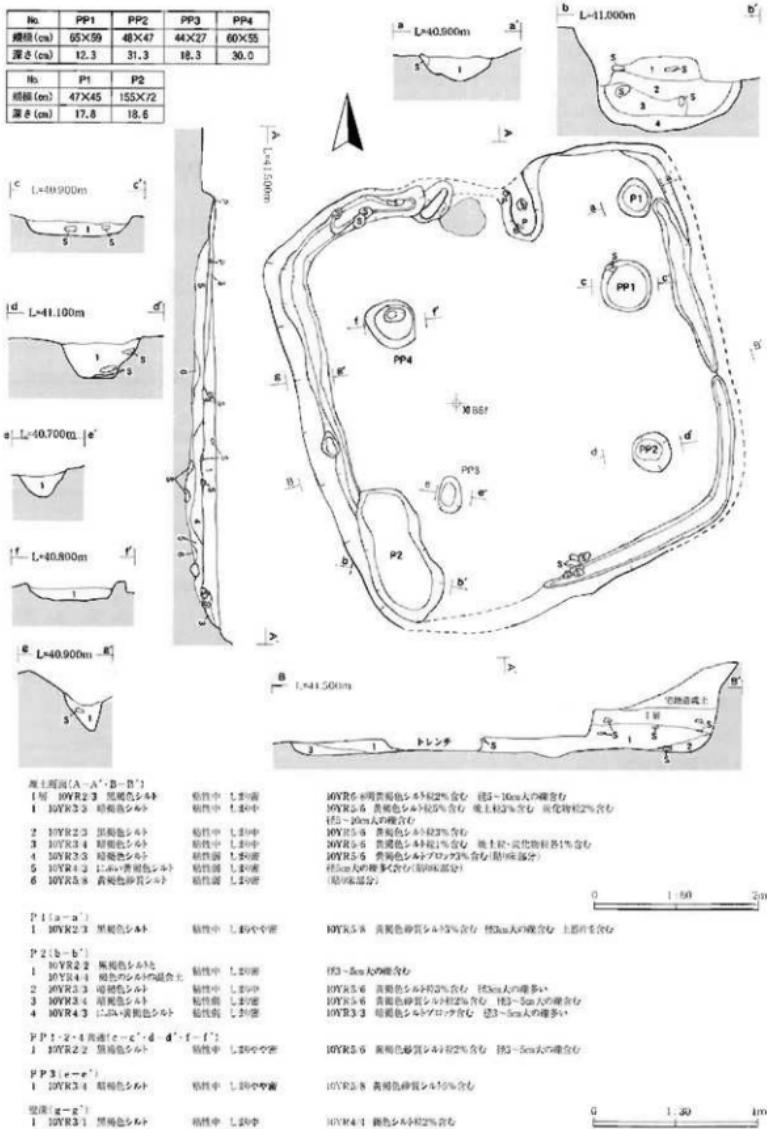
＜規模・平面形＞東辺6.0m、西辺(6.1)m、北辺5.95m、南辺5.97mの隅丸方形を呈している。西辺は推定値である。

＜埋土＞7層からなる。灰白色粒、炭化物を含む黒褐色シルトを主体として構成される。

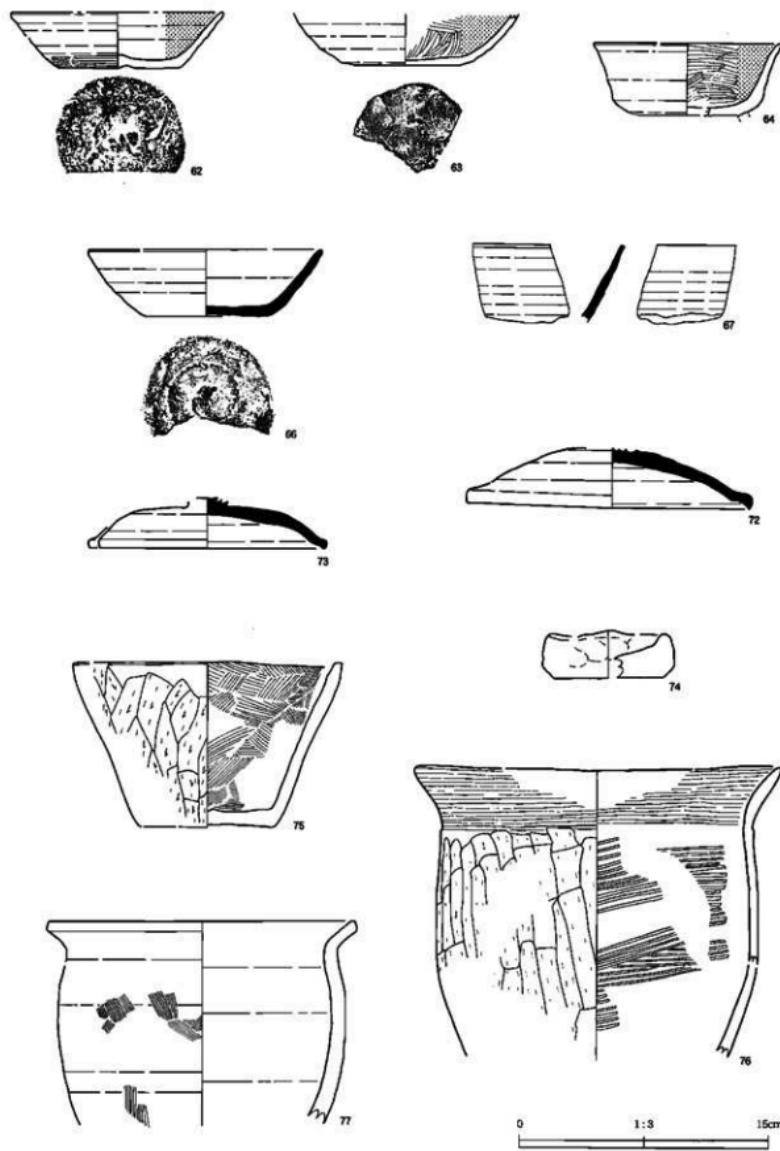
＜壁＞残存値は12~16cm前後である。

＜床面＞ほぼ平坦で壁面付近は固くしまるが、中央部は21号住居跡を暗褐色シルトで埋め戻して構築されており、壁際周辺に比してやや締まりが弱い。西壁、北壁、東壁の壁際には壁溝が途切れながら巡る。全域に黒褐色シルトと黄褐色シルトの混合土による貼り床が施される。

＜カマド＞南壁の中央やや東よりに構築されている。カマド本体は黒褐色と暗褐色の粘土で造られ、左右の袖には大型の礫が芯材として用いられる。燃焼部には69×72cm、厚さ8cmの範囲で焼土が形成されている。



第22図 S 1 0 6 穫穴住居跡 (1)



第23図 S 10 6 窒穴住居跡 (2)

燃焼部には右側に亜角窓を設置した支脚、左側に土師器の壺を伏せた支脚が検出された。煙道・煙出孔は残存不良のため確認できなかった。このため詳細を明らかにできなかったが、住居跡の壁面が12~16cm掘り込まれているのに対して燃焼部・煙出孔が完全に削平されたとはレベル的に考えにくく、煙道の形態がもともと實際で短く立ち上がる形状であった可能性がある。

<柱穴・ピット>床面から柱穴2基、ピット2基が検出された。PP 1~PP 2は配置から住居の主柱穴を構成するものと推定され、また柱材として平角材を用いていたことが埋土から確認でき、特筆される。掘り方規模は径42~50cm、深さ33~38cmを測り、平面形は円形を呈する。平角材部分は幅30~31cm、厚さ9~12cmの長方形で、板状の断面を呈する。PP 1の底面には根固め石と見られる小砾が据えられている。P 1はカマド右脇で検出した。規模は径97cm×78cm、深さ22cmを測り、平面形は不整な円形を呈する。P 2は東壁、南寄りの部分に検出された。規模は径62×58cm、深さ15cmを測り、平面形は不整な円形を呈する。

遺物（第27~29図、写真図版41~43）

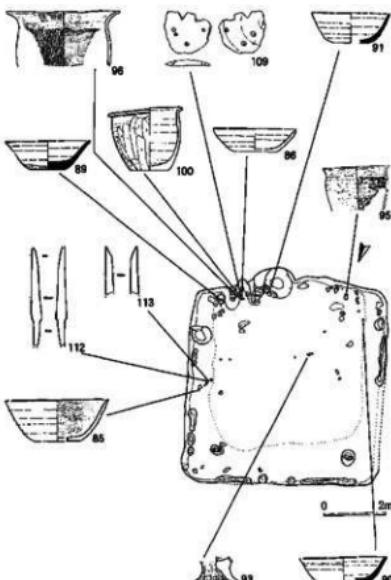
床面から土師器片6点、須恵器片5点、カマド構成材として土師器片6点、須恵器片1点、堆積土中より土師器片1点、須恵器片3点、カマド支脚として土師器片1点、カマド燃焼部より土師器片1点が出土した。器種は壺、高壺、瓶、壺、甕、大甕等構成され、製作に際してはロクロが使用されている。87はカマド燃焼部から出土した土師器壺で、底部に線刻を持つ。91は須恵器壺で、底部回転イトリ後、ヘラケズリ再調整が施される。94は土師器の瓶で、外面タクキナケズリ、内面ナデナハケメ調整される。鉄製品は堆積土中より刀子2点が出土している。石製品は3点が出土した。109は凝灰岩製の有孔石製品である。石製品としては3点が出土している。109はカマド埋土から出土した有孔石製品である。110、111は床面から出土した砥石である。鉄製品は2点が出土している。112・113は堆積土中から出土した刀子である。出土遺物から判断して、本遺構は平安時代に属するものと推察される。

S I O 8 穏穴住居跡

遺構（第30~33図、写真図版10）

<位置・重複関係> X II A 2 j グリッドに位置する。検出面はIV層で暗褐色のプランとして確認された。18号住居跡、28号住居跡と重複しており、これらによって切られる。

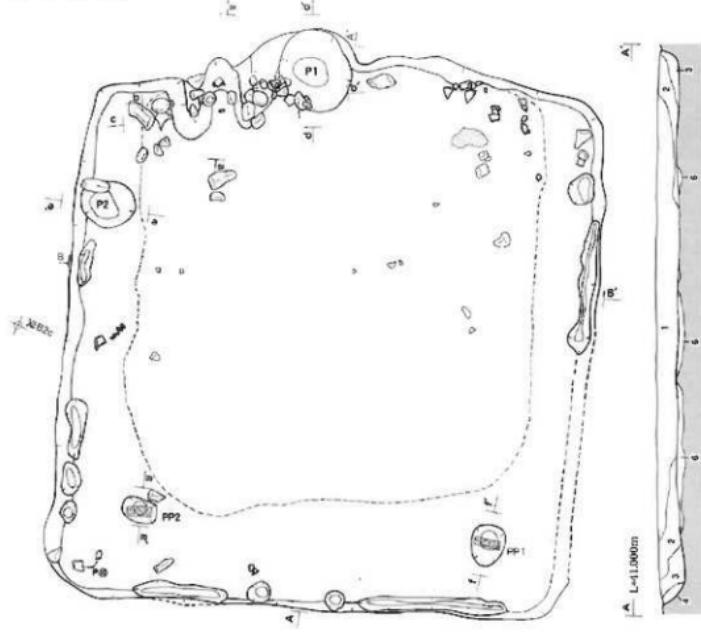
<規模・平面形> 東辺5.8m、西辺-4.05m、南辺5.98m、北辺-4.15mの隅丸方形を呈する。西辺と北辺



第24図 S I O 7 穏穴住居跡 (1)

No	PP1	PP2
幅(㎝)	50×41	42×27
深さ(㎝)	33.0	38.0

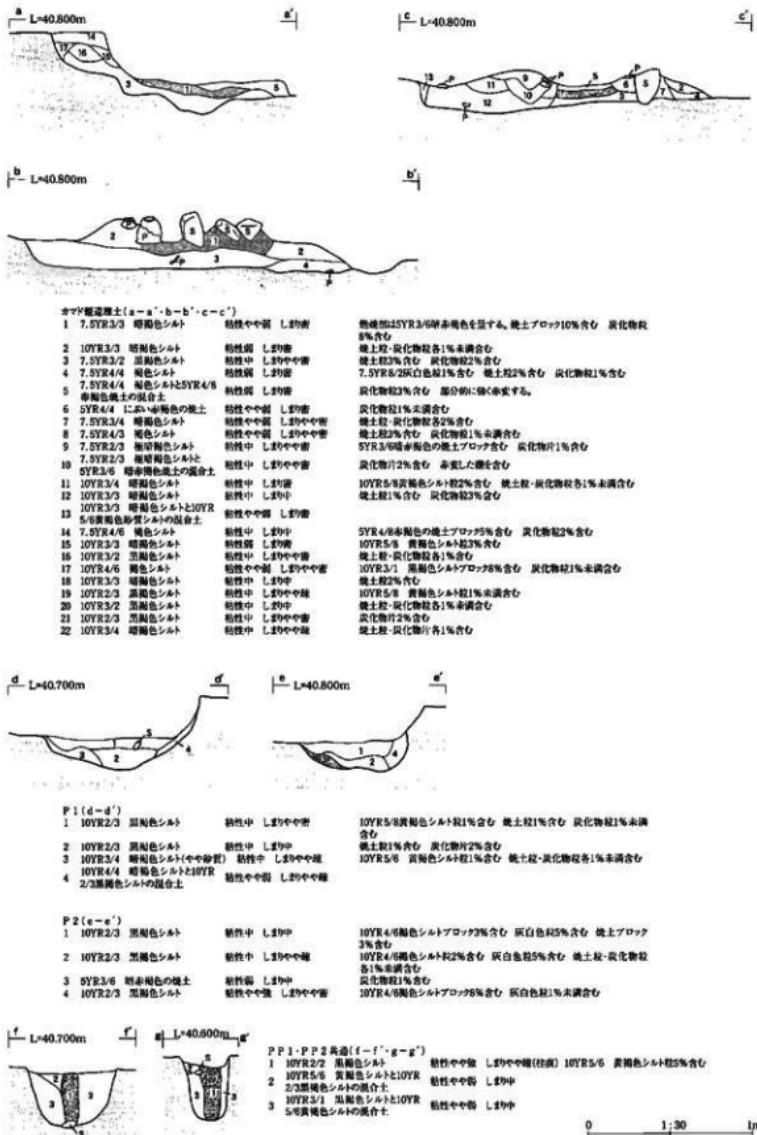
No	P1	P2
幅(㎝)	97×76	62×58
深さ(㎝)	22.1	14.9



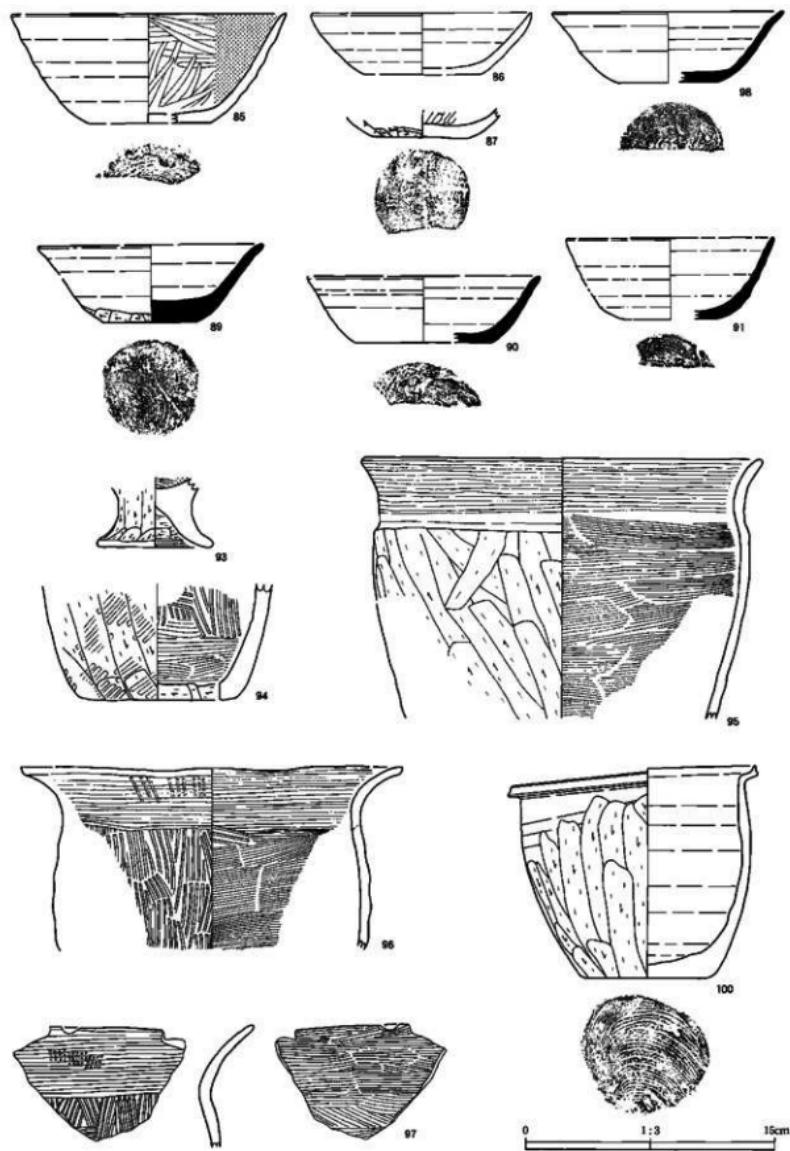
- | | |
|------------------|------------|
| 地上断面(A-A', B-B') | |
| 1 10YR2/1 黒褐色シルト | 粘性中 しのぎ無 |
| 2 10YR2/2 黒褐色シルト | 粘性や中硬 しのぎ有 |
| 3 10YR2/3 黒褐色シルト | 粘性や中硬 しのぎ有 |
| 4 10YR2/3 黑褐色シルト | 粘性中 しのぎ有 |
| 5 10YR2/1 黑褐色シルト | 粘性や中硬 しのぎ無 |
| 6 10YR2/4 黑褐色シルト | 粘性や中硬 しのぎ無 |
| 7 10YR3/4 黑褐色シルト | 粘性中 しのぎ無 |
- 10YR3/8 黑褐色シルト2%含む 灰白色和3%含む 壤土粒・炭化物
灰2%含む
灰白色2%未満含む 地上部・炭化物各3%含む
10YR3/8 黑褐色シルト1%未満含む 灰白色2%含む 炭化物
1%未満含む
10YR3/8 黑褐色シルト1%未満含む
10YR3/8 黑褐色シルト1%未満含む
10YR3/8 黑褐色シルト1%未満含む 灰白色2%未満含む
灰白色2%含む 炭化物2%未満含む

0 1:80 2m

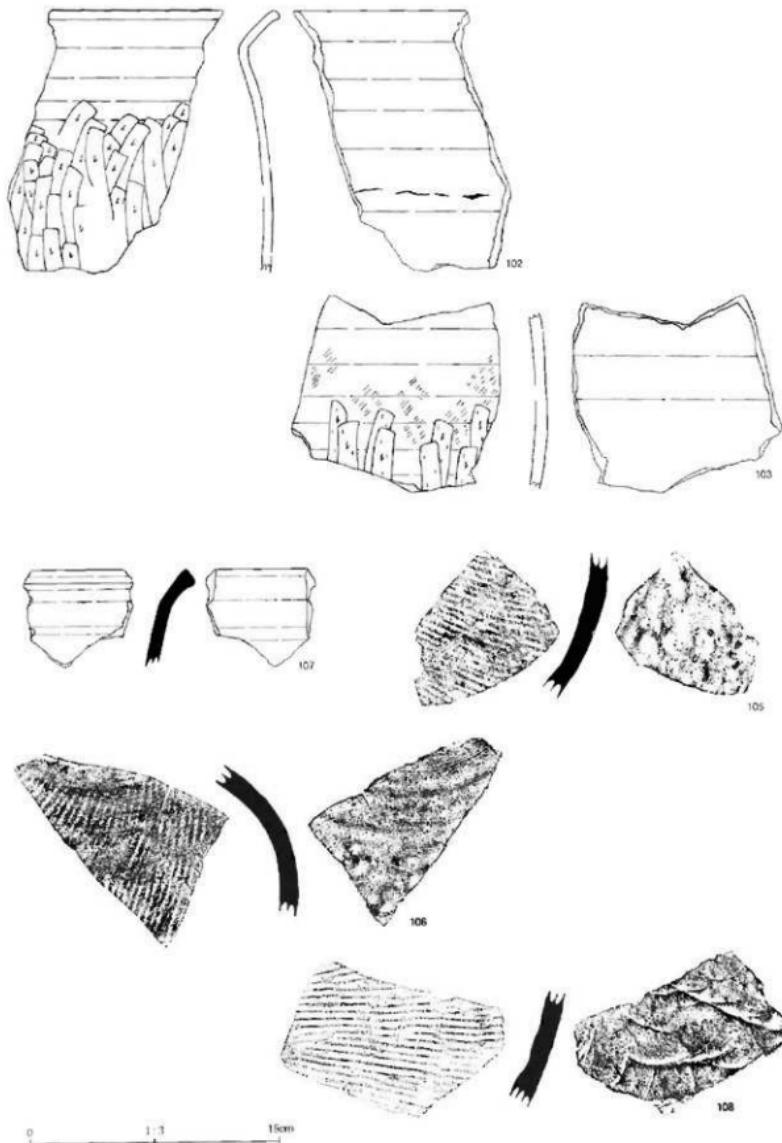
第25図 S107壁穴住居跡 (2)



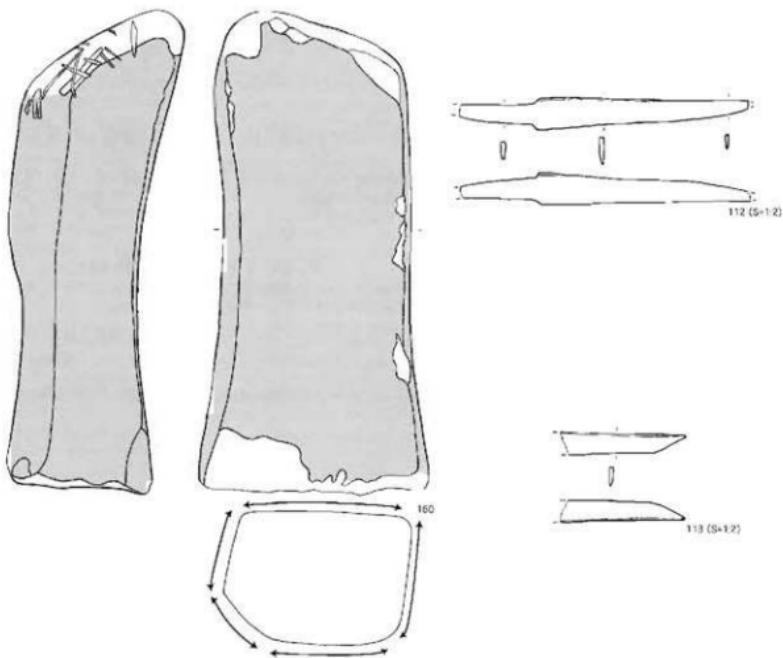
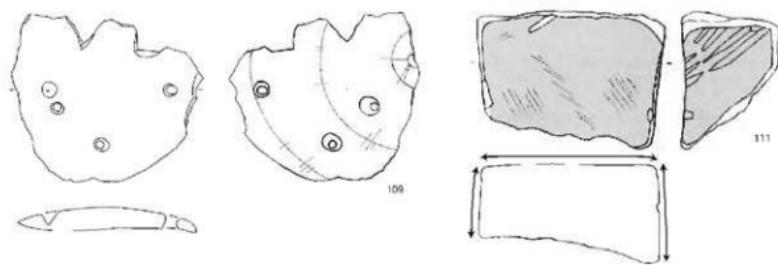
第26図 S 107 穴住層（3）



第27図 S107堅穴住居跡(4)



第28図 S107 穩穴住居跡 (5)



第29図 S I O 7 竪穴住居跡 (6)

は残存値である。

＜埋土＞11層からなり、灰白色粒を含む黒褐色シルトを主体として構成される。

＜壁＞暗褐色シルトを掘り込んで構築されている。残存値は21~39cmである。

＜床面＞ほぼ平坦で堅く締まる。東側部分からは埋土の中位に相当する高さに径10~15cmの大の礫が多数出土している。礫の一部は被熱し赤変するものもあり、南側部分には炭化物の広がりが見られる。北東部（Q 1）には遺物が集中する。壁際には壁溝が巡り、黒褐色シルトと黄褐色シルトによって貼り床が施される。

＜カマド＞北西壁のほぼ中央に設置されている。カマド本体は黒褐色と暗褐色の粘土で造られ、左右の袖には大形の土師器窓が伏せた状態で芯材として転用されている。火床面は燃焼部には燃焼部には径70×50cm、深さ10cmの範囲で現地性の焼土が見られる。燃焼部中央には2個の円礫が支脚として用いられている。

煙道は上部を削平されており、形状は不明であるが、長さ1.5m、幅40cmの溝状に掘り込まれる。

煙出し部は径51×38cmの土坑状に掘り込まれ、確認面からの深さは46.5cmである。

＜柱穴・ピット＞床面から大小合わせて計14基の柱穴と1基のピットが検出された。柱穴の規模は径20~90cm前後、深さ11~52cmを測り、平面形はほぼ円形を呈する。これらのうち、その配置からPP 1~PP 4までの柱穴が住居の主柱穴を構成するものと考えられる。ピットは北東隅に1基が検出された。規模は径68×58cm 深さ24.1cmを測り、平面形は円形を呈する。

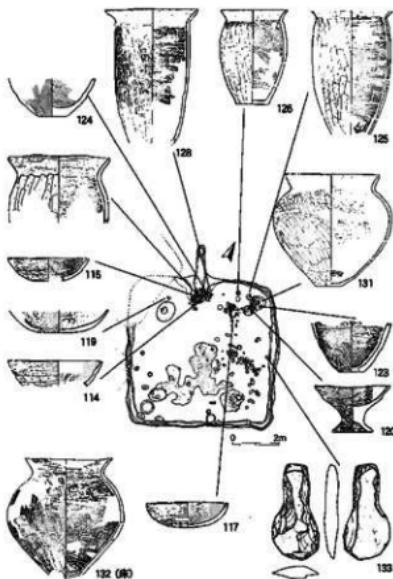
遺物（第34~36図、写真図版43~46）

床面から土師器片8点、カマド構成材として土師器片5点、堆積土中より土師器片5点、カマド燃焼部より土師器片1点が出土した。器種は壺、高杯、瓶、甕、球腹甕で構成され、製作に際してロクロは使用されない。壺は体部に段を持ち、内面黒色処理されるものが多い。121は高壺で、底部にヘラ書「X」を持つ。123は単孔の瓶で、体部は内外面共にナデ調整される。石器は1点が出土している。133は床面から出土した石錐である。鉄製品としては2点が出土している。134はPP 7から出土した鉄錐である。135は堆積土中から出土した刀子である。出土遺物から判断して、本遺構は奈良時代に属するものと推察される。

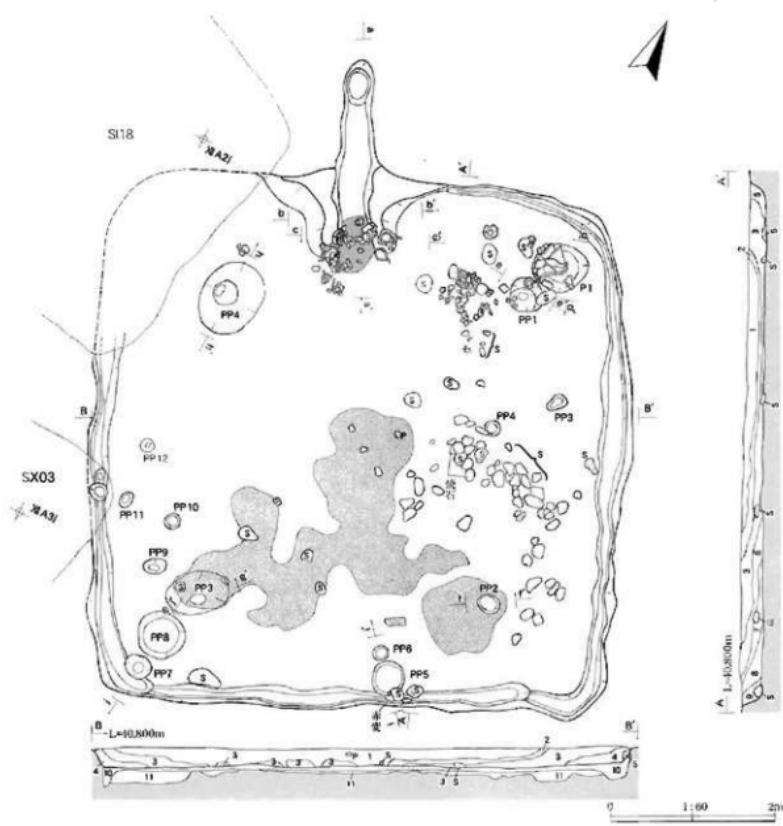
S 109 壁穴住跡

遺構（第37~38図、写真図版11）

＜位置・重複関係＞X II B 3 b グリッドに位置する。検出面はIV層で黒褐色のプランとして確認された。検出の段階で遺構の上部は削平をうけ消失していた。東辺の一部は現代の擾乱によって破壊されている。



第30図 S 108 壁穴住跡 (1)



地圖上断面(A-A'・B-B')

1. IOWR 1-3 に於く黄褐色シホト

2. IOWR 3-3 黑褐色シホト

3. IOWR 3-2 黄褐色シホト

4. IOWR 2-2 黑褐色シホト

5. IOWR 2-3 黄褐色シホト

6. IOWR 4-4 黄褐色シホト

7. IOWR 3-2 黑褐色シホト

8. IOWR 3-4 黄褐色シホト

9. IOWR 4-2 黑褐色シホト

10. IOWR 3-5 黄褐色シホト

11. IOWR 6-6 黑褐色シホト

細胞中 L. 1.000で照

射微鏡 しゆめいき

IOWR 3-3 黄褐色シホト 10% 合む

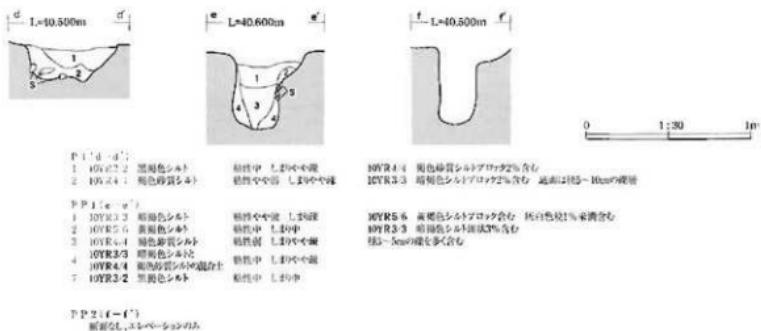
No.	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7
規格(cm)	48×42	72×47	90×71	25×23	44×37	19×16	33×25
深さ(cm)	46.9	41.5	52.3	44.3	18.8	13.0	16.0

No.	PP8	PP9	PP10	PP11	PP12	PP13	PP14
規格(cm)	59×54	28×17	19×17	21×14	17×16	25×16	19×18
深さ(cm)	13.6	20.3	20.6	17.0	30.4	13.0	11.1

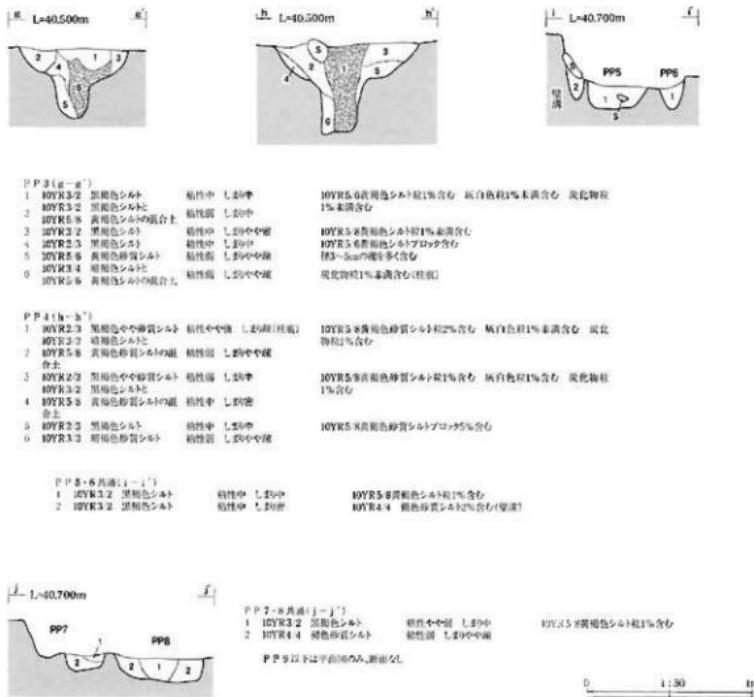
No.	P1
規格(cm)	68×58

深さ(cm)	24.1
--------	------

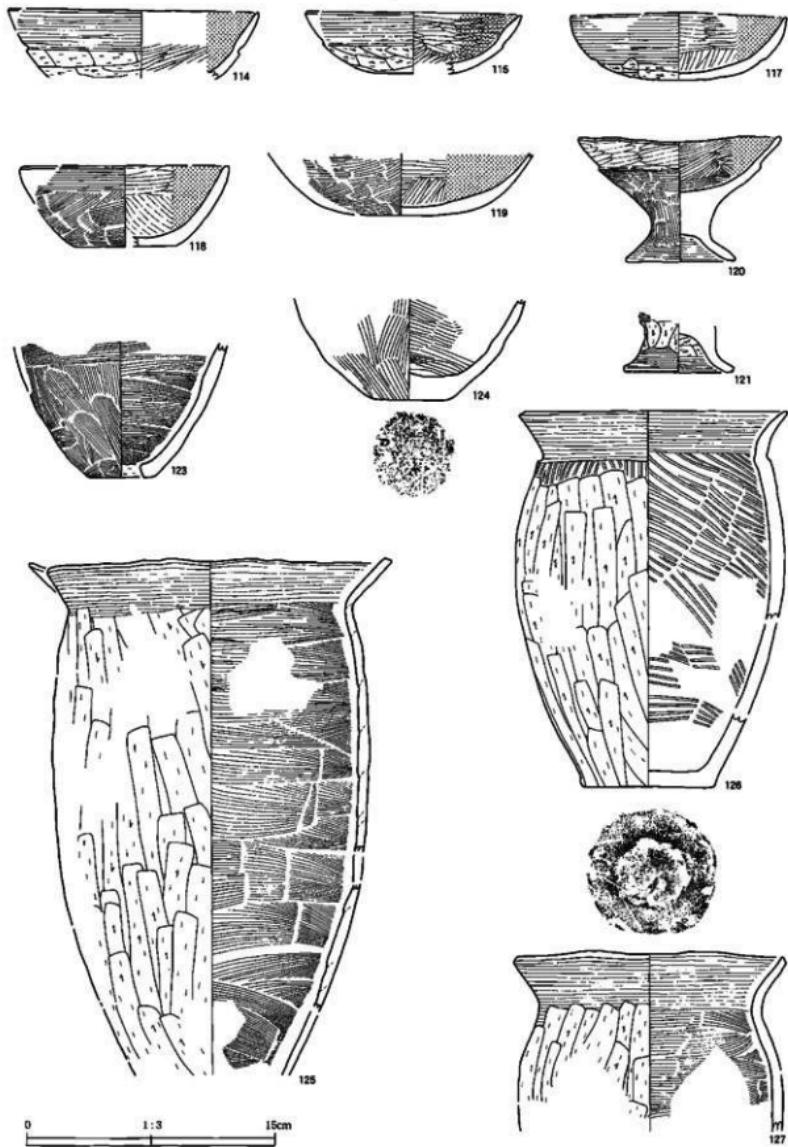
第31図 S 108 穹穴住居跡 (2)



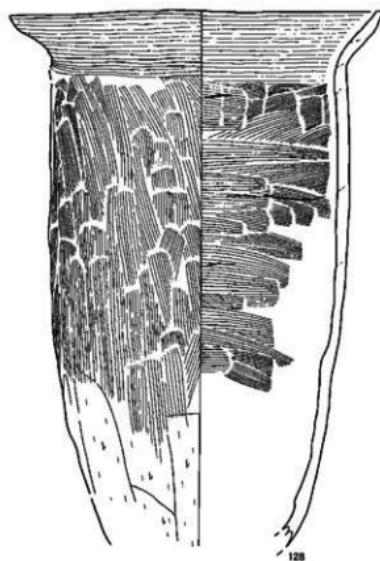
第32図 S 19.8 穴住居跡 (3)



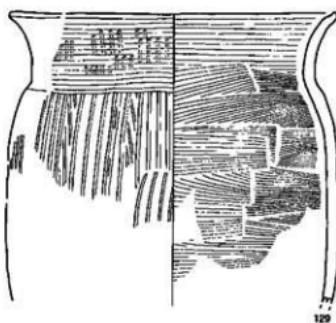
第33図 S.I.O.8 窓穴住居跡 (4)



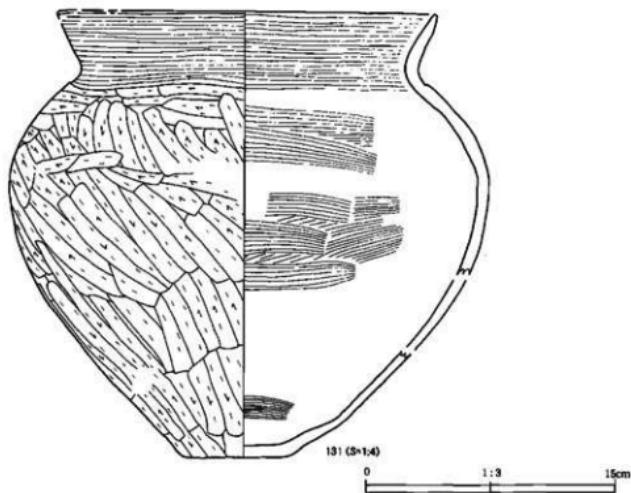
第34図 S 108 穴住居跡 (5)



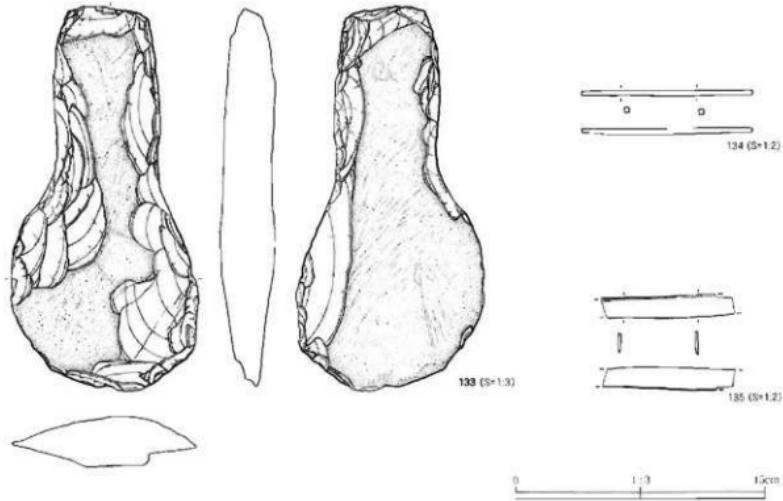
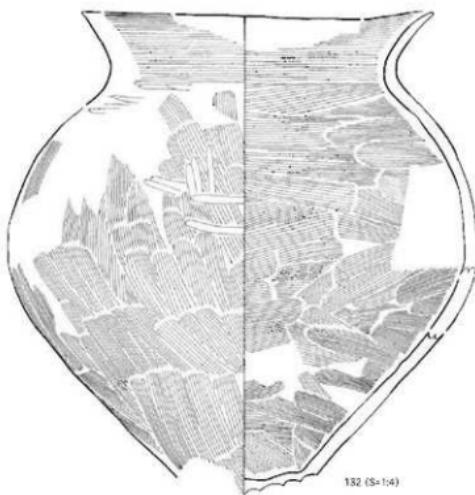
128



129



第35圖 S I O 8 穩穴住居跡 (6)



第36圖 S 108 空穴住居跡 (7)

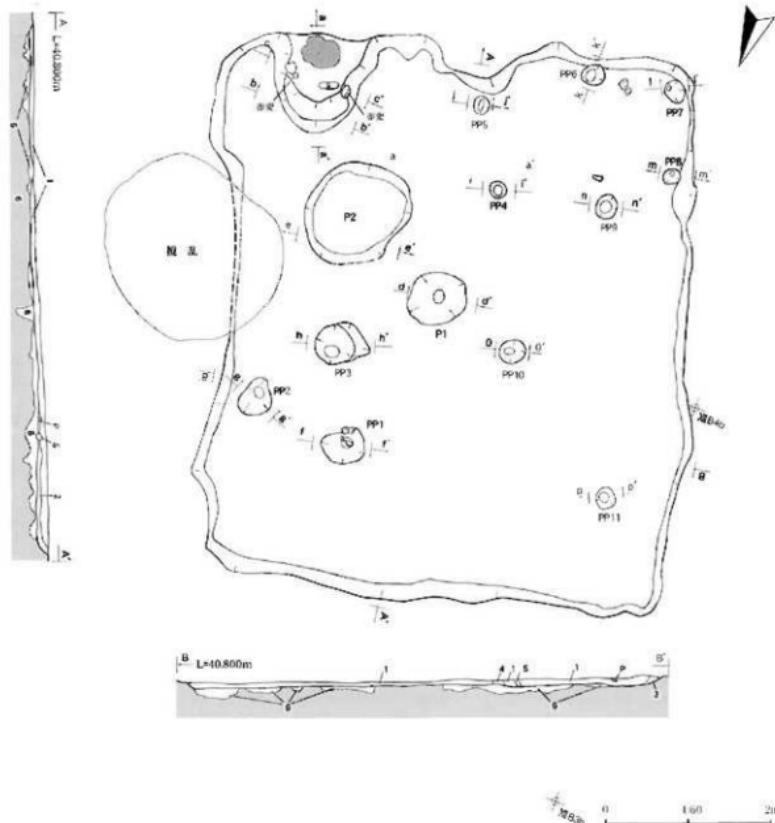


図37断面(A-A',B-B')

- 1 10VK3-1 黒褐色シルト 粘性中 しのぎ
- 2 10VK2-2 黑褐色シルト 粘性中 しのぎ
- 3 3-10VK3-4(?)泥質砂土 粘性中 しのぎ
- 4 10VR3-1 黑褐色シルト 粘性中 しのぎ
- 5 10VK4-1 黑褐色シルト 粘性弱 しのぎ
- 6 10VK2-2 黑褐色シルトと10VK4-4褐色シルトの組合

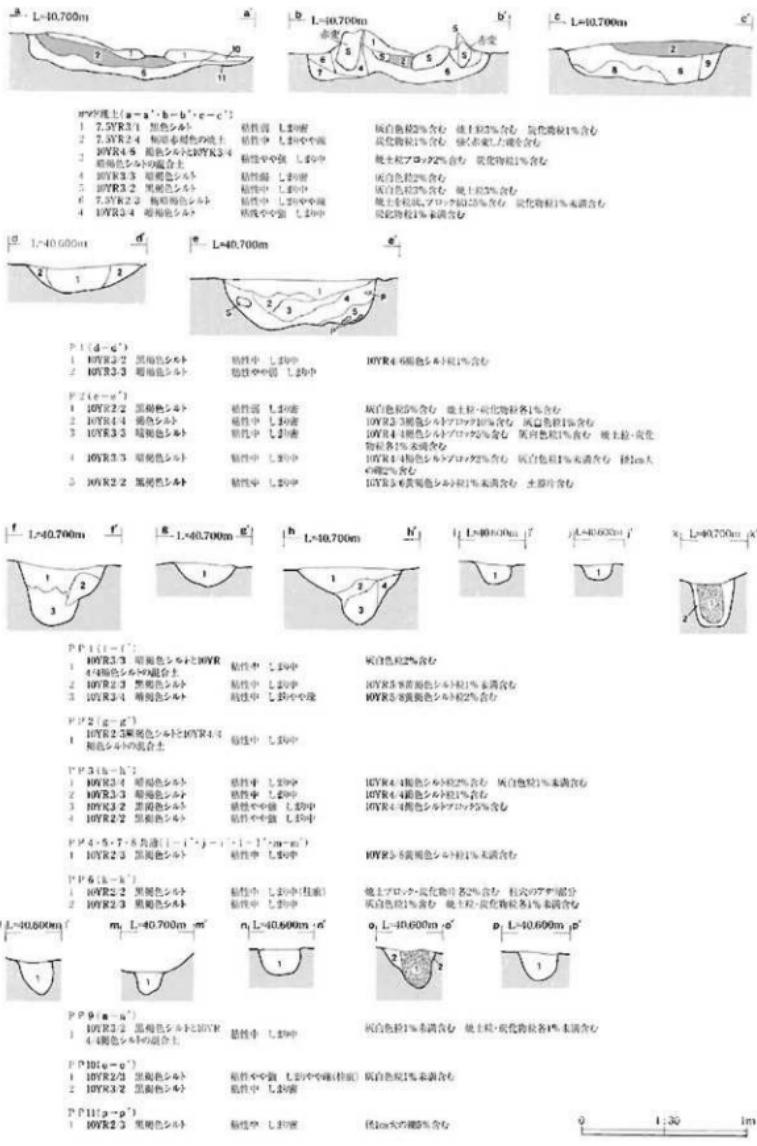
- 10YR4-6褐色シルト和1%未満含む 黄褐色約5%含む
黄白色約1%含む
- 10YR4-6褐色砂質シルトブロック含む
黄白色約1%未満含む
- 黄白色約3%含む 黄褐色部分

No.	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7
横幅(cm)	53×39	48×39	66×46	20×17	22×19	29×26	31×23
深さ(cm)	36.9	14.1	36.6	14.7	12.8	28.1	19.9

No.	PP8	PP9	PP10	PP11
横幅(cm)	22×18	31×24	31×24	32×24
深さ(cm)	14.7	16.1	23.3	18.0

No.	P1	P2
横幅(cm)	67×64	136×108
深さ(cm)	38.6	24.5

第37図 S109堅穴住居跡(1)



第38図 S 10 穴住居跡 (2)



第39図 S I O 9 壁穴住居跡（3）

＜規模・平面形＞東辺6.4m、西辺6.6m、南辺5.75m、北辺5.54mの隅丸長方形を呈する。

＜埋土＞6層からなり、灰白色粒を含む黒褐色シルトを主体として構成される。

＜壁＞壁高の残存値は7～14cmを測る。

＜床面＞床面はほぼ平坦で堅く締まり、黒褐色シルトと黄褐色シルトの混合土によって貼り床が施される。

＜カマド＞南壁の東より1/4の地点から、構築土と思われる径1.15×1.08m前後、厚さ9～12cmの不整形な焼土混じりの暗褐色シルトの堆積を確認した。両袖と見られる部分には煙が芯材として用いられており、被熱亦変している。燃焼部には73×84cm、厚さ9cmの範囲で焼土が形成されている。燃焼部から支脚は検出されなかった。煙道・煙出孔は残存不良のため確認できず詳細は明らかではない。住居跡の壁面が7～14cm掘り込まれているに對して煙道部・煙出孔が完全に削平されたとは考えにくく、煙道がもともと壁際で短く立ち上がる形狀を呈するものであった可能性がある。

＜柱穴・ピット＞計11基の柱穴と2基のピットが検出された。柱穴の規模は径20～66cm前後、深さは12～37cm前後を測る。平面形はほぼ円形を呈している。埋土は灰白色粒、黄褐色シルトを含む黒褐色シルトを主として構成される。柱穴は住居内の主柱穴を構成するものと推定される。

ピットは住居の中央部より検出された。P 2は貼り床をはがした状態で検出された。規模はP 1が径67cm×64cm、深さ38.6cm、P 2が径1.36×1.08m、深さ24.5cmを測る。平面形は不整な円形を呈する。

遺物（第39図、写真図版46）

床面から土師器片1点、貼床より土師器片2点、堆積土中より土師器片10点が出土した。器種は壺、甕、大甕で構成される。壺の製作に際してはロクロが使用されており、内面が黒色処理される。底部は切り離し後、ヘラケズリ再調整を持つものが多い。他に回転イトキリのもの（142・143・144）も、少数ながら見られる。出土遺物から判断して、本遺構は平安時代に属するものと推察される。

S I O 10 壁穴住居跡

遺構（第40～43図、写真図版12）

＜位置・重複関係＞X II A 7 j グリッドに位置する。検出はⅢ層で黒褐色のプランとして確認した。

＜規模・平面形＞東辺5.17m、西辺5.28m、北辺5.14m、南辺5.14mの隅丸方形を呈する。

＜埋土＞13層からなり、灰白色粒、炭化物粒を含む黒褐色～暗褐色のシルトを主体として構成される。

＜壁＞壁高の残存値は11～18cmである。壁際にはP P 4・P P 6～14が巡る。これらは配置から判断して壁柱穴を構成すると見られる。

＜床面＞床面は黒褐色と黄褐色シルトを主体とする混合土によって貼り床が施され、ほぼ平坦で四隅に縮まる。壁際には堅溝が途切れながら全周する。

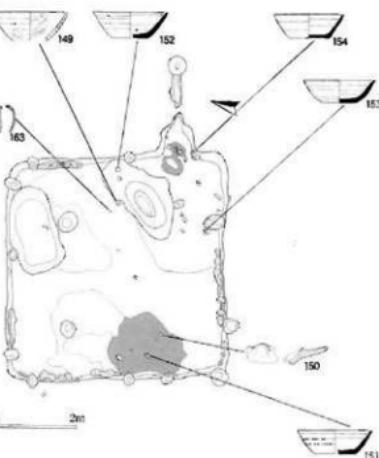
＜カマド＞東棟の南寄り、壁邊の1/4の場所に構築されている。カマド本体は削平を受け、天井へ両ソテ部は残存していなかったが、箱形状の掘り方痕跡が確認された。掘り方内部からは土師器器片が確認されている。燃焼部には径75×48cm、厚さ9cmの範囲で現地性の焼土が形成されている。焼道部の長さは推定2.2mを測るが、削平を受け底面付近のみが検出された状態であったため、掘り込みの深さや構造については不明である。焼出し部はほぼ円形で径48×44cm、深さ19cmの土坑状に掘り込まれる。

＜柱穴・ピット＞剖14基の柱穴と2基のピットが検出された。柱穴の規模は径25～53cm前後、深さ14～54cmを測る。平面形はほぼ円形を呈する。P P 1～P P 3・(P P 4?)はその配置から、住居の主柱穴を構成するものと考えられる。P P 6～P P 14・(P P 4?)は横面に接して掘り込まれた壁柱穴と考えられる。P 1は

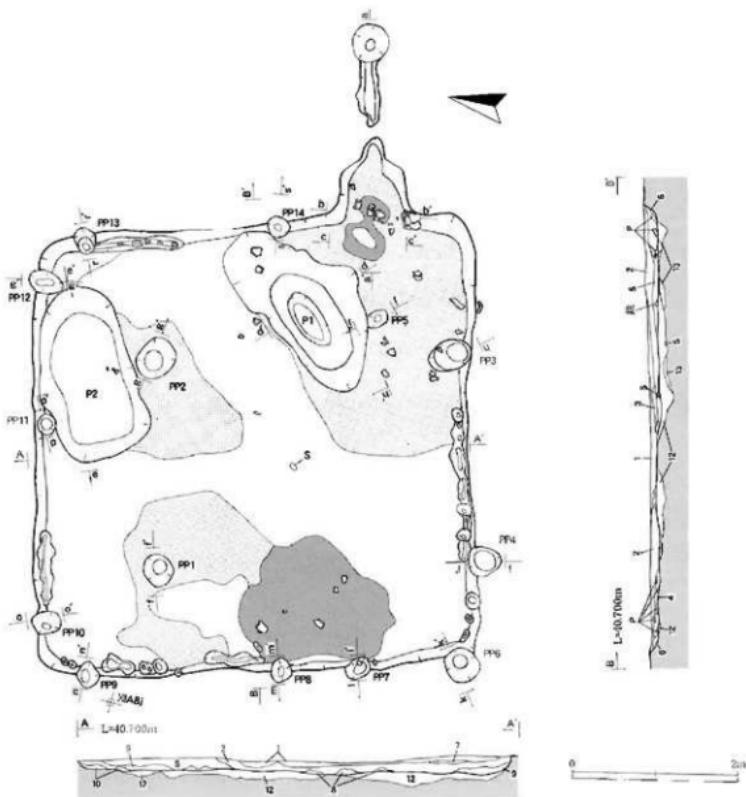
住居東側、カマド付近で貼り床下位から検出された。平面形は不整な楕円形を呈する。規模は径2.24×1.2m、深さ49.6cmを測り、断面形はすり鉢形を呈する。P 2は北側側で検出されたものでP 1より新しい。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は2.1×1.18m、深さ17.8cmを測る。

遺物（第44図、写真図版46・47）

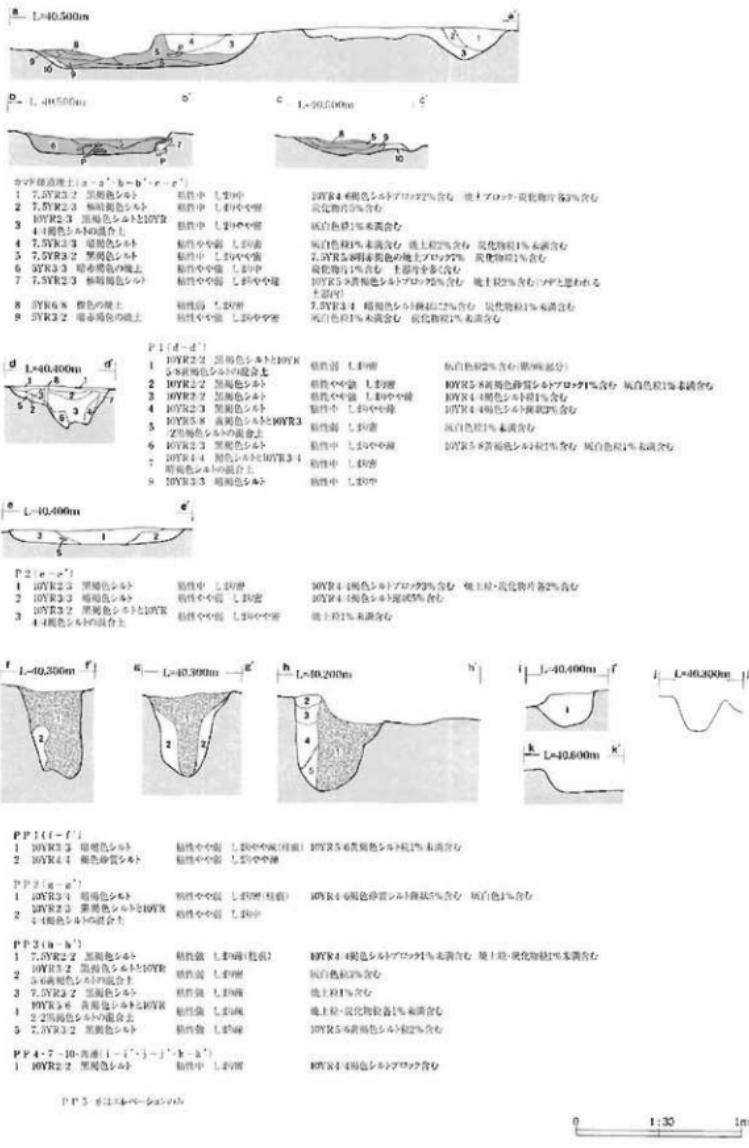
床面から土師器片2点、須恵器片4点、カマド構成材として土師器片3点、須恵器片1点、堆積土中より土師器片2点が出土した。器種は壺、双耳壺、甕、壺蓋類で構成される。壺は須恵器が卓越し、底部は回転イтокリされるものが多いが、回転ヘラキリによるものも(151)少数存在する。150は土師器の双耳壺で、内面黒色処理される。石器は1点が出土している。161は床面から出土した磨石である。鉄製品としては2点が出土している。162は堆積土中から出土した刀子である。163は堆積土下位から出土した刀装具である。出土遺物から判断して、本遺構は平安時代に属するものと推察される。



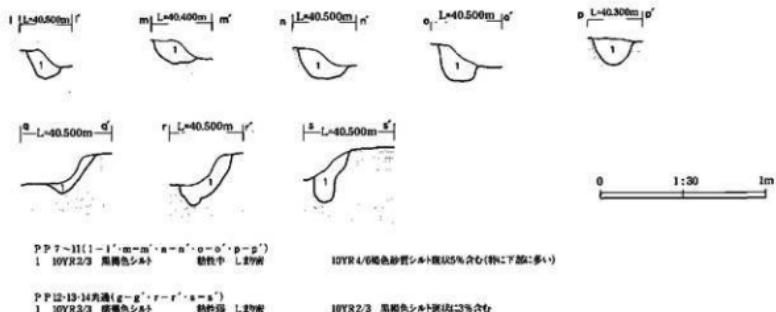
第40図 S I 10 窓穴住居跡(1)



第41圖 S.1.1.9 聲穴住屋跡 (2)



第42図 S-1-10 穴穴住居跡 (3)



No.	P1	P2	No.	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5
幅(㎝)	224×120	210×118	幅(㎝)	36×35	52×40	53×35	38×38	26×19
厚さ(㎝)	46.9	17.8	厚さ(㎝)	52.0	48.6	29.0	54.0	20.0
PP6	PP7	PP8	PP9	PP10	PP11	PP12	PP13	PP14
46×40	30×24	30×26	32×30	36×27	25×23	41×26	32×24	26×25
21.1	16.3	14.4	17.0	22.8	15.3	32.3	27.9	32.8

第43図 SII 10 積穴住居跡 (4)

SII 11 積穴住居跡

遺構 (第45・46図、写真図版13)

<位置・重複関係> XIA 8 i グリッドに位置する。検出面はIV層で、北側を砂礫層と接する部分で黒褐色のプランとして確認した。3号土坑と重複し、これによって切られる。

<規模・平面形> 南東辺4.33m、北西辺4.06m、北東辺3.75m、南西辺3.46mの隅丸方形を呈する。

<埋土> 7層からなり、炭化物を含む黒褐色シルト主体で構成される。

<壁> 壁高の残存値は23~31cmである。

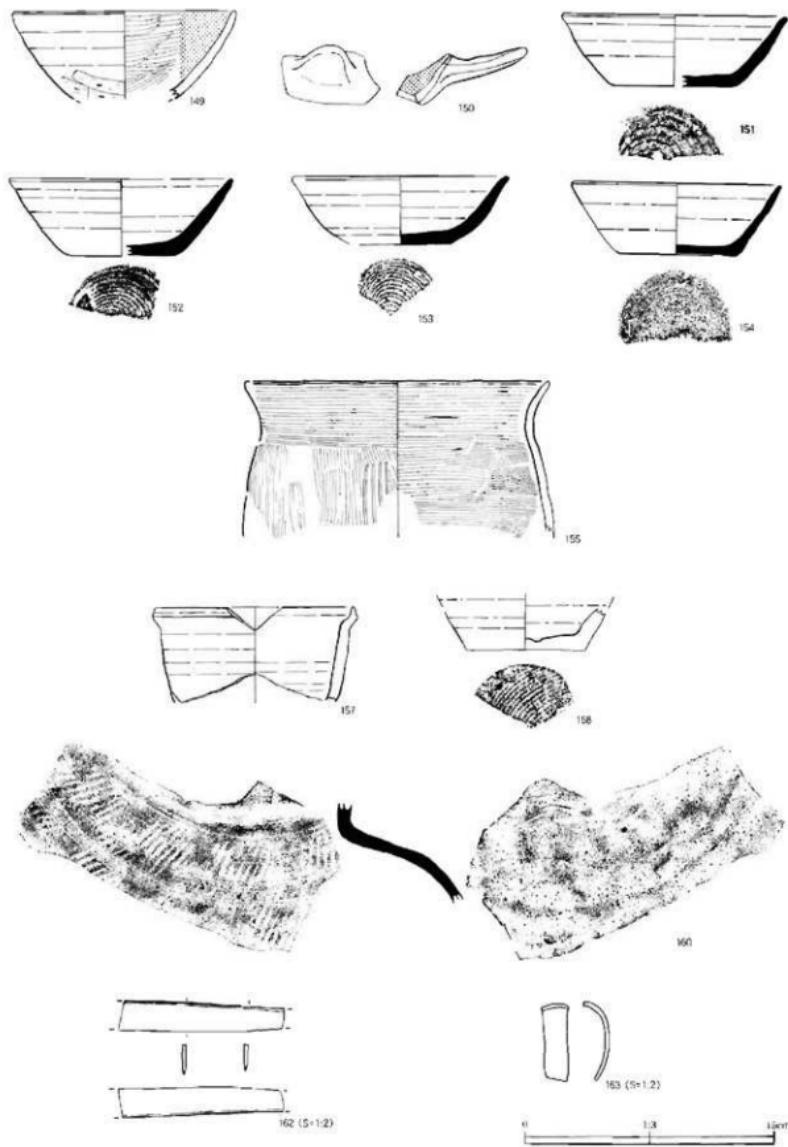
<床面> 床面はほぼ平坦で固くしまり、一部には砂礫が露出する。床面からは炭化した木材が多量に出土しており、焼失住居と考えられる。褐色砂質シルトと暗褐色シルトの混合土によって、貼り床が施される。

<カマド> 北西壁ほぼ中央に構築されている。カマド本体は黒褐色シルトを主体として構築される。燃焼部には39×45cm、厚さ13cmの範囲で現地性の焼土が形成される。煙道部は幅37cm、長さ1.55mの溝状に掘り込まれる。煙道部は煙出孔へ向かい、ほぼ平坦な角度をもって延びており、確認面からの深さは62cmである。煙道の構造など詳細は残存不良のため不明である。

<柱穴・ビット> 計6基の柱穴が検出された。住居中央部に検出された1基を除き、残り5基は壁柱穴である。柱穴の平面形は、ほぼ円形を呈している。規模は径22~37cm前後、深さ11~56cm前後を測る。これらの柱穴は、その配列から住居の主柱穴を構成するものと考えられる。

遺物 (第47図、写真図版47)

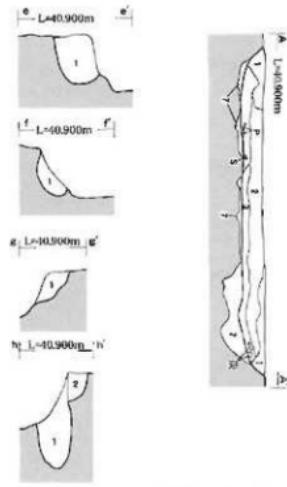
床面から土師器片3点のみ出土している。器種は壺や壺で構成される。製作に際していずれもロクロは使用されない。164は土師器の壺で、体部と口縁部の接するところに段を持つ。内面は黒色処理される。出土遺物から判断して、本遺構は奈良時代に属するものと推察される。



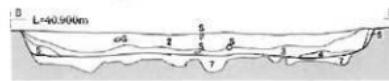
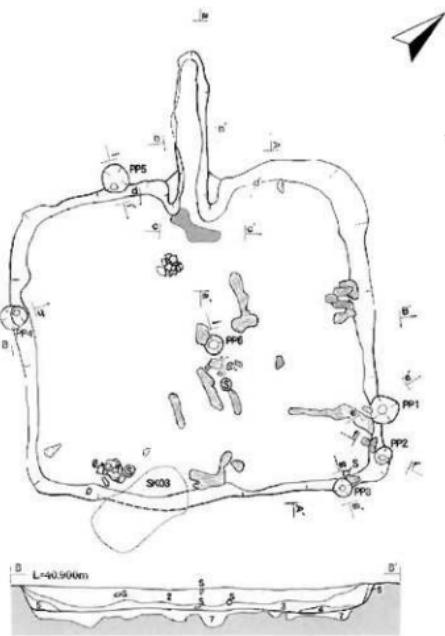
第44図 S-110 縱穴住居跡(5)

No.	PP1	PP2	PP3
横幅(cm)	37×34	24×19	23×21
深さ(cm)	34.6	25.1	20.4

PP4	PP5	PP6
32×28	35×30	22×21
56.7	24.6	11.1



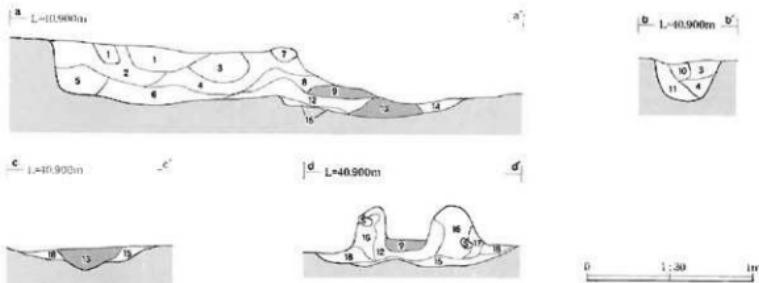
- | 断面(A-A', B-B') | | 断面(B-B') | |
|----------------|-------------------------------------|----------|--------|
| 1 | I DYK 3.7 黒褐色シルト | 粘性質 | しゆうじゆ |
| 2 | I DYR 2.3 黒褐色シルト | 粘性質 | しゆうじゆ |
| 3 | I DYR 2.3 黒褐色シルト | 粘性質 | しゆうじゆ |
| 4 | I DYR 4.5 黄褐色シルトとDYR 5.8 黄褐色シルト | 粘性質 | しゆうじゆ |
| 5 | I DYR 2.3 黑褐色シルト | 粘性質 | しゆうじゆ |
| 6 | I DYR 3.2 黄褐色シルトとI DYR 4.5 黄褐色土の混合土 | 粘性質や砂質 | しりやくじゆ |
| 7 | I DYR 4.4 黄褐色質 | 砂質 | さわじゆ |
| | I DYR 3.1 黄褐色シルトの混合土 | 粘性質 | しゆうじゆ |



0 1:60 20

- | | | | |
|--------------------------|--|------------|-----------------------------------|
| P P 1 (-e ⁻) | 1) YVR2.3 黒褐色シット
2) YVR2.3 黒褐色シット | 粘性や中弱 しのゆ中 | 10YR5-8 黄褐色シット含む
黒2cm大の細2%含む |
| P P 2 (-f ⁻) | 1) YVR2.3 黒褐色シット
2) YVR2.3 黒褐色シット | 粘性や中弱 しのゆ中 | 10YR5-8 黄褐色シット含む
黒2cm大の細含む |
| P P 3 (-e ⁻) | 1) YVR2.5 黒褐色シットトロワ
4種類のシット混合 | 粘性や中弱 しのゆ中 | 炭化物1%未満含む |
| P P 4 (-h ⁻) | 1) YVR3.4 黑褐色シット
2) YVR3.6 黄褐色シットと
3) YVR3.4 黑褐色シットの混合 | 粘性 中 しのゆ中 | 10YR5-8 黄褐色シット含む2%含む
炭化物1%未満含む |
| P P 5 (-i ⁻) | 1) YVR3.5 黄褐色シット弱いと
YVR3.2 黑褐色シットの混合 | 粘性弱 しのゆ中 | 炭化物含む 黒2cm大の細含む |
| P P 6 (-j ⁻) | 1) YVR3.1 黑褐色シット
2) YVR3.1 黑褐色シット | 粘性弱 しのゆ中 | 10YR5-8 黄褐色シット弱いと
炭化物含む |

第45図 S+1.1腎窓住居跡(1)

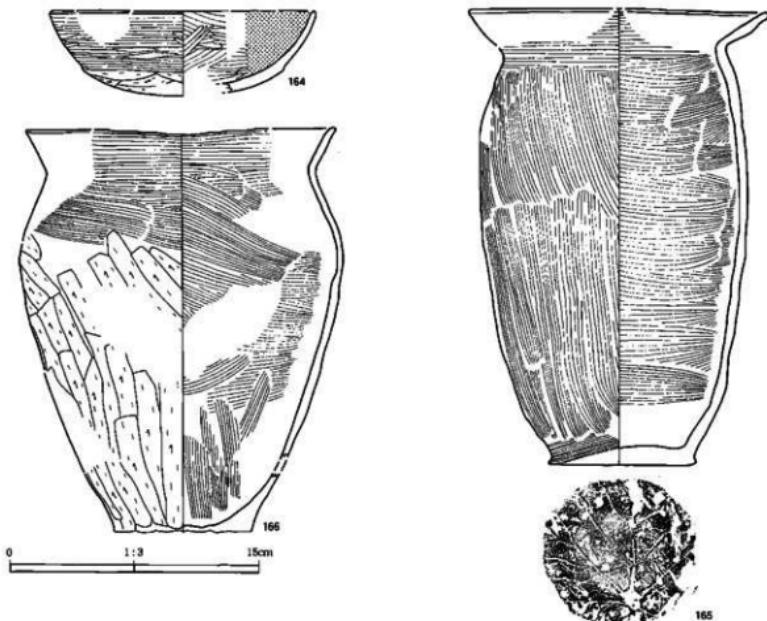


SPDF連続断面 (a-a', b-b', c-c', d-d')

- 1 10YR4.3 黄褐色シルト 粒状や砂質 しのぎ中
- 2 10YR2.2 黄褐色シルト 粒状中・上層部
- 3 10YR2.5 黄褐色シルトと砂質土 粒状少・上層部少
- 4 10YR2.2 黑褐色シルト 粒状や砂質 しのぎ中
- 5 10YR3.6 黄褐色砂質シルト 粒状や砂質 しのぎ中
- 6 10YR2.3 黑褐色シルトと砂質土 粒状中・上層部
- 7 10YR3.9 黄褐色シルト 粒状中 しのぎ層
- 8 10YR3.6 黄褐色砂質シルト 粒状弱 しのぎ層
- 9 10YR2.5 黑褐色シルトと砂質土 粒状少・上層部少
- 10 10YR2.4 黑褐色シルト 粒状中 しのぎ中
- 11 10YR2.2 黑褐色シルト 粒状中 しのぎ中
- 12 10YR2.2 黑褐色シルトとMVR 粒状中 しのぎ層
- 13 4.6 黑褐色シルトと粘土 粒状少
- 14 7.5YR2.3 黑褐色砂質シルト 粒状や砂質 しのぎ層
- 15 10YR3.9 黄褐色シルト 粒状や砂質 しのぎ層
- 16 10YR2.4 黄褐色シルト 粒状中 しのぎ層
- 17 10YR2.2 黑褐色シルト 粒状弱 しのぎ中
- 18 10YR3.4 黄褐色砂質シルト 粒状弱 しのぎ中

- 10YR2.2 黑褐色シルト斑状10%含む 硫化物1%含む
- 10YR5.5 黄褐色シルトと5%含む 硫化物0.5%含む
- 硫化物0.5%含む
- 10YR2.2 黑褐色シルトと2%含む 硫化物0.5%含む
- 10YR2.2 黑褐色シルトと2%含む 硫化物0.5%含む
- 硫化物0.5%含む
- 10YR3.1 黑褐色シルト0.2%含む 硫化物0.5%含む
- 硫化物0.5%含む
- 10YR2.5 黑褐色シルトと2%含む 硫化物0.5%含む
- 硫化物0.5%含む
- 10YR3.6 黑褐色シルト斑状10%含む 硫化物0.5%含む
- 10YR2.5 黑褐色シルト斑状10%含む 硫化物0.5%含む
- 10YR2.5 黑褐色シルト斑状15%含む 硫化物0.5%含む
- 硫化物0.5%含む
- 7.5YR1.6 黑褐色シルト斑状2%含む
- 10YR2.5 黑褐色シルト斑状10%含む 硫化物0.5%含む
- 10YR2.1 黑褐色シルト斑状1%含む
- 10YR2.2 黑褐色シルト斑状2%含む 硫化物0.5%含む (カマドの下)
- 硫化物0.5%含む
- 10YR3.4 黑褐色シルト0.5%含む

第46図 51111壁穴住居跡 (2)



第47図 S II 11 穫穴住居跡 (3)

S II 12 穫穴住居跡

遺構 (第48図、写真図版14)

<位置・重複関係> X IA 5 b グリッドに位置する。検出面はVI層の砂疊で、黒褐色のプランとして確認した。検出の時点では遺構の上部は削平により、殆ど消失しており、床面の僅かな部分が検出されたのみである。また南西部も擾乱を受けていた。遺構の南東部分は調査区域外にかかり、未調査である。

<規模・平面形> 北東辺-3.45m、北西辺 (4.65) m の隅丸方形を呈するものと推定される。北西辺は推定値、北東辺は残存値である。

<埋土> 上部が削平されており、層として確認できなかった。

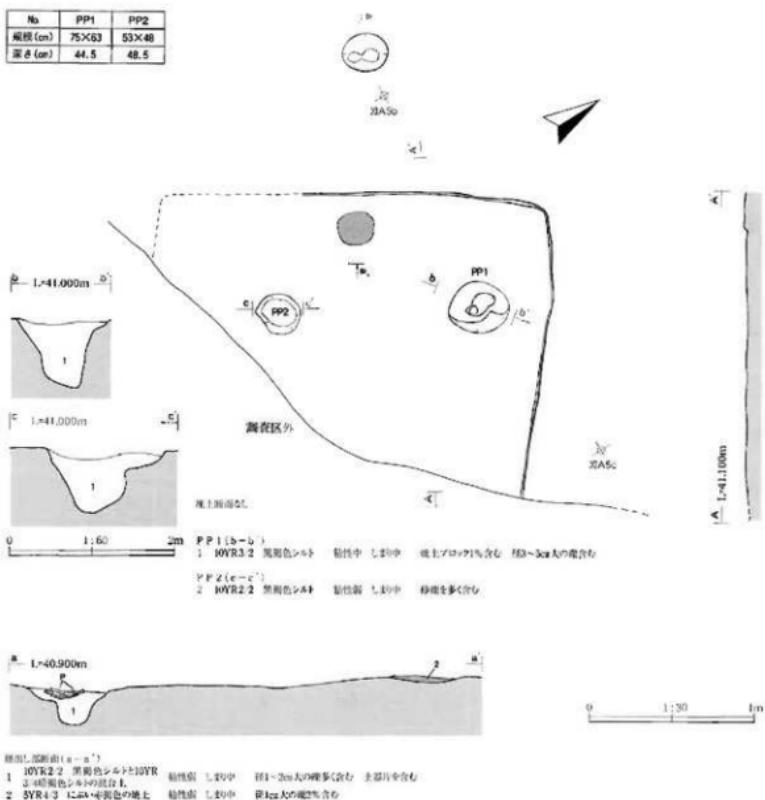
<壁> 残存していない。計測できた残存部で0.5~2.5cmを測る。

<床面> 床面は疊層で、やや起伏を持つ。壁構造と貼り床は確認できなかった。

<カマド> 残存状態は悪いが、燃焼部と思われる現地性の焼土及び煙出しの位置から、北西壁のほぼ中央に構築されていたものと推定される。焼土の規模は径44×39cm、厚さ4cmを測る。煙道部は確認できなかったが、煙出し部は住居の壁から北西145cmの位置に、径56×45cm、深さ20cmの土坑状に掘り込まれる。煙道の構造など詳細は残存不良のため不明である。

<柱穴・ピット> 床面から柱穴を2基検出した。平面形は不整な円形を呈し、規模はP P 1 が径75×63cm、

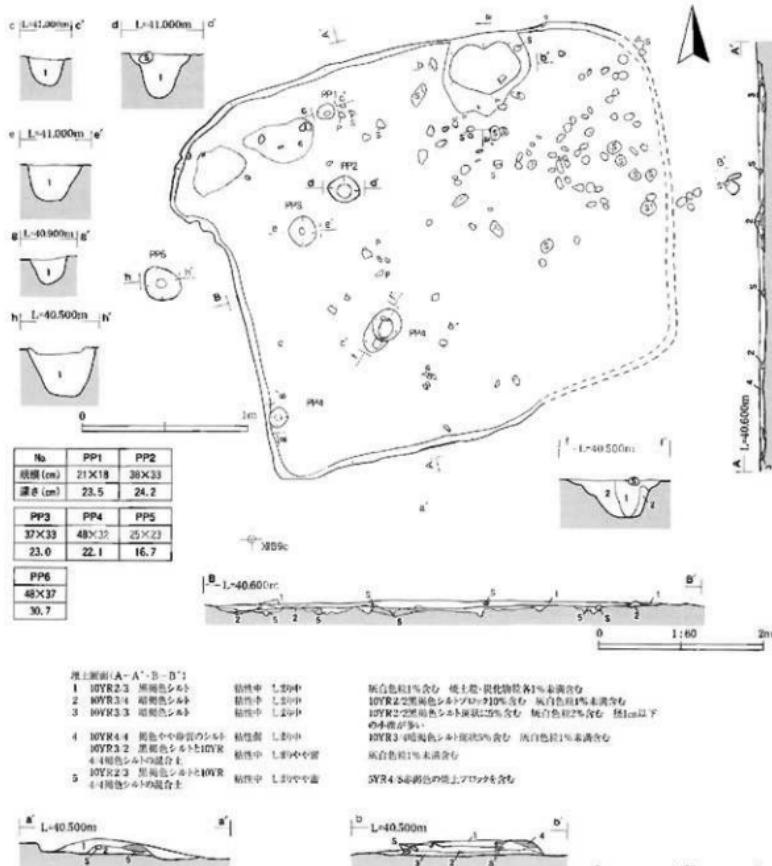
No	PP1	PP2
幅員(cm)	75×63	53×48
深さ(cm)	44.5	48.5



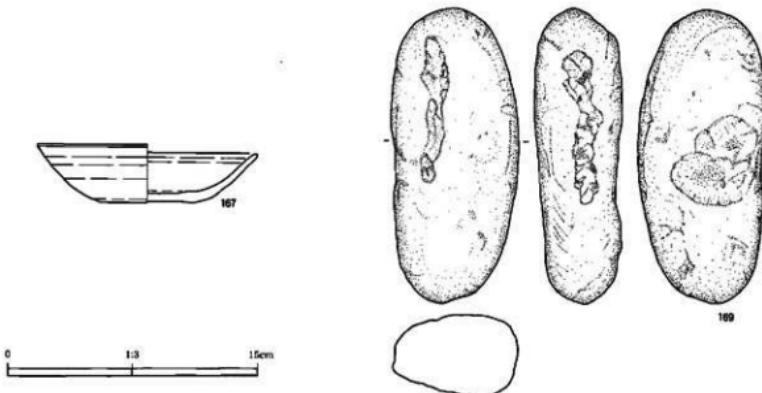
第48図 S 112 積穴住居跡

深さ44.5cm、PP2が径53×48cm、深さ48.5cmを測る。これらの柱穴は、その配列から見て住居の主柱穴を構成するものと思われ、未調査の南東部分にも同様の柱穴が存在するものと推測される。
遺物

遺物は出土していない。形態から古代の遺構と推察できるが、詳細については不明である。



第49図 S I 13 積穴住居跡 (1)



第50図 S I 13 穫穴住居跡（2）

S I 13 穫穴住居跡

遺構（第49図、写真図版15）

<位置・重複関係> X II B 8 c グリッドに位置する。検出面はⅣ層で暗褐色のプランとして確認した。検出の時点で上部は削平され消失しており、東側の壁については確認できなかった。

<規模・平面形> 東辺（3.95）m、西辺4.4m、北辺5.48m、南辺-3.3mの不整な隅丸方形を呈するものと推定される。東辺は推定値、南辺は残存値である。

<埋土> 5層からなる。灰白色粒・焼土・炭化物を含む黒褐色シルト主体で構成される。

<壁高> 壁高的残存値は2~7cmである。

<床面> 床面はⅣ層基盤疊上まで掘り込んで構築され、ほぼ平坦で堅く継まる。北西隅には移地性と思われる焼土ブロックの広がりが観察された。黒褐色と褐色シルトの混合土によって貼り床が施されている。

<カマド> 北壁東寄りの部分で構築土と思われる焼土ブロックを含む黒褐~暗褐色シルトの堆積を確認した。焼道、煙出孔などの施設は削平により残存しない。

<柱穴・ピット> 床面から5基、住居の西側に1基、計6基の柱穴が検出されている。柱穴の平面形は円形を呈し、規模は径21~48cm前後、深さ16~36cm前後を測る。これらの柱穴は住居の主柱穴を構成したものと推定される。

遺物（第50図、写真図版48）

堆積土中より土師器壺が1点出土している。内外面共にロクロナデ調整され、底部の切り離し技法は回転イтокリである。石器類は床面から2点が出土している。168は安山岩製の円錐である。169は安山岩製の礎石である。出土遺物から判断して、本遺構は平安時代に属するものと推察される。

S I 14 穴住居跡

遺構（第51～53図、写真図版16）

＜位置・重複関係＞X II B 7 b グリッドに位置する。検出面はⅡ層で黒褐色のプランとして確認した。

検出の段階で本調査前試掘トレンチによる削平を受けており、遺構の一部が破壊されていた。

＜規模・平面形＞東辺3.53m、西辺-2.65m、北辺3.48m、南辺(3.50)mの隅丸方形を呈するものと推定される。西辺は残存値、南辺は推定値である。

＜埋土＞8層からなり、灰白色粒、焼土、炭化物を含む暗褐色シルトを中心として構成される。

＜埋土＞壁の残存値は20～28cmである。

＜床面＞床面はほぼ平坦で固く締まるもので、一部が段丘基盤疊と接する。貼り床は確認できなかった。

＜カマド＞北壁の東寄り、壁辺1/3の場所に構築されている。試掘トレンチによって削平、破壊を受けているが、残存状態はそれほど悪くない。左右の袖からは芯材として用いられた礫、土師器の臺がまとまって出土している。燃焼部には焼土が殆ど認められず、ブロックとして黒色土に混入する程度である。煙道部は長さ1.4mを測り、緩やかな傾斜をもって徐々に深く掘り込まれ煙出孔へと続く。上部が削平を受けているため詳細は不明であるが、これらのことから判断して、煙道部の構造は割り貫き式であると推定される。煙出し部は径48×43cmの不整円形を呈し、確認面からの深さは38.4cmを測る。

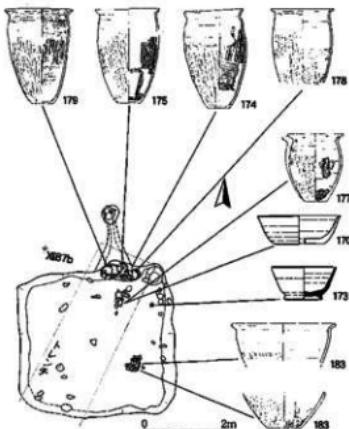
＜柱穴・ピット＞北東隅、カマド脇からピットが1基検出された。平面形は円形を呈し、規模は径42×40cm、深さ8.1cmを測る。

遺物（第54～56図、写真図版48～50）

床面から土師器片4点、須恵器片2点、カマドの構成材として土師器片8点、堆積土中より土師器片1点が出土している。器種は壺、高台付壺、壺、甕壺類で構成される。製作に際してはいずれもロクロが使用される。壺は内外面共にロクロナデ調整、底部は回転イ

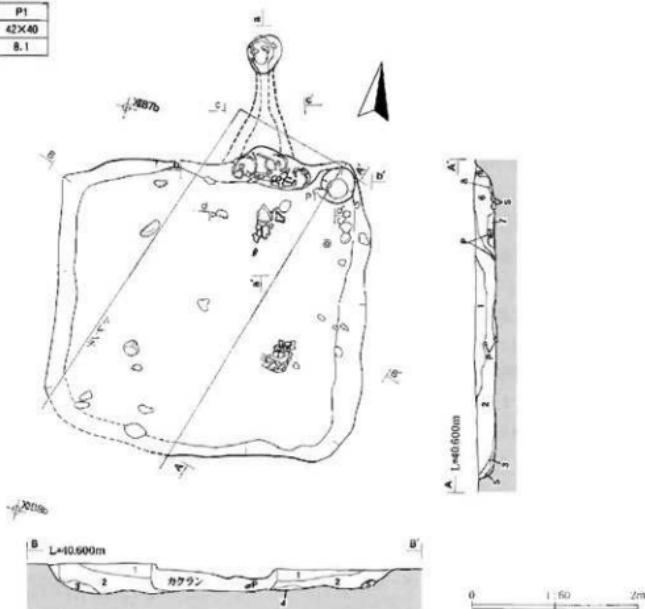
トキリされる。173は須恵器の高台壺で、ほぼ完形に近い状態で出土している。183は土師器壺で、上半部ロクロナデ調整、下半部ケズリ調整される。石製品としては床面から砥石が1点出土している(185)。

出土遺物から判断して、本遺構は平安時代に属するものと推察される。



第51図 S I 14 穴住居跡 (1)

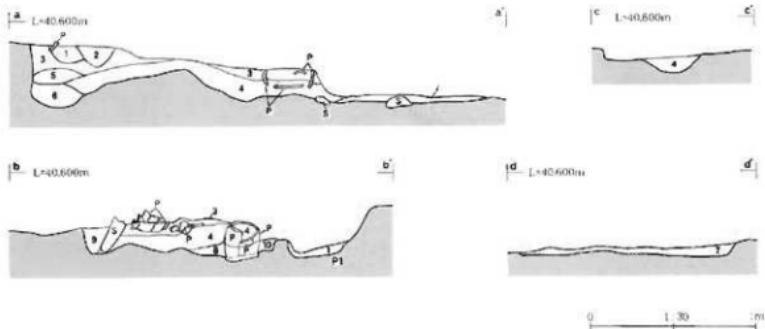
No.	P1
横幅(cm)	42×40
深さ(cm)	8.1



抄土層面(A-A'-B-B')

- | | | |
|------------------|------------|----------------------------------|
| 1 IOYR3-2 黒褐色シルト | 粘性中 しのり中や強 | 灰白色灰3%含む 地上段・炭化物各1%未満含む |
| 2 IOYR3-2 黒褐色シルト | 粘性中 しのり中 | 灰白色灰1%未満含む 地上段・炭化物各2%含む |
| 3 IOYR3-3 黑褐色シルト | 粘性やや強 しのり中 | IOYR4-6褐色含質シルト灰13%含む |
| 4 IOYR3-4 黑褐色シルト | 粘性中 しのり中 | IOYR5-6褐色含質シルト灰2%含む 文化試験レンチによる断面 |
| 5 IOYR2-3 黑褐色シルト | 粘性中 しのり中 | 灰白色灰1%未満含む 地上段・炭化物各1%未満含む |
| 6 IOYR2-3 黑褐色シルト | 粘性中 しのり中 | IOYR4-6褐色含質シルト灰灰10%含む |
| 7 IOYR2-4 黑褐色シルト | 粘性弱 しのり弱 | |
| 8 IOYR2-5 黑褐色シルト | 粘性中 しのり弱 | |

第52図 S-1-1-4 窪穴住居跡(2)



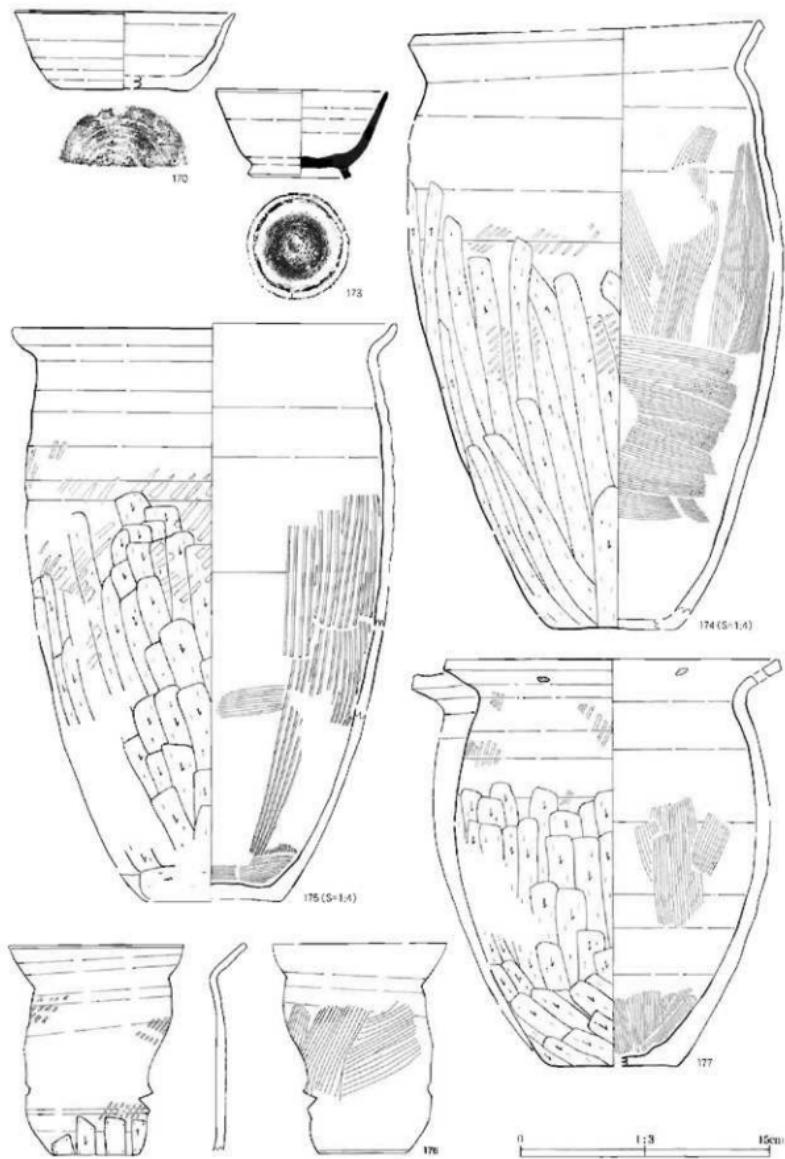
- カブ野断面(a～a'・b～b'・c～c'・d～d')
- 1 7.SVR3.2 黒褐色シルト 硬性中 し10cm
 - 2 10YR3.4 黑褐色シルト 硬性中 し10cm
 - 3 10YR2.3 黑褐色シルト 硬性やや弱 し20cm
 - 4 7.0YR2.3 黑褐色シルト 硬性やや強 し10cm
 - 5 10YR3.2 黑褐色シルト 硬性やや弱 し30cm
 - 6 10YR2.1 黑褐色やや砂質のシルト 硬性やや強 し10cm
 - 7 10YR3.3 黑褐色シルトと10YR3.2 硬性中 し10cm
 - 8 10YR2.3 黑褐色シルト 硬性弱 し10cm
 - 9 10YR2.3 黑褐色やや砂質のシルト 硬性弱 し10cm
 - 10 10YR2.4 黑褐色シルト 硬性中 し10cm

底白色1%未満含む 灰土粒・炭化物粒各2%含む 土器片を含む
 底白色粒2%含む
 底白色粒2%未満含む(1層に近い)
 灰土粒・炭化物粒各1%含む
 灰土粒3%含む 炭化物粒2%含む
 10YR4-6褐色シルブリック含む 炭化物粒1%含む

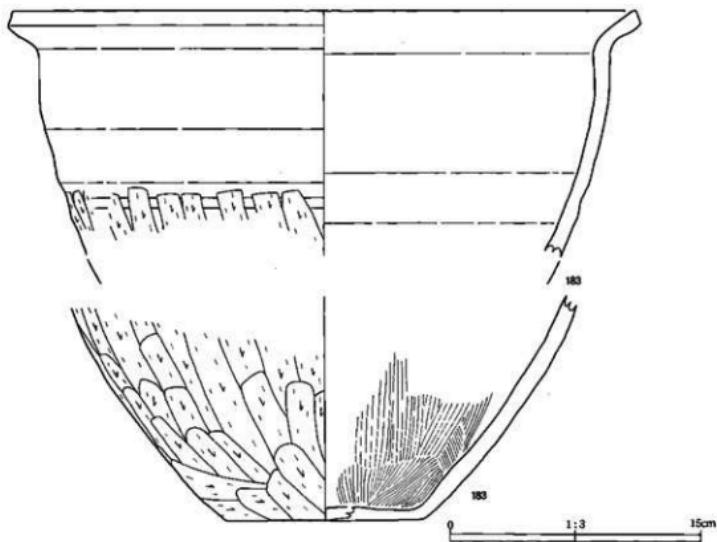
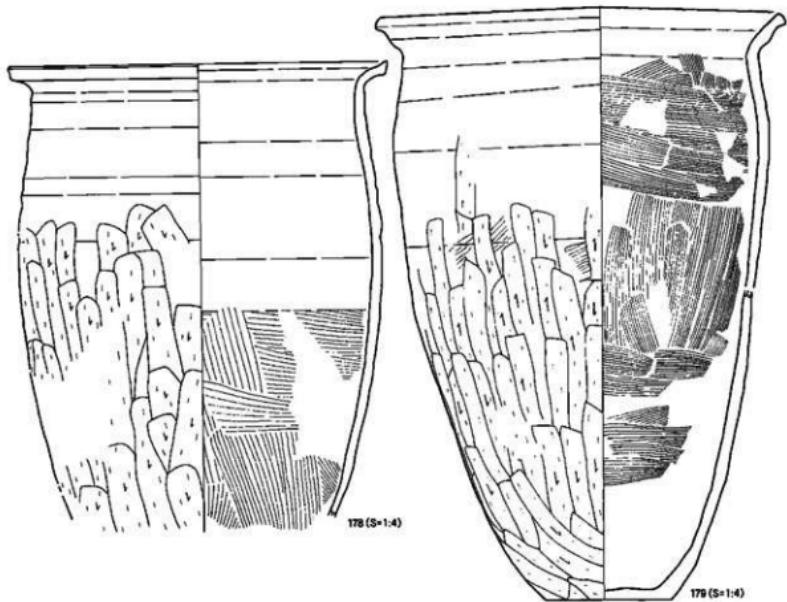
- P1(b～b'に含)
 1 10YR3/4 黑褐色シルト 硬性中 し10cm

底白色1%未満含む

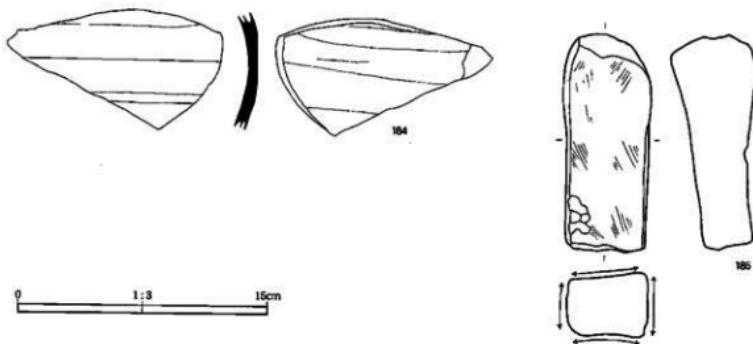
第53図 S114 積穴住居跡（3）



第54図 S114 穴住居跡 (4)



第55図 S 1 1 4 穫穴住居跡 (5)



第56図 SII 14 壁穴住居跡 (6)

SII 15 壁穴住居跡

造構（第57~59図、写真図版17）

<位置・重複関係> XIA 10j グリッドに位置する。

検出面はIV層で黒褐色のプランとして確認した。

<規模・平面形> 東辺2.93m、西辺2.97m、北辺2.62m、南辺2.5mの隅二方形を呈する。

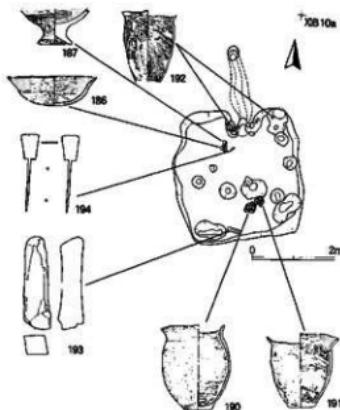
<埋土> 5層からなり、黄褐色砂質シルトを含む黒褐色シルト主体で構成される。

<壁> 壁高の残存値は10~20cmである。

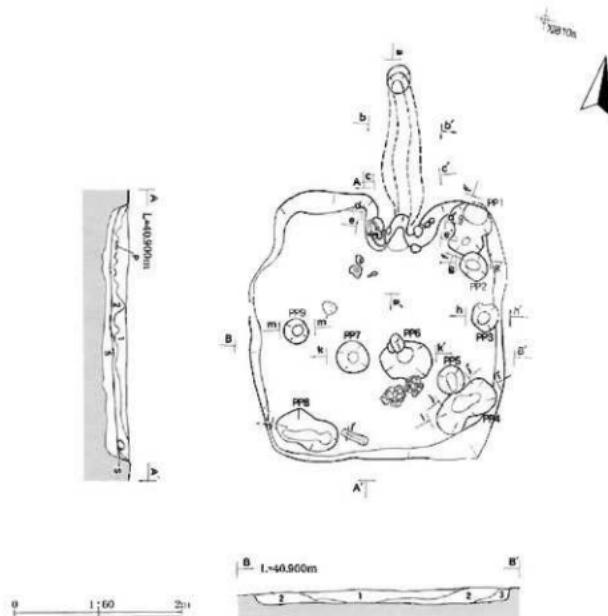
<床面> 床面は砂質土で構築されており、ほぼ平坦でやや締まる。黒褐色と褐色シルトの混合土によって貼り床が施される。

<カマド> 北壁の中央やや東寄りに構築されており、カマド本体はにぶい黄褐色～暗褐色シルト、黒褐色シルトの混合土によって造られ、左右の袖には芯材として大型の礫、土器片が用いられている。煙道は割り貫き式と推定され、長さ1.54mを測る。煙出し部は梢円形を呈し、規模33×24cm、深さ40.9cmの土坑状に掘り込まれる。燃焼部中央には褐色砂質シルトを斑状に含む黒褐色土が確認されるのみで明確な焼土は認められない。

<柱穴・ピット> 床面から計7基の柱穴が検出された。柱穴の平面形は円形、または不整円形を呈し、規模は径32~78cm前後、深さ14~26cm前後を測る。これらの柱穴は住居の主柱穴を構成するものと推定されるが、詳細は不明である。



第57図 SII 15 壁穴住居跡 (1)



No.	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7	PP8	PP9
幅(cm)	62×35	34×28	32×30	79×36	34×32	63×44	43×38	76×34	30×28
深さ(cm)	16.8	14.5	22.3	21.7	15.8	25.9	23.8	21.7	13.5

種別断面(A-A', B-B')

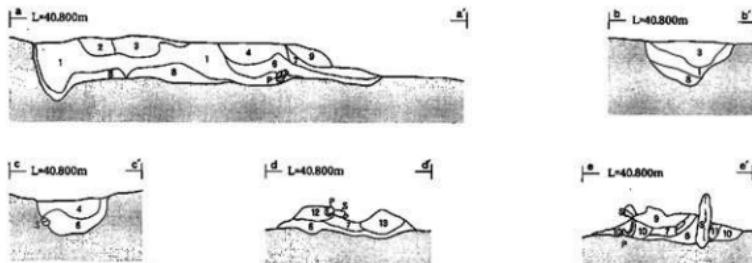
1 10YR 3/2 黒褐色シルト 粘性中 し190
2 10YR 3/3 黄褐色シルト 粘性中 し190
3 10YR 3/4 黄褐色シルト 粘性中 し190
4 10YR 3/2 黄褐色シルト 黏性強 し190
5 10YR 3/1 黄褐色シルト 10YR 4/2 黏性弱 し190
4/6褐色シルトの混在土

10YR 5/6 黄褐色砂質シルトプロック含む 硫化物1%含む
10YR 5/4 6/1 黄褐色砂質シルト強度5%含む 硫化物1%含む
10YR 5/6 黄褐色砂質シルト強度10%含む
10YR 3/2 黄褐色シルトプロック含む

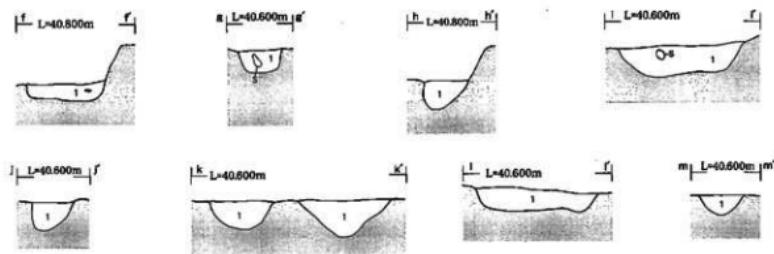
第58図 S-1-1.5 積穴住居跡 (2)

遺物 (第60図、写真図版50、51)

床面から七脚器片6点、堆積土から土脚器片1点が出土している。器種は壺、高杯、甕で構成される。製作に際してクロコが使用されるものはない。186は床面から出土した土脚器壺で、底部丸底風を呈し、体部にごく緩い段を持ち、外反しながら口縁部に至る。内外面共に粗いミガキ調査が施され、黒色処理される。187、188は高杯である。188は底部にヘラ印「X」を持つ。190は土脚器壺で、底部は丸底風を呈する。内外面ともにナデ調査される。石製品としては床面から礫石が1点出土している(193)。鉄製品は床面より鉄錠が1点出土している(194)。出土遺物から判断して、本遺跡は奈良時代に属するものと推察される。



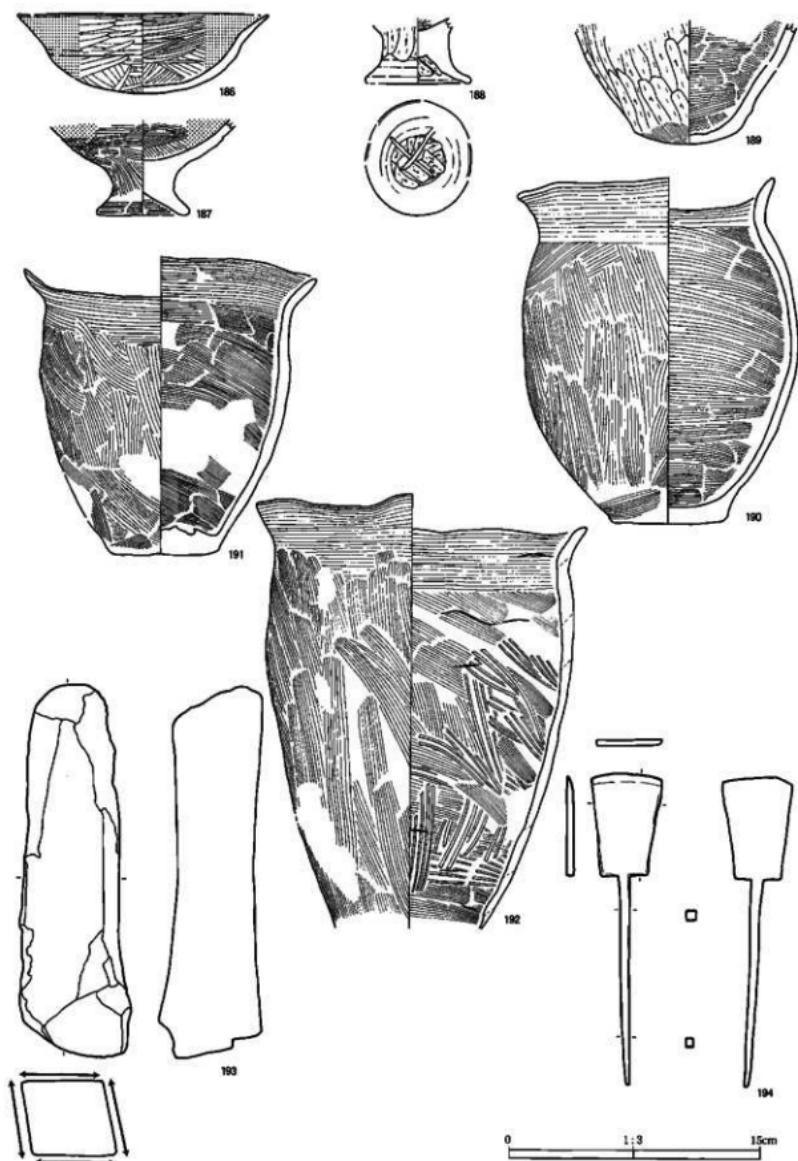
カマド堅穴住層(1-a'-b'-c'-d'-e'-f')	
1	10YR 2/3 黒褐色シルト
2	10YR 3/4 單褐色やや質實のシルト 硬性弱 しわやや密
3	10YR 4/6 單褐色シルト
4	10YR 3/1 黒褐色シルト
5	10YR 4/4 黑褐色シルト
6	4個の黑色色輪シルトと10YR 硬性弱 しわ中
7	10YR 2/3 黑褐色シルト
8	10YR 4/4 黑褐色の砂
9	10YR 4/3 にぶつ・質褐色シルトと 黄褐色シルトの複合土
10	10YR 2/4 黑褐色シルト
11	10YR 2/1 黑褐色シルト
12	10YR 2/3 黑褐色シルト
13	10YR 2/2 黑褐色シルト
10YR 4/6褐色砂質シルトブロック5%含む 塵土粒・炭化物粒各1%未満 を含む	
10YR 2/2 黑褐色シルトブロック3%	
7.5YR 4/4褐色の塵土ブロック2%含む 灰白色1%未満	
10YR 3/3 黑褐色シルト質状含む 塗土粒1%未満含む	
10YR 4/4褐色の砂質シルト質状2%含む	
10YR 2/3 黑褐色シルト質状2% 非褐色塵土1%未満含む	
塗土粒・炭化物粒各1%未満含む(カマドのソダ)	
SYR 4/6褐色砂質シルトブロック3%含む 灰化塵1%を含む	
10YR 4/6褐色砂質シルトブロック5%含む 塵土粒1%未満含む	



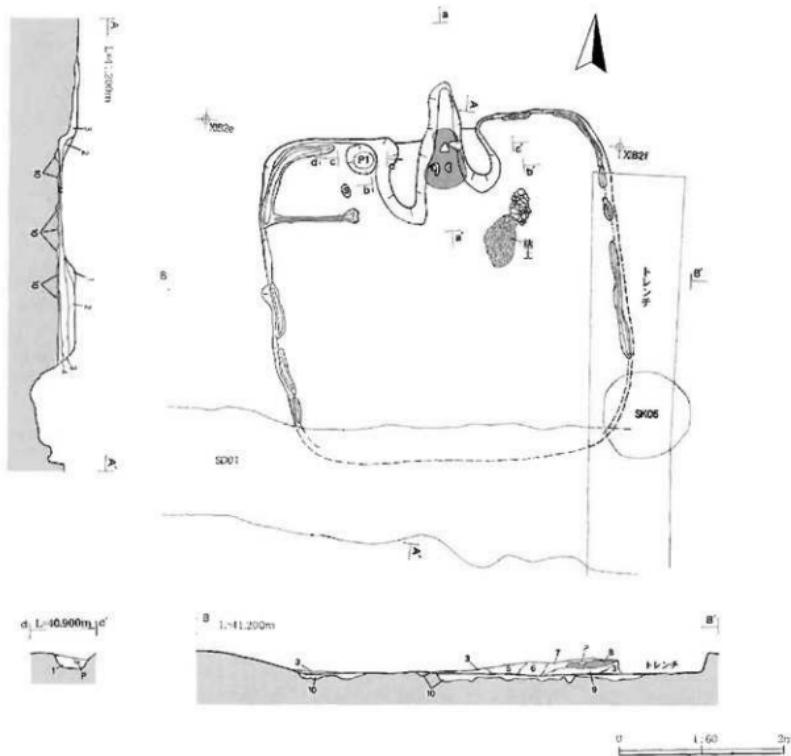
PP 1-2 共通(1-f'-g'-e')	
1	10YR 2/3 黑褐色シルト
	硬性弱 しわ中
	10YR 4/6褐色の砂質40%含む
PP 3(h-h')	
1	10YR 3/3 黑褐色シルト
	硬性弱 しわ強
	10YR 4/4褐色の砂ブロック5%含む
PP 4(j-1')	
1	10YR 3/3 黑褐色シルト
	硬性弱 しわ強
	10YR 4/6褐色の砂質25%含む 塵土粒・炭化物粒各1%未満を含む
PP 5(j-1')	
1	10YR 2/3 黑褐色シルト
	硬性 中 しわ強
	10YR 5/3にね・質褐色の砂質35%含む
PP 6-k-9 共通(1-k'-1-l'-m-m')	
1	10YR 2/2 黑褐色シルト
	硬性弱 しわ強
	10YR 5/6褐色砂質シルトブロック40%含む 10YR 4/6褐色の砂質 に10%含む

0 1:30 1m

第59図 S I 15 堅穴住層(3)



第60圖 S I 15 積穴住居跡 (4)

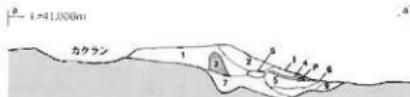


地土断面(A-A', B-B')

- | | | |
|---------------------------------|-------------|---|
| 1 10YR2/4 暗褐色シルト | 粘性やや弱 し20cm | 10YR5/8 黄褐色シルト12%含む 黄褐色1%含む |
| 2 10YR2/3 黑褐色シルト | 粘性やや弱 し20cm | 10YR5/8 黄褐色シルト12%含む 黄褐色1%含む |
| 3 10YR2/1 黑褐色シルト | 粘性少 し20cm | 10YR5/8 黄褐色シルト12%含む ブロック状5%含む 水化物鉱1%含む |
| 4 10YR3/2 暗褐色シルト | 粘性少 し20cm | 10YR5/8 黄褐色シルト12%含む 黄褐色1%含む |
| 5 10YR3/3 暗褐色シルト | 粘性弱 し20cm | 10YR5/4 黄褐色シルト12%含む 黄褐色1%含む 黄褐色1%含む |
| 6 10YR2/2 黑褐色シルト | 粘性やや弱 し20cm | 10YR5/4 にい黄褐色シルト12%含む 黄褐色1%含む 水化物鉱各1%含む |
| 7 10YR2/3 黑褐色シルト | 粘性やや弱 し20cm | SYR4/8 黄褐色の底土と10YR3/3の混合土 |
| 8 SYR4/8 赤褐色の底土と10YR3/3の混合土 | 粘性少 し20cm | 粘性弱 し20cm |
| 9 10YR2/2 黑褐色シルト | 粘性少 し20cm | SYR4/8 黄褐色シルト12%含む 黄褐色1%含む |
| 10 10YR2/3 黑褐色シルト | 粘性弱 し20cm | 10YR6/6 明黄褐色シルト12%含む 黄褐色1%含む |
| 11 5 10YR3/3 暗褐色シルトと10YR3/3の混合土 | 粘性弱 し20cm | (粘性弱) |

D-D'-E-E'

- | | | |
|------------------|-------------|---|
| 1 10YR3/4 暗褐色シルト | 粘性やや弱 し20cm | 10YR5/8 黄褐色シルト砂質シルト混在12%含む SYR5/8 明赤褐色の
底土プロト2%含む 粘性弱多<%含む |
|------------------|-------------|---|



厚さ(cm)	PP1
標高(cm)	38×37
底土(cm)	17.0

0 1 30 1m

第61図 S116 穫穴住居 (1)

S I 16 積穴住居跡

遺構（第61・62図、写真図版18）

＜位置・重複関係＞X I B 2 e グリッドに位置する。検出面はIV層で黒褐色のプランとして確認した。

S D01方形周溝、S K06土坑と重複しており、これらに切られて遺構の南側は消失している。また本調査前試掘トレンチによる削平を受け、東壁の大部分は失われている。

＜規模・平面形＞東片-85cm、西辺-3.36m、北辺3.82m、南辺(3.8)mの隅丸方形を呈するものと推定される。東西辺は残存値、南辺は推定値である。

＜埋土＞10層からなり、黄褐色シルトを含む黒褐色シルトを主体として構成される。

＜壁＞東壁の大部分と南壁は消失している。壁の残存値は7~24cmである。

＜床面＞床面は平坦で堅く締まる。黄褐色シルトと黒褐色シルトの混合土によって、貼り床が施される。壁際には壁溝が巡り、西壁の北寄り1/4の地点に長さ1.1m、幅8cmほどの間仕切り溝を持つ。

＜カマド＞北壁ほぼ中央に設置されている。両袖は黒褐色~黄褐色のシルト主体で構築されている。燃焼部中央には円窓が据えられ、周辺に現地性の焼土の広がりが見られる。このことから円窓は支柱として用いられた可能性がある。焼土の範囲は径70×38cmで不整な梢円形を呈し、厚さ3cmを測る。煙道、煙出し部は擾乱によって破壊され、残存状態は不良である。残存する煙道部の規模は幅35cm、長さ50cmの溝状に掘り込まれる。煙道部は煙出孔へ向かい徐々に浅くなっている、約7°の角度をもって立ち上がる。煙道の構造など詳細は残存不良のため不明である。

＜柱穴・ピット＞カマド左袖脇の壁際にピットが1基検出された。平面形は円形を呈しており、規模は径38×37cm、深さ17cmを測る。

遺物（第63図、写真図版52）

床面から土師器片2点、カマド燃焼部から土師器片1点、堆積土中から土師器片5点、須恵器片1点が出士した。器種は壺、鉢、甕、壺蓋類で構成される。195は土師器壺で、内面黒色処理される。196は土師器鉢で内面黒色処理される。198~201は土師器甕で、内外面共にハケメ調整されることが多い。203は須恵器の甕蓋類で、タクキ成形を経てロクロナデ+ケズリ調整される。土製品としては床面より土製筋鉋車が1点出土している(204)。出土遺物から判断して、本遺構は奈良時代に属するものと推察される。

S I 17 積穴住居跡

遺構（第64図、写真図版19）

＜位置・重複関係＞X I A 3 j グリッドに位置する。検出面はVI層で黒褐色のプランとして確認した。検出の時点で上部は削平を受けてほとんど消失しており、更に床面中央部は本調査前試掘トレンチやゴミ穴によって破壊されていた。

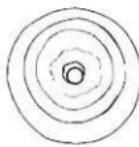
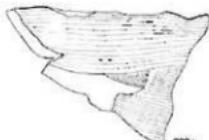
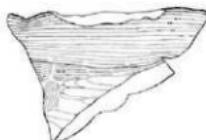
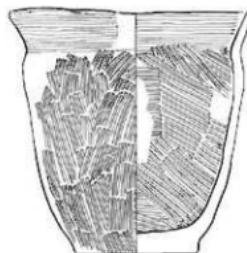
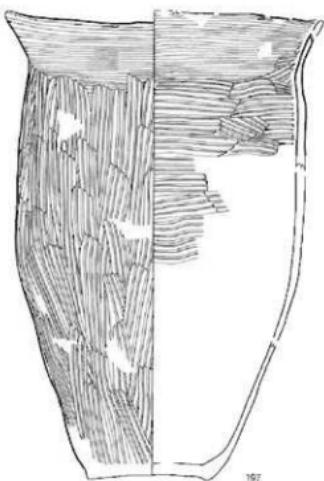
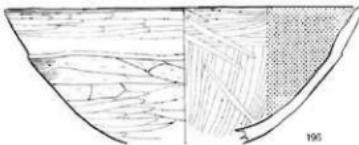
＜規模・平面形＞東辺5.0m、西辺5.7m、北辺(5.54)m、南辺(5.44)mの隅丸方形を呈するものと推定される。北辺、南辺は推定値である。

＜埋土＞残存部は黒褐色シルト主体で構成されるもので、埋土に多量の礫を含む。

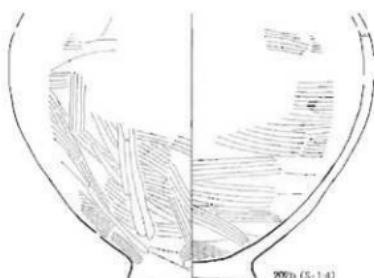
＜壁＞ほとんど残存しておらず、計測できた部分でも1~4cmを測るのみである。

＜床面＞床面は砂礫層まで掘り込んで構築されており、中央部に試掘トレンチ、ゴミ穴が掘削されており、破壊されている。貼り床は認められなかった。

＜カマド＞東壁のほぼ中央に構築されているが、削平を受けて残存状態は不良である。残存部からカマド本



204 (S=1:2)



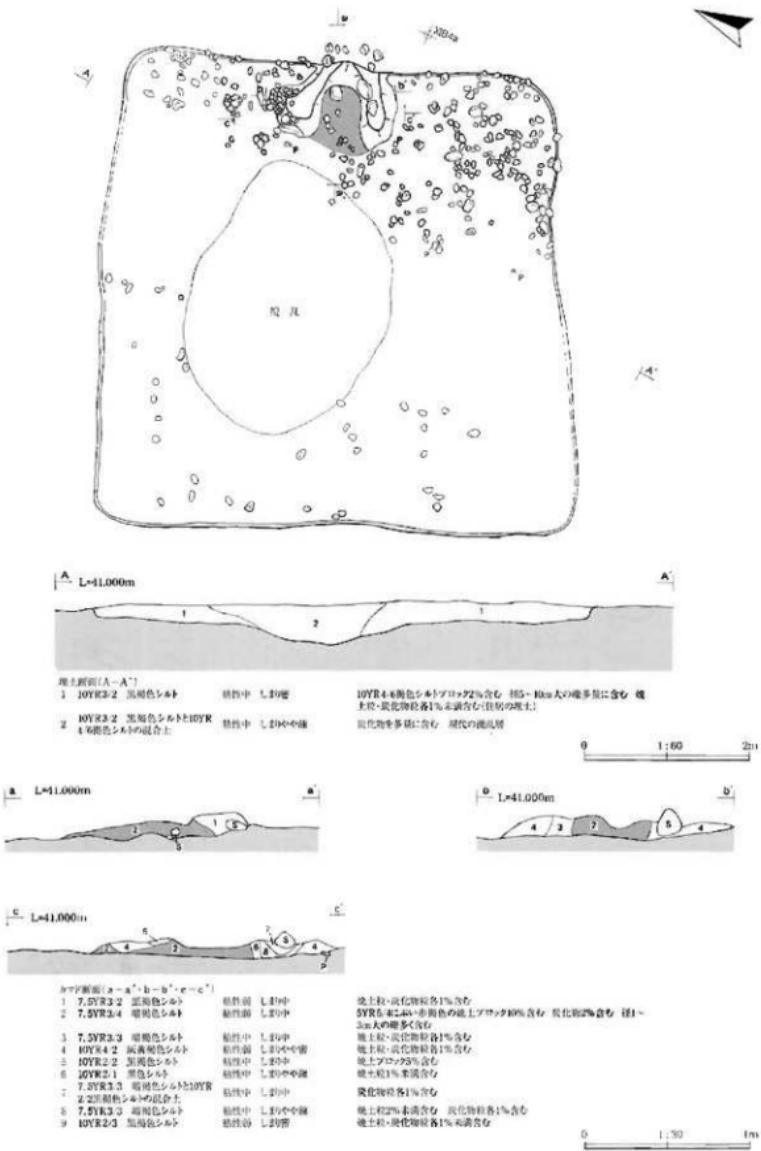
200D (S=1:4)



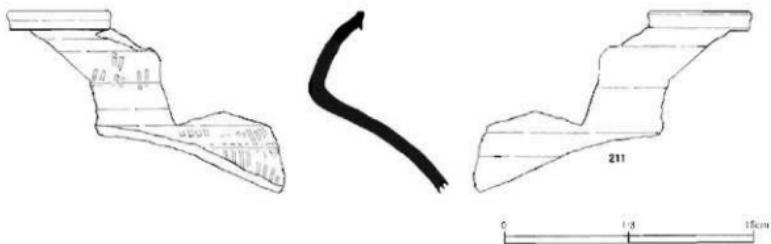
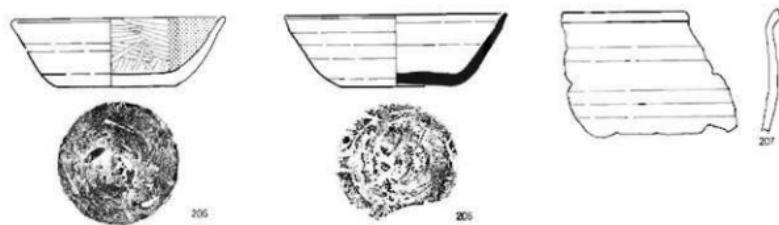
203



第63図 S I 16 穂穴住居跡 (3)



第64図 S 1 17 竪穴住居跡 (1)



第65図 S I 1 7 竪穴住居跡 (2)

S I 18 穹穴住居跡

遺構（第66・67図、写真図版20）

＜位置・重複関係＞X II A 1 i グリッドに位置する。検出面はIV層で8号住居跡埋土掘削時に重複する暗褐色のプランを確認した。このため当初S I 18住居跡の存在に気付かず東壁上部を掘削してしまった。S I 08住居跡と重複しており、これを切る。

＜規模・平面形＞東辺3.47m、西辺3.75m、北辺3.5m、南辺-3.3mの隅丸方形を呈するものと推定される。南辺は残存値である。

＜埋土＞7層からなり、灰白色粒を含む黒褐色シルトを主体として構成される。

＜壁＞残存高は31~34cmを測る。

＜床面＞床面はほぼ平坦で硬く締まっている。褐色砂質シルトと黒褐色シルトの混合土によって、貼り床が施される。

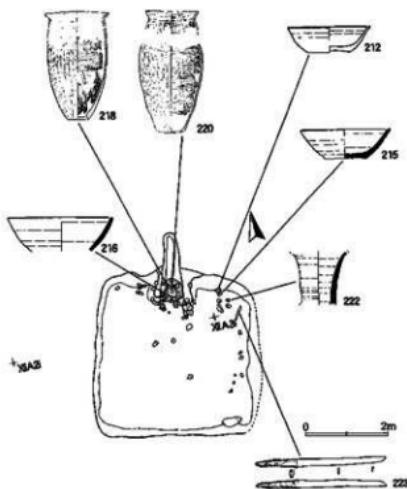
＜カマド＞北壁のほぼ中央に構築されている。カマド本体は褐色シルトを主体として構築され、左右の袖には土師器の長胴壺片、径10cm大の環が芯材として用いられる。燃焼部には径20cm大の比熱環が左右に据えられ、現地性の焼土が形成されていることから支脚として用いられたものと推定される。焼土の範囲は径56×54cm、厚さは2cmを測る。煙道部は長さ85cmを測り17°の角度をもって緩やかに立ち上がり煙出し部に至る。煙道部の構造など詳細は残存不良のため不明である。

＜柱穴・ビット＞検出されなかった。

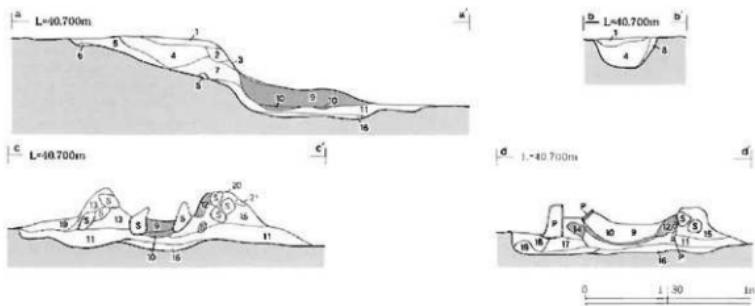
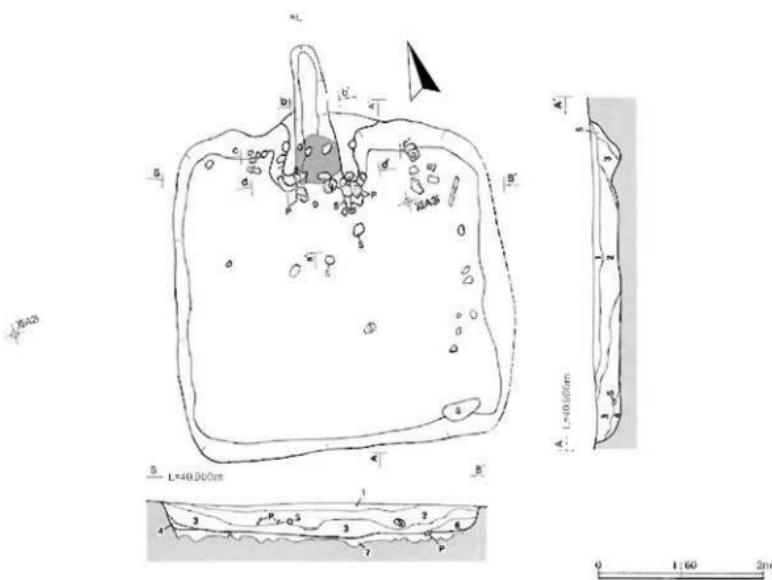
遺物（第68・69図、写真図版53・54）

床面から土師器片1点、須恵器片4点、カマド構成材として土師器片4点、須恵器片3点が出土している。器種は壺、甕、壺蓋類、長頸瓶で構成される。

製作に際してはロクロが使用されるものと使用されないものがある。壺は須恵器が卓越し、底部の切り離し技法は回転ヘラキリと回転イトキリの両者が混在する。212と217は墨書き土器で、それぞれ底部と部体に墨書きを持つ。鉄製品としては1点が出土している。223は床面から出土した短刀である。出土遺物から本遺構は平安時代に属するものと推察される。



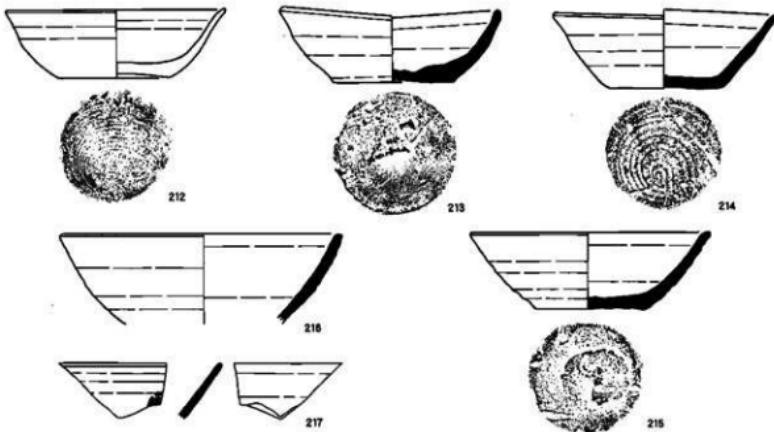
第66図 S I 18 穹穴住居跡 (1)



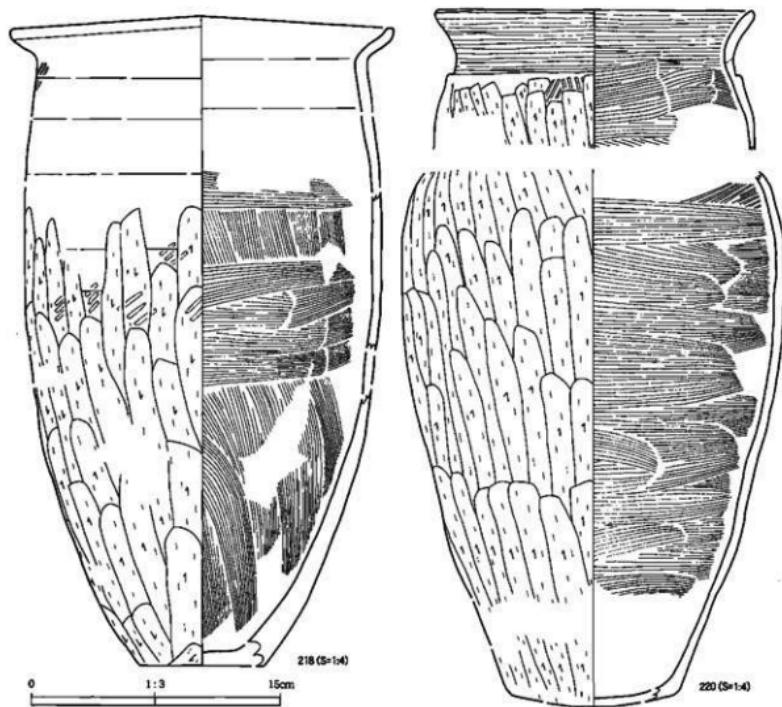
第67図 S-18 積穴住居跡 (2)

- カマツ連道断面 (a-a'・b-b'・c-c'・d-d')
- 7.SYR3/3 墓褐色やや赤褐色シルト 粘性弱 しのぎ弱
 - 7.SYR3/4 墓褐色シルト 粘性弱 しのぎ弱
 - 7.SYR3/5 黒褐色シルト 粘性弱 L.39中
 - 7.SYR2/2 墓褐色シルト 粘性やや弱 L.39中
 - 7.SYR2/3 黒褐色シルト 粘性弱 L.39中と10YR
4/4褐色シルトの混合土
 - 10YR4/4 黑褐色シルト 粘性弱 L.39中
 - 7.SYR3/2 黑褐色シルト 粘性弱 L.39中
 - 7.SYR3/3 黑褐色シルト 粘性中 L.39中や弱
 - 9.9TR3/1 黑色シルト 粘性中 L.39中や弱
 - 7.SYR2/3 墓褐色やや赤褐色のシルト 粘性弱 しのぎ弱
 - 10YR4/4 黑褐色シルトの混合土 粘性弱 L.39中
 - 3 黑褐色シルトの混合土
 - SYR3/5 黑褐色の壤土 粘性弱 L.39中
 - 10YR4/6 黑褐色の壤土 粘性弱 L.39中
 - SYR4/6 黑褐色の壤土 粘性弱 L.39中
 - 10YR4/5 黑褐色の壤土 粘性弱 L.39中
 - 10YR4/4 黑褐色シルト 粘性弱 L.39中
 - 10YR3/2 黑褐色シルト 粘性弱 L.39中
 - 10YR3/6 黑褐色シルト 粘性弱 L.39中

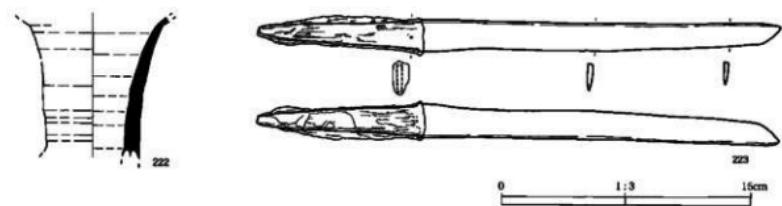
7.SYR4/6 墓褐色砂質シルト層状5% 灰白色粒1%含む 灰化物粒1%未
混合土
7.SYR4/6 墓褐色砂質シルト層状10% 灰白色粒1%含む 地土粒・灰化
物粒各1%未混合土
地土粒・灰化物粒各1%含む
地土粒・プロック各1%含む 灰化物粒1%含む
灰化物粒1%未混合土
SYR3/3 黑褐色の壤土ブロック5%含む
灰化物粒1%含む
SYR3/3 黑褐色の壤土の混合土ブロック5%含む
灰化物粒2%含む 灰化物粒1%含む
地土粒2%含む 灰化物粒1%含む
10YR6/6 黑褐色シルト層状5%含む SYR3/3 墓褐色の壤土ブロック5%
含む(崩落)
SYR3/3 黑褐色の壤土の混合土ブロック5%含む
灰化物粒1%含む
SYR3/3 黑褐色の壤土の混合土ブロック5%含む カマツの根部分
灰化物粒2%含む カマツの根部分
灰化物粒2%含む 塵土粒1%含む カマツの根部分
灰化物粒1%未混合土
10YR3/4 黑褐色シルトブロック5%含む カマツの根部分
10YR3/3 黑褐色シルトブロック5%含む
10YR4/4 黑褐色シルト層状5%含む
10YR5/5 黑褐色シルト層状5%含む



第68図 S I 18 堆穴住居跡 (3)

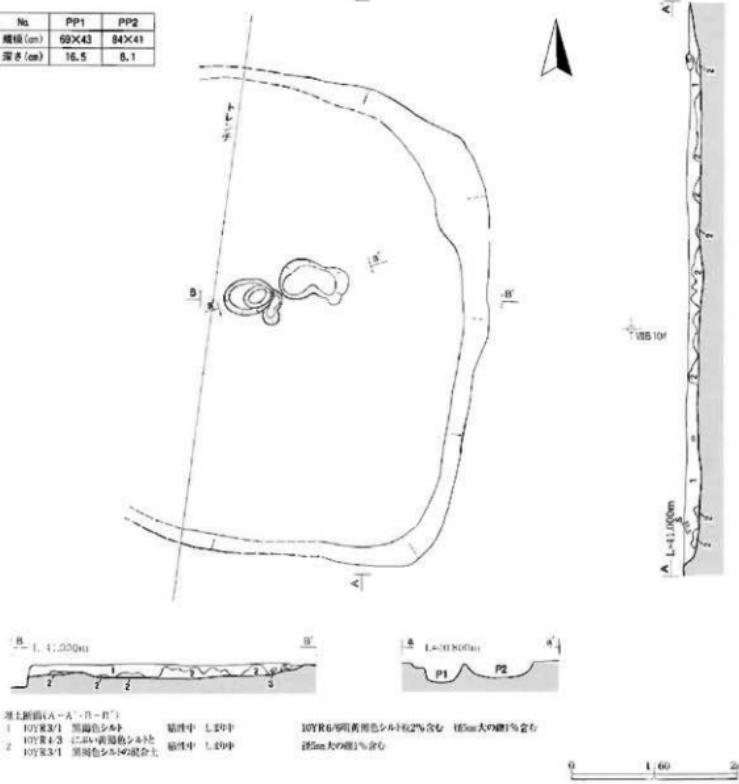


S I 18 壺穴住居跡出土遺物①



第69図 S I 18 壺穴住居跡 (4)

Ns	PP1	PP2
横幅(cm)	60×43	84×41
深さ(cm)	16.5	8.1



第70図 S II 1.9 穏穴住居跡（1）

S I 19 窓穴住居跡

遺構（第70・71図、写真図版21）

＜位置・重複関係＞X II B 9 e グリッドに位置する。検出面はIV層で、遺物の集中する黒褐色のプランとして確認した。上部は後世の削平を受け消しておらず、西側部分も本調査前試掘トレンチによって破壊、消失していた。遺構の残存状態は不良である。

＜規模・平面形＞東辺5.07m、北辺-2.2m、南辺-2.9mを測る。西辺は残存していないが、本来は隅丸方形と推定される。北辺、南辺とも残存値である。

＜埋土＞2層からなる。上層は黒褐色シルト、下層はにぶい黄褐色シルトと黒褐色シルトの混合土で構成される。埋土中に多量の礫を含む。

＜壁＞西壁は本調査以前のトレンチによる掘削を受け消しておらず、北壁、南壁も残存状態は不良である。残存値は10~16cmを測る。

＜床面＞床面は砂砾基盤層上に接して構築されたもので、やや起伏を持ち堅く締まる。貼り床は確認できなかった。

＜カマド＞調査範囲においては未確認であるが、削平されて残存していない可能性、あるいは西側に存在する余地も残される。残存不良により詳細は不明である。

＜柱穴・ピット＞住居の中央部から2基のピットが検出された。P 1は径69×43cm、深さ16.5cmを測り、平面形は不整な円形を呈する。P 2は径84×41cm、深さ8.1cmを測り、平面形は不整な円形を呈する。2基とも内部から礫、遺物が出土している。

遺物（第72・73図、写真図版54・55）

床面から土師器片11点、土師器片3点、堆積土中より土師器片10点、須恵器片3点が出土している。器種は壺、高台付、鉢、臺、壺蓋類、大甕で構成され、製作に際してはロクロが使用されている。壺は全て土師器で、底部の切り離し技法は回転トイキリによる。壺の法量が小形のもののが存在する。

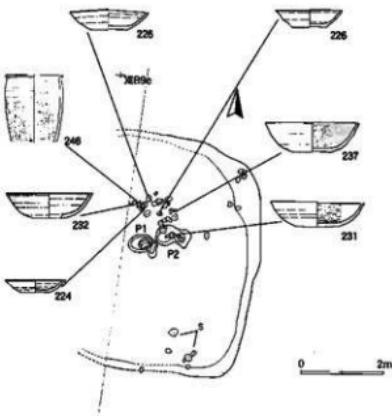
241・242は土師器高台壺で、内面黑色処理される。249・250は須恵器の大甕で外面平行タタキ、内面平行アテグによる器面調整を持つ。出土遺物から本遺構は平安時代に属すると推察される。

S I 20 窓穴住居跡

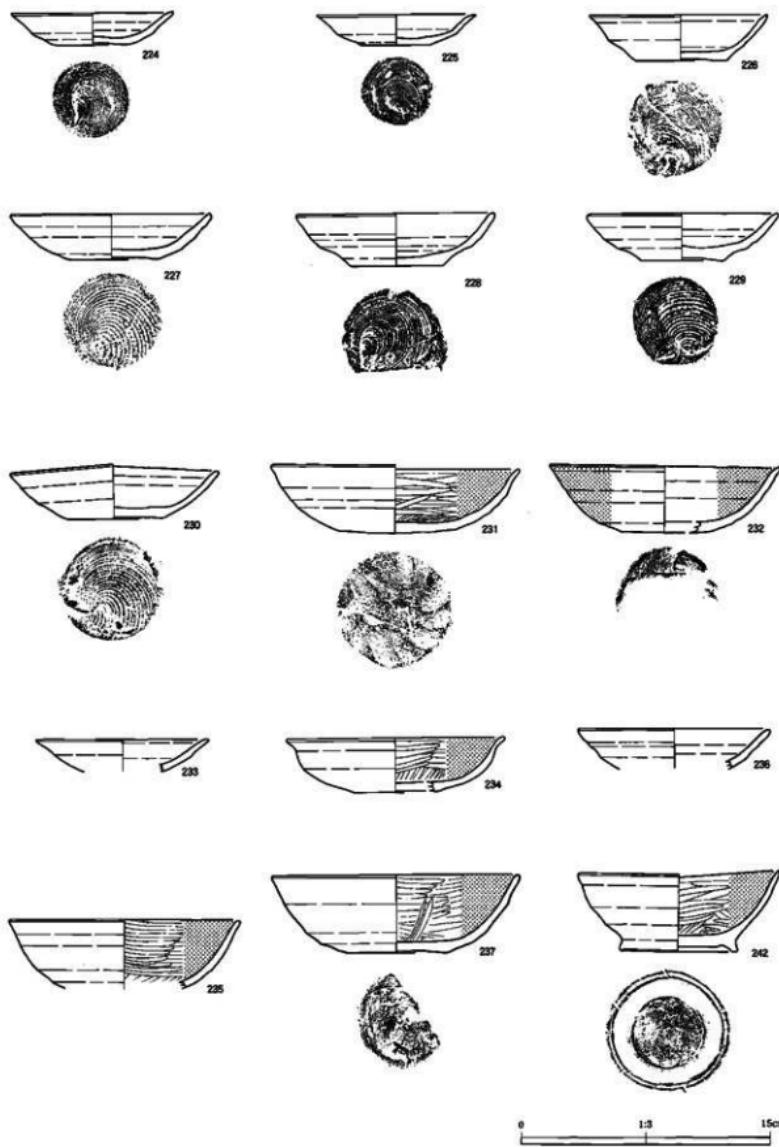
遺構（第74図、写真図版22）

＜位置・重複関係＞X I A 10 g グリッドに位置する。検出面はIV層で暗褐色のプランを確認した。検出時に上部は後世の削平を受けており、残存状況は不良である。また、北辺から東辺にかけては擾乱によって破壊、消失しており、東壁を検出できなかった。

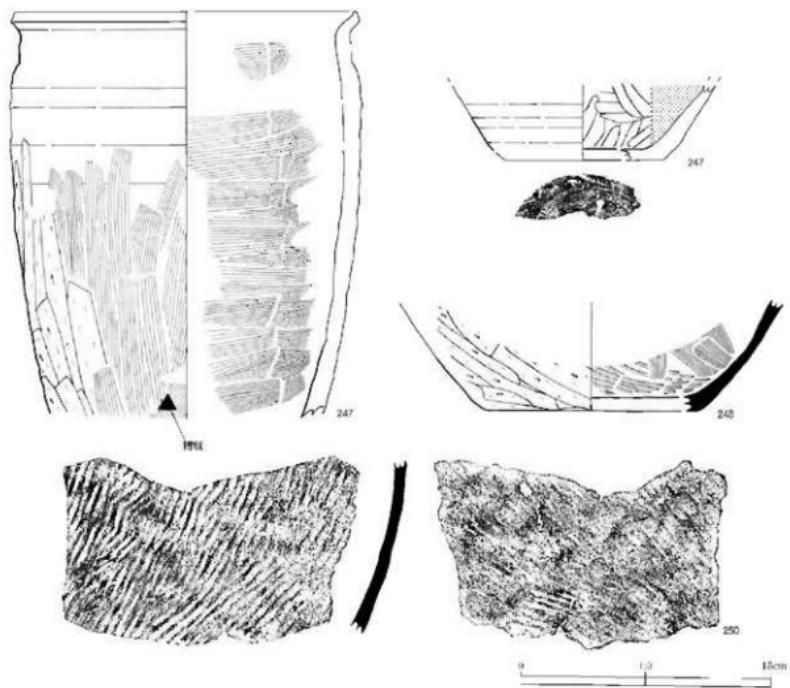
＜規模・平面形＞西辺3.7m、北辺-1.15m、南辺-3.06mを測る。東辺は消失していたが、本来は隅丸方形を呈するものと推定される。北



第71図 S I 19 窓穴住居跡 (2)



第72図 S I 19 壁穴住居跡 (3)



第73図 S 1 1 9 積穴住居跡 (4)

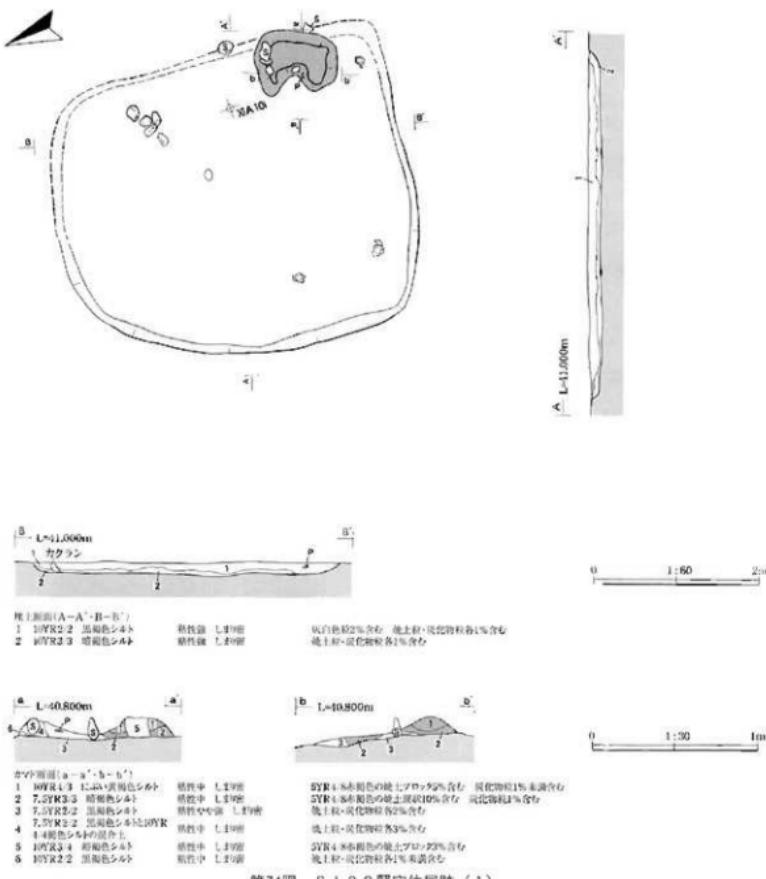
辺と南辺も残存値である。

<埋土> 2層からなる。上位は灰白色粒、旋土、炭化物を含む黒褐色シルト、下位は焼土、炭化物を含む暗褐色シルトで構成される。

<壁> 残存値は7~12cmである。北壁から東壁にかけては乱で破壊され、消失していた。

<床面> 砂埋造盤層を床面とし、ほぼ平坦で堅く緻まる。

<カマド> 東壁南寄り1/3の地点で構築しと思われる焼土ブロック混じりのにびい黄褐色シルトの堆積を確認した。袖部からは被熱して赤変した礫が突出されており、これを芯材として黄褐色~褐色シルトで覆って構築されたものと見られる。また、燃焼部では中央に礫が埋められており、これを支脚として用いていた可能性がある。煙道部、突出し部は残存不良のため確認できず、詳細は不明である。



第74図 S120竪穴住居跡（1）

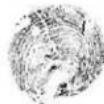
<柱穴・ビット>検出されなかった。

遺物（第75図、写真図版56）

床面から土師器片3点、須恵器片1点、カマドの構成材として土師器片1点、堆積土中より土師器片4点が出土している。器種は壺、皿、甕で構成され、製作に際してはロクロが使用されている。壺は上部器が多く、底部の切り離し技法は回転イキリによるものが多い。257は床面から出土した須恵器の外で、底部はヘラケズリ再調整される。258は堆積土から出土した土師器皿で、内外面共にロクロナダ調整される。出土遺物から判断して、本遺構は平安時代に相当するものと推察される。



251



252



253



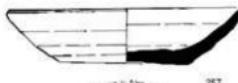
254



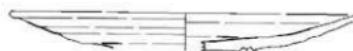
255



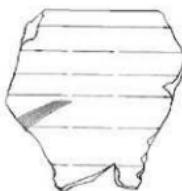
256



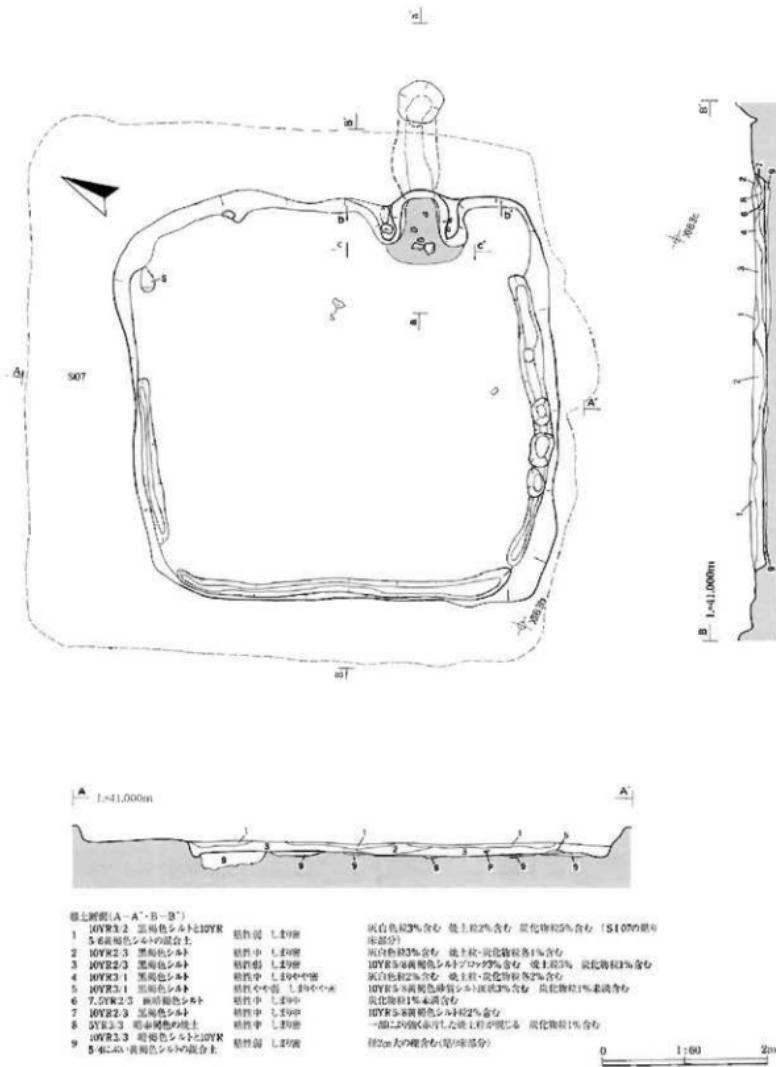
257



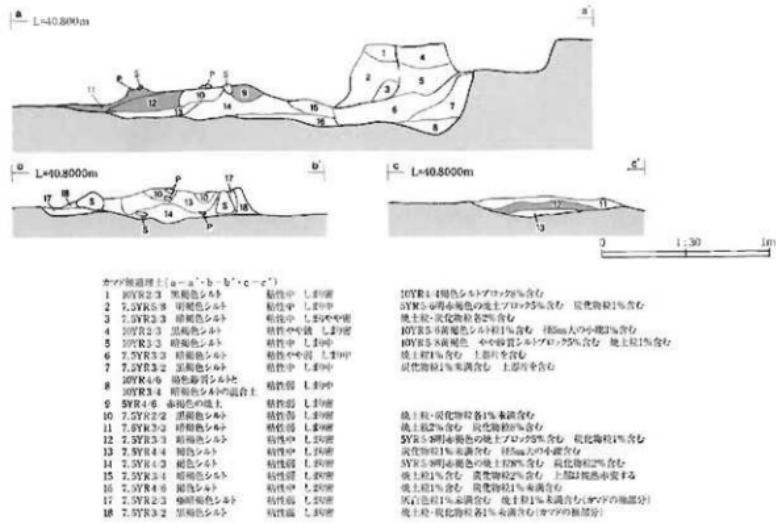
258



第75図 S 120 窪穴住居跡 (2)



第76図 S 121 積穴住居跡 (1)



第77図 S121竪穴住居跡（2）

S121竪穴住居跡

遺構（第76・77図、写真図版23）

<位置・重複関係> X II B 2 b グリッドに位置する。7号住居跡を新査中、住居の床面で暗褐色のプランを確認した。埋土の断面觀察、貼り床の状況から本住居跡はS107住居跡よりは時期的に古いと判断され、S107住居跡抜張以前の構築であると考えられる。

<規模・平面形> 東辺4.81m、西辺4.6m、北辺4.27m、南辺4.75mの隅丸方形を呈する。

<埋土> 9層からなり、灰白色粒、焼土、炭化物を含む黒褐色シルトを主体として構成される。最上部の1層は7号住居跡の貼り床である。

<壁> 残存高は3~12cmである。

<床面> やや起伏を持ち、硬くしまる。埋土の9層部分に、暗褐色と/or 黄褐色シルトの混合土によって貼り床が形成される。壁際には檐溝が巡る。

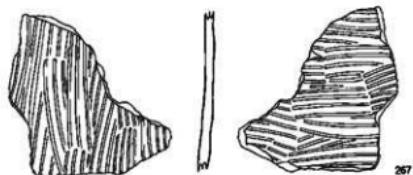
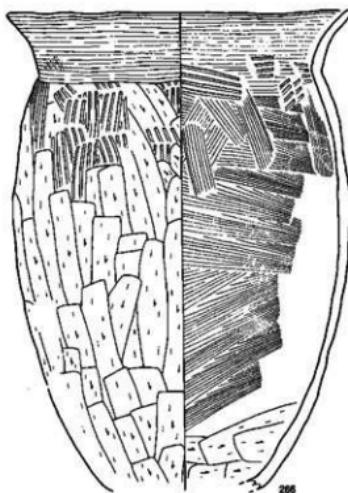
<カマド> 東壁の南寄りの部分に構築されていた。残存状態はやや不良である、両袖は甕を芯材として粘土で覆って構築されている。燃焼部には90cm×70cm、厚さ8cmの範囲で、現地性の焼土が形成される。

煙道部は割り貫き式で、長さ80cmを測る。煙道部の半ばまで赤く被熱していた。煙出し部は不整な円形を呈しており、径54cm×49cm、深さ37cmの土坑が掘り込まれる。

<柱穴・ピット> 検出されなかった。

遺物（第78図、写真図版56・57）

床面から須恵器片2点、カマド燃焼部から土師器片1点、堆積土中から土師器片5点、須恵器片2点が出土している。器種は灰、高环、罐、甕、壺類で構成される。製作に際してはロクロが使用されるものと使



0 1:3 15cm

第78圖 S I 2 1 壓穴住處跡 (3)

用されないものがある。土師器の环は外面ロクロナデ調整、内面ミガキ+黒色処理されるものが多く、底部分は切り離し後、ヘラケズリ再調整される。262・263は須恵器环で、底部の切り離し技法はそれぞれ、回転ヘラキリ、ヘラケズリ再調整される。265は土師器の单孔器で、外面タタキ成形後ケズリ調整、内面ナデ+ハケメ調整される。268・269は須恵器の壺壺類である。出土物から本遺構は平安時代に属するものと推察される。

S 1 2 2 積穴住居跡

遺構（第79～81図、写真図版24）

＜位置・重複関係＞X II A 2 f グリッドに位置する。検出はⅣ層で、にぶい赤褐色の焼土の広がりとして確認した。検出の段階で上部は削平を受けたは消失しており、壁も大部分は確認できなかった。

＜規模・平面形＞西辺-3.2m、北辺-3.75mの周丸方形を呈するものと推定される。西辺と北辺は残存値である。

＜埋土＞3層からなり、焼土を含む黒褐色シルトを主体として構成される。

＜壁＞西壁と北壁の壁高は残存値で4cm～16cmを測る。

＜床面＞ほぼ平坦であり、粘土質で堅く固まっている。多量の焼土が散在し、炭化材も僅かに認められるところから焼失性居と推測される。焼土は北東隅、南東隅、北西壁際に多量に分布する。貼り床は確認できなかった。

＜カマド＞北東隅で構築土と思われる焼土ブロックを含む黒褐色シルトの堆積と、並列の芯材と見られる跡を検出した。但し、削平を受けた残存状態は乏しい。

＜柱穴・ピット＞床面から4基の柱穴と4基のピットが検出された。柱穴の平面形は円形を呈し、規模は径28～54cm前後、深さ14～29cm前後を測る。これらの柱穴はその配置から住居の主柱穴を構成するものと推定される。ピットの平面形は円形から稍円形を呈し、規模は径54～96cm前後、深さ11～34cm前後を測る。

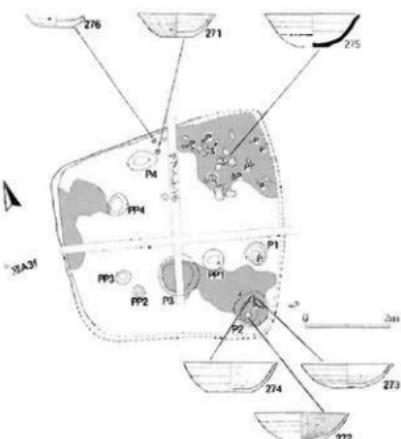
このうちP 2 の底面付近からは完形の环が出土して

いる（272）。

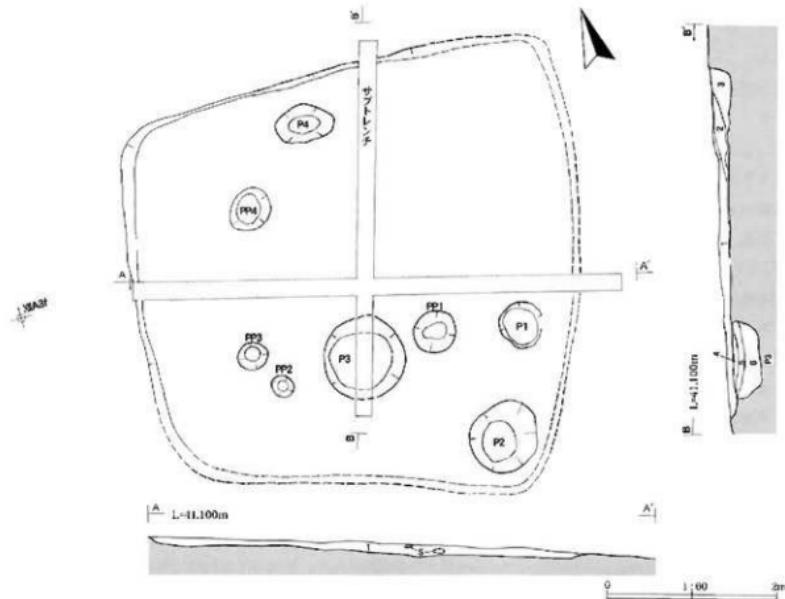
遺物（第82図、写真図版57・58）

床面から土師器片6点、カマド構成材として須恵器片1点、堆積土中より土師器片5点、須恵器片3点が出土している。器種は环、鉢、壺、壺壺類、大甕で構成され、製作に際してはコクロが使用されている。环は内外面共にロクロナデ調整されるものと、内面ミガキ+黒色処理されるものがある。底部の切り離し技法は回転ヘラキリである。

276は土師器鉢で、内面ミガキ+黒色処理される。石製品は1点が出土している。285はP P 2 から出土した砥石である。また、カマド構築土中より鉄滓が1点出土している（286）。出土遺物から判断して、本遺構は平安時代に属するものと推察される。



第79図 S 1 2 2 積穴住居跡（1）



No.	PP1	PP2	PP3	PP4
規模(cm)	48×46	28×24	35×33	54×45
深さ(cm)	14.4	14.1	29.4	28.8

No.	P1	P2	P3	P4
規模(cm)	54×50	85×80	95×95	70×44
深さ(cm)	11.8	33.3	28.0	29.5

壁上断面(A-A'・B-B')

1. SYR3-2 黄褐色シルト
2. SYR3-4 黄褐色シルト
3. SYR3-3 黄褐色シルト

粘土中 L.の面

粘土中 L.の面

粘土中 L.の面

7.SYR5-6黄褐色の底土約1%含む

7.SYR7-6粘土の底アリオクルム含む
底土层-底化物各1%含む

底土約2%含む 底化物約1%含む

P3(引B)に含む

4. SYR3-3 黄褐色シルトとSYR5-6
5.8厚断面約6mmの底土上
5. SYR3-4 黄褐色シルト
6. SYR3-3 黄褐色シルト

粘土中 L.の面

粘土中 L.の面

粘土中 L.の面

7.SYR5-6黄褐色の底アリオクルム含む

7.SYR7-6粘土の底アリオクルム含む
底土层-底化物各1%含む

底土約2%含む 底化物約1%含む

第80図 S 12 2 穹穴住居跡 (2)

S 12 3 穹穴住居跡

遺構 (第83・84図、写真図版25)

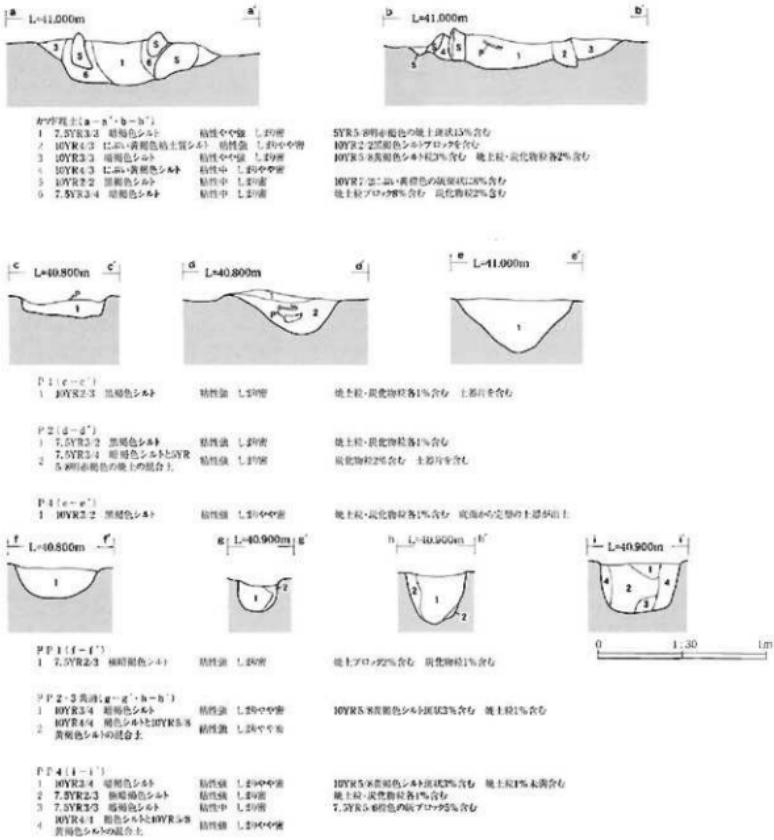
<位置・重複関係> X 1 B 6 a グリッドに位置する。検出はIV層で黒褐色のプランを確認した。

<規模・平面形> 東辺4.43m、西辺4.85m、北辺4.98m、南辺4.42mの四角形を呈する。

<埋土> 6層からなり、黄褐色シルトを含む黒褐色シルトを中心として構成される。埋土の上位に径5cm大の躑躅を含む。

<壁> 残存高で20~30cmを測る。

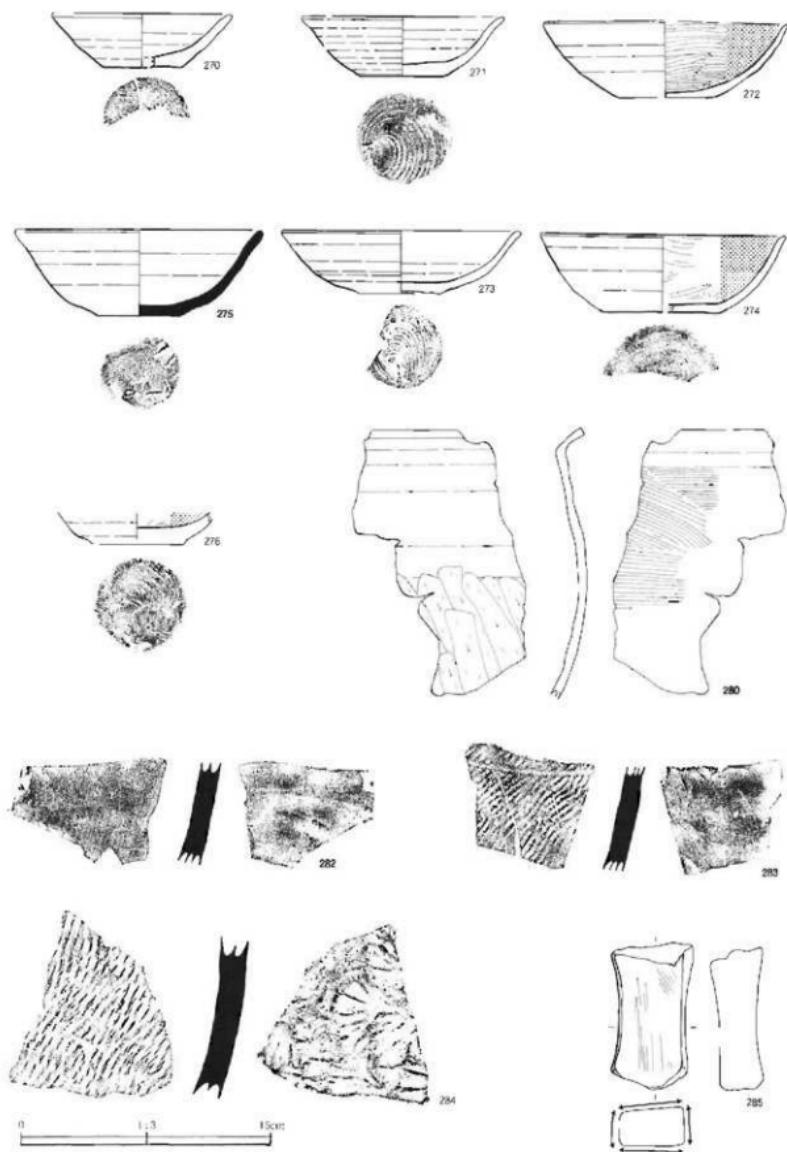
<床面> 床面はほぼ平滑で軽く縁まり、黄褐色シルトと褐色シルトの混合土で貼り床が形成される。



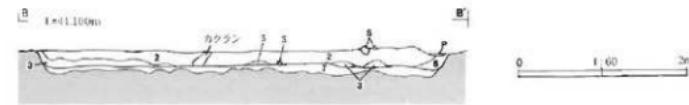
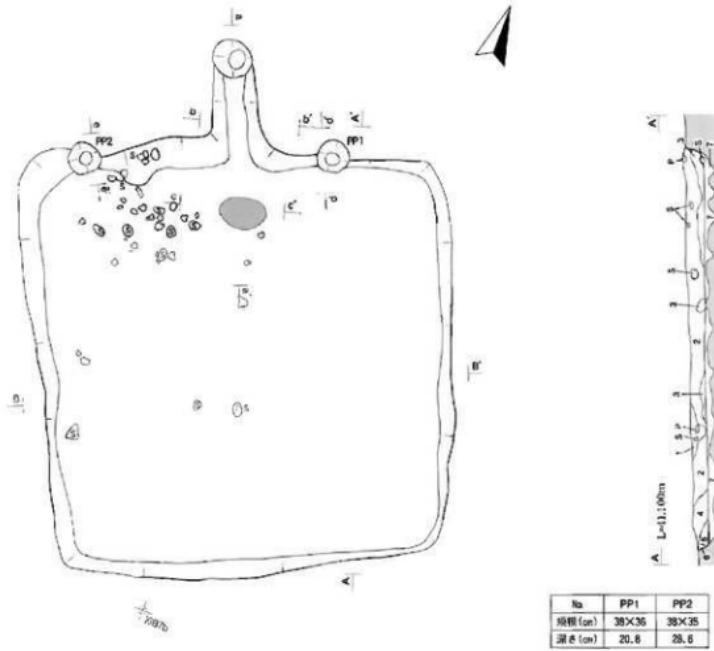
第81図 S 1 2 2 穫穴住居跡 (3)

<カマド>本体部分は残存せず、燃焼部の焼土を確認したのみである。焼道の位置などから北壁はほぼ中央に構築されていたと推定される。燃焼部と思われる位置には現地性の焼土が形成されている。焼土の範囲は径56cm×38cmの円形を呈しており、厚さは8cmである。焼道部は長さ85cmを測る。削平を受け、削り貫き式か掘り込み式かは不明である。突出し部は径48×42cmの円形を呈し、深さは32cmを測る。カマド焼土西側に半大程度の礫、土器片、粘土が多量に散乱するのが確認されている。これらは出土位置、粘土の状況などからカマドの構造材が廃棄された状況を示すものである可能性がある。

<柱穴・ピット>カマド両脇の壁面から壁柱穴が2基検出された。壁柱穴は平面形は円形を呈しており、東



第82図 S-2-2 積穴住居跡 (4)



地上剖面 (A-A'・B-B')

- 1 IOVR2-2 黒褐色シルト
- 2 IOVR2-2 黑褐色シルト
- 3 IOVR3-1 黑褐色シルト
- 4 IOVR3-1 黑褐色シルト
- 5 IOVR2-2 黑褐色シルト
- 6 IOVR5-3 黑褐色シルトとIOVR
2-40 黄褐色シルトの混合土
- 7 IOVR5-6 黑褐色シルトとIOVR
2-25 黄褐色シルトの混合土

IOVR5-6 黄褐色シルトと2%含む
泥炭質1%未混合物
IOVR5-6 黄褐色シルト和1%含む
壤土粘1%含む 泥炭物2%含む
IOVR5-6 黄褐色シルト泥炭5%含む
IOVR5-6 黄褐色シルト泥炭3%含む 泥炭物2%含む
IOVR5-6 黄褐色シルト泥炭1%未混合物

(弱地盤部分)

△ L=11.00m

◆ L=11.00m

F-7-1 (d-d')

- 1 IOVR2-2 黑褐色シルト
- 2 IOVR5-6 黄褐色シルト

IOVR5-6 黄褐色シルト2%含む
泥炭質2%含む
IOVR2-2 黑褐色シルト泥炭2%含む

F-7 (e-e')

- 1 IOVR2-2 黑褐色シルト
- 2 IOVR4-6 黑褐色シルト
- 3 IOVR2-2 黄褐色シルトの混合土

IOVR4-6 黑褐色シルト2%含む
泥炭質2%含む
IOVR2-2 黑褐色シルト泥炭2%含む

第83図 S-1 2 番穴住居跡 (1)

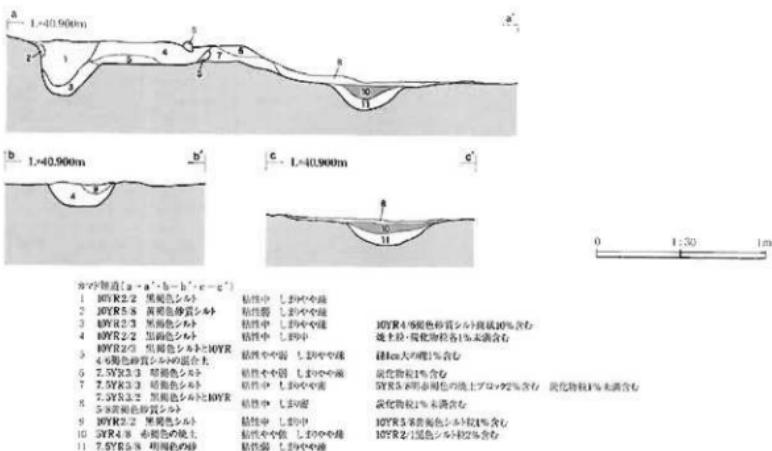


図84 S 1 2 3 積穴住居跡（2）

側のP P 1の規模は径38×36cm、深さは20.8cm、西側のP P 2の規模は径38×35cm、深さ28.6cmを測る。これらの柱穴は配列から見て、住居の柱穴を構成する可能性がある。

遺物（第85・86図、写真図版58・57）

床面から土器器片5点、須恵器片1点、堆積土中より土器器片10点、須恵器片7点が出土している。器種は壺、蓋、鉢、壺、球形壺、壺蓋、大壺で構成され、製作に際してはロクロが使用されているものと不透用のものが混在する。293は床面から出土した壺で、ロクロナテ調整後、底部縁辺から底部にかけてヘラケズリ再調整される。306は床面から出土した球形壺であるが、混入の可能性が高い。本遺物は全体的に製作技術、器種構成から判断して外部からの混入と見られる個体が多く混在する。出土遺物から、本遺構は平安時代に属すると推察される。

S 1 2 4 積穴住居跡

遺構（第87図、写真図版26）

＜位置・重複関係＞X I B 9 b グリッドに位置する。検出面はⅣ層で、遺物の集中する暗褐色のプランとして確認した。S 1 01住居跡と重複し、これを切る。

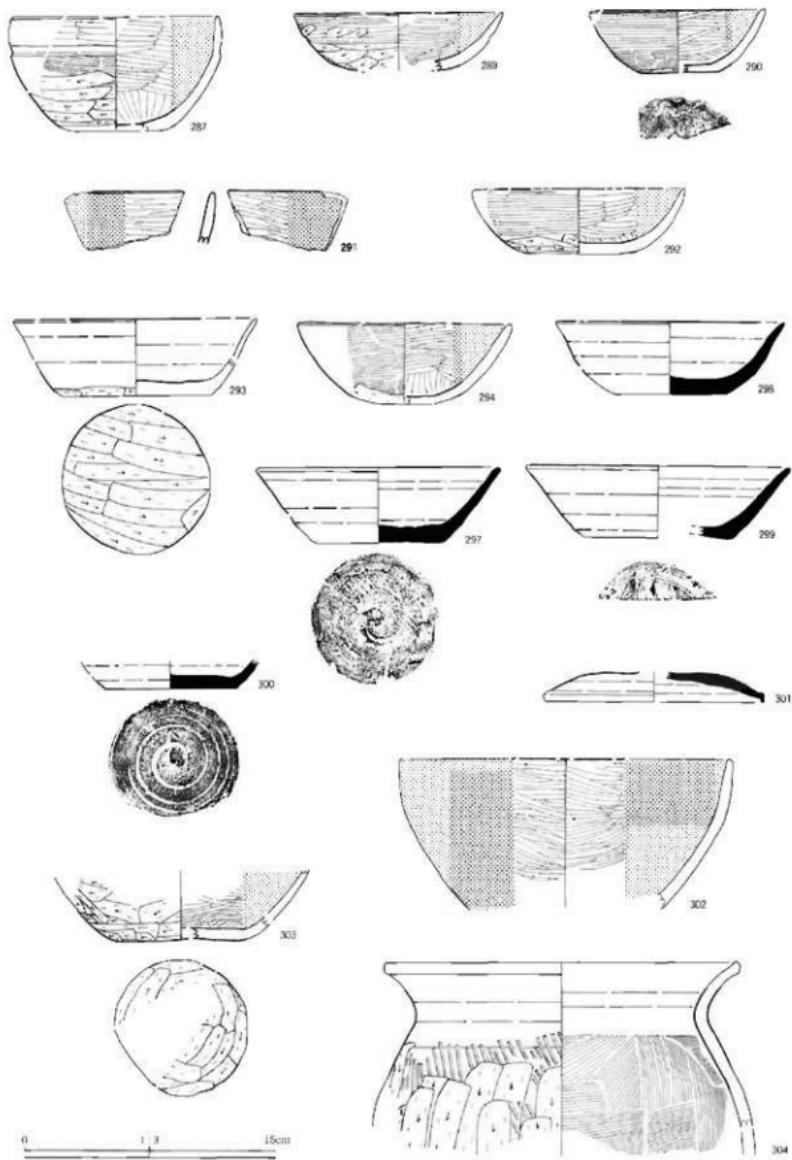
＜規模・平面形＞東辺3.44m、北辺5.0m、東辺3.8m、南辺4.7mの隅丸方形を呈する。

＜埋土＞6層からなり、土を含む黒褐色シルトを土体として構成される。

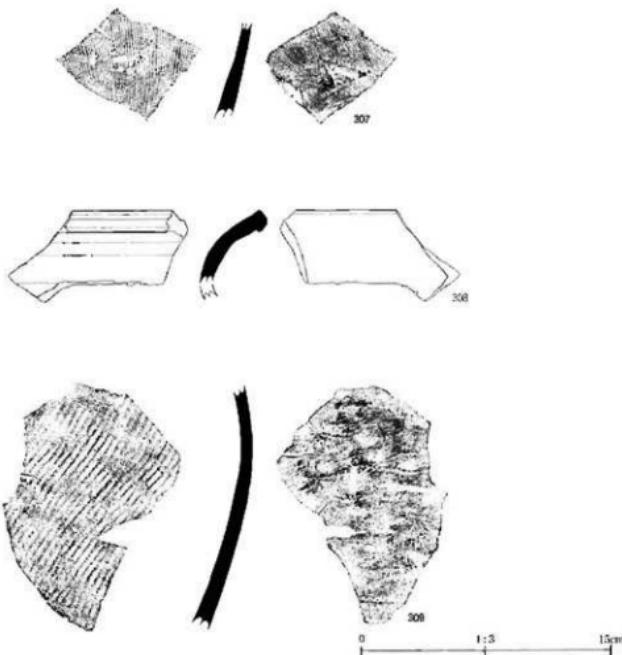
＜壁＞残存高は8～14cmである。

＜床面＞全体的に緩やかに凹凸しており、Q 1付近でもっとも低くなる。床面から径5～10cmの礫が多数出土している。床面は固く締まるものであるが貼り床は確認できなかった。南側の壁際に壁溝が確認されている。

＜カマド＞北壁中央やや東寄りの地点に構築されている。本体部分は焼土・炭化物を含む黒褐色シルトを主



第85図 S I 2 3 穫穴住居跡 (3)



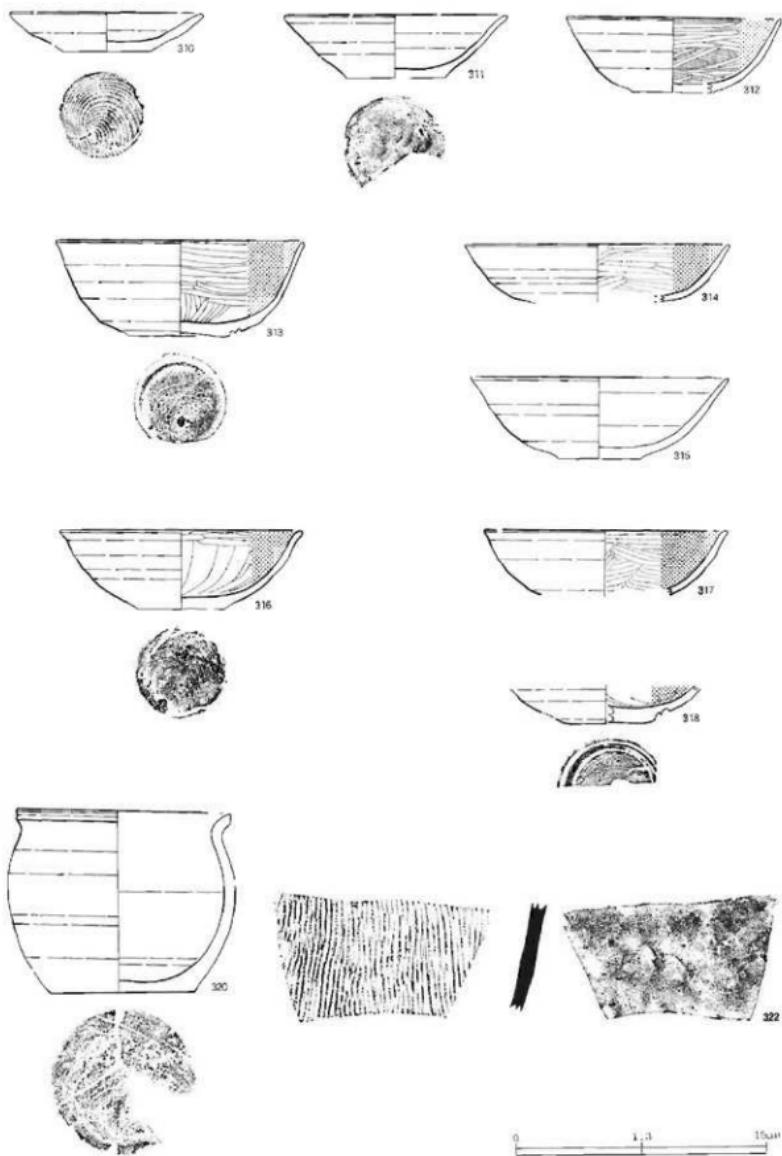
第86図 S 1 2 3 穂穴住居跡 (4)

体として精査されるものであるが、残存状況が不良である為、詳細は不明である。周辺からは多数の礫が出土しているが、袖の芯材や支柱に用いられた痕跡が確認できなかったことから、構築材の可能性は低いと考えられる。焼土の範囲は95cm×63cmの楕円形を呈しており、厚さ10cmを測る。埠道は長さ50cmと短く、突出し部の土塊も検出されていない為、削平を受け消滅している可能性もある。このため、埠道および突出し部の構造は明らかではない。

<柱穴・ピット>床面から柱穴2基、ピット1基が検出された。柱穴の平面形は円形を呈し、規模はP P 1が径24×28cm、深さ30.9cm、P P 2が径18×17cm、深さ37.3cmを測る。これらの柱穴は配列から見て、住居の主柱穴を構成するものと推定される。ピットは東壁付近から検出されている。平面形は円形を呈し、規模は径13×34cm、深さ21.8cmを測る。

遺物（第88図、写真図版59・60）

床面から土器片4点、焼土内から土器片4点、堆积上中より5点が出土している。須恵器は出土していない。器種は杯、高台杯、甌、大甌で構成される。製作に際しては全てロクロが使用され、ロクロ不使用のものはない。杯は概して口徑が小形のものが多い。石器類は1点が出土している。323は床面から出土した安山岩製の円錐である。出土遺物から本遺構は平安時代に属するものと推定される。



第88図 S I 2.4 積穴住居跡 (2)

2. 遺物集中区・堅穴状遺構

S X 0 1 遺物集中区

遺構（第89・90図、写真図版27）

＜位置・重複関係＞X I A 9 h グリッドに位置する。検出はIV層であり、遺物の集中によって確認された。

サブトレーナー3本をキの字型に入れて精査を行ったが、壁や明確なプランは確定できなかった。

＜規模・平面形＞明確な平面形は確認できなかったが、径7.2m×5.0mの不整な円形の範囲内に、高壙を中心とする多数の遺物と移地性の焼土が散在し、それを以て遺構の範囲を想定した。遺物の高壙から住居跡ではなく、何らかの祭祀に関係する遺構である可能性がある。

＜埋土＞トレーナーで確認できた埋土は6層からなり、焼土、炭化物を含む黒褐色シルトを主体として構成される。

＜壁＞壁は検出できなかった。

＜柱穴・ピット＞検出されなかった。

遺物（第91図、写真図版60・61）

土器片11点、堆積土中から8点が出土している。器種は高壙、壺、小形土器で構成される。325は壺？としたが、高壙の可能性もある。特筆されるのは高壙の多さで、12～13点と卓越する。遺構内からこれだけの点数が出土したものは本遺跡において他に例がなく、特徴的である。出土遺物から判断して、本遺構は奈良時代に属するものと推察される。

S X 0 2 堅穴状遺構

遺構（第92・93図、写真図版28）

＜位置・重複関係＞X I B 6 a グリッドに位置する。

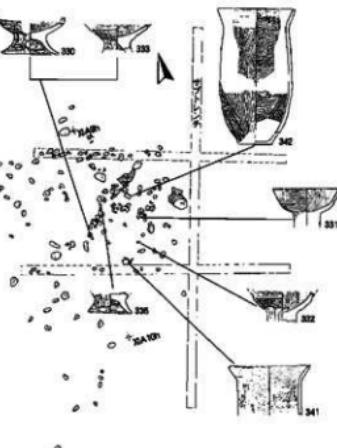
検出面はIV層である。検出の段階で上部は削平されて消失しており、床上数cmが確認されたのみである。

＜規模・平面形＞東辺3.9m、西辺3.65m、北辺5.1m、南辺3.95mの不整な隅丸の平行四辺形状を呈する。

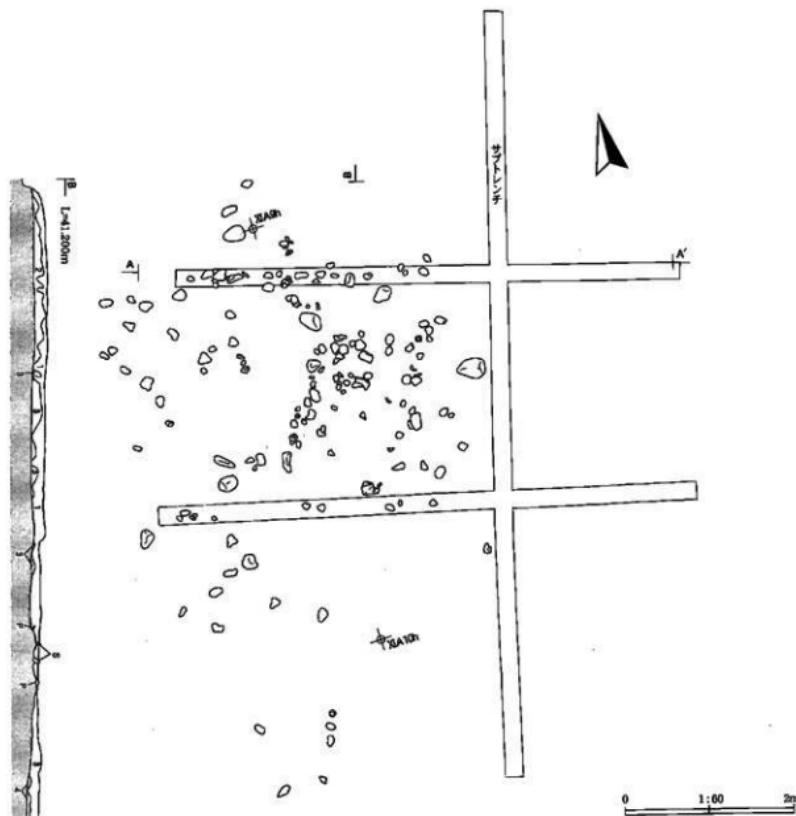
＜埋土＞6層からなり、焼土、炭化物を含む黒褐色シルト主体で構成される。埋土中に径1～5cm大の礫を多量に含む。

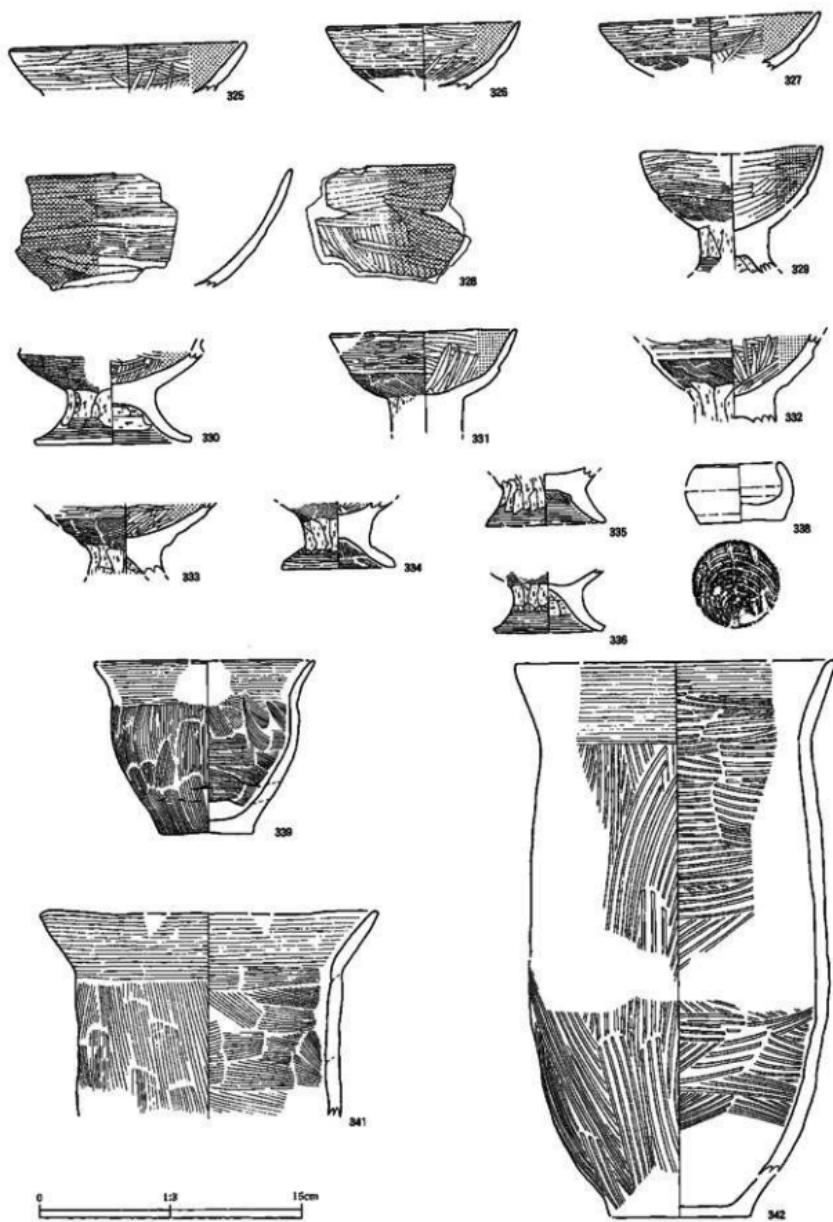
＜壁＞残存高は1～14cmである。

＜床面＞ほぼ平坦で、堅く締まる。一部には礫層が露出する。床面には縁辺部を中心に径5～10cmの円礫や移地性焼土ブロックが散在しており、西半部で顕著である。なお、焼土内（スクリーントーン部）およびP 1、P P 3からは、多量の炭化穀類、堅果殻が出土している。礫層の上に、暗褐色シルトと黄褐色シルトの混合土によって貼り床が形成されている。

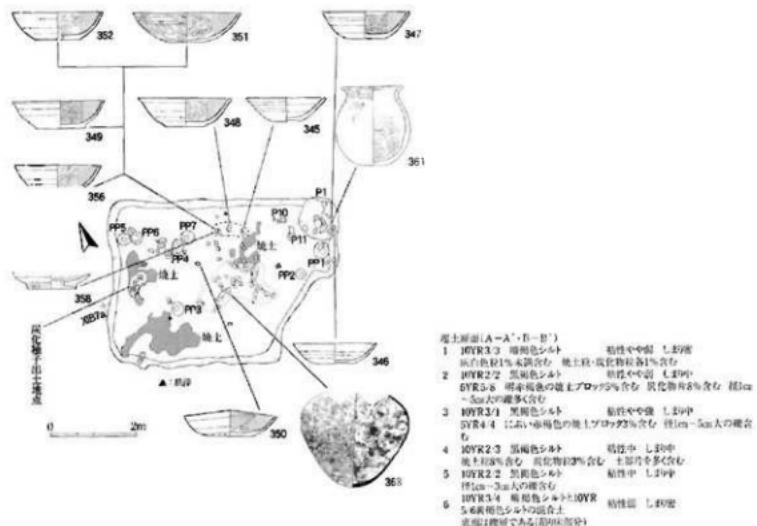
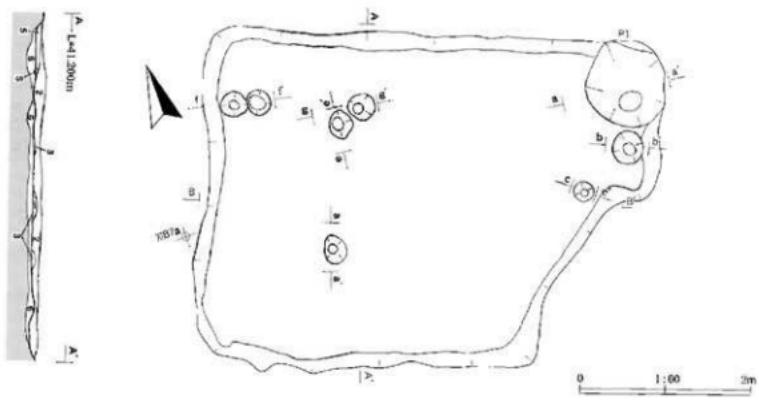


第89図 S X 0 1 遺物集中区 (1)

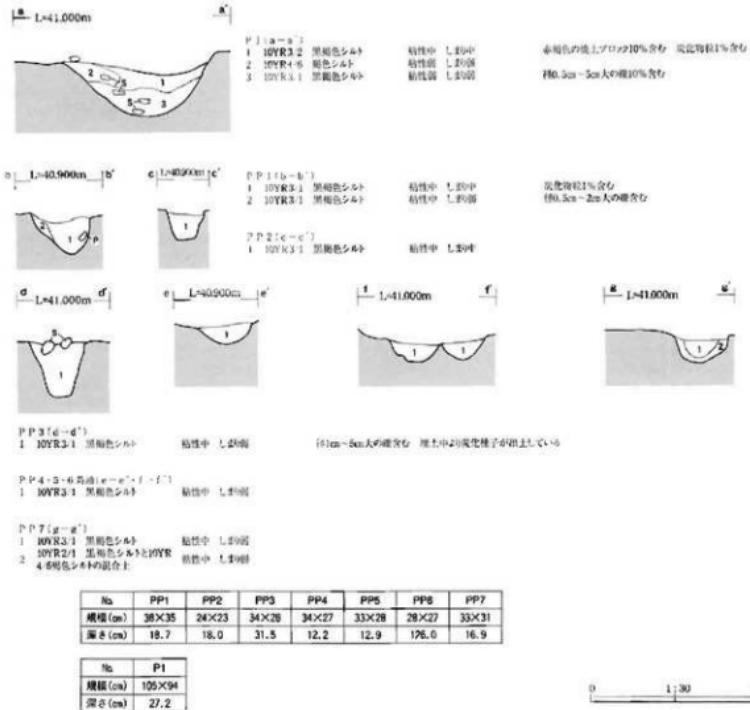




第91図 S X O 1 造物集中区 (3)



第92図 SX02 穴状遺構 (1)



第93図 S X 0 2 穴状遺構 (2)

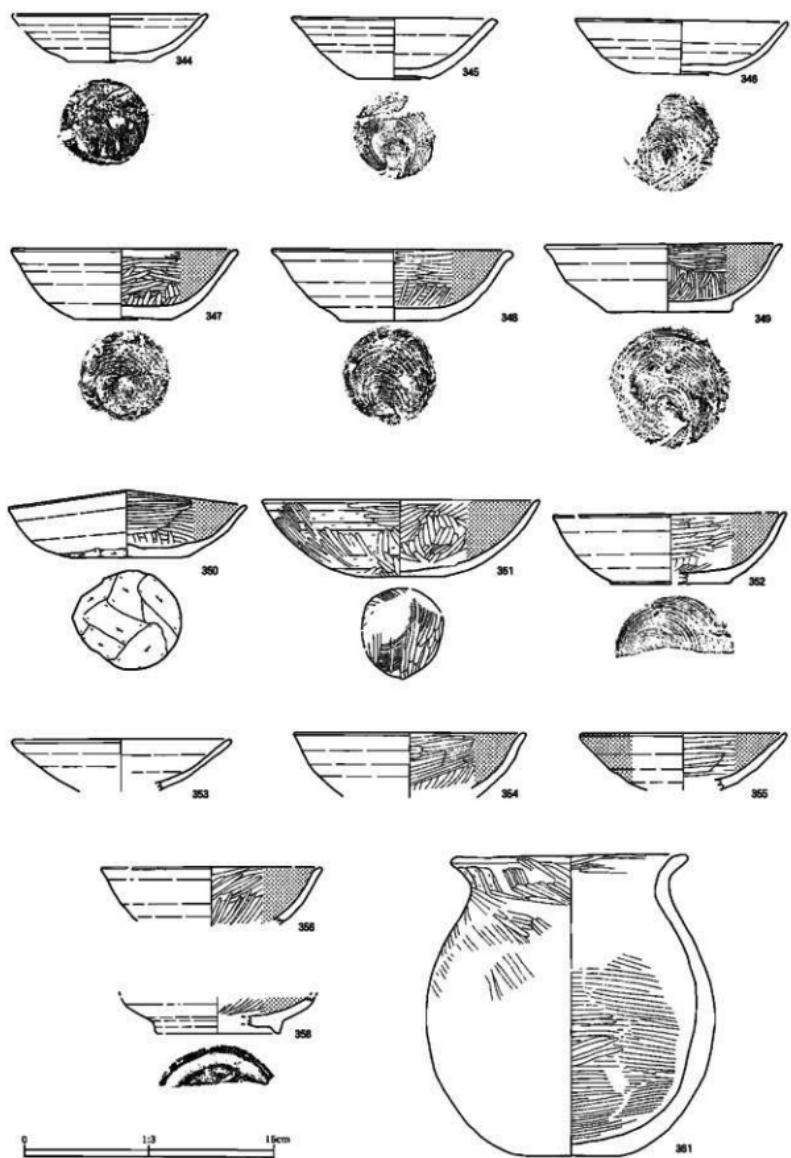
<カマド>確認できなかった。

<柱穴・ピット>床面から柱穴が7基、ピットが1基検出された。柱穴の平面形は円形または梢円形を呈し、規模は径24~38cm前後、深さ12~31cmを測る。これらのうちP.P.3の埋土中から炭化した穀物が出土している。これらの柱穴は住居内の柱穴を構成するものと推定される。P.1は、遺構の北東隅から検出された。平面形は不整な円形を呈し、規模は径105×94cm、深さ20.2cmを測る。

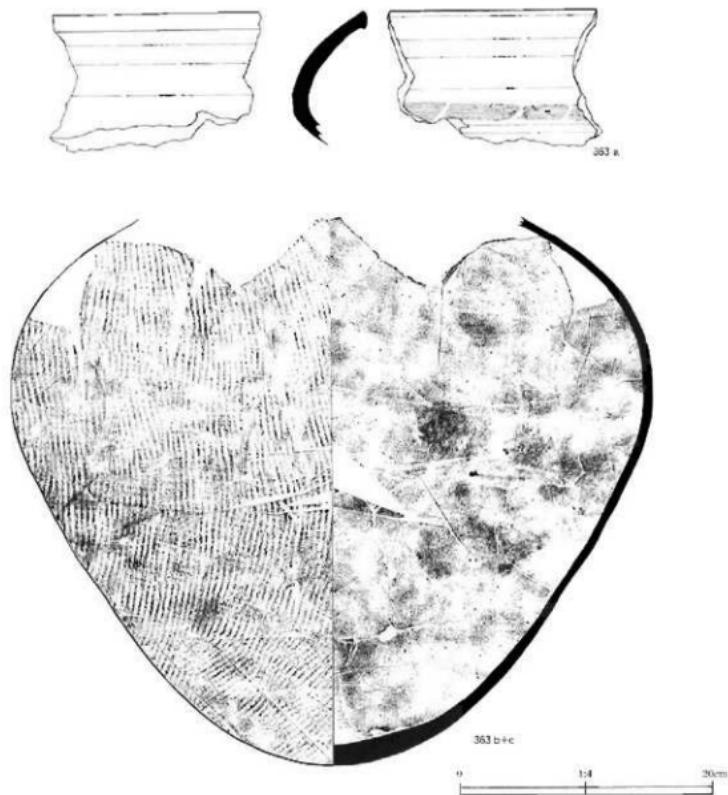
遺物（第94・95図、写真図版61・62）

床から土師器片14点、須恵器片1点、堆積土から土師器片5点が出土している。器種は壺、高台壺、壺、大甕で構成され、製作に際しては361以外の全てがロクロを用いて製作されている。361は床面から出土した土師器塗で、底部膨形を呈する。363は床面の中央部からまとめて出土した須恵器大甕の破片である。

また、床面よりソバ、ヒユ、アワ、イネ、オオムギ、コムギ、マメ科、シソ属、ブドウ科、ブナ科コナラ属（ドングリ）などの炭化様子（分析・鑑定の頁を参照）が出土した。うち、ブナ科コナラ属は堅果から出土した状態で出土している。そのほか铁錠が1点出土している。[出]遺物から判断して、本遺構は平安時代に属



第94圖 SX 02 空穴狀遺構 (3)



第95図 S X 0 2 竪穴状遺構 (4)

するものと推定される。

S X 0 3 竪穴状遺構

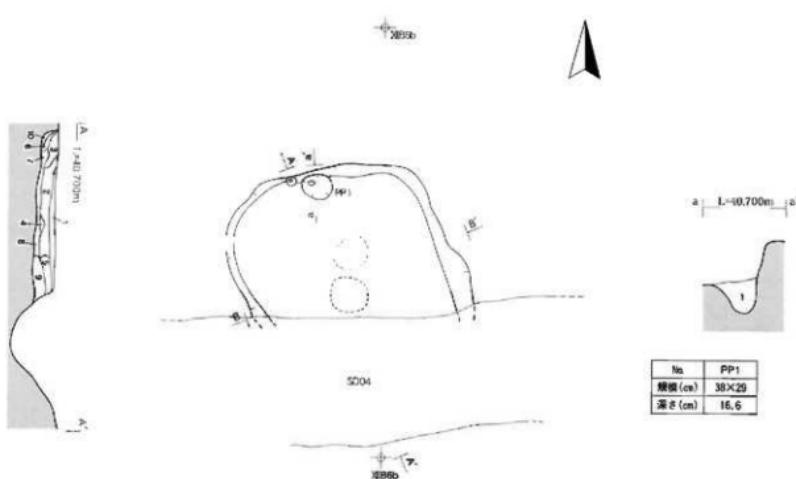
遺構（第96図、写真同版29）

＜位範・重複関係＞ X II B 5 グリッドに位置している。S D04溝跡と重複してこれに切られており、南側は消失している。

＜規模・平面形＞ 東辺-1.67m、西辺-1.2m、北辺2.28mを測る。南辺が失われており、詳細は不明であるが、本来は隅丸方形を呈していたものと推定される。東辺、西辺は残存部である。

＜埋土＞ 10cmからなり、褐色シルトを含む黒褐色シルトを中心として構成される。

＜被覆＞ 残存高は18~26cmである。



柱上断面 (A-A'-B-B')	
1 IOYR2/2 黒褐色シート	粘質土 しまゆ
2 IOYR2/2 黒褐色シート	粘質土 しまゆ
3 IOYR2/2 黒褐色シート	粘質土 しまゆ
4 IOYR2/2 黒褐色シート	粘質土 しまゆ
5 IOYR2/2 黒褐色シート	粘質土 しまゆ
6 IOYR2/2 黒褐色シート	粘質土 しまゆ
7 IOYR2/2 黒褐色シート	粘質土 しまゆ
8 IOYR2/2 黒褐色シート	粘質土 しまゆ
9 IOYR2/2 黒褐色シート	粘質土 しまゆ
10 IOYR3/1 黒褐色シート	粘質土 しまゆ
11 IOYR3/1 黒褐色シート	粘質土 しまゆ

柱上断面 (A-A'-B-B')

柱上断面 (A-A'-B-B') の組合せ

柱上断面 (A-A'-B-B') の組合せ

第96図 S X 0 3 穹穴状遺構

<床面>ほぼ平坦で堅くしまるが、貼り床は確認されなかった。一部中央部にごく浅い溝みを持つ。

<柱穴・ピット>北壁際の床面から柱穴が1基検出された。平面形は円形を呈しており、規模は縦38×29cm、深さ16.6cmを測る。

遺物

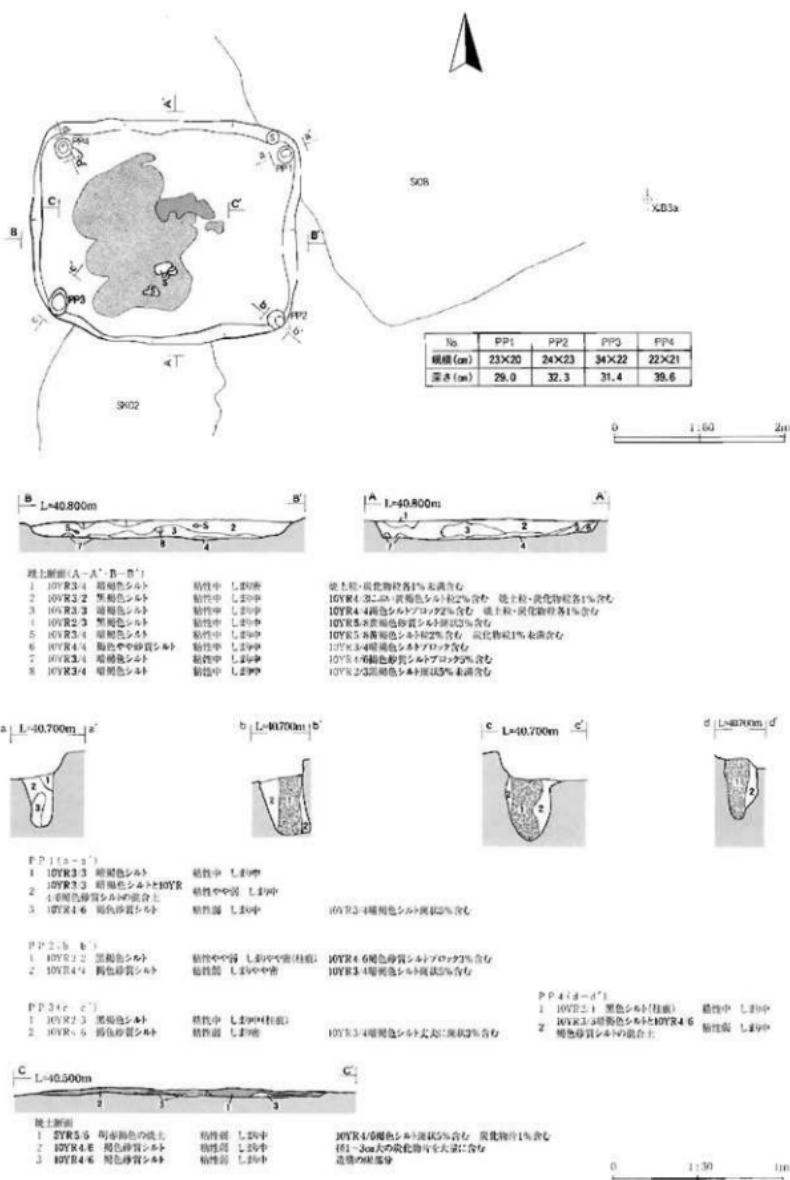
遺物は出土していない。時期など詳細については不明である。

S X 0 4 穹穴状遺構

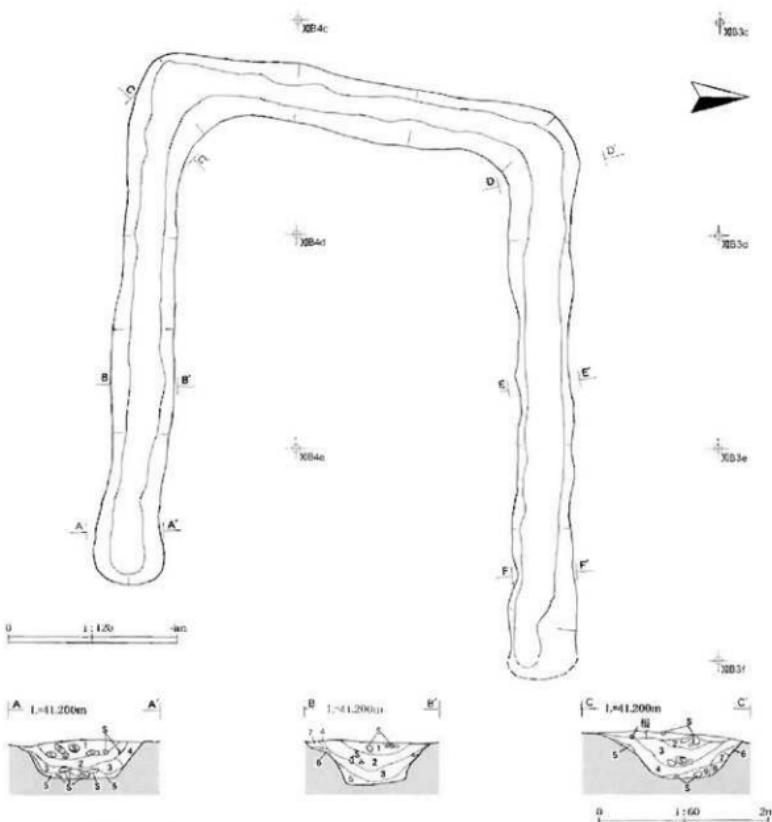
遺構 (第97図、写真図版30)

<位置・重複関係>S II A 2 i グリッドに位置する。検出はIV層で黒褐色のプランを確認した。S I 08住居跡、SK02土坑と重複しており、これらを切る。

<規模・平面形>東辺2.15m、西辺2.24m、北辺2.83m、南辺2.8mの隅丸方形を呈する。



第97回 S X O 4 穴状造構



断面 (A-A')

- 1 IOWR2.3 黄褐色シルト
- 2 IOWR2.3 黑褐色シルト
- 3 IOWR2.3 黄褐色シルト
- 4 IOWR2.2 黑褐色シルト

断面 (B-B')

- 1 IOWR2.3 黄褐色シルト
- 2 IOWR2.3 黑褐色シルト
- 3 IOWR2.3 黄褐色シルト
- 4 IOWR2.2 黑褐色シルト
- 5 IOWR2.3 黄褐色シルト
- 6 IOWR2.3 黄褐色シルト
- 7 IOWR2.2 黑褐色シルト

断面 (C-C')

- 1 IOWR2.3 黄褐色シルト
- 2 IOWR2.3 黑褐色シルト
- 3 IOWR2.3 黑褐色シルト

黄土層・炭化物各1%未満含む 地下10cmの堆多く含む
IOWR1.3(2m) 黄褐色シルト2%未満含む 炭化物2%未満含む
IOWR1.3(2m) 黄褐色シルト2%未満含む IOWR1.0(2m) 黄褐色シルト2%未満含む
IOWR5.5(2m) 黄褐色シルト2%未満含む

黄白色2%含む 黄土層・炭化物各1%未満含む 地5~10cmの堆
多く含む

黄白色2%含む 黄土層・炭化物各1%未満含む

IOWR4.3(2m) 黄褐色シルト2%未満含む

IOWR3.8(2m) 黄褐色シルト2%未満含む 黄土層・炭化物各1%未満含
む

IOWR5.8(2m) 黄褐色シルト2%未満含む

IOWR3.4(2m) 黑褐色シルト2%未満含む(地山)の表面部分のみ

炭化物2%未満含む

第98図 S D O 1 方形開溝 (1)

<埋土>7層からなり、黄褐色シルト粒を含む暗褐色シルトを主体として構成される。

<壁>残存高は11~18cmである。

<床面>ほぼ平坦で硬くしまる。中央部やや西寄りには、不整形を呈する移動性の焼土が形成され、炭化物の散乱が認められる。焼土の範囲は径1.96×1.25m、厚さ2cmを測る。貼り床は確認されなかった。

<柱穴・ピット>住居の四隅から計4基の柱穴が検出された。柱穴の平面形は円形または梢円形を呈しており、規模は径22~34cm前後、深さ29~39cm前後を測る。これらの柱穴は配列からみて住居の主柱穴を構成するものと推定される。

遺物

遺物は出土していない。時期など詳細については不明である。

3. 方形周溝・溝跡

S D O 1 方形周溝

遺構（第98~100図、写真図版31）

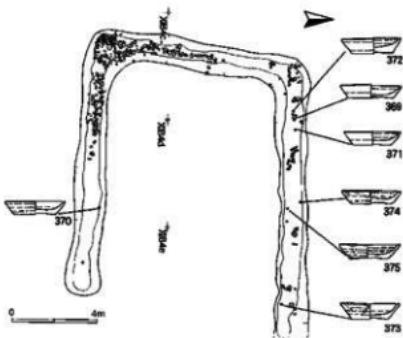
<位置・検出状況>調査区北東部、X I B 3 c ~ 4 e グリッドに位置する。検出面はV層で、コの字形に湾曲する暗褐色の溝状プランとして確認した。S I 03住居跡、S I 16住居跡と重複関係にあり、これらを切る。

<規模・形状>平面形は東側に開いたコの字形を呈する。規模は南北約11m、東西約15m、溝幅は1.2~1.6cm前後、深さ45~60cm前後を測る。断面形は逆台形、もしくは鉢型を呈する。底面はVI層の砂礫面でほぼ平坦であるが、北東部は後世の擾乱を受けて著しい凹凸を持つ。

<埋土>3層に大別される。灰白色粒、炭化物を含む黒褐色シルトを主体として構成され、径3~10cmの大の礫を多く含む。南西~西側底面上10~23cmのところで径5~10cmの大の礫が大量に出土した。これらの礫は出土状況から埋没が開始されて後、意図的に遺構内に投棄されたものと考えられる。

遺物（第101~103図、写真図版63）

全て堆積土中からの出土である。須恵器片1点、かわらけ25点、常滑焼の広口壺・壺片3点が出土している。かわらけの製作に際してはロクロを使用するもの12点、てづくねによるもの13点である。373~375には油燈が付着し、灯明皿として使用された可能性がある。また、ロクロかわらけには完形で出土したものが7点あるのに対して、手づくねかわらけの完形品は皆無であった。鉄製品としては1点が出土している。435は刀子である。出土遺物から判断して、本遺構は12世紀後半代に属するものと推察される。



第99図 SD O 1 方形周溝（2）



第100図 S D 0 1 方形周溝 (3)

0 1:80 2m

S D 0 2 方形周溝

遺構 (第102図、写真図版32)

<位置・検出状況>調査区北部、段丘縁辺のX B10aグリッド付近に位置する。検出面はVI層砂礫面で、黒褐色の溝状プランを確認した。S D 03方形周溝と重複し、これを切る。遺構の一部は擾乱を受けている。

<規模・形状>平面形は北側に開いた隅丸のコの字～C字形を呈している。規模は南北約6m、東西約8m、溝幅は30～55cm前後、深さは10～25cm前後を測り、北側では浅くなっている。断面形は皿状、もしくは浅鉢状を呈する。底面は砂疊である。

<埋土>黄褐色の砂疊を含む黒褐色シルトの単層からなる。径1～5cm大の礫が多量に含まれる。

遺物 (第103図、写真図版63)

堆積土中より常滑の広口壺片1点、かわらけ1点が出土した。394はロクロ成形の小形かわらけである。

出土遺物から、本遺構は12世紀後半代に属するものと推察される。

S D 0 3 方形周溝

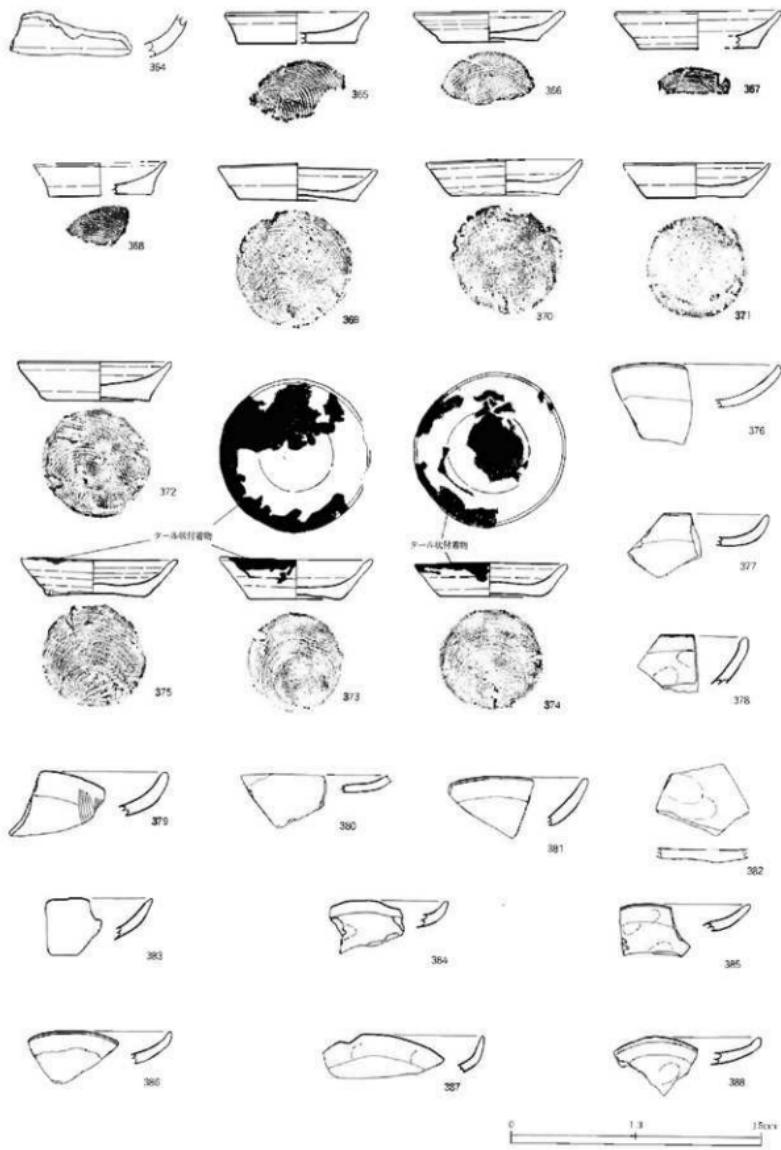
遺構 (第102図、写真図版32)

<位置・検出状況>調査区北部、段丘縁辺のX B1a・1bグリッドに位置する。検出面はVI層砂礫面で、黒褐色の溝状プランを確認した。2号溝と重複してこれに切られている。遺構の一部は擾乱を受けている。

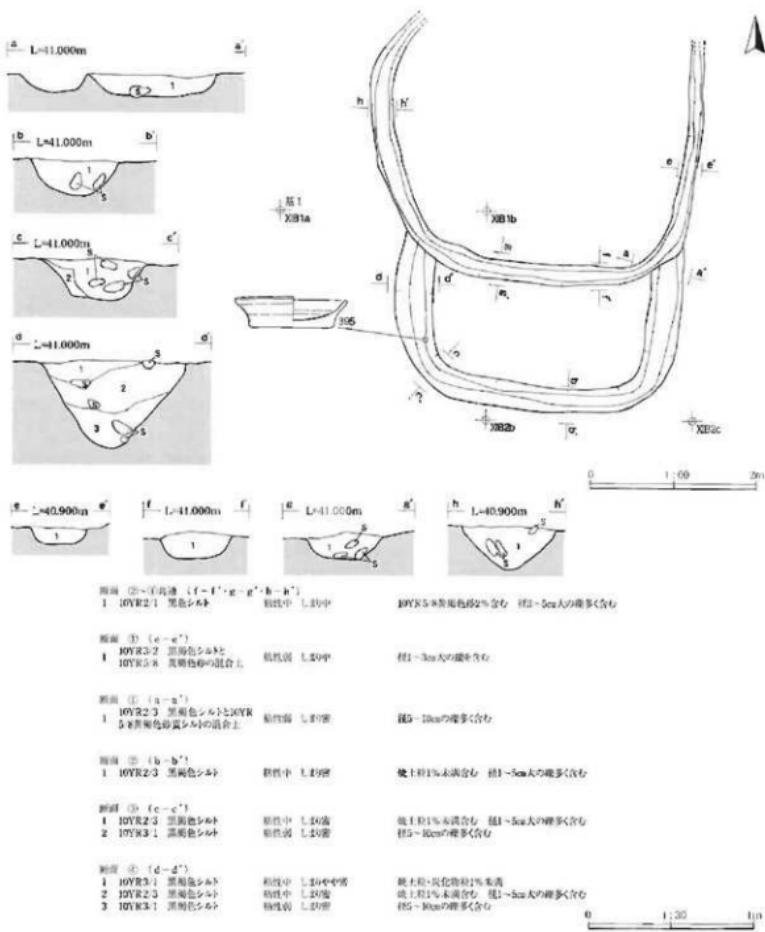
<規模・形状>平面形は北側に開いた隅丸のコの字～C字形を呈していると推定されるが、北側は2号溝に切られているため詳細は不明である。規模は南北約3.5m、東西約6.5m、溝の幅は50～95cm前後、深さは10～55cm前後を測る。西側では深く、東側は浅くなっている。断面形は皿状、もしくは浅鉢状を呈する。底面は砂疊である。

<埋土>部位によって異なるが1～3層からなる。焼土、炭化物を含む黒褐色シルトを主体として構成され、径1～5cm大の礫を多量に含む。

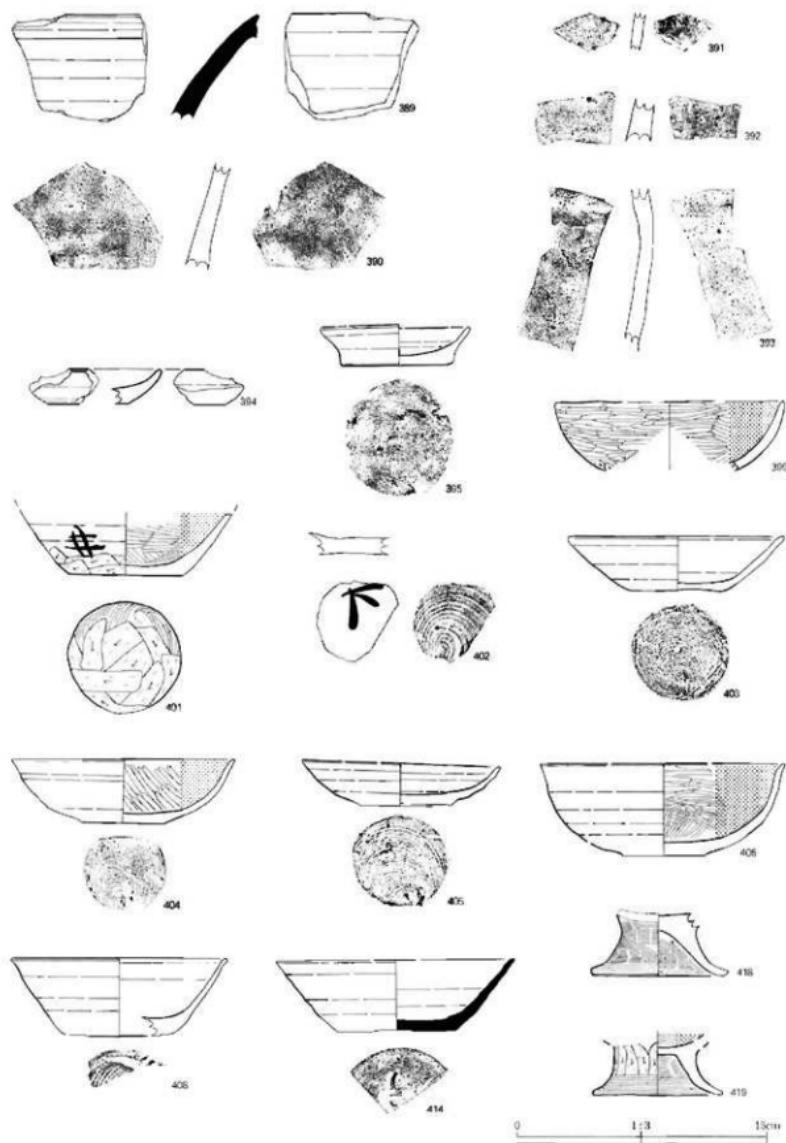
遺物 (第103図、写真図版63)



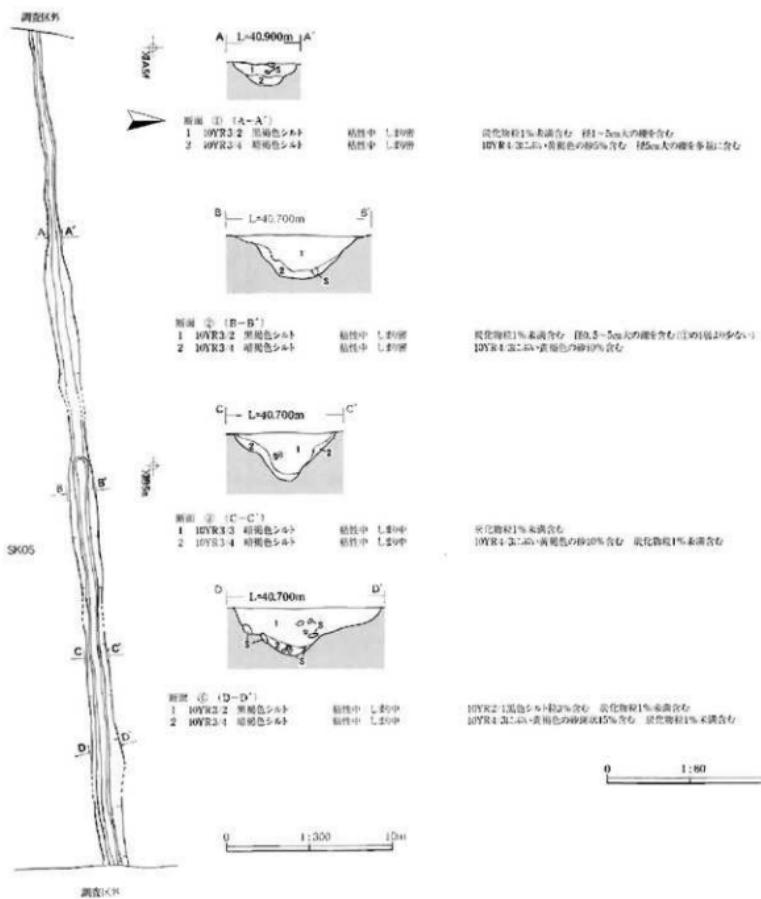
第101図 S D O 1 方形周溝 (4)



第102図 S D 0 2 方形周溝・S D 0 3 方形周溝



第103図 SD 01～SD 03方形周溝・遺構外出土遺物（1）



第104図 SD 0-4溝跡

堆積土中よりかわらけ1点が出土した。395はロクロ成形の小形かわらけである。出土遺物から、本遺構は12世紀後半に属するものと推察される。

S D O 4 溝跡

遺構（第104図、写真図版33）

＜位置・検出状況＞調査区南側X II A 5 f～X II B 5 eグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒褐色の帯状プランとして確認した。遺構は調査区の東西を横断するような形状を呈し、両端部は調査区域外へ延びる。中央部付近でS X03豎穴状遺構と重複し、これを切る。

＜規模・形状＞平面形は直線状に長い溝状を呈する。規模は長さ約50m、溝幅50～150cm前後、深さ8～60cm前後を測る。西側では上部が削平されたものと考えられ、幅が狭く浅い。ほぼ中央の部分で底面が上がり、極端に浅くなっている部分が見られる。断面形は皿状、もしくは浅鉢状を呈する。底面は砂礫である。

＜埋土＞2層からなる。上位は炭化物を含む黒褐色シルト、下位は黄褐色の砂礫を含む暗褐色シルトから構成され、東側では砂礫の量が多い。

遺物

遺物は出土していない。時期など詳細については不明である。

（丸山直美・齊藤麻紀子）

4. 土坑

S K O 1 土坑

遺構（第105図、写真図版34）

＜位置・検出状況＞調査区中央部南寄り、X II A 3 hグリッドに位置する。検出面はⅣ層で黒褐色の不整な円形プランとして確認された。

＜規模・形状＞開口部径2.0×1.72m、底部径1.73×1.3mの不整な円形を呈する。断面形は浅鉢状を呈し、深さは最深部で31.1cmを測る。底面は凹凸を持ち、硬く締まる。

＜埋土＞埋土は8層からなり、黒褐色シルトを主体として構成される。下位には黄褐色シルトを含む。

遺物

遺物は出土していない。時期など詳細については不明である。

S K O 2 土坑

遺構（第105図、写真図版34）

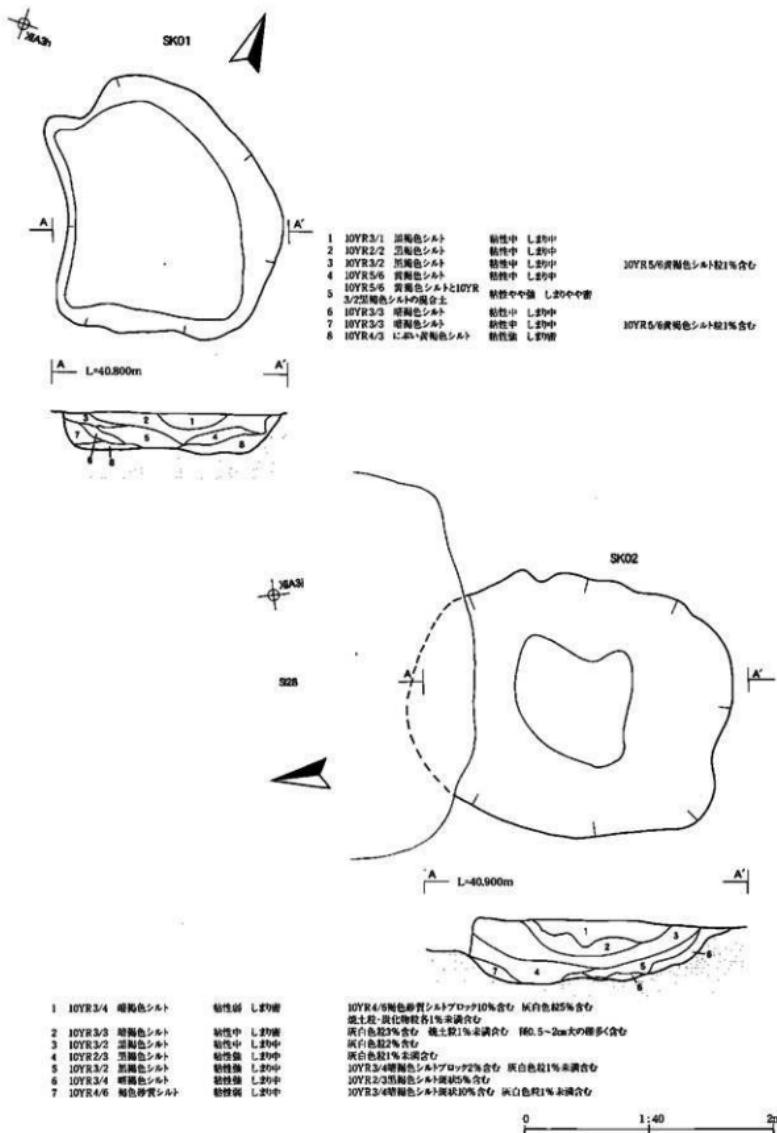
＜位置・検出状況＞調査区中央部南寄り、X II A 3 iグリッドに位置する。検出面はⅣ層で、28号住居跡を精査中に住居跡に切られるような形で暗褐色の不整な円形プランを検出した。

＜規模・形状＞開口部径(2.33)×2.13m、底部径1.22m×96cmの不整な円形を呈する。断面形は浅鉢状を呈し、深さは最深部で47.3cmを測る。底面は丸みを帯び大型の礫が多く見られる。

＜埋土＞7層からなり、灰白色粒、炭化物を含む暗褐色シルトを主体として構成される。下位には黄褐色砂質シルトを含む。

遺物

遺物は出土していない。時期など詳細については不明である。



第105図 SK01土坑・SK02土坑

S K 0 3 土坑

遺構（第106図、写真図版34）

＜位置・検出状況＞調査区中央部X I A 9 j グリッドに位置する。検出面はIV層である。S I 11住居跡を精査中に住居跡と重なる形でプランを確認した。S I 11住居跡と重複しておりこれを切る。検出の時点ですでに住居の埋土が除去された状態であったため、土坑の埋土や壁も消失しており、底面と上端の一部が確認されたのみである。

＜規模・形状＞平面形は楕円形を呈し、底部径は97×42cm、深さは32.2cmを測り、底面はほぼ平坦である。開口部径、断面形は不明である。

＜埋土＞埋土の状態は確認できなかった。

遺物

遺物は出土していない。時期など詳細については不明である。

S K 0 4 土坑

遺構（第106図、写真図版34）

＜位置・検出状況＞ 調査区中央部東寄りX I B 10 c グリッドに位置する。検出面はIV層で、S I 01住居跡のカマド西側で黒褐色の円形プランを確認した。S I 01住居跡、S I 24住居跡と重複し、これらを切る。

＜規模・形状＞平面形は円形を呈する。開口部径98×96cm、底部径は61×58cm、深さは最深部で17.5cmを測る。断面形は浅鉢状を呈する。底面は凹凸があり、堅く締まる。

＜埋土＞4層からなり、灰白色粒、炭化物を含む黒褐色シルトを主体として構成される。

遺物

遺物は出土していない。時期など詳細については不明である。

S K 0 5 土坑

遺構（第106図、写真図版35）

＜位置・検出状況＞ 調査区中央部東寄りX I B 8 c グリッドに位置する。検出はIV層で、黒褐色の不整な楕円形のプランを確認した。

＜規模・形状＞平面形は楕円形を呈する。開口部径1.5×1.15m、底部径は1.33m×93cm、深さは最深部で9.7cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。底面は平坦で硬く締まる。

＜埋土＞褐色シルトを含む黒褐色シルトの単層である。

遺物

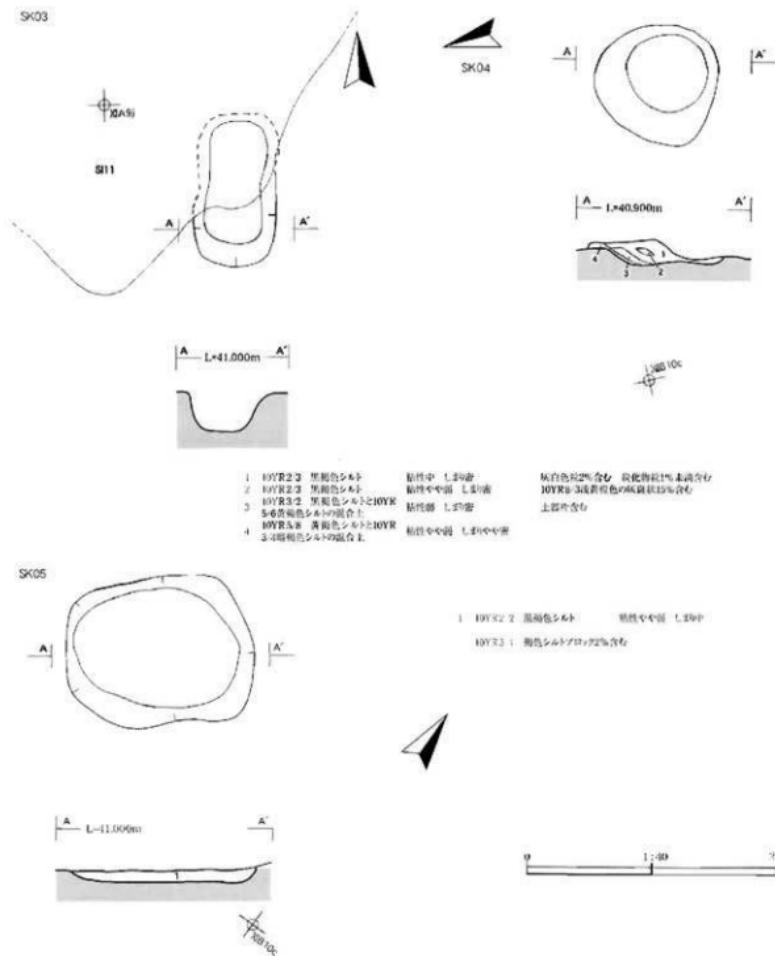
遺物は出土していない。時期など詳細については不明である。

S K 0 6 土坑

遺構（第107図、写真図版35）

＜位置・検出状況＞ 調査区北東端のX I B 2 f グリッドに位置する。検出面はIV層で、黒褐色の円形プランとして確認した。西側の大半は試掘時のトレンチによって掘削され消失している。S I 16住居跡・S D 01方形周溝と重複しており、これらを切る。

＜規模・形状＞平面形は不整な円形を呈する。開口部径1.09×1.05m、底部径は80×78cm、深さは最深部で



第106図 SK03～SK05土坑

36cmを測る。断面形は袋状を呈するものと推定される。底面は丸みを帯び硬く締まる。

＜埋土＞7層からなり、焼土、炭化物を含む黒褐色シルトを主体として構成される。下部には黄褐色シルトが含まれる。

遺物

遺物は出土していない。

S K 0 7 土坑

遺構（第107図、写真図版35）

＜位置・検出状況＞調査区中央部やや南寄りのX II A 1 i グリッドに位置する。検出面はIV層で、黒褐色の不整な楕円形プランとして確認した。

＜規模・形状＞平面形は不整な楕円形を呈する。開口部径1.54m×98cm、底部径は64×34cm、深さは最深部で52.8cmを測る。断面形は浅鉢状を呈する。

＜埋土＞7層からなり、黒褐色シルトと暗褐色シルトを主体として構成され、部分的に黄褐色シルトが混じる。

遺物

遺物は出土していない。時期など詳細については不明である。

S K 0 8 土坑

遺構（第107図、写真図版35）

＜位置・検出状況＞調査区西側南寄りの一段高い部分、X II A 3 a グリッドに位置する。検出面はV層で、暗褐色の溝状プランとして確認した。

＜規模・形状＞平面形は溝状を呈する。開口部径2.73m×37cm、底部径は2.51m×16cm、深さは最深部で73.4cmを測る。長軸の方向はN-47°-E、断面形は壁が垂直気味に立ち上がる逆台形を呈する。短軸の断面形は底部から開口部に向かってやや外傾するV字状を呈する。

＜埋土＞9層からなり、黒褐色シルトの混じった黄褐色シルトを主体として構成されている。

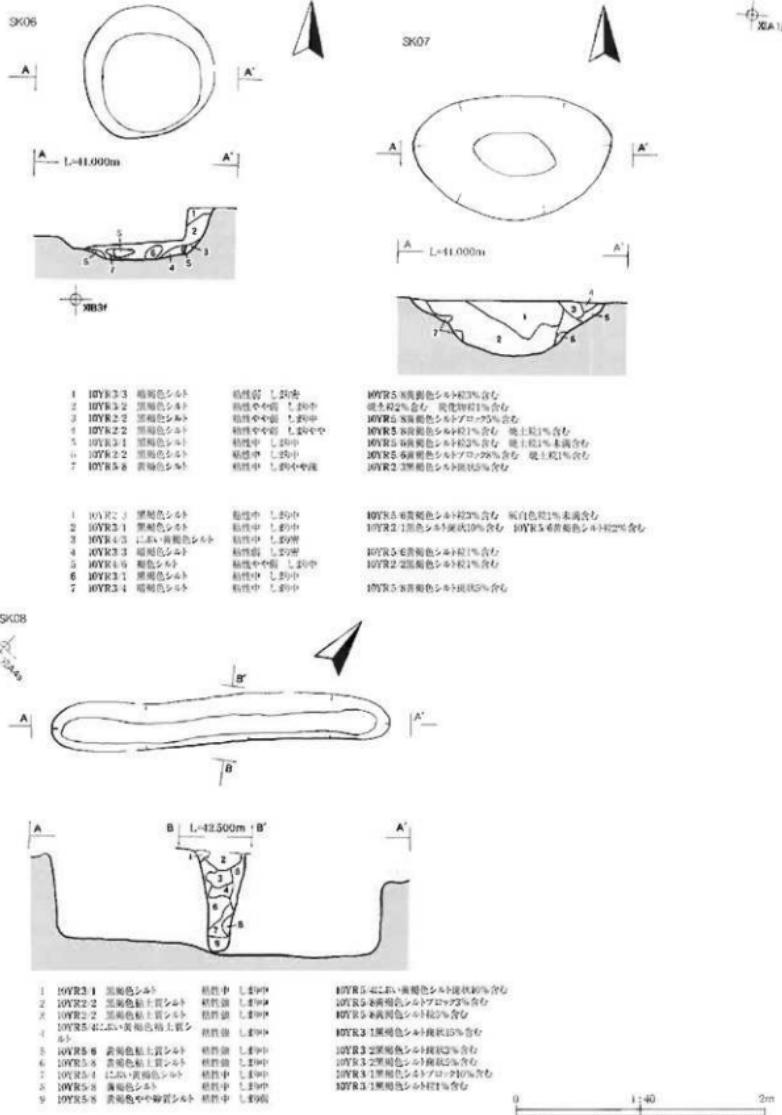
遺物

遺物は出土していない。時期など詳細については不明である。

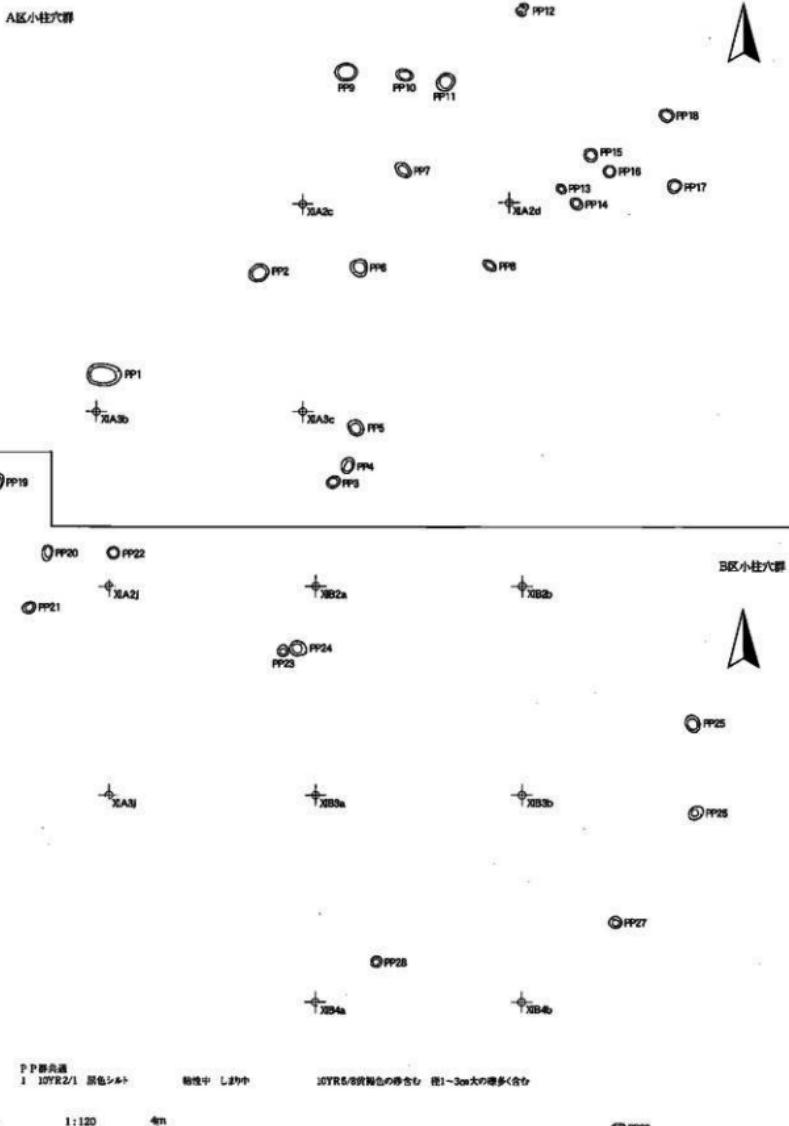
5. A・B 区小柱穴群

調査区北側から計29基の柱穴状ピットを検出した。個々の柱穴状ピットの計測値・位置関係については、第2表と第113図の遺構配置図を参照されたい。柱穴状ピットの平面形は、ほぼ円形を基調とする。検出された柱穴では掘建柱建物跡を構成する柱穴配列を想定できなかった。規模は一部に例外が見られるが、おしなべて50cm以下と小規模である。

(齊藤麻紀子)



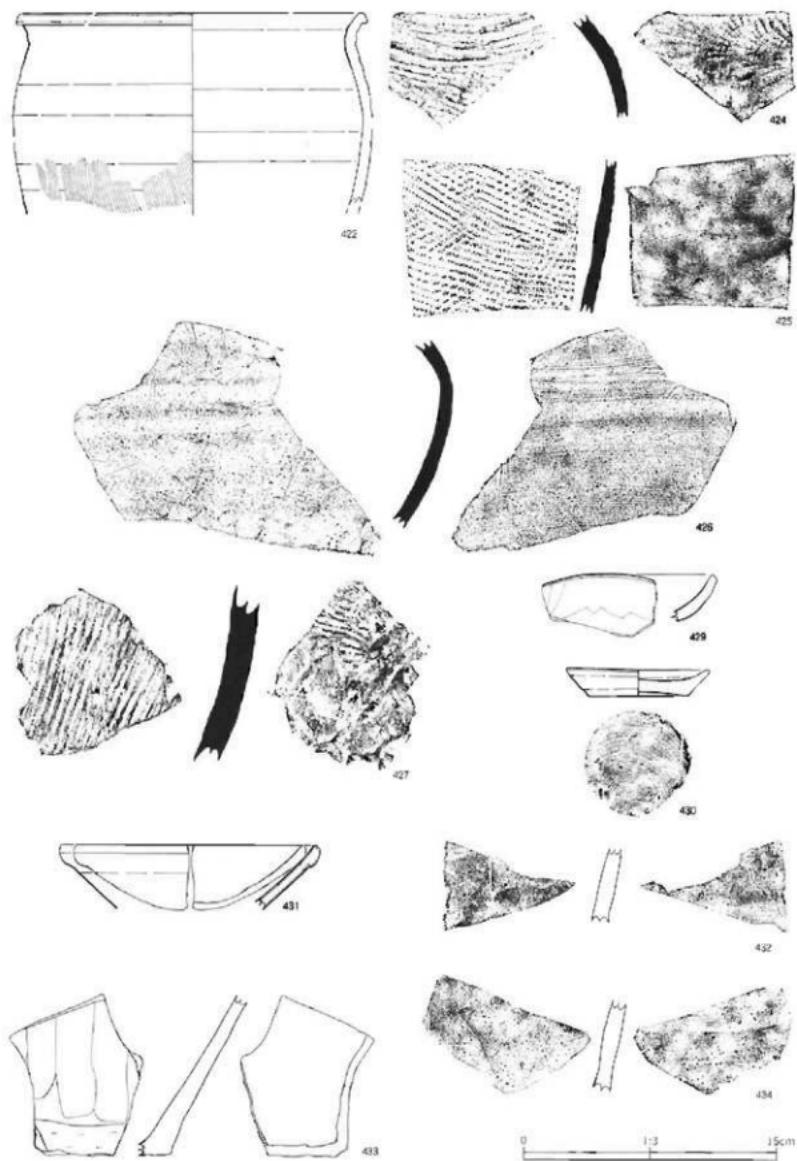
第107図 SK06～SK08土坑



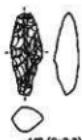
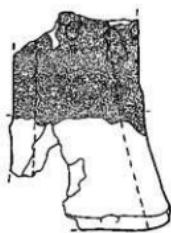
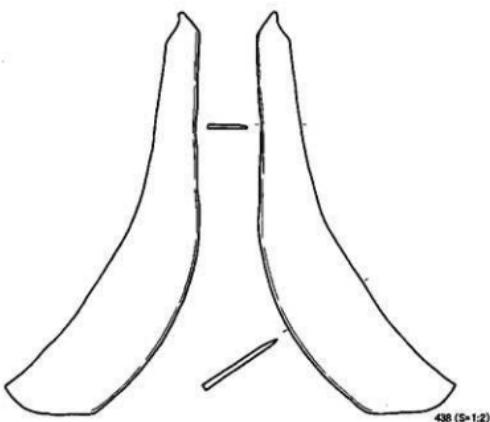
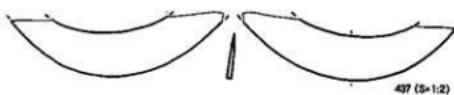
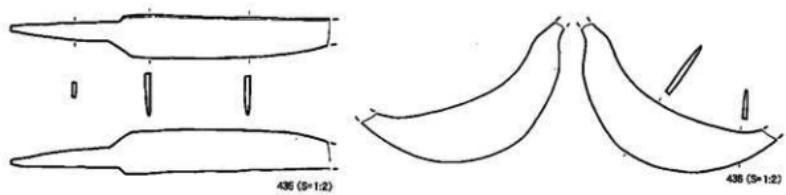
第108図 A・B区小柱穴群

第2表 A・B区小柱穴群計測値一覧

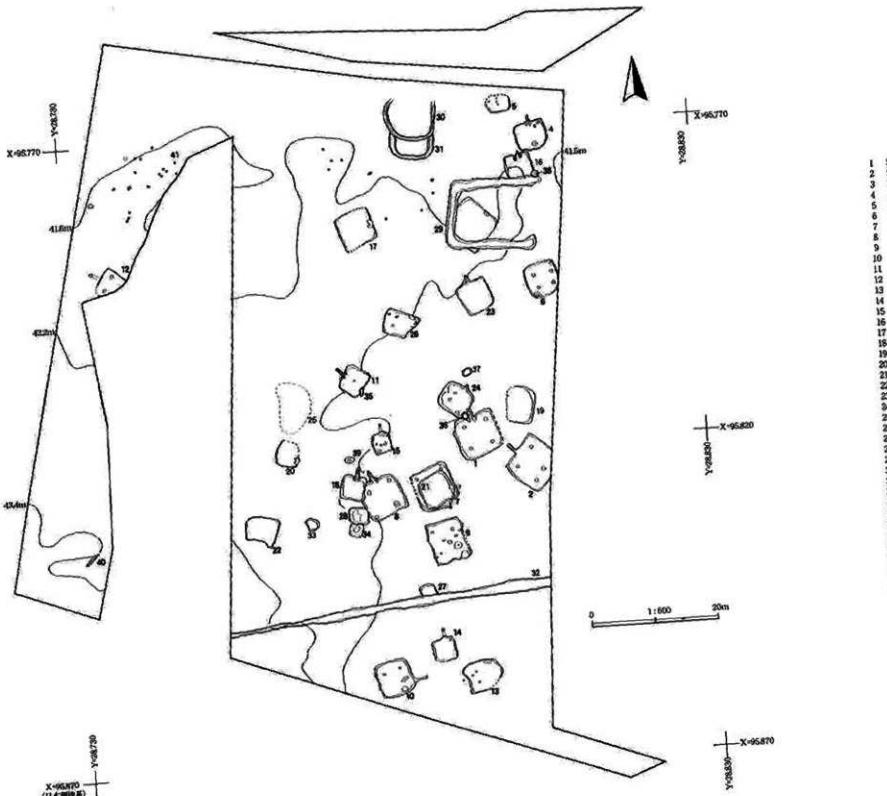
No	グリッド名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
PP1	XIA2b	80	49	51.9
PP2	XIA2b	47	40	31.8
PP3	XIA3c	32	28	25.5
PP4	XIA3c	41	30	31.8
PP5	XIA3c	40	38	35.3
PP6	XIA2c	44	40	32.5
PP7	XIA1c	44	28	30.3
PP8	XIA2c	34	20	27.5
PP9	XIA1c	54	42	35.4
PP10	XIA1c	40	30	46.3
PP11	XIA1c	46	40	25.0
PP12	XIA1d	32	23	30.9
PP13	XIA1d	26	22	30.1
PP14	XIA2d	32	27	24.6
PP15	XIA1d	34	30	26.8
PP16	XIA1d	30	28	29.5
PP17	XIA1d	35	24	33.5
PP18	XIA1d	32	29	32.7
PP19	XIA1i	39	29	38.4
PP20	XIA1i	40	29	26.3
PP21	XIA2i	31	27	26.3
PP22	XIA1j	33	29	21.3
PP23	XIA2j	33	24	29.9
PP24	XIA2j	41	34	32.3
PP25	XIA2b	40	32	20.4
PP26	XIA3b	38	30	17.9
PP27	XIA3b	32	28	34.5
PP28	XIA3a	32	30	25.9
PP29	XIA4b	35	28	28.1



第109図 遺構外出土遺物（2）



第110図 遺構外出土遺物（3）



第111図 造構配図

V. 造構外の出土遺物

1. 造構外の出土遺物

・土師器（第103・109図、写真図版63・64）

27点が出土している。器種および内訳は坏片18点、高台付坏片3点、高坏片3点、壺片3点である。396～413は土師器坏である。399は製作に際してロクロを使用しないもので、底部を欠き全体の形状は不明である。体部は内湾しながら口唇部に至る。外面共にミガキ調整され、内面のみ黒色処理される。401は外面ロクロナデ、内面ミガキ+黒色処理される。体部下半に墨書「井」を持つ。底部～底部縁辺は回転イトキリ後、ヘラケズリ再調整される。402は底部破片でロクロによる回転イトキリ痕を持つ。底部外面に墨書「大」を持つ。403～408は全体の器形が判明するもので、底部から直線的に外傾するもの（403・408）、底部から内湾しながら立ち上がるものの（404・405）がある。このうち404・406・407は内面黒色処理される。415～417は高台付坏で、いずれも残存率25%以下の小片である。418～420は高坏の脚部である。421～423は壺である。いずれも残存率20%以下の小片で、全体の器形の判明するものはない。

・須恵器（第103・109図、写真図版64・65）

6点が出土している。器種およびその内訳は坏片1点、壺壺類片1点、大壺片4点である。414は底部から直線的に外傾して立ち上がる。426は壺壺類の破片で外面ロクロナデ+ケズリ・ハケメ調整、内面カキメ調整される。424・425・427・428は大壺である。外面は格子目タタキ、平行タタキ成形痕、内面は放射状アテ具痕、内面円形無紋アテ具痕を持つものなどがある。

・かわらけ、陶磁器（第109図、写真図版65）

造構外からは6点が出土している。429は大形のてづくね成形かわらけ、430は小形のロクロ成形かわらけである。431は白磁玉縁碗、432～434は常滑焼の広口壺、壺類の破片である。以上6点はいずれも12世紀後半代に比定されるものである。

・鉄製品（第110図、写真図版65）

造構外からは4点が出土している。435は刀子、436～438は鎌である。

・羽口、鉄滓（第110図、写真図版66）

羽口は4点が出土している（439～442）。439・440は先端がラッパ状に開き、次第に器道の内径を減じる形状を呈する。441・442は端部の小片で筒状を呈し、439・440とは形状が異なる。これらのことから両者は使用の形態が異なるものである可能性がある。鉄滓は2点出土している（443・444）。いずれも碗形滓である。

・古銭（第110図、写真図版66）

445は北朝段丘崖付近から出土した元祐通宝である。

・石器（第110図、写真図版66）

造構外からは5点が出土している。446～448は石鎚である。449は打製石斧である。450はフレイクである。

第3表 遺物観察表（土師器・須恵器）

No	出土地点	種類	器種	残存率	色調	主な外面調整（旧→新）	主な内面調整（旧→新）	底部	法量（cm）			備考
									口径	底径	器高	
1	S101床	土師器	壺	90%	10YR7/4にぶい黄橙 ガキ+ケズリ	(口) ヨコナデ+ミガキ【体】ミガキ+ケズリ	(口~体) ミガキ	ケズリ	10.6	3.0	3.5	内面黒色処理
2	S101床	土師器	壺	100%	10YR4/3にぶい黄橙 ミガキ	(口~体) ミガキ	(口~体) ミガキ	—	12.7	—	7.8	内外面黒色処理
3	S101床	土師器	壺	85%	7.5YR6/6橙 ケズリ	(口) ヨコナデ+ミガキ【体】ケズリ	(口~体) ミガキ	ケズリ	15.8	—	5.6	内面黒色処理
4	S101カマド左袖	土師器	壺	15%	7.5YR7/6橙 ミガキ	(口) ヨコナデ+ミガキ	(口~体) ミガキ	—	—	—	—	内面黒色処理?
5	S101床	土師器	壺	10%以下	10YR7/4にぶい黄橙 ミガキ	(口) ヨコナデ【体】ケズリ	(口~体) ミガキ	—	—	—	—	内面黒色処理
6	S101床	土師器	壺?	10%以下	10YR5/3にぶい黄橙 ミガキ	(口) ナデ	(口) ナデ	—	—	—	—	内面黒色処理?
7	S101床	土師器	壺	10%以下	2.5Y4/3オーブ梅 ミガキ	(口) ミガキ	(口) ミガキ	—	—	—	—	内外面黒色処理
8	S101 1層	土師器	壺	10%以下	2.5YR5/3黄褐 ケズリ	(口) ヨコナデ+ミガキ【体】ナゲ	(口~体) ミガキ	—	—	—	—	内面黒色処理
9	S101Q4埋土	土師器	高壺?	15%	N3/灰暗	(口~体) ミガキ	(口~体) ミガキ	—	—	—	—	内面黒色処理
10	S101Q3埋土	土師器	高壺	10%以下	10YR7/4にぶい黄橙 ミガキ	(脚) ヨコナデ	(脚) ヨコナデ	—	—	—	—	—
11	S101床	土師器	高壺	30%	10YR6/4にぶい黄橙 ミガキ	(脚) ヨコナデ+ケズリ	(脚) ヨコナデ+ケズリ	—	—	6.5	(3.7)	内面黒色処理
12	S101Q1埋土	土師器	壺	90%	10YR6/4にぶい黄橙 ミガキ?	(口) ヨコナデ【体】ナデ+ミガキ	(口) ヨコナデ【体】ナデ	—	16.9	7.1	31.5	—
13	S101カマド左袖	土師器	壺	80%	5YR5/6明赤褐	(口) ヨコナデ【体】ナデ	(口) ヨコナデ【体】ナデ	—	16.4	—	(21.4)	口縁部内面炭化物付着
14	S101床	土師器	壺	30%	5YR6/4にぶい橙 ケズリ	(口) ヨコナデ【体】ハケメ+ケズリ	(口) ヨコナデ【体】ナデ	—	—	—	—	—
15	S101床	土師器	壺	10%以下	10YR4/2灰黄褐 ミガキ?	(口) ヨコナデ【体】ナデ	(口) ヨコナデ【体】ナデ	—	—	—	—	—
16	S101Q3埋土	土師器	壺	20%	2.5Y6/4にぶい黄 ミガキ?	(口) ヨコナデ【体】ケズリ	(口) ヨコナデ【体】ナデ	—	—	—	—	—
17	S101カマド構成	土師器	壺	30%	7.5YR6/4にぶい橙 ケズリ	(口) ヨコナデ【体】ナデ+ケズリ	(口) ヨコナデ【体】ナデ	—	(17.0)	—	(16.4)	—
18	S101カマド構成	土師器	壺	15%	7.5YR6/6橙 ミガキ	(口) ヨコナデ【体】ケズリ	(口) ヨコナデ【体】ナデ	—	(19.1)	—	(11.9)	—
19	S101埋土	土師器	壺	20%	5YR5/2灰褐 ミガキ?	(体) ケズリ	(体) ナデ	ケズリ	—	—	—	—
20	S101床	土師器	壺	10%以下	10YR6/4にぶい黄橙 ミガキ?	(体) ナデ+ケズリ	(体) ミガキ?	ケズリ	—	—	—	—
21	S101カマド支脚	土師器	壺	10%以下	5YR4/6赤褐 ミガキ?	(体) ケズリ	(体) ナデ	木葉痕	—	—	—	底部木葉痕
22	S102 1層	土師器	壺	10%以下	10YR5/6黄褐 ミガキ?	(口~体) ミガキ	(口~体) ミガキ	—	—	—	—	内面黒色処理
23	S102 1層	土師器	壺	10%以下	10YR6/4にぶい黄橙 ミガキ?	(口) ヨコナデ+ミガキ【体】ナデ	(口~体) ミガキ	—	—	—	—	内面黒色処理
24	S102 1層	土師器	高壺	10%以下	10YR7/3にぶい黄橙 ミガキ?	(脚) ナデ+ミガキ	不明	—	—	—	—	外面部黒色
25	S102 1層	須恵器	大甕	10%以下	7.5YS/5灰 ミガキ?	(体) 平行タケキ	(体) 円形容文アラグ	—	—	—	—	—
26	S102 1床	土師器	壺	95%以上	10YR5/6黄褐 ミガキ?	(口) ヨコナデ【体】ハケメ+ナデ	(口) ヨコナデ【体】ナデ	ケズリ	19.7	9.5	33.7	—
28	S103床	土師器	壺	100%	10YR7/6明黄褐 ミガキ?	(口) ミガキ【体】ケズリ	(口~体) ミガキ	ケズリ+ナデ	14.3	6.6	5.6	内面黒色処理
29	S103床	土師器	壺	100%	5YR6/6橙 ミガキ?	(口) ミガキ【体】ナデ+ミガキ	(口~体) ミガキ	ミガキ	13.2	5.0	4.0	内外面黒色処理
30	S103床	土師器	壺	100%	10YR6/4にぶい黄橙 ミガキ?	(口) ヨコナデ+ミガキ【体】ケズリ+ミガキ	(口~体) ミガキ	ケズリ+ミガキ	12.6	—	4.1	内面黒色処理?

遺物觀察表（土師器・須恵器）

No	出土地点	種類	器種	残存率	色調	主な外面開窓（旧→新）	主な内面開窓（旧→新）	底部	法量(cm)			備考
									口径	底径	器高	
31	S I 03床	土師器	壺	95%以上	5Y R5/6明赤褐	(口)ヨコナデ+ミガキ【体】ミガキ	(口~体)ミガキ	ケズリ+ミガキ	12.5	--	3.9	内外面黒色処理？
32	S I 03床	土師器	高壺	95%以上	10Y R6/6明黄褐	(口)ミガキ【体】ケズリ【脚】ナデ+ミガキ	(口~体)ミガキ	ナデ+ミガキ	11.8	6.4	7.2	内外面黒色処理
33	S I 03床	土師器	高壺	100%	10Y R6/6明黄褐	(口)ミガキ【体】ケズリ【脚】ナデ+ミガキ	(口~体)ミガキ	ミガキ	11.3	7.3	6.9	内外面黒色処理
34	S I 03 Q4床	土師器	鉢	20%	10Y R6/2灰黄褐	(口)ヨコナデ【体】ナデ+ミガキ	(口)剥落【体】ナデ	--	12.2	--	(7.6)	
35	S I 03床	土師器	壺	95%以上	10Y R6/3にぶい黄褐	(口)ヨコナデ【体】ハケメ+ケズリ	(口)ヨコナデ【体】ナデ	ケズリ	16.8	8.7	24.1	
36	S I 03床	土師器	壺	70%	10Y R6/8赤褐	(口)ヨコナデ【体】ケズリ	(口)ヨコナデ【体】ナデ	ケズリ+ナデ	(16.4)	4.0	17.9	器面摩耗顯著
37	S I 03 Q4床	土師器	壺	10%以下	2.5Y R7/6橙	(口)ヨコナデ【体】ケズリ	(口)ヨコナデ【体】ナデ	--	--	--	--	
38	S I 03床	土師器	壺	10%以下	2.5Y R5/1赤灰	(口)ヨコナデ【体】ケズリ	(口)ヨコナデ【体】ナデ	--	12.2	--	12.5	
39	S I 03カマド構成	土師器	壺	15%	10Y R6/3にぶい黄褐	(口)ヨコナデ【体】ケズリ	(口)ヨコナデ【体】ナデ	--	12.2	--	12.5	
40	S I 03カマド構成	土師器	壺	20%	10Y R6/3にぶい黄褐	(口)ヨコナデ【体】ケズリ	(口)ヨコナデ【体】ナデ	--	12.2	--	12.5	
41	S I 03カマド構成	土師器	壺	25%	7.5Y R5/6にぶい褐	【体】ケズリ	【体】ナデ	ケズリ	--	--	--	
42	S I 03 Q4埋土	土師器	壺	10%	2.5Y 6/2 灰黄	【体】ケズリ	【体】ナデ	ナデ	--	--	--	
43	S I 03床	土師器	壺	20%	2.5Y R5/3にぶい赤褐	【体】ケズリ	【体】ナデ	ケズリ+ミガキ	--	--	--	
45	S I 04カマド支脚	土師器	壺	90%	7.5Y R5/6明褐	(口)ミガキ【体】ミガキ	(口~体)ミガキ	ケズリ+ミガキ	12.1	--	3.5	内外面黒色処理
46	S I 04床	土師器	壺	95%以上	7.5Y R5/4にぶい褐	(口~体)ミガキ	(口~体)ミガキ	ミガキ	12.8	--	3.5	内外黒色処・網痕？
47	S I 04 Q4埋土	土師器	壺	10%以下	7.5Y R6/2灰褐	(口)ヨコナデ【体】ナデ+ケズリ	(口)ヨコナデ【体】ナデ	--	--	--	--	
48	S I 04カマド左袖	土師器	壺	90%	10Y R5/4にぶい黄褐	(口)ヨコナデ【体】ナデ	(口~体)ミガキ	--	(10.6)	--	(3.2)	内外面黒色処理
49	S I 04床	土師器	壺	10%以下	7.5Y R7/6橙	(口~体)ミガキ	(口~体)ミガキ	--	--	--	(3.6)	内外面黒色処理？
50	S I 04カマド構成	土師器	壺	10%	7.5Y R3/3暗褐	(口~体)ミガキ	(口~体)ミガキ	--	(12.1)	--	(2.9)	内外面黒色処理？
51	S I 04 Q3埋土	土師器	小形土器	50%	10Y R7/4にぶい黄褐	(口)ヨコナデ【体】ナデ	(口)ヨコナデ【体】ナデ	ナデ	(7.0)	--	3.2	
52	S I 04床	土師器	鉢	15%	10Y R5/4にぶい黄褐	(口)ヨコナデ【体】ナデ	(口)ヨコナデ【体】ナデ	--	17.0	--	(8.0)	内外面黒化物付着
53	S I 04埋下-床	土師器	壺	65%	2.5Y R5/6明赤褐	(口)ヨコナデ【体】ナデ	(口)ヨコナデ【体】ハケメ	木葉痕	14.2	7.6	16.7	
54	S I 04 Q4埋土	土師器	壺	65%	7.5Y R6/4にぶい褐	(口)ヨコナデ【体】ケズリ	(口)ヨコナデ【体】ナデ	穿孔？	15.8	(8.8)	18.7	
55	S I 04カマド構成	土師器	壺	10%以下	7.5Y R5/4にぶい褐	(体)ハケメ	(体)ハケメ	--	--	--	(9.3)	
56	S I 04床	土師器	球胴甕	20%	10Y R7/4にぶい黄褐	(体)ハケメ	(体)ハケメ+ナデ	木葉痕	(22.1)	8.6	(8.2)	底部木葉痕
58	S I 05床	土師器	壺	70%	7.5Y R6/4にぶい褐	(口)ヨコナデ【体】ケズリ	(口~体)ミガキ	--	14.3	--	5.6	内外面黒色処理
59	S I 05床	土師器	壺	45%	7.5Y R7/4にぶい褐	(口)ヨコナデ【体】ナデ+ケズリ	(口)ヨコナデ【体】ナデ	ケズリ	15.8	6.4	22.0	
62	S I 06埋土	土師器	壺	45%	2.5Y R7/3浅黄	【体】ロクロナデ	【体】極弱いミガキ？	回転ヘラカリ	(12.8)	--	(3.3)	内外面黒色処理
63	S I 06 1層	土師器	壺	20%	10Y R8/4浅黄褐	【体】ロクロナデ+底部縁辺ヘラケズリ	【体】ミガキ	ヘラケズリ再調整	--	6.4	(3.0)	内外面黒色処理
64	S I 06 1層	土師器	高台壺	20%	5Y R7/8橙	(口~体)ロクロナデ	(口~体)ミガキ	--	(11.3)	--	4.3	内外面黒色処理

遺物觀察表（土師器・須恵器）

No	出土地点	種類	器種	残存率	色調	主な外面調整（旧→新）	主な内面調整（旧→新）	底部	法量 (cm)			備考
									口径	底径	器高	
65	S 106床	土師器	高台坏	15%	5YR6/6黄	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ミガキ	切離し不明	—	—	—	内面黒色処理
66	S 106床	須恵器	坏	45%	N7/灰白	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転ヘラキリ	(14.1)	7.3	4.0	
67	S 106埋土	須恵器	坏	15%	10YR7/2にぶい黄橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	—	—	—	(4.6)	
68	S 106Q1埋土	須恵器	坏	10%以下	10YR7/1灰白	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	—	—	—	—	内外火葬痕
69	S 106Q2埋土	須恵器	坏	10%以下	7.5Y8/2灰白	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	—	—	—	—	
70	S 106Q1埋土	須恵器	坏	10%以下	10YR6/1赤褐	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ロクロナデ	—	—	—	—	内外火葬痕
71	S 106Q1埋下	須恵器	坏	20%	2.5Y7/3赤青	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ロクロナデ	回転ヘラキリ	—	—	—	
72	S 106Q1埋土	須恵器	蓋	80%	5Y5/1灰	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	—	17.2	—	(3.5)	
73	S 106Q4埋土	須恵器	蓋	15%	5Y5/1灰	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	—	(14.4)	—	(3.0)	転用鏡
74	S 106埋土	土師器	小形土器	20%	7.5YR5/4にぶい黄	〔口～体〕ユビナデ	〔口～体〕ユビナデ	ユビナデ	—	—	—	
75	S 106カマド構成	土師器	鉢	25%	5YR4/6赤褐	〔口～体〕ケズリ	〔口～体〕ケズリ	ナデ	(16.4)	(9.8)	9.8	
76	S 106カマド右袖	土師器	蓋	10%	10YR7/4にぶい黄橙	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ハケメ	—	22.0	—	(17.3)	
77	S 106カマド構成	土師器	蓋	10%	5YR5/6明赤褐	〔口～体〕ロクロナデ+ケズリ	〔口～体〕ロクロナデ+ナデ	—	(18.4)	—	(12.4)	
78	S 106床	土師器	蓋	10%以下	7.5YR5/6明褐	〔口〕タタキ+ロクロナデ	〔口〕ロクロナデ	—	—	—	—	
79	S 106Q2埋土	土師器	蓋	15%	10YR6/2灰黄褐	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ロクロナデ	ヘラケズリ再調整	—	—	—	
80	S 106床	土師器	蓋	10%以下	5YR5/6明赤褐	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	—	—	—	—	
81	S 106Q1埋土	土師器	蓋	10%以下	7.5YR5/4にぶい褐	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	—	—	—	—	
82	S 106貼耳	土師器	蓋	10%以下	7.5YR3/1黒褐	〔体〕タタキ+ロクロナデ+ナケズリ	〔体〕ロクロナデ	—	—	—	—	
83	S 106Q1埋土	須恵器	蓋板類	10%以下	10YR7/1灰白	〔口〕ロクロナデ	〔口〕ロクロナデ	—	—	—	—	
84	S 106Q2埋土	須恵器	蓋板類	10%以下	N6/灰	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ロクロナデ	—	—	—	—	
85	S 107床	土師器	坏	25%	5YR4/6赤褐	〔口～体〕ロクロナデ+底部縁刃ヘラケズリ	〔口～体〕ミガキ	回転イトキリ	(16.6)	(7.2)	6.6	内面黒色処理
86	S 107カマド構成	土師器	坏	25%	2.5Y6/4にぶい黄	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	不明	(13.2)	(7.0)	3.7	器面磨耗
87	S 107カマド燃焼	土師器	坏	30%	10YR7/4にぶい黄橙	〔体〕ロクロナデ+底部縁刃ヘラケズリ	〔体〕ミガキ	ヘラケズリ再調整	(9.2)	5.5	(1.8)	底面線刻あり
88	S 107Q1埋下	須恵器	坏	30%	2.5Y6/2赤黄	〔口～体〕ロクロナデ+底部縁刃ケズリ	〔口～体〕ロクロナデ	ヘラケズリ再調整	(14.0)	(6.0)	4.2	内外火葬痕
89	S 107床	須恵器	坏	50%	2.5Y7/2灰黄	〔口～体〕ロクロナデ+底部縁刃ヘラケズリ	〔口～体〕ロクロナデ	ヘラケズリ再調整	13.6	(5.5)	4.6	底部肥厚
90	S 107床	須恵器	坏	30%	10YR8/6黄褐	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	(14.0)	(8.2)	(3.9)	
91	S 107床	須恵器	坏	25%	5Y7/1灰白	〔口～体〕ロクロナデ+底部縁刃ヘラケズリ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	(12.6)	(5.6)	4.8	
92	S 107カマド左袖	須恵器	坏	20%	2.5Y6/1灰黄	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ロクロナデ	回転イトキリ	—	—	—	
93	S 107床	土師器	高坏	35%	7.5YR6/3にぶい褐	〔脚〕ケズリ	〔脚〕ミガキ〔脚〕ケズリ+ナデ	—	—	(7.0)	(4.1)	内面黒色処理
94	S 107Q2埋土	土師器	瓶	10%	7.5YR6/6	〔体〕タタキ+ケズリ	〔体〕ナデ・ハケメ	単孔	—	(9.6)	(6.9)	
95	S 107床	土師器	甕	15%	7.5YR6/4にぶい褐	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	—	—	—	—	
96	S 107カマド左袖	土師器	甕	10%以下	5YR5/6明赤褐	〔口〕ハケメ+ヨコナデ〔体〕ハケメ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	—	(22.9)	—	(10.8)	

遺物観察表（土師器・須恵器）

No.	出土地点	種類	器種	残存率	色調	主な外面調整（旧→新）	主な内面調整（旧→新）	底部	法量（cm）			備考
									口径	底径	器高	
97	S I 0 7 カマド左袖	土師器	甕	10%以下	2.5Y R5/6明赤褐	(口) ハケメ+ヨコナデ【体】ハケメ	(口) ヨコナデ+ナデ【体】ナデ	-	-	-	(7.0)	
98	S I 0 7 カマド右袖	土師器	甕	10%以下	2.5Y R5/6明赤褐	(体) ケズリ	(体) ナデ	ケズリ	-	-	-	
99	S I 0 7 座	土師器	甕	25%	7.5Y R8/3浅黄褐	(体) ケズリ	(体) ナデ	ケズリ	-	-	-	
100	S I 0 7 カマド支脚	土師器	甕	100%	7.5Y R7/6盤	(口) ロクロナデ【体】ケズリ	(口～体) ロクロナデ	回転イトキリ	14.7	7.6	12.7	
101	S I 0 7 座	土師器	甕	10%以下	10Y R7/3にぶい黄褐	(口) ロクロナデ	(口) ロクロナデ	-	-	-	-	
102	S I 0 7 カマド左袖	土師器	甕	10%以下	7.5Y R7/3にぶい赤	(口～体) ロクロナデ+ケズリ	(口～体) ロクロナデ+ナデ	-	-	-	(15.5)	
103	S I 0 7 座	土師器	甕	10%以下	5Y R6/6盤	(体) タキ+ロクロナデ+ケズリ	(体) ロクロナデ	-	-	-	(10.6)	
104	S I 0 7 カマド右袖	土師器	甕	10%以下	10Y R7/4にぶい黄褐	(体) タキ+ロクロナデ+ケズリ	(体) ナデ	-	-	-	-	
105	S I 0 7 Q 2 堀下	須恵器	壺	10%以下	N4/ 灰	(体) タキ+ロクロナデ	(体) 指頭圧痕?+ナデ	-	-	-	-	
106	S I 0 7 座	須恵器	壺	10%以下	N5/ 灰	(体) タキ+ロクロナデ	(体) ロクロナデ	-	-	-	-	
107	S I 0 7 座	須恵器	壺	10%以下	7.5Y 5/1 灰	(口) ロクロナデ	(口) ロクロナデ	-	-	-	-	
108	S I 0 7 Q 2 墓土	須恵器	壺	10%以下	N2/ 黒	(体) 平行タキ	(体) 円形筋文アテグ	-	-	-	-	
114	S I 0 8 カマド燃焼部	土師器	壺	20%	2.5Y R5/6明赤褐	(口) ヨコナデ【体】ケズリ	(口～体) ミガキ	-	(14.3)	-	(4.0)	内面黒色処理
115	S I 0 8 カマド構成	土師器	壺	20%	5Y R4/6米褐	(口) ヨコナデ+ミガキ【体】ケズリ+ミガキ	(口～体) ミガキ	ケズリ	(11.1)	-	(4.0)	内面黒色処理
116	S I 0 8 Q 4 堀下	土師器	壺?	20%	N3/ 暗灰	(口) ヨコナデ【体】ケズリ	(口～体) ミガキ	-	-	-	-	
117	S I 0 8 座	土師器	壺	45%	7.5Y R7/6盤	(口) ヨコナデ+ミガキ【体】ケズリ	(口～体) ミガキ	ケズリ	(13.0)	-	4.0	内面黒色処理
118	S I 0 8 Q 4 堀下	土師器	壺	20%	7.5Y R5/3にぶい褐	(口) ヨコナデ【体】ケズリ	(口～体) ミガキ	ケズリ	-	-	-	表面磨耗
119	S I 0 8 座	土師器	壺	50%	10Y R5/4にぶい黄褐	(口～体) ナデ+ケズリ	(口～体) ミガキ	ケズリ	(16.0)	-	(3.5)	内面黒色処理
120	S I 0 8 座	土師器	高壺	65%	7.5Y R4/4褐	(口) ヨコナデ+ミガキ【体～脚】ヨコナデ+ナデ	(口～体) ミガキ	-	(12.2)	6.6	7.1	内面黒色処理
121	S I 0 8 横下	土師器	高壺	25%	10Y R6/6明黄褐	(脚) ヨコナデ+ケズリ	不明	ケズリ+ヨコナデ	-	6.6	(3.6)	底部ヘラ書き「×」
122	S I 0 8 横中	土師器	高壺	20%	2.5Y 8/3淡黄	(脚) ヨコナデ+ナデ	(体) ミガキ	ナデ	-	-	-	内面黒色処理
123	S I 0 8 座	土師器	壺	10%以下	5Y R6/6盤	(体) ナデ	(体) ナデ	單孔	-	(4.0)	(8.1)	
124	S I 0 8 座	土師器	甕	10%以下	5Y R6/8盤	(体) ナデ	(体) ナデ	-	(21.7)	-	(30.9)	
125	S I 0 8 カマド構成	土師器	甕	50%	10Y R6/4にぶい黄褐	(口) ヨコナデ【体】ケズリ	(口) ヨコナデ【体】ナデ	-	-	(4.8)	(6.0)	
126	S I 0 8 座	土師器	甕	80%	5Y R5/4にぶい赤褐	(口) ヨコナデ【体】ハケメ+ナデ+ケズリ	(口) ヨコナデ【体】ナデ+ハケメ	木瘤痕	16.2	8.0	22.5	
127	S I 0 8 カマド構成	土師器	甕	10%	10Y R7/7にぶい黄褐	(口) ヨコナデ【体】ケズリ	(口) ヨコナデ【体】ナデ	-	(16.3)	-	(10.8)	
128	S I 0 8 カマド右袖	土師器	甕	90%	7.5Y R5/4にぶい褐	(口) ヨコナデ【体】ナデ+ケズリ	(口) ヨコナデ【体】ナデ	-	22.3	-	(32.1)	
129	S I 0 8 焼出し	土師器	甕	25%	5Y R6/4にぶい黒	(口) ヨコナデ【体】ハケメ	(口) ヨコナデ【体】ナデ	-	(19.7)	(17.2)	-	
130	S I 0 8 カマド構成	土師器	甕	20%	10Y R6/4にぶい黄褐	(体) ケズリ	(体) ナデ	-	-	-	-	底部剥落
131	S I 0 8 座	土師器	球胴甕	95%以上	7.5Y R3/2黒褐	(口) ヨコナデ【体】ケズリ	(口) ヨコナデ【体】ナデ	ケズリ	12.5	5.8	26.8	

遺物調査表（土師器・須恵器）

No	出土地点	種類	器種	残存率	色調	主な外観調整（旧→新）	主な内面調整（旧→新）	底部	法量（cm）			備考	
									口径	底径	器高		
132	S I 0 8床	土師器	球胴型	90%	10Y R7/4にぶい黄橙 キ	(口) ヨコナデ〔体〕ナデ+ミガ キ	(口) ヨコナデ〔体〕ナデ	-	(21.3)	-	(28.8)		
136	S I 0 9床	土師器	壺	80%	10Y R7/4にぶい黄橙	(口~体) ロクロナデ+底部縁追 ヘラケズリ	(口~体) ミガキ	ヘラケズリ再 調整	14.8	6.7	4.8	内面黒色処理	
137	S I 0 9 P 3埋土	土師器	壺	25%	7.5Y R6/4にぶい橙	(口~体) ロクロナデ	(口~体) ミガキ	ヘラケズリ再 調整?	-	-	-	内面黒色処理・器面 摩耗	
138	S I 0 9 Q 3埋土	土師器	壺	10%	10Y R6/4にぶい黄橙	(口~体) ロクロナデ	(口~体) ロクロナデ	-	-	-	-		
139	S I 0 9 1層	土師器	壺	10%以下	7.5Y R7/6埋	(口~体) ロクロナデ	(口~体) ロクロナデ	-	-	-	-		
140	S I 0 9 1層	土師器	壺	10%以下	2.5Y R4/1黄灰	(体) ミガキ	(体) ミガキ	ミガキ	-	-	-	内面黒色処理	
141	S I 0 9 Q 2埋土	土師器	壺	10%以下	7.5Y R6/4にぶい橙	(口) ヨコナデ+ミガキ〔体〕ミ ガキ	(口~体) ミガキ	-	-	-	-	内面黒色処理	
142	S I 0 9 Q 2埋土	土師器	壺	10%以下	10Y R4/2赤黄褐	(体) ミガキ	回転イトキリ	-	-	-	-	内面黒色処理	
143	S I 0 9 Q 1貼床	土師器	壺	10%	5Y 8/1灰白	(体) ロクロナデ	回転イトキリ	-	-	-	-	外面摩耗	
144	S I 0 9 Q 4埋下	土師器	壺	10%以下	2.5Y 4/7暗黄灰	(体) ロクロナデ	(体) 不明	回転イトキリ	-	-	-	内面摩耗	
145	S I 0 9 PPP 9	土師器	壺	高杯	10%以下 7.5Y R7/6埋	(体) ミガキ+ケズリ	(体) ミガキ	-	-	-	-	内面黒色処理	
146	S I 0 9 Q 3埋下	土師器	壺	10%以下	7.5Y R7/6赤黄	(体) ケズリ	(体) ナデ	-	-	-	-		
147	S I 0 9 貼床	土師器	壺	10%以下	10Y R7/3にぶい黄橙	(体) ナデ	木葉痕	-	-	-	-		
148	S I 0 9 1層	土師器	大甕	10%以下	5Y 2/1灰	(体) 平行タタキ	円形無文アテブ	-	-	-	-		
149	S I 1 0 Q 2埋下	土師器	壺	20%	10Y R6/4にぶい黄橙	(口) ロクロナデ〔体〕ナデ	(口~体) ミガキ	-	(13.4)	-	(5.2)	内面黒色処理	
150	S I 1 0 Q 3床	土師器	双耳壺	10%	7.5Y R7/4にぶい橙	(把手~体) ナデ?	(体) ミガキ	-	-	-	(3.5)	内面黒色処理	
151	S I 1 0 床	須恵器	壺	30%	5Y R5/1褐色	(口~体) ロクロナデ	回転ヘラキリ	(13.6)	(6.6)	4.3			
152	S I 1 0 床	須恵器	壺	20%	2.5Y 8/1灰白	(体) ロクロナデ	回転イトキリ	(13.3)	(7.4)	4.6			
153	S I 1 0 旧カマド右 袖	須恵器	壺	30%	2.5Y R7/3赤黄	(口~体) ロクロナデ	回転イトキリ	(13.0)	(6.0)	4.1			
154	S I 1 0 床	須恵器	壺	35%	2.5Y 7/2灰黄	(口~体) ロクロナデ	回転イトキリ	(12.6)	(6.8)	4.3			
155	S I 1 0 旧カマド内	土師器	壺	10%以下	7.5Y R5/4にぶい橙	(口) ロクロナデ〔体〕ハケメ ナデ	(口) ヨコナデ〔体〕ナデ	-	-	-	(9.2)		
156	S I 1 0 旧カマド内	土師器	壺	10%以下	5Y R4/8赤褐	(口~体) ロクロナデ	(口~体) ロクロナデ	-	-	-	-		
157	S I 1 0 Q 3床	土師器	壺	10%以下	5Y R6/6盤	(口~体) ロクロナデ	(口~体) ロクロナデ	-	(12.0)	-	(5.7)	内面炭化物付着	
158	S I 1 0 旧カマド構 成	土師器	壺	10%以下	5Y R4/8赤褐	(体) ロクロナデ	静止イトキリ	-	(7.2)	(3.4)			
159	S I 1 0 PPP 14	土師器	壺	10%以下	5Y R5/8明赤褐	(体) タタキ+ロクロナデ	(体) ロクロナデ+ナデ	-	-	-	-		
160	S I 1 0 床	須恵器	壺	10%以下	7.5Y R5/1褐色	(口) ロクロナデ〔体〕タタキ+ ロクロナデ	(口~体) ロクロナデ	-	-	-	(9.6)		
164	S I 1 1 床	土師器	壺	30%	5Y R5/6明赤褐	(口) ヨコナデ+ミガキ〔体〕ケ ズリ+ミガキ	(口~体) ミガキ	-	(16.0)	-	-	内面黒色処理	
165	S I 1 1 床	土師器	壺	90%	7.5Y R6/6盤	(口) ヨコナデ〔体〕ナデ	木葉痕	(18.1)	8.3	27.2	底部木葉痕		
166	S I 1 1 床	土師器	壺	35%	10Y R7/4にぶい黄橙 リ	(口) ヨコナデ〔体〕ナデ+ケズ リ	(口) ヨコナデ〔体〕ナデ	-	(18.5)	(8.4)	(24.2)		
167	S I 1 1 3床	土師器	壺		7.5Y R5/4にぶい褐	(口~体) ロクロナデ	回転イトキリ	13.3	5.8	3.5			

遺物観察表（土師器・須恵器）

No.	出土地点	種類	器種	残存率	色調	主な外表面調整（旧→新）	主な内面調整（旧→新）	底部	法量（cm）			備考
									口径	底径	器高	
170	S II 4 床	土師器	壺	35%	10Y R6/6明黄褐	【口～体】ロクロナデ	【口～体】ロクロナデ	圓軸イトキリ	(13.2)	(7.8)	4.6	底部柱状づくり
171	S II 4 カマド構成	土師器	壺	10%	5Y R6/8橙	【体】ロクロナデ	【体】ロクロナデ	—	—	—	—	
172	S II 4 カマド構成	土師器	壺	15%	5Y R6/8橙	【体】ロクロナデ	【体】ロクロナデ	圓軸イトキリ	—	—	—	
173	S II 4 床	須恵器	高台壺	95%以上	2.5G Y5/1オリーブ灰	【口～体】ロクロナデ	【口～体】ロクロナデ	切離し不明	10.3	6.2	5.2	
174	S II 4 カマド構成	土師器	壺	80%	5Y R4/8赤褐	【口】ロクロナデ【体】タタキナ ロクロナデ+ケズリ	【口～体】ロクロナデ+ハケメ	ナデ	(20.9)	(7.2)	30.2	
175	S II 4 カマド構成	土師器	壺	90%	5Y R5/6明赤褐	【口】タタキ+ロクロナデ+ケズ リ	【口～体】ロクロナデ+ハケメ	ナデ	23.2	18.2	34.3	
176	S II 4 煙出し	土師器	壺	10%以下	5Y R5/6明赤褐	【口】タタキ+ロクロナデ+ケズ リ	【口～体】ロクロナデ+ナデ	—	—	—	(12.6)	
177	S II 4 床	土師器	壺	25%	5Y R5/6明赤褐	【口】タタキ+ロクロナデ+ケズ リ	【口～体】ロクロナデ+ナデ	ケズリ	(19.8)	(7.3)	(24.3)	口縁部穿孔有り
178	S II 4 カマド構成	土師器	壺	45%	2.5Y R5/6明赤褐	【口～体】ロクロナデ+ケズリ	【口～体】ロクロナデ+ナデ	—	(22.6)	—	(27.5)	
179	S II 4 カマド構成	土師器	壺	50%	2.5Y R6/8橙	【口～体】タタキ+ロクロナデ+ ケズリ	【口～体】ロクロナデ+ナデ・ハ ケメ	ナデ	24.5	7.5	34.7	
180	S II 4 カマド構成	土師器	壺	10%	2.5Y R5/4にぶい赤褐	【体】ケズリ	【体】ナデ	ナデ	—	—	—	
181	S II 4 床	土師器	壺	10%以下	7.5Y R6/4にぶい橙	【体】ケズリ	【体】ナデ	ケズリ	—	—	—	
182	S II 4 カマド構成	土師器	壺	10%以下	5Y R5/6明赤褐	【体】ロクロナデ	【体】ロクロナデ	—	—	—	—	
183	S II 4 床	土師器	壺	20%	2.5Y R5/6明赤褐	【口～体】ロクロナデ+ケズリ	【口～体】ロクロナデ+ナデ	—	(37.0)	(10.7)	(24.8)	
184	S II 4 床	須恵器	壺蓋類	10%以下	2.5Y R5/1黄灰	【体】ロクロナデ	【体】ミガキ	—	—	—	(6.9)	
186	S II 5 床	土師器	壺	60%	2.5Y R5/4にぶい赤褐	【口～体】ミガキ	【口～体】ミガキ	ミガキ	(15.0)	—	4.2	内外面黒色処理
187	S II 5 床	土師器	高壺	60%	7.5Y R5/6明褐	【口～体】ミガキ	【口～体】ミガキ	ナデ	—	5.6	(5.8)	内外面黒色処理
188	S II 5 1層	土師器	高壺	30%	10Y R7/4にぶい黄褐	【脚】ヨコナデ+ケズリ	【体】ミガキ	ケズリ+ヨコ ナデ	—	(6.3)	(3.8)	底部へナ書「×」
189	S II 5 床	土師器	壺	20%	10Y R4/4褐色	【体】ナデ	【体】ナデ	ナデ	—	—	(7.2)	底部丸底風
190	S II 5 床	土師器	壺	90%	5Y R6/6橙	【口】ヨコナデ【体】ナデ	【口】ヨコナデ【体】ナデ	ナデ	15.2	6.5	20.2	
191	S II 5 床	土師器	壺	85%	5Y R5/4にぶい赤褐	【口】ヨコナデ【体】ナデ	【口】ヨコナデ【体】ナデ	ナデ	17.5	5.2	17.6	
192	S II 5 床	土師器	壺	90%	7.5Y R5/4にぶい褐	【口】ヨコナデ【体】ケズリ	【口】ヨコナデ【体】ハケメ・ナ デ	—	—	—	—	
195	S II 6 1層	土師器	壺	80%	2.5Y R6/8橙	【口】ヨコナデ【体】ケズリ	【口～体】ミガキ	ケズリ	14.7	—	3.5	内面黒色処理
196	S II 6 1層	土師器	鉢	20%	2.5Y R6/6橙	【口】ヨコナデ+ミガキ【体】ナ デ+ミガキ	【口～体】ミガキ	—	(21.4)	—	—	内面黒色処理
197	S II 6 床	土師器	壺	90%	10Y R5/3にぶい黄褐	【口】ヨコナデ【体】ハケメ	【口】ヨコナデ【体】ハケメ	ナデ	19.0	7.1	28.0	
198	S II 6 カマド燃焼部	土師器	壺	80%	2.5Y R4/6赤褐	【口】ヨコナデ【体】ハケメ	【口】ヨコナデ【体】ハケメ	木簡痕	(14.5)	7.4	14.5	
199	S II 6 地土	土師器	壺	10%以下	10Y R7/2にぶい黄褐	【口】ヨコナデ【体】ハケメ	【口】ヨコナデ【体】ハケメ	—	—	—	—	
200	S II 6 Q4 楼下	土師器	壺	10%	2.5Y R3/3暗赤褐	【体】ハケメ	【体】ハケメ	ナデ	—	—	—	
201	S II 6 1層	土師器	壺	10%以下	10Y R7/3にぶい黄褐	【体】ハケメ	【体】ハケメ	木簡痕	—	—	—	
202	S II 6 床	土師器	球形壺	10%以下	10Y R6/4にぶい黄褐	【体】ナデ+ケズリ+ミガキ	【体】ナデ	ナデ	(17.8)	7.6	(22.2)	
203	S II 6 1層	須恵器	壺蓋類	10%以下	N4/ 壱	【体】タタキ+ロクロナデ+ハケ メ	【体】カキメ	—	—	—	—	

遺物觀察表（土師器・須恵器）

No	出土地点	種類	器種	残存率	色調	主な外面調整（旧→新）	主な内面調整（旧→新）	底部	法量 (cm)			備考
									口径	底径	器高	
205	S I 1 7床	土師器	壺	65%	7.5Y R6/4に赤い黄緑	(口~体) ロクロナデ	(口~体) ミガキ	弱いヘラケズ リ再調整	14.0	7.1	4.1	内面黒色処理
206	S I 1 7床	須恵器	壺	55%	10Y R7/3に赤い黄緑	(口~体) ロクロナデ	(口~体) ロクロナデ	弱いヘラケズ リ再調整	13.5	6.8	4.3	
207	S I 1 7床	土師器	壺	10%以下	10Y R6/3に赤い黄緑	(口~体) ロクロナデ	(口~体) ロクロナデ	—	—	—	(7.5)	
208	S I 1 7床	土師器	壺	50%	5Y R6/4に赤い黄緑	(口) ヨコナデ(体) ハケメ+タケ メリ	(口) ヨコナデ+ハケメ(体) ハ ケメ	ケズリ	(24.1)	(8.0)	(32.9)	
209	S I 1 7床	土師器	壺	70%	10Y R7/4に赤い黄緑	(口) ロクロナデ(体) タタキ+ ロクロナデ+ケズリ	(口~体) ロクロナデ	ナデ	(20.0)	(9.7)	30.5	
210	S I 1 7床	土師器	壺	10%以下	7.5Y R7/2明黄緑	(口) ヨコナデ(体) ハケメ	(口) ヨコナデ(体) ハケメ	—	—	—	—	
211	S I 1 7床	須恵器	壺蓋類	10%以下	2.5Y R3/4暗赤褐色	(口) ロクロナデ(体) タタキ+ ロクロナデ	(口~体) ロクロナデ	—	—	—	(11.0)	
212	S I 1 8床	土師器	壺	90%	5Y R6/4に赤い黄緑	(口~体) ロクロナデ	(口~体) ロクロナデ	回転イトキリ	13.2	6.6	5.0	底部墨書き有り
213	S I 1 8カマド構成	須恵器	壺	90%	7.5Y R5/1灰陶	(口~体) ロクロナデ	(口~体) ロクロナデ	回転ヘラキリ	14.3	7.2	4.5	
214	S I 1 8床	須恵器	壺	90%	7.5Y R4/1暗灰	(口~体) ロクロナデ	(口~体) ロクロナデ	回転イトキリ	13.4	6.5	4.8	
215	S I 1 8床	須恵器	壺	70%	N5' 床	(口~体) ロクロナデ	(口~体) ロクロナデ	回転ヘラキリ	14.4	6.8	4.7	
216	S I 1 8床	須恵器	壺	60%	2.5Y T7/2灰黄	(口~体) ロクロナデ	(口~体) ロクロナデ	—	(16.9)	—	(5.5)	
217	S I 1 8カマド構成	須恵器	壺	10%以下	5Y 6/2R赤オーブ	(口~体) ロクロナデ	(口~体) ロクロナデ	—	—	—	(3.3)	体部墨書き有り
218	S I 1 8カマド構成	土師器	壺	70%	5Y R4/6赤褐	(口) ロクロナデ(体) タタキ+ ロクロナデ+ケズリ	(口~体) ロクロナデ+ナデ	ナデ	(30.0)	(7.4)	(38.9)	
219	S I 1 8カマド構成	土師器	壺	10%	7.5Y R5/4に赤い黄緑	(口) ヨコナデ(体) ハケメ+タ ケメリ	(口) ヨコナデ(体) ナデ	—	19.2	—	(8.2)	
220	S I 1 8カマド左袖	土師器	壺	45%	10Y R6/4に赤い黄緑	(体) ケズリ	(体) ナデ	—	—	(10.0)	(32.1)	
221	S I 1 8カマド構成	土師器	壺	10%以下	5Y R5/3に赤い赤褐	(口) ヨコナデ(体) ナデ	(口) ヨコナデ(体) ナデ	—	—	—	—	
222	S I 1 8床	須恵器	長颈瓶	10%	2.5Y S1/黄灰	(口) ロクロナデ	(口) ロクロナデ	—	(8.8)	—	(8.6)	
224	S I 1 9床	土師器	壺	90%	10Y R6/6明黄緑	(口~体) ロクロナデ	(口~体) ロクロナデ	回転イトキリ	9.8	4.4	1.9	体部油墨付着
225	S I 1 9 1層	土師器	壺	60%	7.5Y R6/4L暗い黄緑	(口~体) ロクロナデ	(口~体) ロクロナデ	回転イトキリ	(9.6)	4.2	1.8	
226	S I 1 9床	土師器	壺	95%以上	7.5Y R7/4に赤い黄緑	(口~体) ロクロナデ	(口~体) ロクロナデ	回転イトキリ	10.6	5.3	2.7	
227	S I 1 9床	土師器	壺	70%	10Y R4/2灰黄緑	(口~体) ロクロナデ	(口~体) ロクロナデ	回転イトキリ	12.0	5.4	2.7	
228	S I 1 9 1層	土師器	壺	55%	10Y R6/4に赤い黄緑	(口~体) ロクロナデ	(口~体) ロクロナデ	回転イトキリ	(12.0)	(5.6)	3.1	
229	S I 1 9 Q4埋土	土師器	壺	55%	7.5Y R5/6明黄	(口~体) ロクロナデ	(口~体) ロクロナデ	回転イトキリ	11.6	5.1	2.8	
230	S I 1 9床	土師器	壺	100%	10Y R6/3に赤い黄緑	(口~体) ロクロナデ	(口~体) ロクロナデ	回転イトキリ	12.7	6.0	3.3	
231	S I 1 9床	土師器	壺	95%以上	10Y R6/4に赤い黄緑	(口~体) ロクロナデ	(口~体) ミガキ	ヘラケズリ再 調整	15.0	7.0	4.1	内面黒色処理
232	S I 1 9床	土師器	壺	50%	10Y R6/3に赤い黄緑	(口~体) ロクロナデ	(口~体) ロクロナデ+ミガ キ	弱いヘラケズ リ再調整	(13.9)	(5.0)	4.0	内面黒色処理?
233	S I 1 9カマド燃	土師器	壺	30%	7.5Y R7/6橙	(口~体) ロクロナデ	(口~体) ロクロナデ	—	(10.4)	—	(1.9)	
234	S I 1 9 1層	土師器	壺	20%	10Y R7/6明黄緑	(口~体) ロクロナデ	(口~体) ミガキ	—	(13.2)	—	(3.2)	内面黒色処理

遺物観察表（土器類・須恵器）

No.	出土地点	種類	器種	残存率	色調	主な外面調整（旧→新）	主な内面調整（旧→新）	底部	法量（cm）			備考
									口径	底径	器高	
235	S I I 9 カマド焼成部	土師器	壺	10%	10YR6/4に赤い黄褐	【口～体】ロクロナデ	【口～体】ミガキ	—	—	—	—	内面黒色処理
236	S I I 9 カマド焼成部	土師器	壺	10%	10YR6/3に赤い黄褐	【口～体】ロクロナデ+ナデ	【口～体】ロクロナデ	—	—	—	—	
237	S I I 9 床	土師器	壺	25%	5YR7/6橙	【口～体】ロクロナデ	【口～体】ミガキ	回転イトキリ	(15.3)	4.7	(6.0)	内面黒色処理
238	S I I 9 1層	土師器	壺	10%以下	10YR6/3に赤い黄褐	【口～体】ロクロナデ	【口～体】ミガキ	—	—	—	—	内面黒色処理
239	S I I 9 1層	土師器	壺	10%以下	7.5YR5/4Cに赤い褐	【口～体】ロクロナデ	【口～体】ロクロナデ	—	—	—	—	
240	S I I 9 床	土師器	壺	20%	2.5Y4/1黄灰	【体】ロクロナデ	【体】ロクロナデ	回転イトキリ	—	—	—	底部火煙？墨書き？
241	S I I 9 床	土師器	高台壺	20%	2.5Y7/3浅黄	【体】ロクロナデ	【体】ミガキ	回転イトキリ	—	—	—	内面黒色処理
242	S I I 9 床	土師器	高台壺	95%以上	10YR6/4に赤い黄褐	【口～体】ロクロナデ	【口～体】ミガキ	回転イトキリ	12.2	7.0	5.0	内面黒色処理
243	S I I 9 Q 4 樹皮	土師器	壺	10%以下	5YR4/4に赤い赤褐	【口～体】ロクロナデ	【口～体】ロクロナデ	—	—	—	—	
244	S I I 9 1層	土師器	壺	10%以下	5YR5/4に赤い赤褐	【口】ヨコナデ（体）ナデ	【口】ヨコナデ（体）ナデ	—	—	—	—	
245	S I I 9 Q 4 墓土	土師器	壺	10%以下	5YR5/3に赤い赤褐	【口】ヨコナデ（体）ケズリ	【口】ヨコナデ（体）ナデ	—	—	—	—	
246	S I I 9 床	土師器	壺	20%	7.5YR5/6明褐色	【口～体】ロクロナデ+ケズリ	【口】ロクロナデ+ナデ	—	(21.0)	—	(23.7)	体部稍痕
247	S I I 9 P 1	土師器	鉢	10%	10YR6/3に赤い黄褐	【体】ナデ	【体】ミガキ	ヘラケズリ再調整	—	(9.0)	(4.7)	内面黒色処理
248	S I I 9 1層	須恵器	更張鏡	10%以下	5YS/1 黒	【体】ケズリ	【体】ハメケ	ケズリ	—	(12.8)	(6.7)	
249	S I I 9 Q 2 樹土	須恵器	大甕	10%以下	N2/ 黒	【体】平行タタキ	【体】平行タタキ	—	—	—	—	
250	S I I 9 1層	須恵器	大甕	10%以下	N6/ 黒	【体】平行タタキ	【体】平行タタキ	—	—	—	—	
251	S I 2 0 樹土	土師器	壺	45%	10YR7/3に赤い黄褐	【口～体】ロクロナデ	【口～体】ミガキ	回転イトキリ	(16.5)	6.0	5.0	内面黒色処理
252	S I 2 0 Q 2 墓土	土師器	壺	75%	7.5YR6/4に赤い褐	【口～体】ロクロナデ+底部擦認 ヘラナデ	【口～体】ミガキ	回転イトキリ +ヘラケズリ再調整	16.8	5.6	5.3	内面黒色処理
253	S I 2 0 柴	土師器	壺	60%	10YR4/3に赤い黄褐	【口～体】ロクロナデ	【口～体】ミガキ	回転イトキリ	(15.0)	6.2	5.4	内面黒色処理
254	S I 2 0 樹下	土師器	壺	30%	7.5YR6/6橙	【口～体】ロクロナデ	【口～体】ロクロナデ	回転イトキリ	(12.6)	(5.6)	3.5	
255	S I 2 0 カマド構成土	土師器	壺	15%	7.5YR6/6橙	【口～体】ロクロナデ	【口～体】ロクロナデ	回転イトキリ	(12.6)	(5.4)	(3.5)	
256	S I 2 0 床	土師器	壺	45%	10YR3/3暗褐	【口～体】ロクロナデ	【口～体】ミガキ	回転イトキリ	(14.2)	6.2	4.2	内面黒色処理
257	S I 2 0 床	須恵器	壺	95%以上	2.5Y8/2灰白	【口～体】ロクロナデ	【口～体】ロクロナデ	ヘラケズリ再調整	14.3	7.7	3.5	
258	S I 2 0 Q 3 墓土	土師器	壺	20%	7.5YR7/4に赤い褐	【口～体】ロクロナデ	【口～体】ロクロナデ	回転イトキリ	—	—	—	
259	S I 2 0 床	土師器	壺	10%以下	2.5YR6/8微	【口～体】ロクロナデ	【口～体】ロクロナデ	—	—	—	—	
260	S I 2 1 Q 3 樹土	土師器	壺	10%	2.5YR6/8微	【体】ロクロナデ	【体】ミガキ	ヘラケズリ再調整	(11.4)	(5.8)	(3.4)	内面黒色・体部擦痕
261	S I 2 1 Q 1 墓土	土師器	壺	10%	10YR5/1褐色	【口～体】ロクロナデ	【口～体】ミガキ	ヘラケズリ再調整	—	—	—	内面黒色処理
262	S I 2 1 Q 4 墓土	須恵器	壺	70%	7.5YR7/4に赤い褐	【口～体】ロクロナデ	【口～体】ロクロナデ	回転ヘラキリ	13.9	6.8	4.7	
263	S I 2 1 樹土	須恵器	壺	30%	10YR8/3浅黃褐	【口～体】ロクロナデ	【口～体】ロクロナデ	ヘラケズリ再調整	(14.8)	(6.6)	4.8	
264	S I 2 1 Q 1 墓土	土師器	高杯？	10%	10YR6/4に赤い黄褐	【口】ヨコナデ（体）ナデ	【口～体】ミガキ	—	—	—	—	内面黒色処理
265	S I 2 1 カマド燃焼土	土師器	壺	10%	7.5YR6/6橙	【体】タキキ+ケズリ	【体】ハメナデ	単孔	—	(9.4)	(12.2)	

遺物観察表（土師器・須恵器）

No	出土地点	種類	器種	残存率	色調	主な外面調整（旧→新）	主な内面調整（旧→新）	底部	法量（cm）			備考
									口径	底径	器高	
266	S I 2 1 燐道部	土師器	壺	40%	5YR 5/6明赤褐色	〔口〕ヨコナデ〔体〕ハケメナケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ハケメナケズリ	-	(20.7)	-	(28.8)	
267	S I 2 1 カマド壠土	土師器	壺	10%以下	7.5Y R6/6墨	〔体〕ハケメ	〔体〕ハケメ	-	-	-	(9.5)	
268	S I 2 1 床	須恵器	壺蓋類	10%以下	5Y6/1灰	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ロクロナデ	-	-	-	(3.9)	
269	S I 2 1 床	須恵器	壺蓋類	10%以下	N6/灰	〔体〕ケズリ	〔体〕ナデ	ケズリ	-	(12.4)	(4.0)	
270	S I 2 2 1層	土師器	壺	25%	10Y R7/3にぶい黄緑	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	(10.7)	-	(3.0)	
271	S I 2 2 床	土師器	壺	35%	7.5Y R6/4にぶい緑	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	(12.2)	(5.2)	3.6	
272	S I 2 2 床	土師器	壺	100%	10Y R6/4にぶい黄緑	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	不明	14.7	5.5	4.7	内黒処理・器面摩耗
273	S I 2 2 床	土師器	壺	40%	7.5Y R8/3灰青緑	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	(13.3)	(4.6)	3.7	
274	S I 2 2 床	土師器	壺	20%	7.5Y R6/4にぶい緑	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	回転イトキリ	14.0	-	4.8	内黒処理・器面摩耗
275	S I 2 2 カマド構成	須恵器	壺	50%	7.5Y R7/4にぶい緑	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	14.6	4.9	5.2	
276	S I 2 2 床	土師器	鉢	10%	2.5Y R5/6明赤褐色	〔体〕ロクロナデ?	〔体〕ミガキ	回転イトキリ?	-	5.5	1.9	内面黒色処理
277	S I 2 2 1層	土師器	壺	10%以下	7.5Y R5/6明緑	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	-	-	-	-	
278	S I 2 2 1層	土師器	壺	10%以下	10Y R7/3にぶい黄緑	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	-	-	-	-	
279	S I 2 2 1層	土師器	壺	10%以下	10Y R7/4にぶい黄緑	〔口〕工具痕列+ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	-	-	-	-	
280	S I 2 2 床	土師器	壺	10%	5Y R6/6墨	〔口～体〕ロクロナデ+ケズリ	〔口～体〕ロクロナデ+ナデ	-	-	-	(15.9)	
281	S I 2 2 Q 3 墓土	土師器	壺	10%以下	10Y R6/3にぶい黄緑	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	-	-	-	-	
282	S I 2 2 Q 2 墓土	須恵器	壺蓋類	10%以下	N2/ 黒	〔体〕平行タキ	〔体〕ナデ	-	-	-	-	
283	S I 2 2 1層	須恵器	大甕	10%以下	N5/ 灰	〔体〕平行タキ	〔体〕円筒形アテグ+ナデ	-	-	-	-	
284	S I 2 2 Q 3 墓土	須恵器	大甕	10%以下	7.5Y4/1灰	〔体〕平行タキ	〔体〕放射状アテグ	-	-	-	-	
287	S I 2 3 Q 4 墓下	土師器	壺	15%	10Y R6/6明黄緑	〔口〕ミガキ〔体〕ナデ	〔口～体〕ミガキ	ヘラケズリ再調整	(12.2)	-	(5.6)	内面黒色処理
288	S I 2 3 Q 4 墓下	土師器	壺	15%	10Y R5/2灰黄緑	〔口〕ミガキ〔体〕ケズリ	〔口～体〕ミガキ	-	-	-	-	内面黒色処理
289	S I 2 3 Q 4 墓下	土師器	壺	20%	7.5Y R6/3にぶい緑	〔口〕ヨコナデ+ミガキ〔体〕ケズリ+ミガキ	〔口～体〕ミガキ	-	(12.5)	-	(3.4)	内面黒色処理
290	S I 2 3 Q 4 墓下	土師器	壺	20%	7.5Y R7/3にぶい緑	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	〔口～体〕ミガキ	ケズリ	(10.4)	(4.2)	3.7	内面黒色処理
291	S I 2 3 Q 4 墓下	土師器	壺	10%以下	7.5Y2/1黑	〔口～体〕ミガキ	〔口～体〕ミガキ	-	-	-	(3.5)	内外面黒色処理?
292	S I 2 3 Q 2 墓下	土師器	壺	50%	5Y R5/6明赤褐色	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口～体〕ミガキ	ケズリ	(12.6)	5.2	3.9	内面黒色処理
293	S I 2 3 床	土師器	壺	70%	5Y R5/6明赤褐色	〔口～体〕ロクロナデ+底部縁辺ヘラケズリ	手持ちヘラケズリ再調整	(14.5)	8.9	4.6		
294	S I 2 3 床	土師器	壺	15%	10Y R6/3にぶい黄緑	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	〔口～体〕ミガキ	ケズリ	(12.8)	-	(4.8)	内面黒色処理
295	S I 2 3 Q 1 墓下	土師器	壺	10%以下	10Y R5/2灰黄緑	〔口～体〕ミガキ	〔口～体〕ミガキ	-	-	-	-	内外面黒色処理?
296	S I 2 3 Q 3 墓土	土師器	壺	10%以下	10Y R5/1褐灰	〔口～体〕ミガキ	〔口～体〕ミガキ	-	-	-	-	内外面黒色処理
297	S I 2 3 1層	須恵器	壺	60%	10Y R7/4にぶい黄緑	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転ヘラケズリ	(14.6)	7.9	4.5	
298	S I 2 3 Q 4 墓土	須恵器	壺	30%	2.5Y7/3浅黄	〔口～体〕ロクロナデ+底部縁辺ヘラケズリ	〔口～体〕ロクロナデ	ヘラケズリ再調整	(13.6)	6.4	4.3	底部切痕?
299	S I 2 3 Q 3 墓下	須恵器	壺	20%	10Y R6/2灰黄緑	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転イトキリ	(15.0)	(8.2)	(4.5)	

遺物観察表（土師器・須恵器）

No.	出土地点	種類	器種	残存率	色調	主な外面調査（旧→新）	主な内面調査（旧→新）	底部	法線（cm）			備考
									口径	底径	器高	
300	S I 2 3 床	須恵器	壺	20%	7.5Y5/1 灰	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ロクロナデ	回転ヘラキリ	(10.6)	7.8	(1.7)	
301	S I 2 3 Q 4 埋土	須恵器	壺	45%	7.5Y5/1 灰	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ロクロナデ	—	—	13.2	—	1.8
302	S I 2 3 床	土師器	鉢	15%	10YR5/3にぶい黄褐	〔口～体〕ミガキ	〔口～体〕ミガキ	—	—	(20.0)	—	(7.3) 内外面黒色処理
303	S I 2 3 Q 4 埋土	土師器	鉢？	10%	10YR5/4にぶい黄褐	〔体〕ナデ	〔体〕ミガキ	ケズリ	—	(7.6)	(4.1)	内面黒色処理
304	S I 2 3 床	土師器	壺	10%	5YR5/4にぶい赤褐	〔口〕ロクロナデ〔体〕タタキ+ケズリ	〔口〕ロクロナデ〔体〕ナデ	—	(21.2)	—	(11.5)	
305	S I 2 3 埋土	土師器	壺	10%以下	5YR6/6縫	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	—	—	—	—	
306	S I 2 3 床	土師器	球胴壺	10%以下	10YR4/3にぶい黄褐	〔口〕ヨコナデ〔体〕ミガキ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	—	—	—	—	
307	S I 2 3 Q 3 横下	須恵器	束帯瓶	10%以下	7.5Y4/1灰	〔体〕ハケメ	〔体〕ハケメ	—	—	—	—	
308	S I 2 3 Q 4 埋土	須恵器	束帯瓶	10%以下	2.5Y4/1黄灰	〔口〕ロクロナデ	〔口〕ロクロナデ	—	—	—	—	
309	S I 2 3 Q 4 埋土	須恵器	大甕	10%以下	2.5Y5/2暗灰	〔体〕格子目タタキ	〔体〕ハケメ+ナデ	—	—	—	—	
310	S I 2 4 埋土内	土師器	壺	30%	7.5YR6/6縫	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転ヘラキリ	(11.6)	5.2	2.3	
311	S I 2 4 FP 1 1 焼土	土師器	壺	25%	10YR5/4にぶい黄褐	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転ヘラキリ	(13.4)	6.0	3.7	
312	S I 2 4 烧土内	土師器	壺	50%	10YR4/3にぶい黄褐	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ+ミガキ	回転ヘラキリ	(12.8)	(5.0)	4.4	内面黒色処理
313	S I 2 4 床	土師器	高台壺	50%	7.5YR6/6縫	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	回転ヘラキリ	(15.0)	(5.6)	5.7	内面黒色処理
314	S I 2 4 床	土師器	壺	30%以下	10YR6/3にぶい黄褐	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	—	(16.0)	—	(3.4)	内面黒色処理
315	S I 2 4 1層	土師器	壺	25%	7.5YR7/4にぶい縫	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転ヘラキリ	(15.4)	2.5	4.9	
316	S I 2 4 床	土師器	壺	35%	7.5YR6/4にぶい縫	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	回転ヘラキリ	(14.6)	5.2	4.8	内面黒色処理
317	S I 2 4 烧土内	土師器	壺	20%	7.5YR6/4にぶい縫	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	—	(14.5)	—	—	内面黒色処理
318	S I 2 4 床	土師器	高台壺	10%	7.5YR6/8縫	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ミガキ	回転ヘラキリ	—	(4.8)	(2.8)	内面黒色処理？
319	S I 2 4 Q 3 埋土	土師器	高台壺	25%	10YR8/4浅黄褐	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ロクロナデ	弱いヒラケズ リ再調整	—	—	—	
320	S I 2 4 埋土	土師器	壺	90%	5YR4/4にぶい赤褐	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	回転ヘラキリ	12.0	8.6	10.8	
321	S I 2 4 埋土	土師器	壺	10%以下	7.5YR6/6縫	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	—	—	—	—	
322	S I 2 4 Q 3 埋土	土師器	大甕	10%以下	5Y3/1オーリーブ黒	〔体〕格子目タタキ	〔体〕円形容文テグナナデ	—	—	—	—	
325	S X 0 1 1層	土師器	壺？	20%	10YR7/4にぶい黄褐	〔口〕ミガキ	〔口～体〕ミガキ	—	—	—	—	内面黒色処理
326	S X 0 1 1層	土師器	高壺	20%	10YR6/3にぶい黄褐	〔口〕ミガキ〔体〕ナデ	〔口～体〕ミガキ	—	—	—	—	内面黒色処理
327	S X 0 1 Q 2 埋土	土師器	高壺？	15%	10YR6/4にぶい黄褐	〔口〕ミガキ〔体〕ナデ	〔口～体〕ミガキ	—	—	—	—	内面黒色処理
328	S X 0 1 床	土師器	高壺？	10%以下	10YR7/3にぶい黄褐	〔口〕ヨコナデ〔体〕ケズリ+ナ ダ	〔口～体〕ミガキ	—	—	—	(6.6)	内面黒色処理
329	S X 0 1 埋土	土師器	高壺	40%	10YR6/4にぶい黄褐	〔口〕ミガキ〔体〕ナデ〔脚〕ケ ズリ	〔口～体〕ミガキ	—	(10.4)	—	(7.0)	内面黒色処理
330	S X 0 1 床	土師器	高壺	60%	7.5YR5/6明褐色	〔体〕ナデ〔脚〕ケズリ	〔体〕ミガキ	—	—	(8.8)	(5.9)	内面黒色処理
331	S X 0 1 床	土師器	高壺	25%	2.5Y2/1 黒	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ〔脚〕ケ ズリ	〔口～体〕ミガキ	—	(10.0)	—	—	内面黒色処理
332	S X 0 1 床	土師器	高壺	40%	7.5YR7/4にぶい縫	〔口〕ミガキ〔体〕ナデ〔脚〕ケ ズリ	〔口～体〕ミガキ	—	—	—	(10.2)	内面黒色・底部ヘラ 青「×」有り
333	S X 0 1 床	土師器	高壺	30%	7.5YR5/4にぶい赤 縫	〔口〕ミガキ〔体〕ナデ〔脚〕ケ ズリ	〔体〕ミガキ	—	—	—	(4.2)	内面黒色処理

遺物観察表（土師器・須恵器）

No	出土地点	種類	器種	残存率	色調	主な外面調整（旧→新）	主な内面調整（旧→新）	底部	法量(cm)			備考
									口径	底径	器高	
334	S X 0 1 墓土	土師器	高坏	25%	7.5Y R6/6櫻	【体】ナデ【脚】ヨコナデ+ケズリ	【体】ミガキ	-	-	(6.5)	(3.5)	内面黒色処理
335	S X 0 1 床	土師器	高坏	25%	10Y R5/4にぶい黄褐色	【脚】ヨコナデ+ケズリ	【体】ミガキ	-	-	(6.8)	(3.1)	内面黒色処理
336	S X 0 1 床	土師器	高坏	25%	10Y R6/6明黄褐色	【脚】ヨコナデ+ケズリ	-	-	-	6.0	(3.5)	
337	S X 0 1 1 罐	土師器	高坏	10%以下	10Y R7/4にぶい黄褐色	【脚】ナデ	【体】ミガキ	-	-	-	-	内面黒色処理
338	S X 0 1 床	土師器	小形土器	70%	5Y R6/8櫻	【口～体】ロクロナデ	【口～体】ロクロナデ	回転イトキリ	(4.8)	4.8	(3.3)	
339	S X 0 1 床	土師器	壺	30%	10Y R5/4にぶい黄褐色	【口】ヨコナデ【体】ナデ	【口】ヨコナデ【体】ナデ	ナデ	(12.5)	5.3	9.0	
340	S X 0 1 1 罐	土師器	壺	10%以下	5Y R5/6明赤褐色	【口】ヨコナデ【体】不明	【口】ヨコナデ【体】ナデ	-	-	-	-	器面摩耗
341	S X 0 1 床	土師器	壺	10%以下	10Y R7/4にぶい黄褐色	【口】ヨコナデ【体】ナデ	【口】ヨコナデ【体】ハケメ	-	(19.2)	-	-	
342	S X 0 1 床	土師器	壺	25%	10Y R7/3にぶい黄褐色	【口】ヨコナデ【体】ハケメ	【口】ヨコナデ【体】ハケメ	-	(18.4)	-	(31.6)	
343	S X 0 1 墓土	土師器	壺	10%	10Y R6/6明黄褐色	【体】ケズリ+ハケメ	【体】ハケメ+ナダ	-	-	-	-	
344	S X 0 2 Q 1 墓土	土師器	坏	50%	10Y R4/1灰灰灰	【口～体】ロクロナデ	【口～体】ロクロナデ	回転イトキリ	(11.7)	5.0	2.8	
345	S X 0 2 床	土師器	坏	30%	10Y R6/3にぶい黄褐色	【口～体】ロクロナデ	【口～体】ロクロナデ	回転イトキリ	(12.0)	(4.6)	3.5	
346	S X 0 2 床	土師器	坏	50%	7.5Y R6/6櫻	【口～体】ロクロナデ	【口～体】ロクロナデ	回転イトキリ	12.8	5.8	3.2	
347	S X 0 2 床	土師器	坏	90%	10Y R7/3にぶい黄褐色	【口～体】ロクロナデ	【口～体】ミガキ	回転イトキリ	13.7	5.6	4.3	内面黒色処理
348	S X 0 2 床	土師器	坏	60%	2.5Y R3/3灰青	【口～体】ロクロナデ	【口～体】ミガキ	回転イトキリ	14.4	5.7	4.4	内面黒色処理
349	S X 0 2 床	土師器	坏	50%	5Y R6/6櫻	【口～体】ロクロナデ	【口～体】ミガキ	回転イトキリ	14.2	7.4	4.1	内面黒色処理
350	S X 0 2 床	土師器	坏	50%	7.5Y R5/3にぶい褐	【口～体】ロクロナデ+底部縁追 ハラケズリ	【口～体】ミガキ	ヘラケズリ再 調整	(14.4)	6.5	3.5	内面黒色処理
351	S X 0 2 床	土師器	坏	60%	10Y R5/4にぶい黄褐色	【口～体】ロクロナデ+回転ケズ リ+ミガキ	【口～体】ミガキ	回転イトキリ +ミガキ再調 整	(16.6)	(5.0)	4.6	内外面黒色処理
352	S X 0 2 床	土師器	坏	30%	7.5Y R5/3にぶい褐	【口～体】ロクロナデ	【口～体】ミガキ	回転イトキリ	(14.0)	(7.2)	(4.2)	内面黒色処理
353	S X 0 2 床	土師器	坏	15%	7.5Y 3/3オリーブ黒	【口～体】ロクロナデ	【口～体】ミガキ	-	(13.2)	-	(3.4)	内面黒色処理
354	S X 0 2 床	土師器	坏	10%以下	10Y R4/2灰黄褐色	【口～体】ロクロナデ	-	-	-	-	-	
355	S X 0 2 床	土師器	高台坏	15%	10Y R4/2灰黄褐色	【体】ロクロナデ	【体】ミガキ	不明	-	-	(2.2)	内面黒色処理
356	S X 0 2 床	土師器	高台坏	15%	10Y R4/3にぶい黄褐色	【体】ロクロナデ	【体】ナデ+ミガキ	回転イトキリ	-	-	-	内面黒色処理
360	S X 0 2 Q 2 墓土	土師器	高台坏	15%	10Y R6/2灰黄褐色	【体】ロクロナデ	【体】ミガキ	不明	-	-	-	内面黒色処理
361	S X 0 2 床	土師器	壺	90%	10Y R4/6櫻	【口～体】ミガキ	【口】ミガキ【体】ナデ	ケズリ+ミガ キ	12.3	-	18.0	体部下半摩耗・焼け はじけ剥落
362	S X 0 2 床	土師器	壺	25%	10Y R7/4にぶい黄褐色	【体】ロクロナデ	【体】ロクロナデ	ヘラケズリ再 調整	-	-	-	
363	S X 0 2 床	須恵器	大壺	25%	7.5Y 5/1灰	【口】ロクロナデ【体】平行タタ キ	【口】ロクロナデ【体】円形繊文 アラシナナデ	-	-	-	(10.8)	
388	S D 0 1 墓土	須恵器	壺蓋	10%以下	10Y R7/6明黄褐色	【口】ロクロナデ	【口】ロクロナデ	-	-	-	(6.4)	外表面自然輪
396	X I B 5 e	土師器	坏	10%	2.5Y 3/1黒褐	【口】ミガキ【体】ケズリ	【口～体】ミガキ	ケズリ	-	-	-	内面黒色処理
397	X I B 2 c ~ 4 c	土師器	坏	10%以下	7.5Y R7/3にぶい褐	【口】ミガキ【体】ケズリ	【口～体】ミガキ	-	-	-	-	内面黒色処理
398	X B 8 b	土師器	坏	20%	2.5Y 6/2 黄褐	【口～体】ナデ+ミガキ	【口～体】ミガキ	-	-	-	-	内面黒色処理
399	X I B 6 a	土師器	坏	15%	2.5Y 6/4にぶい黄	【口】ミガキ【体】ケズリ	【口～体】ミガキ	-	-	-	-	内面黒色処理
400	X I B 2 c ~ 4 c	土師器	坏	20%	10Y R6/4にぶい黄褐色	【体】ナデ+ケズリ	【体】ミガキ	ケズリ	-	-	-	内面黒色処理

遺物観察表（土師器・須恵器）

No	出土地点	種類	器種	残存率	色調	主な外面調査（旧→新）	主な内部調査（旧→新）	底部	寸法（cm）			備考
									口径	底径	器高	
401	X II A区	土師器	壺	65%	10Y R6/4にぶい黄橙	〔体〕ロクロナデ	〔体〕ミガキ	圓軸イキリ +ヘラケズリ 再調整	-	-	-	体部墨書き「井」？有り
402	X I B 2 e	土師器	壺	10%以下	2.5Y 6/4にぶい黄	-	-	圓軸イキリ	-	-	-	底部墨書き有り
403	X I B 9 c	土師器	壺	55%	7.5Y R7/6橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	圓軸イキリ	12.9	5.5	3.2	
404	X I B 4 c	土師器	壺	40%	7.5Y 2/1黒	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	圓軸イキリ	13.4	5.1	4.0	内面黑色処理
405	X I B 4 c	土師器	壺	85%	10Y R6/4にぶい黄橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	圓軸イキリ	11.9	5.3	2.6	
406	X I B 9 c	土師器	壺	25%	7.5Y R4/4褐	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	圓軸イキリ	(14.8)	5.0	5.6	内面黑色処理
407	X I A 8 i	土師器	壺	10%	7.5Y R5/6明褐	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	-	-	-	-	内面黑色処理
408	X I B 6 a	土師器	壺	20%	7.5Y R5/6明褐	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	圓軸イキリ	-	-	-	
409	X I A 9 h	土師器	壺	10%以下	10Y R6/4にぶい黄橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	-	-	-	-	内面黑色処理
410	X B 10 d	土師器	壺	20%	10Y R6/4にぶい黄橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	-	-	-	-	
411	X I A区	土師器	壺	10%	7.5Y R7/3にぶい黄	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	-	-	-	-	内面黑色処理
412	X B区	土師器	壺	10%以下	10Y R5/3にぶい黄橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ミガキ	-	-	-	-	内面黑色処理
413	X I B 2 c～4 c	土師器	壺	10%以下	7.5Y R6/3にぶい褐	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	-	-	-	-	
414	X II A 2 j	須恵器	壺	25%	10Y R8/4浅黄橙	〔口～体〕ロクロナデ	〔口～体〕ロクロナデ	ヘラケズリ再 調整	-	-	-	
415	X B 10 d	土師器	高台壺	10%以下	7.5Y R7/6橙	〔高台〕ロクロナデ	〔高台〕ロクロナデ	-	-	-	-	
416	X I B 4 c	土師器	高台壺	15%	5Y R6/8橙	〔体〕ロクロナデ+ミガキ	〔体〕ロクロナデ+ミガキ	切離し不明	-	-	-	内外面黑色処理
417	X I B 4 c	土師器	高台壺	25%	7.5Y R7/6橙	〔台〕ロクロナデ	〔台〕ロクロナデ	切離し不明	-	-	-	
418	X I B 9 b	土師器	高台	30%	7.5Y R7/6橙	〔神〕ヨコナデ+ケズリ+ナデ+ 一部ミガキ	〔底〕ミガキ〔脚〕ヨコナデ+ケ ズリ	-	-	8.0	(4.1)	内面黑色処理
419	X I A 10 g	土師器	高壺	40%	10Y R6/3にぶい黄橙	〔脚〕ナデ+ヨコナデ	〔体〕ミガキ〔脚〕ナデ+ヨコナ デ	-	-	-	-	内面黑色処理
420	X I B 7 b	土師器	高壺	15%	5Y R7/3にぶい黄	〔脚〕ケズリ	〔脚〕ナデ	-	-	-	-	
421	X II B区	土師器	壺	10%以下	5Y R5/8明赤褐	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ+ケズ リ	〔口〕ヨコナデ〔体〕ナデ	-	-	-	-	
422	X I B 4 c	土師器	壺	10%	10Y R3/1黒褐	〔口〕ロクロナデ〔体〕ロクロナ デ+ナデ	〔口～体〕ロクロナデ	-	-	-	-	
423	X B 10 d	土師器	壺	20%	5Y R5/4にぶい赤褐	〔口〕ロクロナデ〔体〕ロクロナ デ+ケズリ	〔口〕ロクロナデ〔体〕ロクロナ デ+ナデ	-	-	-	-	
424	X II B 7 a	須恵器	大甕	10%以下	5Y 6/2灰オリーブ	〔体〕格子目タタキ	〔体〕放射状アテグ	-	-	-	-	
425	X II B 4 d E層	須恵器	大甕	10%以下	2.5Y 6/1黄灰	〔体〕格子目タタキ	〔体〕円形無文アテグ+ナデ	-	-	-	-	
426	X I B 4 c	須恵器	瓦盤類	10%	5Y 4/1灰	〔体〕タタキ+ロクロナデ+ケズ リ+ハケメ	〔体〕カキメ	-	-	-	-	
427	X I B 2 c～4 c	須恵器	大甕	10%以下	N4/ 灰	〔体〕平行タタキ	〔体〕平行アテグ+円形無文アテ グ	-	-	-	-	
428	X I B 2 c～4 c	須恵器	大甕	10%以下	2.5Y 5/1灰	〔体〕格子目タタキ	〔体〕円形無文アテグ+ナデ	格子目タタキ +ナデ	-	-	-	

第4表 遺物観察表（かわらけ）

No	出土地点	器種(分類)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存状態	特徴など
364	SD01埋土	ロクロ大形	—	—	—	1/4以下	スノコ痕明瞭
365	SD01埋土	ロクロ小形	8.5	7.0	1.9	1/4程度	スノコ痕明瞭
366	SD01埋土	ロクロ小形	9.2	5.8	1.8	1/4程度	
367	SD01埋土	ロクロ小形	9.0	5.8	2.1	1/4以下	スノコ痕明瞭
368	SD01埋土	ロクロ小形	8.0	6.0	1.95	1/4以下	
369	SD01埋土	ロクロ小形	9.5	7.0	2.2	完形	スノコ痕明瞭
370	SD01埋土	ロクロ小形	9.1	6.4	2.1	ほぼ完形	
371	SD01埋土	ロクロ小形	8.8	5.8	2.1	3/4程度	
372	SD01埋土	ロクロ小形	9.3	6.3	2.3	3/4以上	スノコ痕明瞭
373	SD01埋土	ロクロ小形	9.1	5.6	2.5	完形	油煙付着
374	SD01埋土	ロクロ小形	8.9	6.0	2.1	完形	スノコ痕明瞭 油煙付着
375	SD01埋土	ロクロ小形	9.5	6.2	2.3	完形	スノコ痕明瞭 油煙付着
376	SD01埋土	てづくりね大形(C5)	—	—	—	1/4以下	
377	SD01埋土	てづくりね大形(D3)	—	—	—	1/4以下	
378	SD01埋土	てづくりね大形(D3)	—	—	—	1/4以下	
379	SD01埋土	てづくりね大形(D3)	—	—	—	1/4以下	
380	SD01埋土	てづくりね大形(D3)	—	—	—	1/4以下	
381	SD01埋土	てづくりね大形(D3)	—	—	—	1/4以下	
382	SD01埋土	てづくりね大形(D3)	—	—	—	1/4以下	
383	SD01埋土	てづくりね大形(D3)	—	—	—	1/4以下	
384	SD01埋土	てづくりね小形(D3)	—	—	—	1/4以下	
385	SD01埋土	てづくりね小形(D3)	—	—	—	1/4以下	
386	SD01埋土	てづくりね小形(D3)	—	—	—	1/4以下	
387	SD01埋土	てづくりね小形(D3)	—	—	—	1/4以下	
388	SD01埋土	てづくりね小形(D3)	—	—	—	1/4以下	
394	SD02埋土	ロクロ小形	—	—	—	1/4以下	
395	SD03埋土	ロクロ小形	8.7	6.3	2.45	ほぼ完形	スノコ痕明瞭
429	XIB10c II	てづくりね大形(D3)	—	—	—	1/4以下	
430	XIB9d II	ロクロ小形	8.5	5.8	2.2	3/4程度	

第5表 遺物観察表（国産陶器・磁器）

No	種類	器種	部位	出土地点	年代など	色調	その他
390	常滑	広口壺	体下	SD 0 1 磯土埋土	12世紀代	外灰褐色、内自然釉	400と同一か
391	常滑	広口壺か壺	体上	SD 0 1 磯土埋土中	12世紀代	外自然釉、内褐灰色	
392	常滑	広口壺	体下	SD 0 1 磯土埋土	12世紀代	外灰赤色、内自然釉	402と同一か
393	常滑	広口壺	体下	SD 0 2 磯土	12世紀代	外暗赤灰、内褐灰色	
431	白磁	玉縁碗	口縁部	X I B 9 c II	12世紀後半代	灰白色	
432	常滑	壺	体下	X II B 4 a 挿底	12世紀代	外灰褐色、内自然釉	
433	常滑	広口壺	体下～底	X I B 6 a II	12世紀代	内外自然釉	
434	常滑	広口壺	体下	X II B 4 a II	12世紀代	内外暗赤褐色	

第6表 遺物観察表（土器品）

No	出土地点	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
60	S I 0 5 床	纺錘車	4.7	4.75	1.85	47.45	
204	S I 1 6 床	纺錘車	5.4	5.3	2.6	82.62	

第7表 遺物観察表（羽口）

No	出土地点	種類	長さ(cm)	外径(cm)	内径(cm)	重量(g)	備考
27	S I 0 2 Q 1 床	羽口	(8.0)	6.8	2.2	160.7	分析No.9
439	X II B 6 e II	羽口	(9.8)	4.2	3.2	137.14	
440	X II B 6 e II	羽口	(8.7)	5.4	3.6	78.1	分析No.14
441	X II B 1 b II	羽口	(4.2)	7.0	2.4	48.86	
442	X II B 9 e II	羽口	(2.8)	6.4	2.2	32.8	

第8表 遺物観察表（鉄製品）

No	出土地点	器種	大きさ(cm)			重量(g)	特徴・備考
			長さ	幅	厚さ		
57	S I 0 4 磯土	刀子	6.2	1	0.5	7	
61	S I 0 5 磯土	刀子	7.7	1.3	0.4	8.89	
112	S I 0 7 磯土	刀子	11.8	10.3	0.4	15.25	4分割 分析No.3
113	S I 0 7 磯土	刀子	4.9	0.9	0.3	2.52	
134	S I 0 8 P P 7	鎌	7.1	0.6	0.6	3.49	2分割
135	S I 0 8 磯土	刀子	5.3	1.1	0.3	4.98	分析No.1
162	S I 1 0 磯下	刀子	6.7	1.5	0.3	14.52	
163	S I 1 0 磯下	刀装具	3.2	1	0.3	3.68	

No	出土地点	器種	大きさ(cm)			重量(g)	特徴・備考
			長さ	幅	厚さ		
194	SII 5床面	鉄鎌(方頭斧柄式)	12.4	3	0.5	20.35	2分割 分析No.2
223	SII 8	短刀	31.5	1.8	0.6	75.27	4分割 分析No.4
435	SD 01	刀子	13	1.8	0.4	28.55	2分割 分析No.5
436	XIB 9 d	鎌	13.4	3.7	0.5	70.1	2分割 分析No.6
437	XIB 9 d	鎌	12.7	2.9	0.4	50.15	分析No.7
438	XIB 9 d	鎌	17.2	3.6	0.3	60.91	分析No.8
445	XIB 1 f	古鏡	2.5	2.5	0.1	2.58	元佑通宝

第9表 遺物観察表(石器・石製品)

No	出土地点	器種	大きさ(cm)			重量(g)	石質	産地	特徴・備考
			長さ	幅	厚さ				
44	SIO 3床	円錐	10.2	8.2	6.4	730	安山岩	奥羽山脈	
109	SIO 7カマド	有孔石製品	6.7	7.1	1.0	400	凝灰岩	奥羽山脈	
110	SIO 7床	砥石	38.7	18.4	14.1	13000	砂岩	奥羽山脈	6面使用
111	SIO 7床	砥石	8.15	11.2	5.8	680	安山岩	奥羽山脈	3面使用
133	SIO 8床	石鍬	22.8	11.2	3.4	89.9	砂岩	北上山地	内面削離調整後、基部側敲打調整
161	SII 10床	磨石	12.7	10	7.3	1300	安山岩	奥羽山脈	片面
168	SII 13床	円錐	8.5	7	6.3	550	安山岩	奥羽山脈	
169	SII 13床	鉢石	17.7	7.8	5.3	915	安山岩	奥羽山脈	表面および右側面に敲打痕跡
185	SII 14床	砥石	12.9	5.3	5.1	317	安山岩(滑岩)	奥羽山脈	5面使用
193	SII 15床	砥石	29.5	9	8.15	2700	石英安山岩	奥羽山脈	4面使用(デイサイト)
285	SII 22 P P 2	砥石	8.8	4.9	3.1	189.7	凝灰岩	奥羽山脈	4面使用
323	SII 24床	円錐	11.1	8.3	5.9	700	安山岩	奥羽山脈	
446	XII A 9 j - II	石鍬	2.2	1.3	0.3	0.9	頁岩	産地不明	凹基
447	XIB 9 b	石鍬	1.5	1.4	3	0.6	頁岩	産地不明	凹基 先端部及び基部片側欠損
448	XII B区	石鍬	3.25	1.25	1.0	3.3	頁岩	産地不明	先端部欠損
449	XII A 6 e	打鍛石斧	13.4	5.5	3.3	250	ホルンフェルス	北上山地	主に片面調整、裏面は刃部のみ
450	XII A 2 f	フレイク	6.6	6.5	1.7	85.6	頁岩	奥羽山脈?	薄面1/2以上残す

VII. まとめ

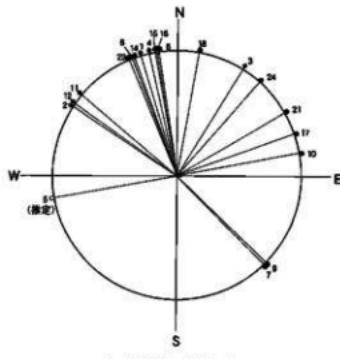
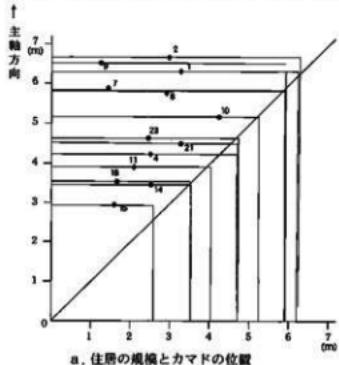
杉の堂遺跡は昭和55年に早稲田大学の桜井清彦氏らによる調査が行われて以来通算24回もの調査が行われ、これまでに縄文時代晩期の居住域や墓域、奈良・平安時代の居住域を中心とした遺跡であることが周知されている。今回対象となったのは段丘の北側縁辺部で、過去の調査で縄文時代晩期の居住域や墓域が確認された東側の段丘崖からは500mほど南東にあたっている。確認された遺構は堅穴住居跡24（古墳1、奈良8、平安15）棟、遺物集中区1カ所、堅穴状遺構4棟、土坑8基、方形周溝3基、溝跡1条、柱穴状小ピット29基である。

調査区は水沢高位段丘上に立地し、北東側の段丘崖に向かい低く緩やかに傾斜するような地形に位置する。堅穴住居跡をはじめとする遺構の大部分は標高41.0mから41.5m付近で多く検出され、段丘基盤礫層が露出する北側、南東側での分布は疎であった。表土除去の結果、調査区本来の地形は北西～南東を結んだラインから南西側に向かい台地状に緩やかに標高を増しておらず、遺構の分布が広がるものと予想された。しかしながらこの部分では後世の宅地造成により旧地形が相当の削平を受けているためか、或いは段丘の縁辺を外れるためか遺構の存在が疎であることが判明した。このため南西側の遺構の分布状況については陥り穴状遺構1基を確認したのみで不明な点が多い。調査の結果、調査区は古墳時代後期から奈良～平安時代を主体とする居住域として利用されていたことが判明した。

1. 堅穴住居跡

〔平面形・規模〕平面形にはほぼ方形のものと長方形のものがある。図aは規模の明確な13棟について示したもので、カマドが設置された壁側の軸ともう一方の軸との相関図である。縦軸に主軸方向の2辺の壁の平均値、横軸に主軸と直交する2边の壁の平均値をとった。これによると、住居跡の規模は一辺が3m以下のもの（SI15）、3.5～5.2mのもの（SI04・10・11・14・18・21・23）、5.8m以上のもの（SI01・02・07・08・09）の3つのグループに分かれ、3.5～5.2mを示すものが最も多い。縦軸と横軸とを比較すると、縦軸が長いものの4棟、横軸が長いものの4棟、縦軸・横軸ともほぼ同じものの5棟であり、縦軸・横軸とも長さにおいてはほとんど差が見られない。

〔重複関係・拡張〕堅穴住居跡においては、同一の時代間での遺構同士の重複は見られない。拡張が認められたのは平安時代のSI211棟のみである（SI21→SI07）。SI21では東壁を80cm、西壁を70cm、北壁を130cmほど拡張し、床面積が20.99m²から36.91m²に増えている。これに伴ってカマドは東側から南側へ移動し、煙道部の構造も割り貫き式から壁面で短く立ち上がるものへと変化している。



第10表 穴住居跡一覧

規格 (m)	壁高(cm)	床面積(m ²)	主軸方向	カマドの種類	柱	プラン	付箇施設	重複関係		備考
								SI01	SI24と重複、これにより切られる SI02構築時の不要縫を廃絶後のSI01住 内へ移さか?	
SI01 6.20×6.40	15~28	37.05(推定)	N-17° -W	掘り込み(推定)	G	隅丸方形	壁溝(西・南・東壁)	SI24と重複、これにより切られる SI02構築時の不要縫を廃絶後のSI01住 内へ移さか?	SI02	SI02構築時の不要縫を廃絶後のSI01住 内へ移さか?
SI02 6.48×6.90	2~8	44.08(推定)	N-57° -W	掘り込み	C(推定)	隅丸方形	壁溝(西壁と南壁の一部)・ピット			近接するSI01よりは新しい?
SI03 (6.26)×5.95	10~20	38.66(推定)	N-32° -E	不明	F	隅丸方形	壁溝(西;北・東壁)・ピット			
SI04 4.24×4.65	12~20	18.23	N-13° -W	掘り込み	G	隅丸方形	壁溝(南・西・北壁)・ピット			
SI05 -1.44×3.26	4~9	8.11(推定)	N-100° -W	不明	H	方形基調(推定)				北側段丘崖に位置
SI06 4.60×(4.54)	14~17	22.56	N-9° -W	不明	B	隅丸方形	壁溝(ほぼ全周する)・ピット	本調査前トレンドチー破壊	SI104、SI16などと復元や軸方向は似る が、4本柱を有する点で異なる。	
SI07 6.00×5.96	12~25	36.91	N-136° -E	壁面で短く立ち上がる	D	隅丸方形	壁溝(西・北・東壁)・ピット	SI21から拡張された。こちらが 新しい	SI21から拡張された。こちらが 新しい	
SI08 5.80×5.98	21~39	37.45(推定)	N-21° -W	掘り込み	A	隅丸方形	壁溝(ほぼ全周する)・ピット	SI18、SX03と重複。これによ り切られる	SI01とカマド軸線がほぼ同じ	
SI09 6.60×5.64	7~14	33.20	N-134° -E	壁面で短く立 ち上がる	G	隅丸方形	ピット		SI07とカマド軸線が同じ	
SI10 5.14×5.22	11~18	26.23	N-79° -E	掘り込み～立 ち上がり?	C	隅丸方形	壁溝(ほぼ全周する)・ピット			
SI11 3.60×4.19	23~31	13.38	N-50° -W	掘り込み	F	隅丸方形		SK03と重複し、これに切られる	SI02とカマド軸線がほぼ同じ	
SI13 4.40×5.48	2~7	22.97	不明	壁面で短く立 ち上がる?	G	隅丸長方形基 調	ピット			
SI14 3.53×3.48	20~28	9.99	N-21° -W	掘り込み	H	隅丸方形	ピット			
SI15 2.95×2.56	10~20	7.01	N-11° -W	倒り賣き	G	北西隅を欠く 方形基調	ピット			
SI16 -3.36×3.82	7~24	13.27(残存)	N-10° -W	掘り込み	G	隅丸方形	壁溝(西;北・東壁)・間仕切り 溝			
SI17 (5.49)×5.35	1~4	28.77	N-70° -E	不明	G	隅丸方形基調				
SI18 3.75×3.50	31~34	11.54	N-10° -W	掘り込み	H	隅丸方形		SI08と重複、これを切る		
SI19 5.07×-2.20	10~16	14.53(残存)	不明	不明	G	隅丸長方形基 調	ピット			
SI20 -2.10×3.70	7~12	12.65	不明	不明	H	隅丸方形基調				
SI21 4.51×4.70	3~15	20.99	N-59° -E	倒り賣き	H	隅丸方形	壁溝(北・西・南壁)	拡張されてSI07となる。こちら が古い		
SI22 -3.20×-3.75	4~16	22.98(推定)	不明	不明	G	隅丸長方形基 調	ピット			
SI23 4.64×4.70	20~30	12.43	N-23° -W	掘り込み(推 定)	E	隅丸方形	ピット			
SI24 3.62×4.85	8~14	16.37	N-41° -E	掘り込み	G	隅丸方形	ピット			

【焼失住居と炭化材】検出した24棟中、焼失住居の可能性のあるものは5棟確認された(SI03・08・10・11・22)。出土遺物はほとんど出土しないのが多数であるが(SI11・22)、なかには廃棄された状況を示すものもある(SI03・08)。炭化材の検出状況は、大半の住居跡で出土量が少なく、あっても本来の形状や上屋構造等を復元できるものはほとんど無い。その中で炭化材が比較的良好な状態で出土したのはSI03である。本住居跡では南東側床面より柱或いは上屋の構築材の可能性が考えられる長さ60~100cm、幅10cm前後、厚さ2.5cm前後のクリ材が検出された。比較的残存状態が良好であった炭化材にアルファベットのa~oまで番号を付した(第14図参照)。o・p・qは直行しており、實際に沿って構造を支えた壁柱穴の可能性がある。検出された木材はほとんどが厚さ2~2.5cm、幅10cmほどの角材で、極目が多く、一定の規格性があることが確認できた。また、出土した炭化材について、樹種同定を行っている。対象としたのはSI03・12・11である。結果はそれぞれクリ材(SI03)、ケヤキ材(SI11・12)という鑑定結果を得た。

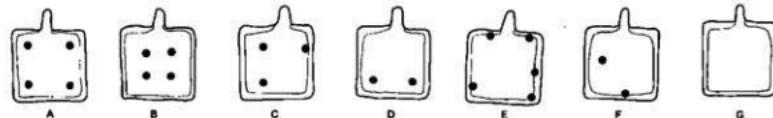
【壁および壁溝】本調査区における壁高の残存値は2~39cmで、南東側に位置するものほど残存状態は概して不良となる。壁溝が確認されたのは24棟中10棟であるが、残存不良で溝の識別が困難であったものもあり、詳細が不明なものも存在する。壁溝が確認されなかったものは14棟存在する。床面積14m²以上の住居跡に壁溝が確認され、これより小形の住居跡では壁溝が見られないといった傾向が認められる。また、床面積36m²以上の住居跡ではすべてに壁溝をともなうことが確認されている。

【柱穴および柱穴配置】住居跡24棟のうち明確に柱穴配置が確認されたものは6棟であり、これらは中型、大型のものである。これ以外の住居跡では、全く柱穴が確認されないか、検出されても浅い小ビットが1個ないしは数個点在する程度である。また、検出したビットのうち、深さのしっかりしたものは柱穴と判断できるが、浅いものについては柱穴と言いつらうるものも存在している。これらの検出状況を次のように分類した。

- A類：壁に近いところに4本の主柱穴をもつもの(SI01・08・02: SI02は推定)
- B類：やや中央よりに4本の主柱穴をもつもの(SI06)
- C類：3本の柱穴がL字状に配置されるもの(SI10・02: SI02は推定)
- D類：A類のカマド側の2本がなく、カマドと反対側の2本で構成されるもの(SI07)
- E類：カマドの構築される側の壁際に2本の浅い柱穴状のビットを持つもの(SI23)
- F類：壁に近いところに浅い柱穴が複数配置される可能性のあるもの(SI03)
- G類：柱穴状の浅いビットが1~数個検出されるが、柱穴配置が不明のもの(SI15・09・11・24・04・17)
- H類：柱穴がまったく検出されないもの(SI05・14・18・20)

【間仕切り溝】SI16の西壁の北壁寄り1/4ほどの床面で長さ11.3cm、幅5~7cm、深さcmの浅い溝跡を検出した。溝の先端部には径16cm、深さ8.5cmほどの円形の小ビットが掘り込まれている。位置、形状から住居跡の間仕切り溝である可能性が考えられる。

【カマドの方向】141頁図bはカマドの構築された方向を示した模式図である。対象としたのはカマドの構築位置が明確な20棟である(SI01~12、SI14~18、SI21、SI23、SI24)。方向は北を基準として西に振れるものをN-O°~W、東に振れるものをN-O°~Eとして表記した。これによるとカマドは16方位



C. 柱穴配置凡例

第11表 岩手県内炭化種子出土遺跡一覧

No	遺跡名	所在地	時期	種別	共伴土器	遺体	出土状況・備考
1	馬場野Ⅱ	九戸郡鶴来町	縄文・弥生	集落跡	前玉造土器	オニグルミ・ナラ・クリ・ハシバミ	住居跡・焼土遺構より出土
2	上木沢Ⅱ	久戸郡大野村	縄文・弥生	集落跡	縄文土器	オニグルミ	住居跡より出土
3	岩曾田Ⅳ	久戸郡鶴来町	縄文・古代	集落跡	クリ・ケルミ・ドングリ	縄文の土坑・縄文と古代の住居跡から出土	
4	赤坂田Ⅰ	二戸郡安代町	縄文・平安	集落跡		トチ	時焼不明（縄文？）の土坑より大量に出土
5	大地渡	特賀郡石鳥谷町	縄文・平安	集落跡		トチ・クリ	住居跡・床面の土蔵より出土
6	兎Ⅱ	江刺市愛宕字兔	弥生中期	集落跡	弥生土器	朝庄痕	包装層出土の土器片（壺）の内面に付着
7	曾根広町	水沢市佐倉河	弥生後期	集落跡	弥生土器	朝庄痕	土器片に付着
8	勝性	水沢市佐倉河字勝性	奈良	集落跡	土器群	朝庄痕	住居跡より出土の土器群（壺）に付着
9	今松	岩手郡岩手町一方井	奈良	集落跡	土器群	朝庄痕・ヒエ痕	住居跡より出土の土器群（壺）に付着
10	上野山	久慈市長内町	奈良	集落跡	須恵器類 微土器類	朝庄痕（縁組？）	住居跡より出土の土器群（壺）に付着
11	銭瓶平	串作寺町銭瓶平	奈良・平安	集落跡	土器群	朝庄痕	
12	稻荷田	水沢市佐倉河字平沢	古代	集落跡	土器群	朝庄痕	
13	銀嶺Ⅰ	宮古市	古代	集落跡	土器群	コナラ・アワ?	堅穴住居跡のカマド跡から出土。貝殻・製穀をともなう
14	北館	一戸町一戸字北館	古代	集落跡	土器群	栽培種以外の種子	燒失住居跡より出土
15	崩田相撲	盛岡市安倍郷町	平安?	柵跡		米	
16	胆沢城跡	水沢市佐倉河	平安	宮衛		切	堅の獨立柱跡穴、柵跡の下から出土
17	真城當神	水沢市真城當神	平安	集落跡		米	
18	飼内	花巻市上飼内	平安	集落跡	土器群	木・アワ・クルミ・コムギ	燒失住居跡の床面、煙道壁土から出土
19	長者屋敷	松尾村松尾大花森	平安	集落跡		朝庄痕	
20	下谷地B	江釣子村北鬼柳	平安	含包層		朝庄痕	
21	中平	久戸郡田村野町中付近	平安(9c)	集落跡	土器群	木	燒失住居跡の箱状木製容器より出土
22	上平沢新田	磐梯郡上平沢新田	平安(9c~10c)	集落跡	土器群	木	燒失住居跡の床面に散在して出土
23	猿谷地	江釣子村猿谷地	平安(9c~10c)	集落跡	土器群	木・柄庄痕	堅穴住居跡より出土
24	田中Ⅲ	一戸町岩館字田中	平安(9c~10c)	集落跡	土器群	木	燒失した堅穴状遺構の床面より出土、一部は壊についたままであった
25	田中Ⅳ	一戸町岩館字田中	平安(9c~10c)	集落跡	土器群	木	燒失した堅穴状遺構の床面より出土、一部は壊についたままであった
26	馬場平	一戸町岩館字馬場平	平安(10c)	集落跡		コムギ	
27	機織山Ⅱ	一関市機織山	平安(10c)	集落跡	土器群	木・切・アスキ	米・網は塊状。小豆は土器群の裏から大量に出土
28	川向Ⅲ	久戸市	平安(10c)	集落跡		朝庄痕	
29	上野B	一戸町一戸字上野	平安(10c~11c)	集落跡	土器群	朝庄痕	内周厚内面に付着
30	江差家	久戸郡久戸村江差家	平安(10c~11c)	集落跡	土器群	木・アワ・オムギ・アズキ	燒失住居跡の床面より出土
31	五郎Ⅰ	二戸郡淨法寺町	平安	集落跡	土器群	オムギ・アワ・ヒエ	複数の住居跡より出土
32	駒場塙	二戸市	平安～中世	集落跡	土器群	米・オムギ・マメ・アズキ	燒失住居跡の床面より出土
33	馬場	二戸市	古代～中世	集落跡	土器群	米・マメ・アズキ	燒失住居跡の他から出土
34	五郎Ⅱ	二戸郡淨法寺町	中・近世	城館跡	米・稻・ササ・アスパ・アツビ・ヒニ		
35	沖Ⅰ	二戸市	中世	集落跡	土器群	米・アワ・マメ・コムギ	調査区内、住居の地床灰から出土
36	岩谷堂城跡	江刺市岩谷堂字館下	中世	城館跡		米	方形の堅穴住居跡より塊状で出土
37	永神	安代町字土沢	中世	集落跡		米	
38	古館	花巻市中根子古館	中世	城館跡	米・コムギ・アズキ・葛	遺物跡床面より出土	
39	熊山	金ヶ崎町字上宿	中世	城館跡		米	
40	伊勢館	大東町島海字清水	中世	城館跡		米	
41	紫Ⅱ	盛岡市紫字紫の館	中世	集落跡		稻穀	
42	岩城	和賀郡賀町岩城	中世(15c~16c)	城館跡		米	
43	一戸城跡	一戸町一戸字北館	中世(15c~16c)	城館跡		稻穀・米塊	昭和54年度調査分
44	一戸城跡	一戸町一戸字北館	中世(15c~16c)	城館跡	米・オムギ・ダイ・アツビ・ヒニ	昭和58年度調査分	
45	一戸城跡	一戸町一戸字北館	中世(15c~16c)	城館跡	米・稻・ダイ・ヒニ・アツビ	昭和59年度調査分	
46	梅田館	索美町片寄字中平	中世(16c)	城館跡	米・村芋・ユダギ・モモ・ヒニ		
47	大瀬川C	石鳥谷町字大瀬川	中世(16c)	城館跡	米・オムギ・アズキ・ヒニ・リバ		
48	上尾田の館	久戸郡鶴来町	中・近世	城館跡 包含地	中國造器 国産陶器	イネ・アワ・マメ	獨立柱建物跡の柱穴から布にくるまれて出土
49	高山遺伝包地	水沢市佐倉河西高山	不明	包含地		米・稻	炭化した茎と共に出土
50	飯岡林崎	盛岡市下飯岡	平安	集落跡	土器群	イネ	燒失住居跡から塊状で出土
51	杉の堂	水沢市神明町	平安(10c)	集落跡	土器群	木・ソラシ・ササ・アツビ・ヒニ・オノ・ヒ	燒失住居跡の床面から出土

(齋藤麻紀子)

でいう西南西～南東の間に構築されており、北北西付近にピークが見られる。◆、●の記号はそれぞれ出土遺物による時期差を介在させて示したものである。これによると◆（8世紀代）は北西と北北西の2カ所、●（9世紀初頭から10世紀前半代）は北北西から南東にかけて集中するような傾向が見られる。なかでも9世紀初頭から10世紀前半代の住居跡に属するカマドは北北西から南東にかけて、特にピークを持たずに散在する傾向が認められた。

【平角材を用いた柱について】本遺跡ではS107から平角材を用いたとみられる柱穴が2基確認されている。堀り方は長径43～52cmの楕円形で、長辺30cm×短辺9～12cmの断面が短冊形を呈する柱当りを確認した（カラー図版参照）。堀り方底面～側面には拳大の扁平礫が認められることから、根固め石と推測される。同様な平角材を用いた柱穴の例としては、江戸時代（文化14年）に秋田県北秋田郡脇神村小勝田（現鷹巣町小ヶ田）で洪水の際に川端の烟突が崩れて現れた埋没家屋の記録がある。この家に関する記録は菅江真澄が『贊能辞賀楽美』に記した聞き書き、平田萬胤が『皇国度制考』に引いた岡見知康の実見記、黒沢道形が『秋田千年瓦』に記した聞き書きの3つが知られる（奈良・豊島1967、水井1975）。このうち黒沢道形の書中には、「柱の末を矢筈の如く削剥ぎて、其刻みへ横木を架し屋根を蓋いたるなり」と記した一節がある。すなわち柱頂をU字状に穿っていたとあり、このことは岡見知康の描いた柱図にも同様に示されているといふ。知康の計測では、その中の1本は長さ1.87m、幅33cm、厚さ9cmでかなり扁平な断面を持つ、いわゆる平角の柱であったとされる。また昭和34年に男鹿市的小谷地遺跡が発掘調査されると、そこでも薄くて幅広の材を柱とし、頂部をU字状に穿って軸を納める状況が確認されたことから、この柱形態が秋田地方における古代家屋の特徴として指摘されている。小谷地遺跡の調査の結果、発見された住居跡の時期は、大量の出土遺物（墨書き土器含む）から推定して平安時代の中期ないし後期に属するとされる。本遺跡で発見された平角材を用いた柱穴は上部構造が不明であるが、特徴的な形態を持つ柱の空間的な分布を示す好資料といえよう。

2. 住居跡以外の遺構について

竪穴状遺構

本遺跡では竪穴状遺構として3棟が確認されている。「竪穴状遺構」という呼称は、居住を想定させうる付属施設を伴わないことから「竪穴住居跡」と分離する意味で使用するものである。また、明確な柱穴が伴わないことから「竪穴建物跡」（渡辺修一1992）とも異なる呼び名を冠するものである。

出土遺物によって遺構の時期が推測できるのはSX02の1棟のみである。SX02は焼失遺構で、西壁際床面から炭化種子が多量に出土している。出土の状況は西壁際に65×27cmの不整な楕円の範囲で散在していたもので、容器に入っていたような痕跡は確認できなかった。炭化構成材はほとんど残存しておらず詳細は不明であるが、棚状の施設などから落として散らばったような状況も推測できる。調査では、この範囲の床面堆積土を対象にフローテーションを行った結果、116.27g以上の炭化種子が得られた。東京都立大学の高瀬氏の分析によると、内訳はオニグルミ、タケ科、ソバ、マメ科、シソ属、イネ、オオムギ、エノコログサ属、アワ、ヒエ属、ヒエ、不明種子である。また、P1からはナス科コナラ属、マメ科、ブドウ科、イネ、コムギ、ヒエ、不明種子が、P3からはソバ、シソ属、イネ、オオムギ、エノコログサ属、ヒエが検出されている。SX02の重量比ではソバが最も多く、床面だけで95.58gが検出されている。ついで多いのはヒエで、8.63gが出土している。イネは44個出土しており、このうち1点をAMSによる放射性炭素年代法で測定したところ、10世紀代に属する可能性が高いという結果が得られている（分析鑑定の項参照）。マメ科は確実なもののが5点出土している。このほか、炭化時に発泡した可能性のあるマメ科植物が12.06g出土している。本

遺跡の炭化種子は分析の結果、キビを欠きながらも栽培種を中心とした組成であり、明らかに人為的に集積されたことを示すものであることが判明した。県内では現在までのところ、炭化種子の発見例はそれほど多くなく、(第11表 岩手県内炭化種子出土遺跡一覧参照)、近年では盛岡市の飯岡林崎遺跡で、塊状の炭化米が出土した例や、北上市の猫谷地遺跡で長洞甕のなかから炭化米が出土した例が存在する(尚、未焼成であるが胆沢城跡からも畳に入った米が出土している)。穀物との関連で述べると、本遺跡では初痕付土器が3点発見されている(46、246、298)。貯蔵容器である大甕の存在、炭化種子が多量に出土した状況などから判断すると、本遺構の性格としては食料庫に類するような機能を想定するのが適当と思われる。

方形周溝

本遺跡では3基の方形周溝が北側段丘崖付近から互いに近接、重複して確認されている。そのうちSD01は長軸10m、短軸8mを測り、平面形はカタカナのコの字形を呈するものである。覆土中からはかわらけ(京系のてづくね・在地系のロクロが共伴)、常滑焼の壺甕類、また検出層位は遺構検出面と同位かは不明であるが、周辺からは白磁の玉縁碗破片など12世紀後半代に属する遺物が出土している。一方SD02・03はSD01の6mほど北西方に位置しており、互いに重複関係にある。SD02の覆土からもまた12世紀後半代のかわらけが1点出土した。これらのかわらけには、製法の違いと投棄状態に特徴がみられた。すなわち手づくねかわらけは破片のみで出土し、接合関係がほとんど認められないのに対し、ロクロかわらけは完形に近い體体が多く、その中に煤状の付着物が認められるものが存在するということである。この煤状の付着物はてづくねかわらけには認められず、両者の違いには投棄者の何らかの意図が介在すると考えられる。また、遺物はすべて底面より浮いた地点から出土しており、埋没の過程で投棄されたものと判断された。本遺構の南西側に混入する多量の礫については構築材崩落層か、人為的な投棄によるものの双方の可能性が考えられる。

次に類似例について述べる。本遺跡のものと類似する遺構が確認された遺跡としては岩手県紫波郡所在の墳館遺跡、静岡県磐田市所在の一の谷中世墳墓群遺跡などが挙げられ、それぞれ10世紀~13世紀、13世紀~16世紀の年代が与えられている。中でも墳館遺跡の方形周溝は東側を開口部とするものが多く本遺跡のものと形態が共通する。墳館遺跡ではほかに墳墓群が確認されており、火葬骨が出土している。本遺跡において墳墓と断定できるような証拠は得られなかったが、類似例との比較から総合的に判断すれば、墳墓、あるいは同族の共同墓など宗教上の施設であった可能性が高いと考えられる。

2. 積穴住居跡出土の土器

掲載した土器器および須恵器片は総数367点である。そのほとんどは積穴住居跡からの出土が多く、その大多数が破片資料である。カマドの構築材として使用されたものや、床面に廃棄されたような状態で出土したものが多い。出土遺物の遺構内での接合率は高いが、遺構間での接合率は低く、SI01とSI02で接合関係が認められたのみである。また、上部が削平を受けており、堆積土の残存状態は概して不良であるが、セット関係を知ることのできる出土状況が數棟で確認できた。ただし、混入とみられる遺物が床面近くから出土する状況も見られ、擾乱も多い状況となっている。対象となる器種には壺、高台壺、双耳壺、高壺、鉢、瓶、長胴甕、球胴甕、壺甕類、大甕がある。なお、杉の堂遺跡は来年度も調査が予定されていることから、今回は簡単なまとめのみを行う。

SI01からSI24までの出土遺物を床面出土遺物とカマドの構成材に限って集成したのが第112図~第117図である。ここではこれらの資料を概観した後、おもな器種である壺(高台付壺)と甕(瓶)に絞ってそれぞれの特徴をまとめることとする。

S 1 0 1：土師器坏4点・高坏1点・壺3点で構成される。坏は底部平底風を呈し体部に弱い稜を持ち、内湾気味に立ち上がるるもの（1・3）、丸底を呈し口縁部まで内湾して立ち上がるるもの（2）の二種類がある。5は器形が判然としないが体部上半に弱い稜をもつことから前者に近いものであろう。壺は3個体出土している。口縁部形状には大きく外反するもの（18）と、外反するもの（17）、外傾するもの（13）などがある。胴部形状には上半がやや張るもの（17）、それほど張らないもの（13・18）がある。

S 1 0 2：土師器壺1点が出土している。胴部は扁平な鋸鉢形で口縁部直立気味に外反する。

S 1 0 3：土師器坏4点・高坏2点・鉢1点・壺3点で構成される。坏は平底風を呈し、体部の下半～中程で稜を持ちやや内湾しながら口縁部に至る器形を呈する（29・30・31）ものと、稜を持たないもの（28）がある。壺は3点が出土している（35・36・40）。35は胴部の中程に張り出しを持つもので、口縁部は外反しながら大きく開く。36、40は胴部上半に張り出しを持つもので、口縁部はやや外傾しながら開く。

S 1 0 4：土師器坏5点・鉢1点・壺2点・球胴壺1点で構成される。坏は平底風～丸底を呈する。体部はやや内湾しながら立ち上がり、胴部中央～上半部に沈線あるいは稜が形成される（45・50）ものと、稜や沈線を持たないもの（46・48）とがある。壺は1点が出土している（53）。球胴壺は1点が出土しているが、全体の器形は不明である。

S 1 0 5：土師器坏1点・壺1点で構成される。坏は特徴的な器形を呈し、口縁部と体部との接続部分が外側において稜線を形成するものである（58）。壺は厚唇がやや厚く、胴部中程でやや張り出す。

S 1 0 6：須恵器坏1点・土師器鉢1点・壺2点で構成される。坏は製作に際してロクロを使用するもので、底部の切り離し技法は回転ヘラケズリである（66）。壺は製作に際してロクロを使用しないもの（76）とロクロを使用するもの（77）がある。前者の壺の器形は胴部上半でやや膨らみを持ち、口縁部やや外傾して口唇に至るものであるが、後者は胴部の形状がより丸みを帯び、口唇部の形状がやや外反の強いものである。

S 1 0 7：須恵器坏3点・土師器坏3点・高坏1点・壺6点・須恵器壺壺類2点で構成される。坏の製作に際してはいずれもロクロが使用されている。底部切り離し技法は回転イトキリで、切り離し後にヘラケズリ再調整されるものが卓越する。高坏は従来の器種構成の観点から混入の可能性が高い。壺は製作に際してロクロが使用されないもの（95～97）と、使用されるもの（100・102・103）の両者がある。ロクロが使用されない壺の口縁部は長く「く」の字状に外反し、最大径を口径部に持つもの（96）と、口縁部が短くやや直立するような形状で、体部の最大径が口径とほぼ同じであるもの（95）がある。ロクロを使用して製作されるものにはロクロ調整以前のタタキ目が見られるもの（103）と、見られないもの（100・102）があり、口縁部～口唇部形状には「く」の字形に外反し、口唇部の下が引き出されるような形状のもの（102）、口縁部が非常に短く外反するもので、口唇部の上端がつまみ上げられるような形状のもの（100）がある。

S 1 0 8：土師器坏4点・高坏1点・瓶1点・鉢1点・壺5点・球胴壺2点で構成される。坏は底部丸底で体部中程に稜を持つ（114・115・117）。壺は胴部が膨らみを持たず扁平なもの（125）、中央～上半にかけてやや膨らみをもつもの（127・126・125・129）などがある。球胴壺は2点が出土している（131・132）。

S 1 0 9：土師器坏1点のみ該当する。136は製作に際してロクロが使用されるもので底部は回転イトキリ後、ヘラケズリ再調整される。内面はミガキ調整後、黒色処理される。

S 1 1 0：土師器双耳坏1点・壺3点・須恵器坏4点・壺壺類1点で構成される。坏は床面～カマドから出土するものはすべて須恵器のみであり、特徴的な様相を呈する。底部の切り離し技法は回転イトキリのみで、再調整は認められない。土師器の双耳坏は1点が出土している。類例としては盛岡市志波城跡などから出土した例がある。壺は製作に際してロクロを使用しないもの（155）と、使用するもの（157・158）がある。後者2点は同一個体の可能性がある。底部の切り離し技法は回転イトキリである。

S I 1 1：壺1点・甕2点で構成される。壺は丸底を呈し、体部中央に棱を持つ。甕は口縁部が長く「く」の字形に外反し、最大径が口径にあるもの（165）と、口縁部がやや直立し、胴部上半部に最大径を持つもの（166）がある。

S I 1 4：須恵器高台壺1点、土師器壺1点・甕5点・壺1点、須恵器甕壺類1点で構成される。土師器壺、須恵器高台壺はロクロを使用して製作される。170は土師器の壺で、口径に比して底径が大きい。底部の切り離しは回転イトキリによる。173は須恵器の高台壺で、付け高台である。甕は5点が出土しているが、すべてロクロを使用して製作されている。口縁部の形状は「く」の字形に外反し、胴部上半に最大径を持つものが大半で、口縁部の形状によって口唇部の下が引き出されるもの（176）、口唇部の断面が丸く内湾するような形状のもの（175）、口唇部の上端がつまみ上げられるような形状のもの（178）が見られる。

S I 1 5：土師器壺1点、高壺1点、甕4点で構成される。製作に際してロクロは使用されない。壺は丸底を呈し、体部中程に弱い棱を持つので口縁部は外傾する。器厚は薄い。甕は器径の歪みが大きく雰囲気のものが多い。口縁部は緩やかな「S」字状を呈し、胴部上半部（191・192）中央部に最大径を持つものである（190）。189は底部丸底を呈する。

S I 1 6：甕3点、球腹甕1点で構成される。ロクロは使用されない。甕は口縁部が直立気味に外傾し、口縁部に最大径を持つ（198）ものと、胴部中央がやや張る筋鉢形を呈するものがある（197）。

S I 1 7：須恵器壺1点、土師器壺1点・甕3点、須恵器大甕1点で構成される。206は須恵器壺で底部径が口縁部径に比して大形である。底部は切り離し後、弱いヘラケズリ再調整される。205は土師器壺で、底部径が口縁部径に比して大形である。底部は切り離し後、弱いヘラケズリ再調整される。甕は3点が出土している。ロクロが使用されないもの（208）とロクロを使用して製作されるもの（207・209）、があり、前者は口縁部が長く「く」の字形を呈し、外反するものである。底径は口径の三分の一ほどで、口径に最大径を持つ。後者は口縁部形状で細分され、口縁部短く外反して口唇部の断面が角張り、その部分がやや凹むものと、口縁部「く」の字形で、口唇部の上端がつまみ上げられるような形状を呈する。209は胴部の中央に最大径を持つものである。

S I 1 8：須恵器壺5点、土師器壺1点・甕4点、須恵器長頸瓶1点で構成される。壺類では須恵器が卓越する。須恵器壺は底部から直線的に立ち上がり口唇部に至るもの（214）、やや内湾しながら口唇部に至るもの（216・213）、やや内湾しながら立ち上がり口唇部や外反するもの（215）などがある。底部の切り離し技法は回転ヘラキリ（213・215）、回転イトキリ（214）がある。土師器壺は底部からやや内湾して立ち上がり口唇部外反するものがある（212）。底部の切り離し技法は回転イトキリである。甕は3点が出土しているが、ロクロ使用しないもの（219・220）、ロクロ使用するもの（218）があり、後者はロクロ調整前のタタキ目を持つ。

S I 1 9：土師器壺11点、高台壺2点、甕1点で構成され、すべて製作に際してロクロが使用されている。須恵器は皆無である。壺は法量が小形のものが混在する（224・233・236・226・227・230）。器形は底部から口唇部まで内湾しながら立ち上がるもの（227・237・242）、もしくは口唇部に至ってやや外反するもの（235・232・224・233・231・226・236・230）の両者が見られる。底部の切り離し技法は回転イトキリが多数であるが、切り離し後にヘラケズリ再調整が施されるものも存在する。甕は口縁部が非常に短く外反するもので口唇の上端部がつまみ上げられるような形状を呈する。最大径を肩上部付近に持つ。

S I 2 0：須恵器壺1点、土師器壺3点・甕1点で構成され、すべて製作に際してロクロが使用されている。壺は土師器・須恵器ともに法量がやや小形のもの（255・257）が見られる。器形は底部から内湾しながら立ち上がり口唇部に至るもの（256・257）と口唇部に至り外反するもの（253・255）とがある。底部の切り離

し技法は回転イトキリされるもの(253・255・256)、切り離し後ヘラケズリ再調整されるもの(257)がある。

S I 2 1：須恵器壺蓋片2点、土師器瓶片1点・壺片2点で構成される。268のみロクロを使用して製作される。266は土師器の壺で、口縁部外傾しながら開く。胴部上半に膨らみをもつものである。265は単孔式の瓶で、上半部を欠いており全体の器形は不明である。外面にはヘラケズリ調整前に施されたタタキ目が残る。内面はハケメ・ナデ調整される。

S I 2 2：須恵器壺1点、土師器壺4点・鉢片1点・壺片1点で構成される。すべてロクロを使用して製作されたもので、底部は判明するものはすべて回転イトキリされる。内面ミガキ+黒色処理されるもの(272・274・276)と、内外共にロクロナデ調整されるもの(271・273)がある。275は須恵器壺である。280は土師器の長胴壺で、外面上半部ロクロナデ、下半部ケズリ調整、内面ナデ調整される。

S I 2 3：土師器壺2点、須恵器壺1点、土師器鉢1点、壺1点、球胴壺1点で構成される。土師器壺はロクロを使用して製作されるもの(293)と、ロクロを使用しないもの(294)の両者が存在する。前者の壺は底部切り離し後ヘラケズリ再調整されるもので、底径も比較的大きなものである。300の須恵器壺は底部回転ヘラキリされる。304は土師器長胴壺で、タタキ成形を経てロクロナデ調整、ケズリ調整される。306の球胴壺は外部からの混入の可能性が高く、ここでは除外する。

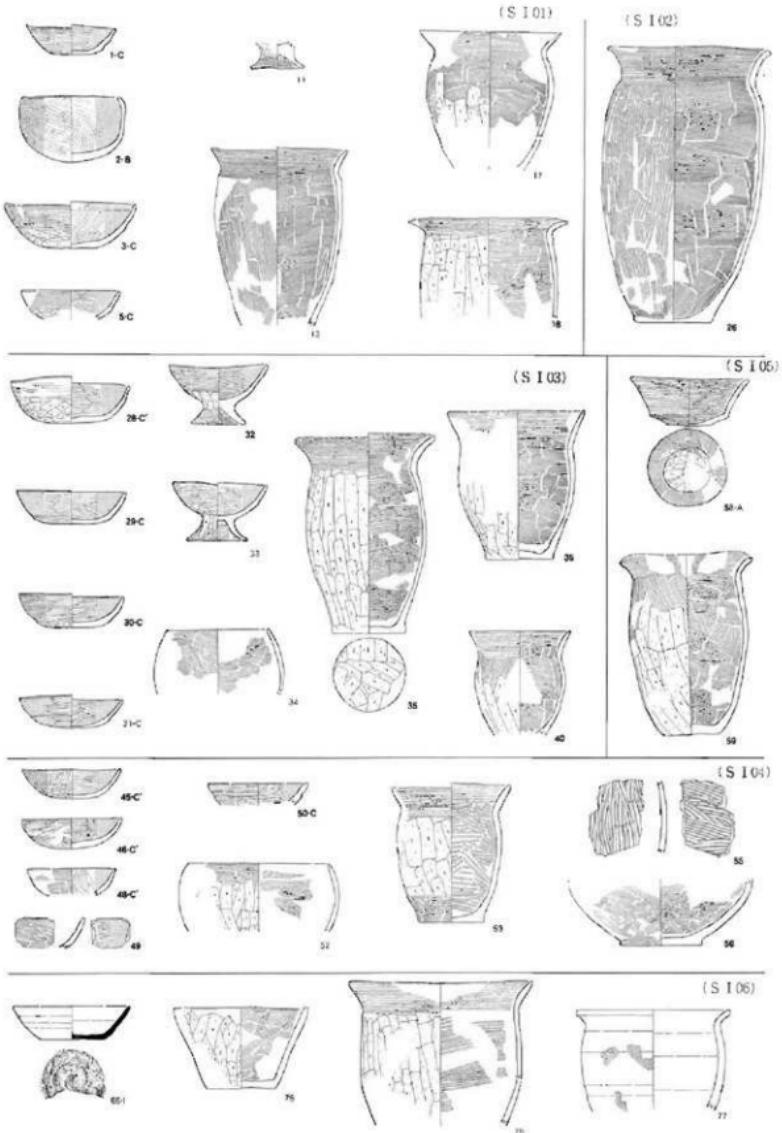
S I 2 4：土師器壺6点、高台付壺2点で構成される。ロクロを使用して製作された土師器壺(310~312、314、316、317)および高台付壺(313・318)のみで構成される。底部の切り離し技法は回転イトキリで、再調整のあるものは認められない。310の壺は法量が小形化し、小皿に近い形態を呈する。

S X 0 1：土師器高壺6(+1?)点、壺3点で構成される。小形土器は製作技法などから判断して混入の可能性が高く、ここでは除外する。土師器の高壺の出土が卓越し(330~333、335~336、328)、明確に壺を

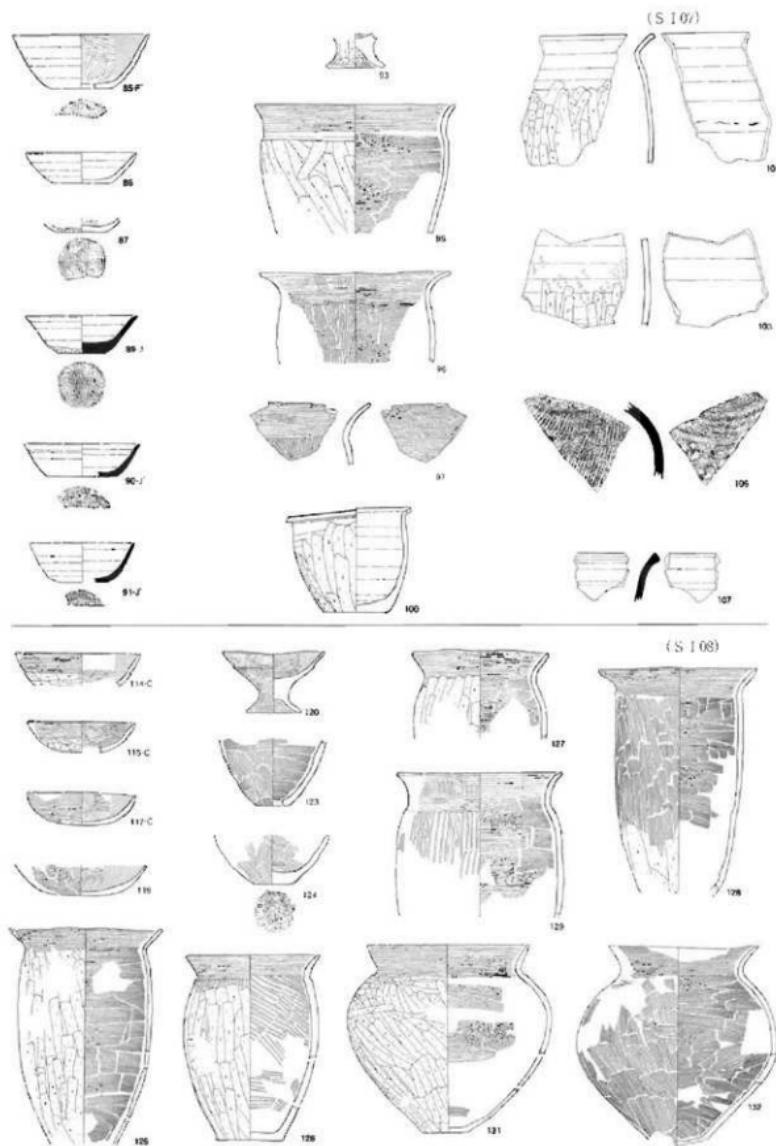
第12表 床面・カマド内出土遺物器種構成一覧

	土師器壺	土師器 高台付壺	及耳壺	須恵器壺 高台付壺	高 壺	瓶	鉢	壺	球胴壺	須恵器壺 ・壺	大壺
S I 0 1	4				1				3		
S I 0 2									1		
S I 0 3	4				2		1	3			
S I 0 4	5						1	2	1		
S I 0 5	1								1		
S I 0 6			1				1	2			
S I 0 7	3		3		1				6		2
S I 0 8	4				1	1	1	5		2	
S I 0 9	1										
S I 1 0		1	4						3		1
S I 1 1	1								2		
S I 1 2											
S I 1 3											
S I 1 4	1				1				5		1
S I 1 5	1					1			4		
S I 1 6									3	1	
S I 1 7	1			1					3		1
S I 1 8	1			5					4		1
S I 1 9	11	2							1		
S I 2 0	3			1					1		
S I 2 1						1		2		2	
S I 2 2	4		1						1		
S I 2 3	2		1					1	1	1	
S I 2 4	6	2									
S X 0 1					6(+1)				3		
S X 0 2	10	2						1+壺1		1	1
S X 0 3											
S X 0 4											
計	63	6	1	17	1	12(+1)	2	6	58	5	9
											1

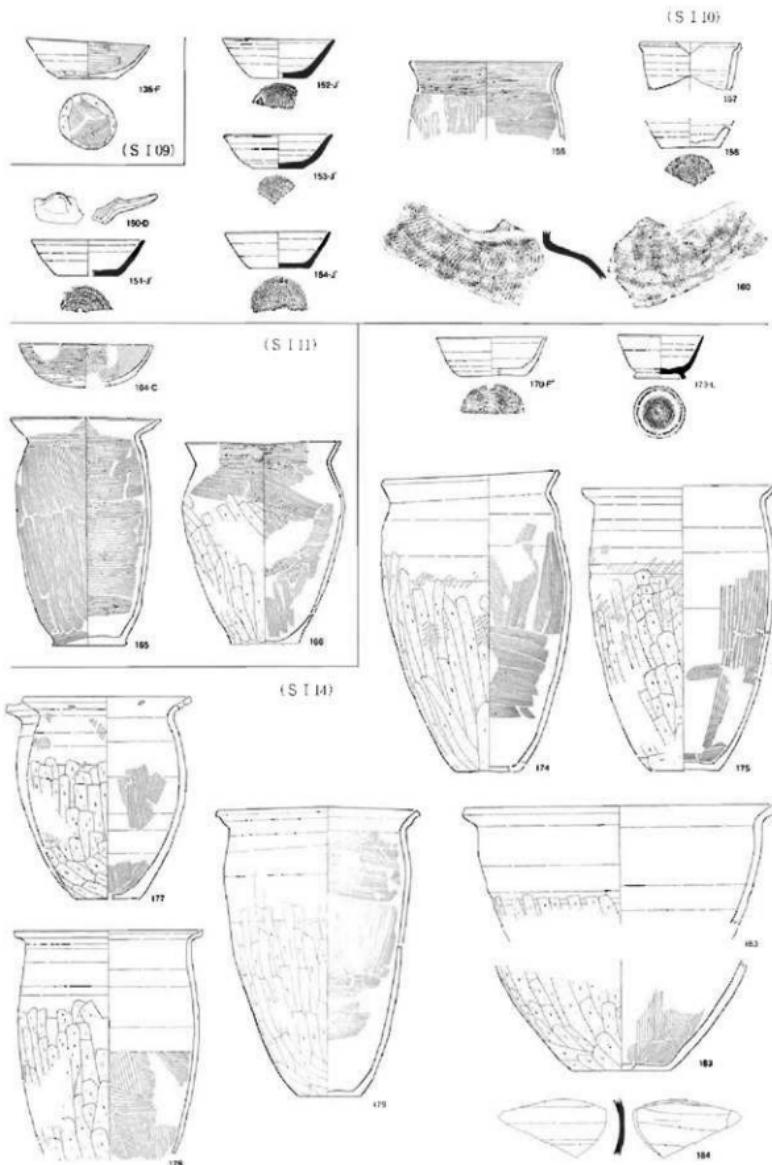
※ 遺物各号に後綴するアルファベットは遺物内での分類記号を表す



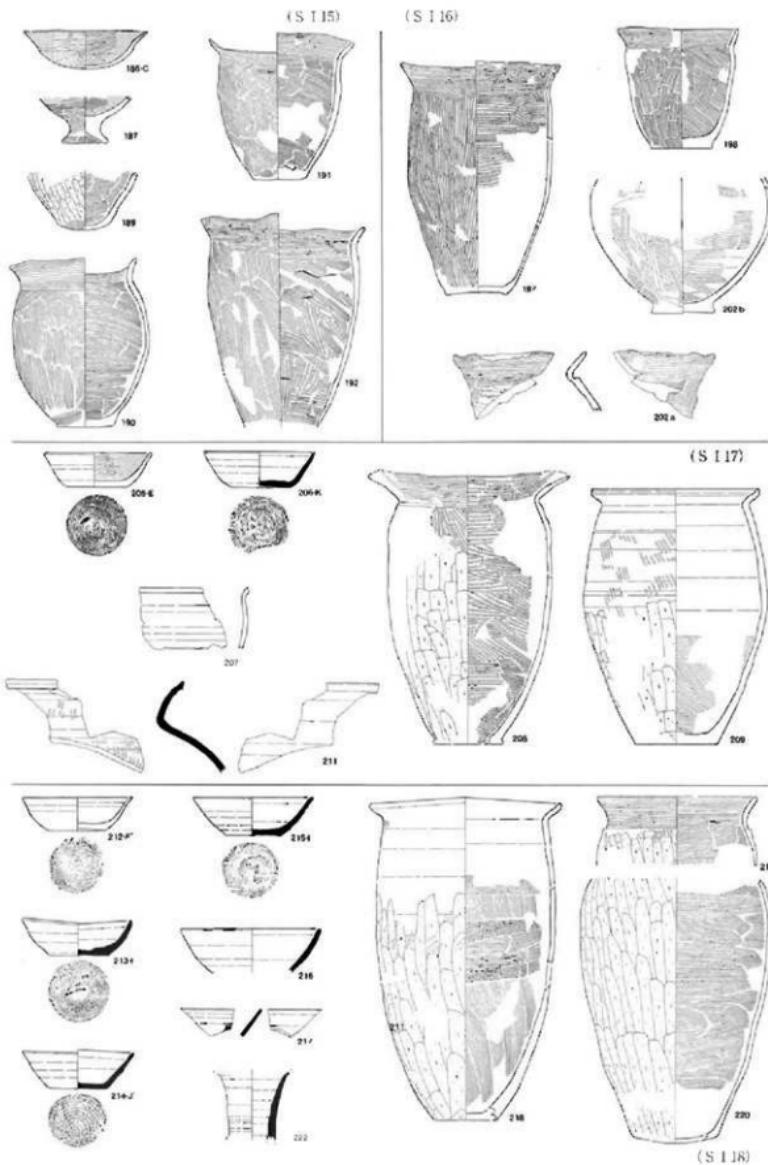
第112図 床面・カマド内出土遺物集成（1）



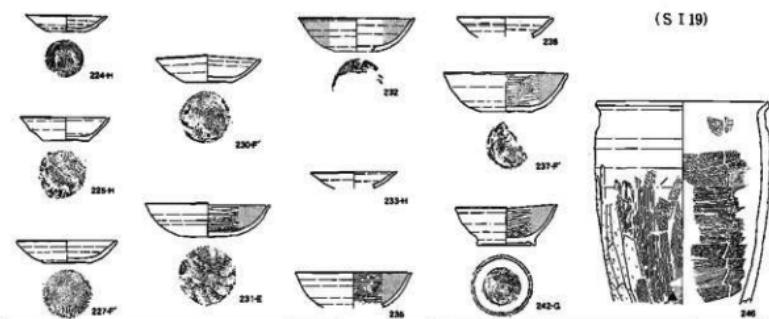
第113図 床面・カマド内出土遺物集成（2）



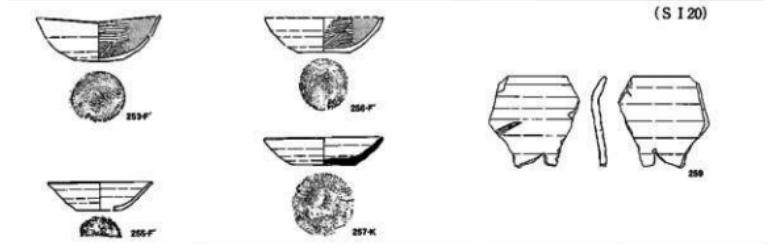
第114図 床面・カマド内出土遺物集成（3）



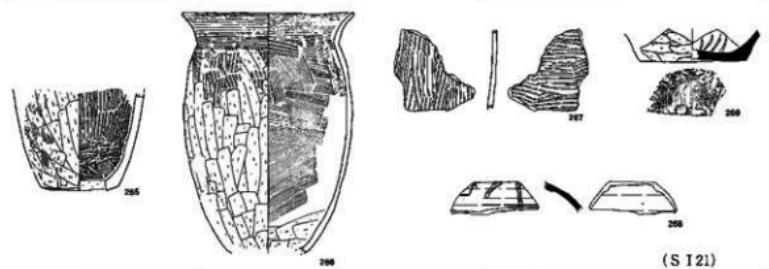
第115図 床面・カマド内出土遺物集成（4）



(S I 19)



(S I 20)

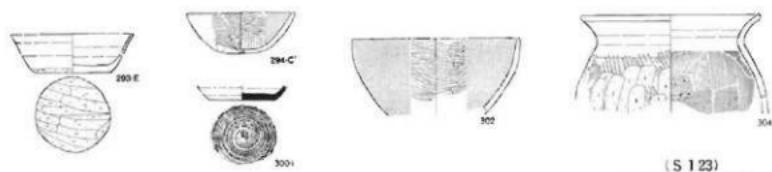


(S I 21)

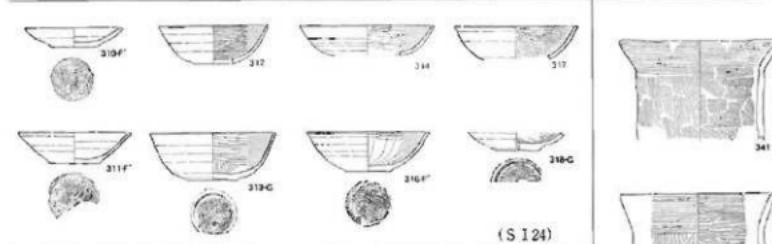


(S I 22)

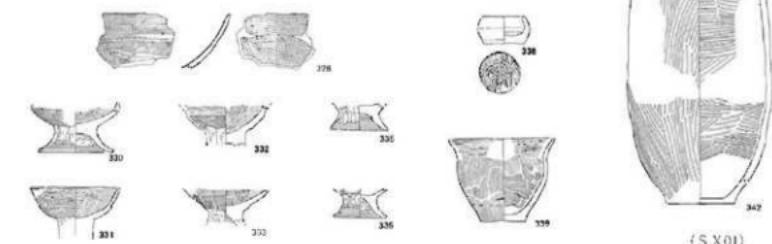
第116図 床面・カマド内出土遺物集成（5）



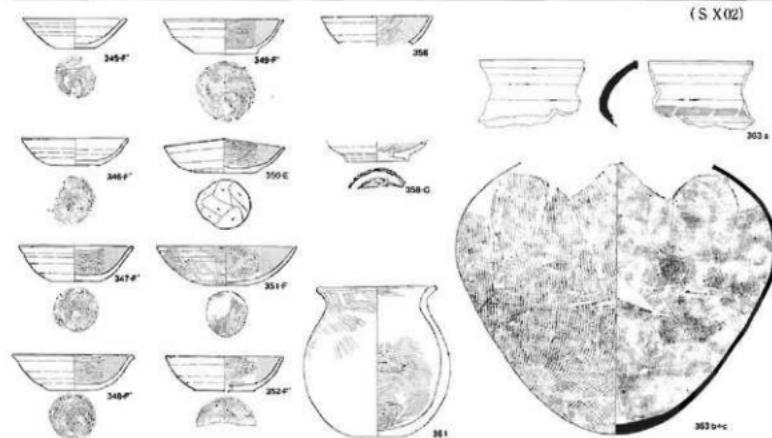
(S 123)



(S 124)



(S X01)



第117図 床面・カマド内出土遺物集成（6）

伴わないので特徴的である。このほか非ロクロの長胴壺が3点出土しているが(339・341・342)、内外面調整にはナズ、ハケメ彫等が用いられる。

S X 0 2：土師器坏10点、高台付坏2点、壺1点、壺1点、須恵器大壺1点で構成される。361以外はすべてロクロを使用して製作される。土師器坏には多様な底部切り離し技法・調整技法が認められ、回転トイクリによるもの（345～349、352）、その後ミガキによる再調整が行われるもの（351）、手持ちヘラケズリ再調整が行われるもの（350）などがある。358は高台付坏である。361は土師器壺で、内外面ミガキ+黒色処理される。363は須恵器の大壺である。

3. 出土遺物から見た遺跡の年代

ここでは、本遺跡から出土した遺物を従来の編年観と比較して出土遺物から見た遺跡の年代を概観したい。岩手県内~東北南部の古代の土器編年については、氏家和典(1957)、桜井清彦(1958)、草間健一(1958)の各氏によりその大綱が組み立てられている。その後、資料の増加を経て沼山源喜治(1968・1969)、桑原滋郎(1976)、伊藤博幸(1976)、佐久間豊(1978)の各氏らによって東北地方南部を中心とする編年との比較検討も含めて研究が進められた。そうした中で相原康二氏は、今まで空白のあった時期を埋める資料をふまえた県南部を中心とする古代土器の編年試案を発表した(相原1981)。いっぽう高橋信雄氏は、岩手県を北上川中流域と馬鹿瀬川流域に二大別し、県北部地方の土器の編年も含めての編年を行っている(高橋1982)。その後、八木光則氏は、斯波郡と爾蘆平地域の二つの地域に注目し、律令施行地域と郡の置かれない非律令地域とを比較する視点から7C中葉から12Cまでの土器編年を行った(八木1993)。これらが現在も県内における編年観の基礎となっている。

本遺跡から出土した土器を坏に焦点を当て特徴を列記すると以下のようになる。

A：酸化炎焼成され、製作に際しロクロを使用しない。底部平底を呈し、口縁部と体部との接続部分外側に
縦線が形成される。外面ミガキ、内面ミガキ+黒色処理される。

B：酸化炎焼成され、製作に際しロクロを使用しない。底部丸底を呈し、内溝しながら口縁部まで立ち上がり、内外面ともにミガキ+黒色処理される。

C：酸化炎焼成され、製作に際しロクロを使用しない。底部丸底風～平底を呈する。口縁部と体部の接点に弱い稜や沈線を持つもの（C）と、持たないもの（C'）あり。体部外面ミガキ調整、体部～底部にかけてはケツリ調整されるものが多い。内面はミガキ+黒色処理される。

D：酸化炎焼成され、製作に際しロクロを使用する。体部上半周側に耳状の把手が付属する（双耳杯）。外
面ロクロナガ、内面きざみを削除してある。底盤は残存しておらず詳細は不明である。

E：醸化炎焼成され、製作に際しロクロを使用する。底部切り離し技法は再調整により不明。底部全面ヘラ・ザイア調理される。片面ロクロトヨ、全面ロクロトヨとも、1回は蒸煮で黑色調理される。

F：融成炎焼成され、製作に際しロクロを使用する。底部切り離し法は回転イトキリによる。再調整を持つもの（F）と持たないもの（F'）がある。外面ロクロナデ、内面ロクロナデもしくはミガキ+黒色処理

G：酸化炎焼成され、製作に際しロクロを使用する。底部は回転イトキリ後、高台が付けられる。外面ロク

H：酸化炎焼成され、製作に際しロクロを使用する。法量小形化（口径11cm以下・器高5cm以下）し、小皿

I : 還元炎焼成され、製作に際しロクロを使用する。底部切り離し技法は回転ヘラキリにより、体部下端～底部縁辺ヘラケズリ再調整多い。内外面共ロクロナデ調整される。

J : 還元炎焼成され、製作に際しロクロを使用する。内外面ロクロナデ調整され、底部切り離し技法は回転イトキリによる。再調整を持つもの（J）と持たないもの（J'）がある。

K : 還元炎焼成され、製作に際しロクロを使用する。底部切り離し技法は再調整により不明。底部全面弱いヘラケズリ再調整される。内外面共にロクロナデ調整される。

L : 還元炎焼成され、製作に際しロクロを使用する。底部は回転イトキリ後、高台が付けられる。内外面ともにロクロナデ調整される。

Aの土器は、1点のみ（S I 05-58）該当する。口縁と体部の接続部の外側に稜が形成されるのが特徴的で、高橋氏のII-1群よりやや古相を呈するものである。いわゆる住社式期に相当するものと考えられる。

S I 05の出土遺物は壺と甕がそれぞれ1点のみであり、遺跡内での類例もないとから詳細は不明である。

Bの土器は1点のみ（S I 01-2）の出土である。器高やや高く（深く）、直上気味に内溝する体部を持つもので、丁寧なミガキ+黒色処理が内外面に施される。共伴関係にあるのはC <3>のみであることからこれらと同時期のものと判断される。9世紀代までは下らないものである（以下、<>内の数字は点数を表す）。

Cに該当するのは13点である。体部に弱い棱あるいは沈線を有するもので、本来は更に細分の余地があると思われる。共伴関係にあるのはB <1>、C' <3>で、高橋氏のII-2群、国分寺下層式期に相当すると思われる。いっぽう八木氏は該期の壺の器形について、外面：段～沈線を有する／内面：無段で丸底主体（段の下が平底風あり）のものが8C代でも古く、次第に外面：沈線～無段へ／内面：無段～平底主体へと変遷するとの見解を述べている。壺の特徴から両氏の見解をもって判断すれば、8世紀中～後半代頃に相当するものと捉えたい。

C'に該当するのは4点で、体部に稜や沈線をもたないものである。共伴はC <5>、E <1>、I <1>で、1点のみではあるが底部回転ヘラ削りの須恵器が伴っている。上記の見解によれば、こちらがCよりも新しい特徴を有するものである。Eが共伴することから9C初頭頃までの幅をもって解釈したい。

Dは1点のみが該当する。共伴するのはJ' <4>である。双耳杯は官衙的な色彩が強い器種で、県内ではこれまで水沢市胆沢城跡、盛岡市志波城跡ほか数例からしか出土例がない。胆沢城の設置が802年であることから、今のところ上限年代をほぼこの時期と想定することができよう。

Eの土器は4点が該当する。製作に際してロクロを使用し、底部切り離し後に底部全体をヘラ削りするものである。共伴するのはF' <9>、H <3>、J' <4>、K <2>、G <2>、C' <1>で土師器・須恵器共にあり、器形も多様である。

F : 2点該当する。回転イトキリ後に縁辺を再調整するもので、高橋氏のIII-1群期に相当するものである。共伴はF' <6>、G <1>、E <1>である。須恵器は共伴していない。

F'は21点と最も多い。回転イトキリ再調整無しの土師器で、共伴するのはH <3>、G <4>、J' <4>、I <2>、E <2>、F <1>、K <1>である。こちらも土師器・須恵器共にあり、器形も多様である。

Gは4点該当する。土師器高台壺である。共伴するのはF' <12>、H <3>、E <2>、F <1>である。回転イトキリ再調整なしの壺<12>、小皿に近い形態の壺<3>との組み合わせが多い。高橋のIII-2群期に相当するものであろうか。須恵器の共伴はない。

Hは3点が該当する。小皿に近い形態を呈するもので、高橋のIII-2群期に相当すると考えられる。共伴

床面出土杯分類一覧

遺構名	酸化炎焼成(非クロ)				酸化炎焼成(ロクロ)					還元炎焼成				
	A	B	C	C'	D	E	F	F'	G	H	I	J	J'	K
S I 01		1	3											
S I 02														
S I 03			3	1										
S I 04			2	2										
S I 05	1													
S I 06											1			
S I 07							1					1	2	
S I 08			3											
S I 09						1								
S I 10					1								4	
S I 11		1												
S I 12														
S I 13														
S I 14							1							1
S I 15		1												
S I 16														
S I 17					1									1
S I 18							1					2	1	
S I 19						1		3	1	3				
S I 20							2							1
S I 21														
S I 22							4							1
S I 23			1		1							1		
S I 24								3	2					
S X 01														
S X 02						1	1	6	1					

S I 02, 12, 13, 16, 21, SX 01は該当遺物なし
 ※図版については床面・カマド内出土遺物集成（1～6）を参照されたい
 ※A～Lは時間軸を示すものではない

各杯形態の共伴関係と遺物から推定される時間幅

時間軸 (縦)	A	B	C	C'	D	E	F	F'	G	H	I	J	J'	K	L
6 C後半代															
7 C後～ 8 C前半代															
8 C中～ 後半代															
9 C前半代															
9 C後～ 10 C前半代															

はG <1>、F' <3>、E <1>で、回転イトキリ再調整なしとの組み合わせが多い。須恵器の共伴はない。Iは4点該当する。底部回転ヘラキリ後再調整される須恵器坏である。共伴はF'、E、C'、J'がそれぞれ1点づつである。

Jは1点のみ該当する。底部回転イトキリ後再調整される須恵器坏である。共伴するのはJ' <2>、F' <1>である。

Kは2点該当する。弱いヘラ削り再調整により底部切り離し技法不明のものである。共伴するのはF' <2>、E <1>である。

Lは1点のみ出土した。須恵器高台坏である。共伴はF' <1>である。

以上のことまとめると次のようになる

* 本遺跡出土の資料は6世紀後半～10世紀前半までの幅をもつものであり、その主体は8世紀後半～9世紀前半である。

* 須恵器を伴わないものはA、B、C、F、G、Hの7タイプある。このうちA～Cはロクロ技術導入以前の時期、G、Hは須恵器の数が著しく減少する時期にそれぞれ相当するものと思われ、これまでの研究史に沿う結果が得られた。

* 非ロクロで須恵器との共伴関係が認められたのはC'の1点のみである。回転ヘラキリの須恵器(I)、ロクロ使用の土師器(E)が伴っていることから、本遺跡においては9C初頭頃まで残存する器形であることが指摘できる。

* S I 21から出土した瓶(265)は外面タクキ+ケズリ調整、内面ハケメナデ調整される。同住居跡は共伴する遺物から9世紀前半代に相当すると捉えられることから、ロクロ技術導入後間もなくの過渡的な様相を反映した資料として注目される。

本来は遺物のみならず、造構の特徴も考慮した検討を行うべきであるが、残存状態の不良なものが多数であるため、これを統計的に処理し分析を加えることは叶わなかった。このため造構に関しては、比較一覧表を作成するに留めている。

(丸山直美)

(参考・引用文献)

氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14巻 東北史学会 1957

桜井清彦「東北地方北部における土師器と窓穴住居に関する諸問題」江上波夫・間野雄・桜井清彦

「東北地方における集落址の研究」「館址」東京大学出版会 1958

草間俊一「第九、土師器文化・先史期」「盛岡市史」盛岡市役所 1958

佐久間豊「奈良・平安期土師器の型式学的分析」「考古学研究」第25巻第2号 考古学研究会 1978

桑原滋郎「東北地方北部および北海道の所謂第I型式の土師器について」考古学雑誌第61巻第4号 1976

伊藤博幸「岩手県の古代土器生産について」「岩手史学研究」61 p.43～44

相原康二「岩手県南部(北上川中流域)における所謂第I型式の土師器・前期土師器の内容について」遠藤勝博・相原康二 1981

高橋信雄「東北地方北部における古代の土器研究」1982

八木光嗣「古代斯波郡と爾羅体の土器様相」1993

(参考・引用文献)

『勝澤城跡－水澤市所在－』文化財調査報告第4集	岩手県教育委員会	1957
「岩手県野田村中平遺跡」	早間俊一岩手大学教務部報告12	1967
『岩崎城の発掘』	利賀町教育委員会	1967
『秋田県の考古学』	奈良修介・豊島 昂 吉川弘文館	1967
『岩手県岩手町仙波堤・今松遺跡』	岩手町教育委員会	1970
『日本の古代史』	佐藤敏也 雄山閣	1971
『秋田の郷没家屋』日本古代文化の探求「家」より	永井親男 社会思想社	1975
『主要地方道一岡北上線間違跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1979
『東北新幹線関係埋蔵文化財報告書Ⅰ』	岩手県教育委員会	1979
『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』	岩手県教育委員会	1980
『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』	岩手県教育委員会	1980
『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』	岩手県教育委員会	1981
『一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』	一戸町教育委員会	1981
『御所ダメ建設間違跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1981
『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅵ』	岩手県教育委員会	1981
『水沢市勝生遺跡金ヶ崎バイパス間違跡調査報告書Ⅱ』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1982
『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書XⅧ(北上地区)』	岩手県教育委員会	1982
『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書XⅨ(猪谷地遺跡)』	岩手県教育委員会	1982
『一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』	一戸町教育委員会	1982
『川向丘遺跡発掘調査報告書(昭和55年度)』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1982
『若成田IV遺跡発掘調査報告書』	岩手県教育委員会	1983
『赤坂田I・II遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1983
『上野山遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1983
『館山遺跡第2次発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1983
『長者屋敷遺跡発掘調査報告書(Ⅲ)』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1984
『江差家IV遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1984
『昭和57年度伊勢館遺跡発掘調査報告書』	大東町教育委員会	1984
『岩手の遺跡』	岩手県埋蔵文化財センター	1985
『上野遺跡』昭和59年度発掘調査報告書	一戸町教育委員会	1985
『一戸城跡』昭和59年度発掘調査概報	一戸町教育委員会	1985
『九戸郡鶴来町馬易野II遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1986
『五庵I遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1986
『五庵II遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1986
『水神遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1986
『駒焼場遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1989
『馬場遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1990
『馬場II遺跡・沖I遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1990
『北館遺跡』平成2年度発掘調査報告書	一戸町教育委員会	1991
『網越I・漫跡・宇野II遺跡』宮古市埋蔵文化財調査報告書36	岩手県宮古市教育委員会	1992
『豊穴住居』か『豊穴建物』か研究連絡誌第34号	渡辺修一・脚千葉県文化財センター	1992
『岩谷堂城跡発掘調査報告書』	江刺市教育委員会	1996
『上田尾の鉛跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1999
『似内遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	2000
『上水沢II遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	2002
『岩手県埋蔵文化財調査略報(平成13年度)』	岩手県埋蔵文化財センター	2002

岩手県水沢市杉の堂遺跡出土の炭化種子

高瀬克範

(東京都立大学人文学部史学科)

はじめに

岩手県水沢市杉の堂遺跡において検出されたS X02・S I 03内の土壌を水洗選別（最小メッシュ1mm）した結果、ややまとまった量の炭化種子が検出された。ここでは、これらの炭化種子について報告を行うとともに、若干の考察を行う。

遺跡の所在地：岩手県水沢市神明町2丁目58-4ほか

発掘調査期間：2002年4月16日～2002年9月4日

調査委託者：国土交通省東北地方整備局岩手工事事務所

調査機関：（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

調査担当者：丸山直美・齋藤麻紀子

遺跡の性格：集落跡（堅穴住居跡、堅穴状遺構、方形周溝、溝跡、土坑などが検出された）

資料の年代：S I 03は8世紀後半代、S X02は9世紀後半から10世紀前半代

S X02底面直上出土炭化イネの年代測定結果（未補正）は、 1020 ± 30 B.P. (IAA-11832)。

1. 出土植物種名表 List of plant remains from Sugino site

双子葉植物綱

離弁花亜綱

クルミ科 JUGLANDACEAE

オニグルミ *Juglans mandshurica*

ブナ科 FAGACEAE

コナラ属 *Quercus*

タデ科 POLYGONACEAE

ソバ *Fagopyrum esculentum*

マメ科 LEGUMINOSAE

ブドウ科 VITACEAE

合弁花亜綱

シソ科 LAMIACEAE

シソ属 *Perilla*

單子葉植物綱

イネ科 GRAMINEAE

イネ *Oryza sativa*

オオムギ *Hordeum vulgare*

コムギ *Triticum aestivum*

エノコログサ属 *Setaria*

アワ *Setaria italica*

ヒエ属 ECHINOCHLOA

2. SX02出土の炭化種子

底面および底面直上からオニグルミ、タデ科、ソバ、マメ科、シソ属、イネ、オオムギ、エノコログサ属、アワ、ヒエ属、不明種子が検出された。P1からは、ブナ科コナラ属、マメ科、ブドウ科、イネ、コムギ、ヒエ属、不明種子が検出された。P3からは、ソバ、シソ属、イネ、オオムギ、エノコログサ属、ヒエ属が検出されている。

SX02全体の重量比ではソバがもっとも多量に出土しており、床面だけでも総重量55.58 gが検出されている。本遺構出土ソバ500個あたりの重量は4.05 gであることから推定すると、11,800個以上のソバが出土していることとなる。すべて炭化しており、種皮が付いているものが相当な割合で含まれており、付いていないものも被熱による種皮の剥落が関与している可能性もある。出土ソバ50個の平均長さは3.27mm、平均幅は2.70mmである。

ついで多いのがヒエ属Aであり、総重量8.63 gが出土している。本遺構出土の炭化ヒエ属A500個の重量は0.30 gであり、推定標数では14,383個あまりが出土していることとなる。形態は、腹部の膨らみがやや弱いが現在の栽培品種にかなり近いといえる。出土ヒエ50個の平均長さは1.43mm、平均幅は1.25mmであり、現在の栽培品種の平均長さ1.8±0.1mm、平均幅1.5±0.1mm（中山ほか2000）とくらべるとサイズが小さい。ほぼすべてが脱穀されているとみてよい。

イネは44個出土しているが、サイズの変異が大きい。1点を試料としてAMSによる年代測定をおこなったところ、上記のように10世紀代に属する可能性が高い結果が得られている。

マメ科は確実なものが5点出土している。底面出土資料のうち保存状態が比較的よいものの1点を解剖し、初生葉の形態観察を行った。その結果、初生葉はほぼ45度の角度で斜め上から斜め下にむかって確認された（写真27・28）。吉崎・椿坂（2001）が提示している初生葉の違いに照らし合わせるならば、本資料はリヨクトウではなくアズキあるいはアズキ近似種と判断できる。このほか、炭化時に発泡した可能性のあるマメ科植物が12.06 g出土しており、互いに癒着しているものもある。発泡による表面変形のためすべての資料にヘソが確認できるわけではないが、粒径と炭化・発泡状態の共通性がたかいことからマメ科植物と考えられる。

オオムギは、長粒タイプ（椿坂1998、山田1998）と思われる種子が床面とP3から1点ずつ出土している。前者は頸が付いた状態で長さ6.0mm、幅2.5mm、後者は頸果のみで長さ5.1mm、幅2.7mmである。前者には被熱して一部頸の剥落がみられるが大部分が癒着して残存しており皮性の品種と思われる。後者も形態は長粒タイプと考えられ、表面には一部頸の残存と考えられる部分もあるが明確ではない。北海道島では短粒タイプ・長粒タイプの双方が分布するが、サイズのうえでも本遺跡出土資料は長粒タイプと共通する特徴を有している。

P 1 からはコムギが3点検出されており、完形1点は長さ4.6mm、幅3.0mmである。粒径の小さいエゾコムギと仮称されているグループよりはあきらかに大きく、北海道島に分布しているものとは系統が異なっているのかもしれない。

アワは2個出土しているが、ヒエ属にくらべて圧倒的に少ない。大きさは、ひとつが長さ1.3mm、幅1.1mm、いまひとつが長さ1.2mm、幅1.1mmである。擦文期の北海道島から出土するものは札幌市K441・N34遺跡で平均長さ1.43mm、幅1.26mm、札幌市H317遺跡3層で平均長さ1.11mm、幅1.09mm、札幌市K39(第6次)で1.23mm、1.19mmであり、本遺跡出土資料はこれまで北海道島内で出土しているアワの変異幅に収まるものである。

栽培種の可能性があるものとしてはこのほかにシソ属があり、偏球形の形態で果皮表面には大型網目模様がみとめられる。また、ヒエ属B・エノコログサ属・ブドウ科・不明種子も検出されており、オニグルミ・ブナ科コナラ属(ドングリ)も量は非常に少ないがすべて炭化した状態で出土している。ブナ科コナラ属の種子はすべて形態が非常に細長いものである。大きさの変異が大きいが、サイズは統じて小さい。

3. S I O 3 出土の炭化種子

マメ科、シソ属、ソバ、不明種子が出土している。ソバは未熟できわめて小さい。マメ科は解剖を行っていないので詳細は不明である。シソ属種子は2個出土している。

4. 杉の堂遺跡出土炭化種子の特徴

焼失住居と考えられるSK02出土炭化種子は栽培種が圧倒的多数を占めており、明らかに人間の選択が関与している組合せといえる。ごく小数のエノコログサ属は雑穀などに混在した雑草の可能性があるとしても、ヒエ属A・ソバ・シソ属・マメ科・イネ科が組成の中心となっており、それ以外の野生植物もオニグルミ・コナラ属であり、おもに食用に供する目的で人為的に集積されたものと考えられる。

調査者によれば、本遺構の種子は遺構の西壁付近で65cm×27cmの範囲内に集中して検出されたという。多量のソバが調理のために保管されていたのか、作付けのために保管されていたのかは現時点ではわからない。ヒエ属Aは間違いなく脱穀を経たものであるが、これがどのような経緯でソバと共に存していたのかも大きな問題である。焼失住居での出土状況とそこで見られる種子の組合せは、調理のコンテクストで残存したカマド・焼土関係の資料とはべつの意味で、今後、重要な情報源となる可能性を秘めている。焼失住居における「種子コンプレックス」の詳細な地域差・時間差および出土状況があきらかになってくれば、畠の作付け作物とそのサイクル、またその地域差・時間差などの関連で評価することができるかもしれないからだ。いずれにしても、まず必要なのは土壤水洗の実践と資料の増加である。

すでに触れたとおり、出土したヒエ属Aは栽培品種にかなり近い形態をしめすが、サイズは小さい。北海道島擦文期の札幌市H317遺跡3層(土器編年観では9C末~10C前半)出土ヒエ属は、平均長さ1.44mm、平均幅1.16mmである。これは杉の堂遺跡のヒエ属Aときわめて近い値であるが、幅は杉の堂遺跡のほうがやや広い。長幅比のグラフをみても、同じ長さでは杉の堂出土資料の幅がやや上回っていることが判る。しかし、資料はあまりにも断片的であり、これをもって両地域における栽培化の進展度のちがいと評価することは現段階ではできそうにない。ソバも現在の栽培品種と比べると大きさは小さく、そう果の長さが3mm以下の未熟なものもが多數含まれている。

多様な地理的・気候的条件を擁する岩手県内においては、先史・歴史時代の生業活動はからずしも均質であったわけではない。栽培植物の利用においても、イネ一辺倒ではなく、多様な農作作物が利用されてい

た時期・地域があってもおかしくはない。本遺跡の成果もこの点を見事に物語っている。発掘調査を行うにあたってあらかじめ組織的・体系的な土壤洗浄をおこなってゆく意識が芽生えないかぎり、重要な情報源をみすみす捨ててゆくことになる。今回は、やむなく1mmメッシュをもちいたが、今後は、小型の雜穀類までをもれなく回収するために0.5mmもしくは0.425mmメッシュをもちいるべきであろう。

謝辞 遺構内土壤の洗浄の必要性に理解を示し、本遺跡における炭化種子の検出にご協力いただいた（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター調査員の丸山直美氏に感謝申し上げる。また、本稿の執筆にあたっては、佐々木由香氏（（株）パレオラボ）・椿坂恭代氏（札幌国際大学考古植物研究会）から貴重なご教示を賜った。この場を借りて御礼申し上げたい。

引用・参考文献

- 大井次三郎1983『新日本植物誌 顕花篇』至文堂。
黒尾和久・高瀬克範2003『縄文・弥生時代の雜穀栽培』木村茂光編『雜穀』青木書店。
椿坂恭代1993「アワ・ヒエ・キビの同定」『吉崎昌一先生還暦記念論集 考古学と自然科学』。
椿坂恭代1998「オオムギについて」『時の辨 石野富三男先生を偲ぶ』。
中山至大・井之口希秀・南谷忠志 2000『日本植物種子図鑑』東北大出版会。
山田悟郎「日本列島北端で展開された雜穀農耕の実態」『北海道開拓記念館研究紀要』26。
吉崎昌一・椿坂恭代1995「H317遺跡から検出された植物種子」仙庭伸久編『H317遺跡』札幌市教育委員会。
吉崎昌一・椿坂恭代2001「先史時代の豆類について—考古植物学の立場から—」『豆類時報』24。
吉崎昌一・椿坂恭代2001「札幌市K39遺跡第6次調査で出土した炭化種子」藤井誠二『K39遺跡第6次調査』札幌市教育委員会。
吉崎昌一・椿坂恭代2001「札幌市K39遺跡第7次調査で出土した炭化種子」秋山洋司『K39遺跡第7次調査』札幌市教育委員会。

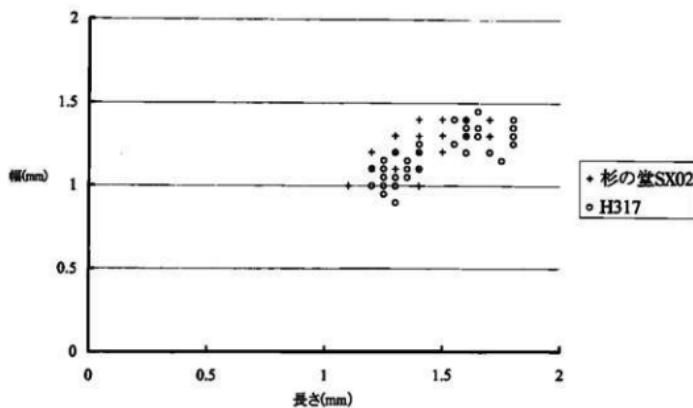
出土ヒ工属A計測値

No	杉の堂SX02		H317道路3番	
	長さmm	幅mm	長さmm	幅mm
1	1.4	1.3	1.6	1.3
2	1.2	1.1	1.6	1.35
3	1.4	1.1	1.3	1.2
4	1.5	1.3	1.25	1
5	1.4	1.3	1.2	1.1
6	1.3	1.2	1.6	1.4
7	1.4	1.3	1.25	1.15
8	1.5	1.2	1.3	1.05
9	1.4	1	1.3	1
10	1.6	1.3	1.3	1.2
11	1.6	1.4	1.6	1.3
12	1.4	1.3	1.3	0.9
13	1.6	1.3	1.6	1.2
14	1.4	1.3	1.25	0.95
15	1.6	1.4	1.35	1.15
16	1.4	1.2	1.65	1.35
17	1.7	1.3	1.25	1.05
18	1.3	1.1	1.4	1.25
19	1.6	1.4	1.7	1.2
20	1.5	1.2	1.75	1.15
21	1.4	1.2	1.6	1.4
22	1.7	1.4	1.65	1.3
23	1.3	1.2	1.8	1.4
24	1.2	1.2	1.55	1.4
25	1.4	1.2	1.3	1
26	1.6	1.4	1.25	1.1
27	1.4	1.4	1.8	1.4
28	1.2	1.2	1.2	1
29	1.4	1.3	1.25	1.05
30	1.4	1.2	1.4	1.2
31	1.5	1.4	1.4	1.1
32	1.5	1.3	1.8	1.35
33	1.5	1.3	1.3	1.05
34	1.4	1.3	1.35	1.1
35	1.4	1.2	1.25	1
36	1.5	1.2	1.35	1.15
37	1.3	1.1	1.8	1.3
38	1.6	1.4	1.2	1
39	1.5	1.2	1.25	1.05
40	1.3	1.2	1.25	0.95
41	1.5	1.4	1.65	1.45
42	1.2	1.2	1.35	1.05
43	1.3	1.2	1.25	1
44	1.1	1	1.6	1.2
45	1.5	1.2	1.4	1.2
46	1.3	1.3	1.25	0.95
47	1.7	1.4	1.35	1.05
48	1.5	1.2	1.55	1.25
49	1.5	1.3	1.8	1.25
50	1.3	1.1	1.35	1.1
平均	1.43	1.25	1.43	1.16

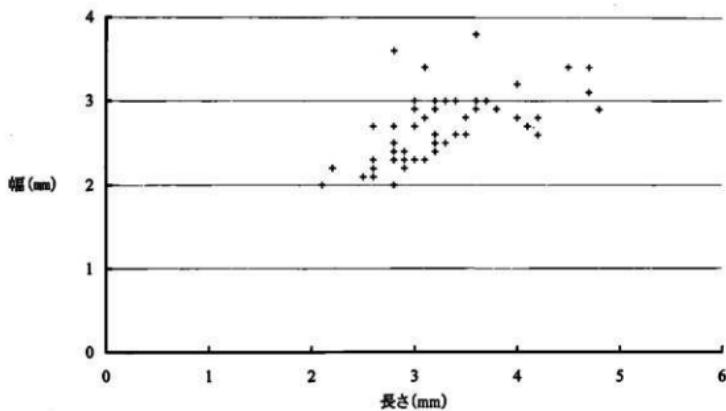
出土ソバ計測値

No	長さmm	幅mm
1	2.5	2.1
2	2.6	2.2
3	3.3	3
4	3.6	2.9
5	2.8	2.7
6	4.1	2.7
7	4.7	3.4
8	2.8	3.6
9	4.2	2.8
10	4.8	2.9
11	4	3.2
12	4.2	2.6
13	3.2	2.9
14	2.8	2.3
15	3.5	2.8
16	3.6	3.8
17	4.7	3.1
18	3.2	2.4
19	3.2	2.5
20	2.8	2
21	3.2	2.6
22	3.7	3
23	3.4	2.6
24	2.2	2.2
25	3	2.7
26	2.8	2.4
27	2.1	2
28	4.5	3.4
29	4	2.8
30	3.4	3
31	3	3
32	3	2.9
33	2.6	2.7
34	2.8	2.5
35	3.1	2.8
36	2.6	2.1
37	3.2	3
38	3.1	3.4
39	2.8	2.4
40	3	2.3
41	2.9	2.2
42	2.9	2.4
43	3.3	2.5
44	2.6	2.3
45	3.6	3
46	2.9	2.3
47	3.5	2.6
48	3.1	2.3
49	3.8	2.9
50	2.6	2.7
平均	3.27	2.7

ヒエ属Aの長幅比



ソバの長幅比



杉の堂遺跡出土炭化種子集計表

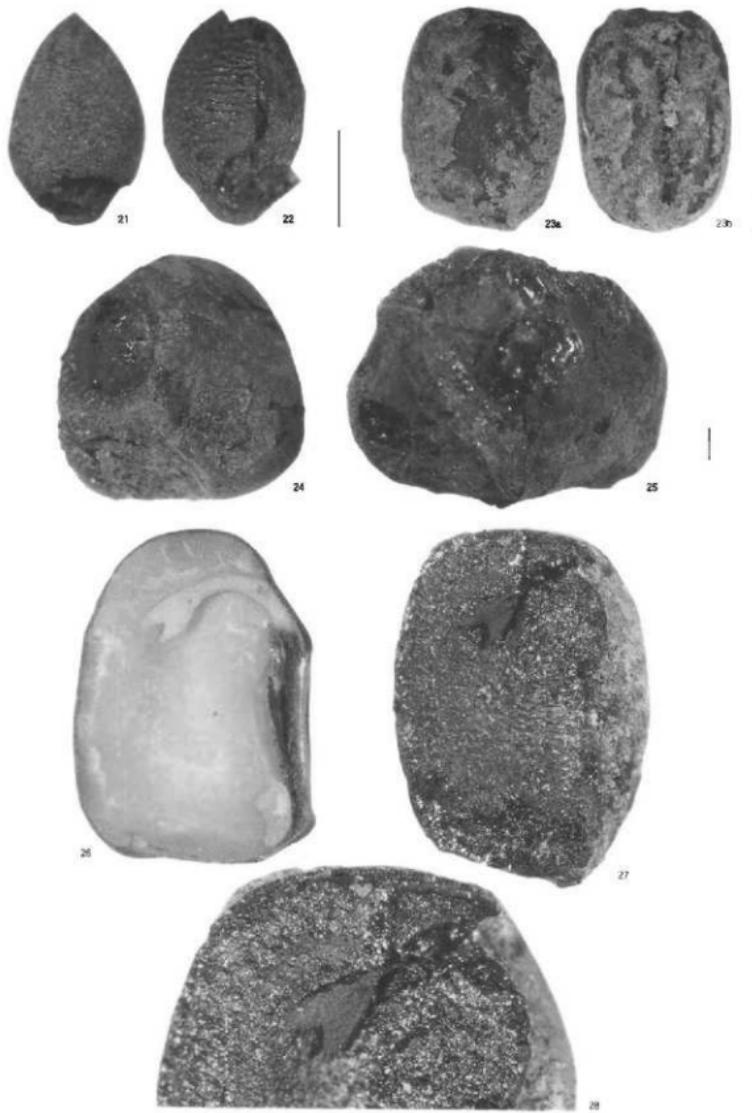
遺構名	S X02	S X02 P 1	S X02 P 3	S I 03
オニグルミ	3.17 g	1	0	0
ブナ科コナラ属	0	12	0	0
タデ科	2	0	0	0
ソバ	11,800*	0	40	1
マメ科	5+発泡資料(ヘンが確認できるもの0.95g, 確認できないもの11.11g)	1	0	1
ブドウ属	0	1	0	0
シソ科	3	2	0	2
イネ	44	4	3	0
オオムギ	1	0	1	0
コムギ	0	3	0	0
エノコログサ属	41	0	1	0
アワ	2	0	0	0
ヒエ属B	1	0	0	0
ヒエ属A	14,383*	1	3	0
不明種子	6	1	0	1

*は推定概数



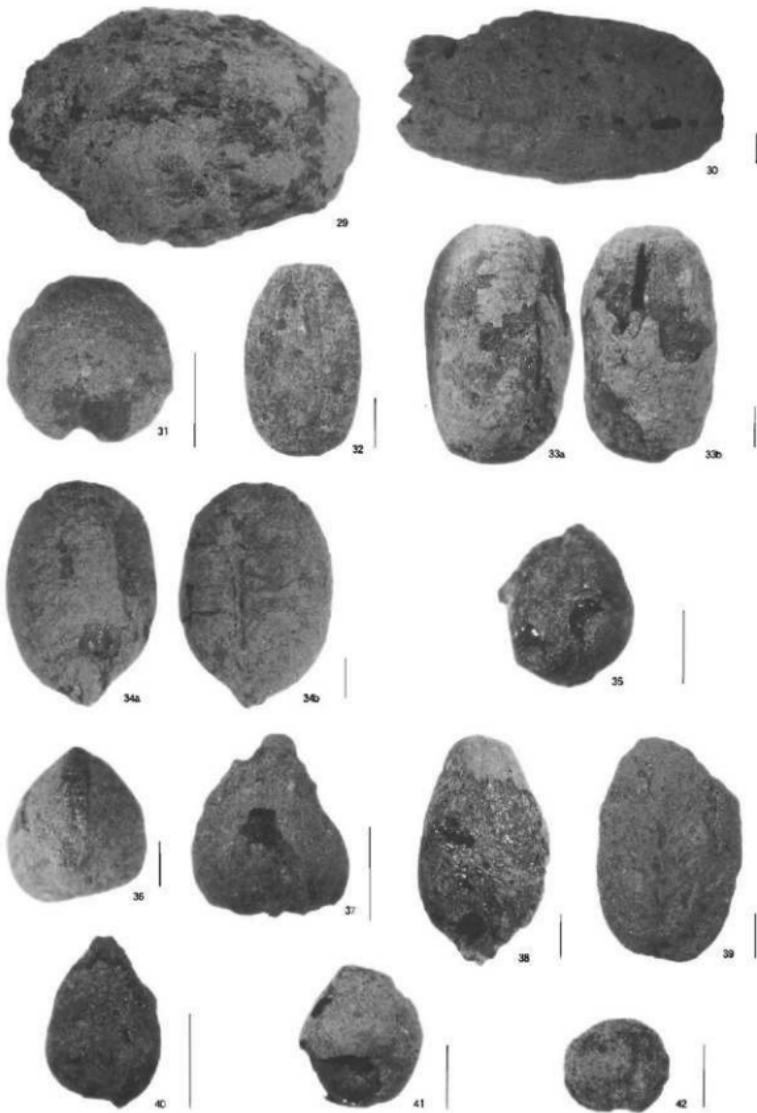
形の変遷跡出土炭化種子(1) [1-20: S.112出土 スケール: 1mm]

1-5: マバ, 6-8: セニユム, 9: タダ科, 10-14: イモ, 15: オオムギ, 16: アリ, 17: ヒヌ属, 18: フドウ科, 19-20: シラム



杉の葉遺跡出土炭化種子(2) [21-25-27-28: 5.112出土 スケール: 1mm]

21・22: エノコロダ等種。23: マメ科。24・25: マメ科? (発芽)。26: 現生アズキ断面。27: 出土マメ科 (23と同一) の断面 (アズキの特徴)。28: 出土マメ科初生葉拡大。



移の堂遺跡出土炭化種子(3) [29-35: S I 12P 1出士, 36-40: S I 12P 3出士, 41-42: S I 03P 5出士] スケール: 1mm
 29-30: コテラ属, 31: ヒエ属A, 32: イモ, 33: マメ科, 34: カルビ, 35: シソ属, 36: ツル, 37: ヒエ属B, 38: オオムギ, 39: ハモ, 40: エノコロダサ属, 41: シソ属, 42: 不明

杉の堂遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

杉の堂遺跡は（岩手県水沢市神明町所在）北上川右岸に位置し、胆沢畠状地の下位段丘である水沢段丘上に立地しており、現在は畑作地や果樹園などとして利用されている。今回は、検出遺構の年代資料を得る目的で、平安時代の竪穴状遺構（S X02）の床面直上から出土した炭化イネの年代測定を行なう。

1. 試料

試料は、床面直上（焼土まじりの黒褐色土中）より、フローテーション法にて抽出した炭化イネ1点である。イネの他、オオムギ、ソバ、アワ、ヒエ属、マメ科、オニグルミ、ブナ科コナラ属、タデ科、シソ属、エノコログサ属なども一緒に出土している。

2. 分析方法

測定は、株式会社加速器分析研究所の協力を得た。年代の算出にはLibbyの半減期5568年を使用、B P年代値は1950年からさかのぼって何年前かを表している。付記した誤差は、標準偏差（ 1σ ）に相当する時代である。 $\delta^{14}\text{C}$ の値は、AMS測定の場合、同時に測定される値を用いている。

3. 結果

測定の結果、 $1,090 \pm 30$ B P（IAA-11832）という値が得られた。なお、 $\delta^{14}\text{C}$ による同位体効果の補正を行なっていない値は $1,020 \pm 30$ B P、 $\delta^{14}\text{C}$ の値は -17.11 ± 0.90 である。

4. 考察

炭化試料の測定値は10世紀頃の年代を示し、土器などの遺物から想定される時代観と矛盾しない。古代には東北地方でも多くの炭化イネが検出されており（三浦、1992；松谷、2001など）、広く栽培・利用されていたことが伺われる。

引用文献

- 松谷暁子（2001）灰像と炭化像による先史時代の利用植物の探索。植生史研究、10, p.47-66.
三浦圭介（1992）青森県での遺跡調査におけるフローテーション法の導入とその成果について。考古学ジャーナル、355, p.29-31

杉の堂遺跡出土鉄関連遺物の金属考古学的調査結果

岩手県立博物館 赤沼英男

1 はじめに

岩手県水沢市に所在する杉の堂遺跡は、国道4号水沢東バイパスの建設工事に伴い平成14年に発掘調査された遺跡である。調査の結果、6世紀後半代から10世紀前半代に比定される堅穴住居跡が検出され、8世紀代の住居跡床面からは鉄器および羽口が、9世紀～10世紀前半代の住居跡床面からは鉄器および鉄滓が検出された¹⁾。時代経過とともに遺跡内において鉄器が普及し、その製作までもがなされるようになった様子をみてとれる。

遺跡内における鉄に関する生産活動内容を推定し、鉄器製作の素材となった地金の時代経過に伴う組成変化の有無を明らかにすることを目的として、出土鉄関連遺物（鉄器、鉄滓、および羽口）の金属考古学的調査を実施した。調査の結果、8世紀から9世紀に比定される鉄器は全て銅製鉄器であり、化学組成上4つに分類された。鉄滓は銅鉄を脱炭して鋼を製造する過程で生成した可能性がある。検出された2点の羽口のうち、肉厚で軌道内径が細いものについては、溶融または部分溶融した銅鉄に空気を送風する、空気酸化の道具として使用された可能性が考えられた。もう一方の羽口については構造物（炉と推定される）内に空気を送り込むために用いられた可能性が高いと推定されたが、具体的な用途を特定することはできなかった。鉄滓の成因および銅製鉄器にみられる化学組成上の差異を加味すると、製品供給、銅製造の素材となる原料銅鉄の供給、および使用不能となった鉄器の再利用によって、遺跡内に鉄器が普及し利用されたと推定される。以下に金属考古学的調査結果を報告する。

2 調査資料

金属考古学的調査を行った資料は鉄器8点、羽口2点、および鉄滓4点の合計14資料である。鉄滓はいずれも椭形滓で凸部表面は溶融または部分溶融した粘土状物質で覆われており、凹部には錫と鉄滓が混在した資料が残存している。羽口には、先端部付近の気道内径が約3cm、気道外径が約5cm、もう一方の端部の気道内径が約4.5cm、気道外径が約7cmで、先端に向かって先細るもの（表1 No.9、図7 a_{1,2}）と、気道内径が約2.3cm、外径が約7cmでは一定の太さをしたもの（表1 No.14、図8 a_{1,2}）の2つが検出されている。前者は後者に比べて肉薄で、表面は先端から約5cmの領域が灰褐色、その外側は約2cmの黄褐色を呈する帯状領域からなり、さらに端部までは赤褐色を呈する領域によって構成されている。黄褐色を呈する領域が壁体に装着されていたものと推定される。No.14羽口表面は青灰色を呈する粘土状物質で覆われている。表1に調査資料番号、検出遺構、推定時期を示す²⁾。

3 調査試料の抽出

鉄器についてはダイヤモンドカッターを装着したハンドドリル（以下、ハンドドリルという）を使って、資料の外観形状を損ねることのないよう細心の注意を払いながら、約0.5gの試料を抽出した。羽口については先端部ともう一方の端部から約0.5gの試料を、鉄滓については中心部分にハンドドリルで深さ1～2

cmの切り込みを入れ、一方の切り込み面から約1gの試料を切り取った。摘出した試料をさらに2分し大きい方を組織観察に、小さい方を化学成分分析に供した。鉄器の中で、No2、No4、No6、No7、およびNo8については、刃(Eg)部および棟(Rg)部または基(Bs)部の2ヶ所から試料を摘出し、それぞれを金属考古学的調査に供した。各資料からの試料摘出位置は、図1～5、図7～9に示すとおりである。

4 分析方法

組織観察用試料についてはエボキシ樹脂で包埋し、エメリーペーパー、ダイヤモンドペーストを使って研磨した。研磨面を金属顕微鏡で観察し、鉄器地金の製造方法、鉄滓の成因、および羽口の使用方法を推定する上で重要なと判断された鉄器の非金属介在物(鋼を製造する過程で分離することができずに残った異物)、鉄滓および羽口に残存する鉱物相をエレクトロン・プローブ・マイクロアナライザ(EPMA)で分析した。鉄器から摘出した試料のうち、メタルが残存する試料については、ナイタール(硝酸2.5mlとエチアルコール97.5mlの混合液)で腐食した後、組織観察した。

化学成分分析用試料は外表面に付着する土砂を除去するため、エチアルコール、アセトンで超音波洗浄した。試料を130°Cで2時間以上乾燥し、テフロン分解容器に直接秤量して、塩酸、硝酸、フッ化水素酸、および蒸留水を加え密栓した後、マイクロウェーブ分解装置を使って分解した。溶液を蒸留水で定溶とし、T.Fe(全鉄)、Cu(銅)、ニッケル(Ni)、コバルト(Co)、マンガン(Mn)、リン(P)、チタン(Ti)、ケイ素(Si)、カルシウム(Ca)、アルミニウム(Al)、マグネシウム(Mg)、バナジウム(V)の12元素を誘導結合プラズマ発光分光分析法(ICP-OES法)で分析した。

5 調査結果

5-1 鉄器の化学組成

表2に鉄器から摘出した試料の化学成分分析結果を示す。No5、No6 Bs、およびNo8 Eg・Bsから摘出した試料のT.Feは95.48～98.57%ではばメタルからなる試料が、No2 Eg・BsのT.Feはそれぞれ89.85%、83.07%で、メタルに銹が混在した試料が分析されている。他の7試料のT.Feは65.37～76.85%で銹化が進んでいる。No3、No4 Eg・Rg、No6 Bs、およびNo7 Egから0.01%以上のCuが、No1、No2 Eg、No3、No4 Eg・Rg、No6 Bs、No7 Eg・Bs、およびNo8 Bsからは0.01%以上のNiが検出され、分析した13試料全てに0.01%を上回るCoの含有が確認された。No2 Eg・Rg、No6 Eg、およびNo7 Egからは0.1%以上のPが分析されている。

銹化が進んだ試料に含有される微量元素を検討する場合、埋蔵環境からの富化について検討する必要がある⁶。5-3で述べる羽口の分析結果(表3)が示すように、遺物を埋蔵する土砂に100ppm(0.01%)以上のCu、Ni、およびCoが含有されることはずない。金属考古学的調査を行った鉄器に銹またはその合金をはじめとする異種金属の付着がみられなかったこと⁷を考慮すると、0.01%以上のCo、Ni、Cuが検出された試料については、そのほとんどが銹化前の地金に含まれていたと判断される。

一方、Pについては埋蔵環境下から富化されることがある⁸。銹化した試料におけるPの分析値を評価する場合、遺物を取り囲んでいた土壤中のP含有量、およびはば同じ埋蔵環境下にあったとみなすことのできる他の鉄器のP含有量を調査し、それらの結果を比較して富化の有無を検討する必要がある。No9羽口の製作に使用された粘土状物質に0.1%を上回るPが含有されていることをふまえると、銹化が進んだ試料から検出されたPをただちに製作に使用された銹中のPに起因するとみるのは難しい。ここではメタルと銹が混

在した試料からなるNo 2 Eg・Rgに0.1%近く、またはそれ以上のPが含有されていた可能性があることを指摘するにとどめる。

5-2 鋼器の組織観察結果

No 2 Eg(図1 a.)およびBsから抽出した試料にはメタルが残存していたので、ナイタールで腐食した後、組織観察した。Eg部から抽出した試料は黒く腐食されたパーライト〔フェライト(α Fe)とセメントタイト(Fe_3C)の共析組織〕とフェライトによって(図1 b.)、Bs部から抽出した試料は微細なパーライトとフェライトからなる領域と主としてフェライトからなる領域が層状に並んだ組織によって構成される(図1 c.)⁴⁾。前者はパーライトの占める面積割合から炭素量0.1~0.2%の鋼、後者は炭素量0.1%以下の鋼と評価される。Eg部のメタルにはFe-Ti-Al-Mg-O系の化合物(XT、以下では主として鎧化鉄と鎧化チタンからなる化合物をXTとする)、および微細な結晶を内包するガラス化した領域(Ma)からなる非金属介在物が、Bs部のメタルには灰色の粒状をしたウスイタイト(Wu:化学理論組成 FeO)、化合物XT、および微細な結晶を内包するガラス化した領域(Ma)からなる非金属介在物がいたるところに残存していた。

No 5、No 7 Bs、およびNo 8 Eg部から抽出した試料もNo 2 Eg部同様炭素量0.1~0.2%の鋼によって、No 8 Bsから抽出した試料は炭素量0.3~0.4%の鋼によって構成されている(図3・4)。No 6 Egから抽出した試料に残存するメタルは、その全域がマルテンサイト組織からなる⁴⁾。この組織の場合、熱処理を施し標準組織に戻した後炭素量を評価する必要があるが、上記組織の喪失を考慮し今回は実施を見合わせた。No 6 Bsから抽出した試料に残存するメタルはその全域が黒く腐食されており、炭素量0.6~0.7%の鋼と評価される(図2 a.-c.)⁴⁾。

No 3およびNo 7 Egの錆部分には金属光沢を呈する線状結晶(Cm)またはその欠落孔が観察される(図3)。No 3の結晶Cmまたはその欠落孔は層状に並び島状領域を形成する。これまでに行われた組織観察結果に基づけば^{2,3)}、結晶Cmはパーライト中のフェライトが鎧化し、セメントタイトが抜け落ちることによって生成した組織と推定される。この組織をパーライトとし鎧化による組織の膨張を無視すると、No 3は炭素量0.2~0.3%の鋼とみることができる。No 7 Egについては結晶Cmが局所的に残存しているに過ぎず、鎧化前の地金の炭素量を推定することは困難であった。No 1、No 4 Eg・Rgには製作時に使用された地金の組織を推定できる領域を見出すことはできなかった。

No 1およびNo 4 Egから抽出した試料にはFe-Ti-Al-Mg-O系のチタン化合物(XT)、No 3およびNo 7 Egから抽出した試料にはFe-Ti-Al-Mg-O系のチタン化合物(XT)とガラス質ケイ酸塩(Gi)からなる非金属介在物が、No 4 Rgから抽出した試料にはFe-Ti-Al-Mg-O系のチタン化合物(XT)と微細な結晶が混在したガラス化した領域(Ma)からなる非金属介在物がみられた。No 5およびNo 6 Bsには、Fe-Ca-Al-K-Na-Mg-Si-Ti-O系ガラス質ケイ酸塩(Gi)、No 6 EgおよびNo 8 EgにはFe-Mg-Si-O系化合物[Fa:マグネシウムを固溶した鉄かんらん石 $[2(Fe,Mg)O \cdot SiO_2]$ と推定される]、および微細な結晶を内包するガラス化した領域(Ma)、No 8 Bsにはそれにウスイタイトが加わった非金属介在物が見出され、No 7 Egには灰色を呈するFe-O系領域とやや暗灰色を呈するFe-Si-O系領域が混在した非金属介在物が観察された(図2-4)。上述の組織観察結果を整理すると表2右欄のとおりとなる。

5-3 羽口の化学組成

No 9 Sa₁のT.Feはそれぞれ9.00%、4.31%、Al、Si、およびCaはそれぞれ8~10%、20~22%、0.7~2.4%である。Alに富む粘土状物質が羽口の製作に使用されていて、先端部分から摘出した試料はもう一方の端部からの試料に比べFe、Caに富んでいる。No 14のSa₁からはそれぞれ4.24%、3.76%のT.Fe、0.3~0.5%のCa、9~11%のAl、18~24%のSiが検出された(表3)。

5-4 羽口の組織観察結果

No 9 Sa₁から摘出した試料は酸化ケイ素(Qz:石英と推定される)、Fe-Ti-Al-Mg-O系化合物(XT)とガラス化した領域から、Sa₂から摘出した試料は酸化ケイ素(Qz:石英と推定される)とほぼガラス化した領域からなる(図7)。No 14 Sa₁から摘出した試料はFe-Ti-Al-Mg-O系化合物(XT)、Fe-Mg-Al-O系化合物(Ha)、およびガラス化した領域からなり、Sa₂から摘出した試料は酸化ケイ素(Qz:石英と推定される)、斜長石と思われる鉱物(Op1)、およびほぼガラス化した領域によって構成される(図8)。

5-5 鉄滓の化学組成

No 11・12およびNo 13・14のT.Feは42.32~61.50%で、他に5.70~7.00%のSi、0.632~3.09%のAlを含有する。酸化鉄に富む鐵滓である。No 12、No 14にはそれぞれ9.73%、7.61%のTiが含有されており、No 11およびNo 13とはTi含有量の点で明瞭な差異がみられる(表4)。

5-6 鉄滓から摘出した試料の組織観察結果

No 10の凸部表面は青灰色を呈し、部分溶融した粘土状物質が固着している。摘出した試料にはいたるところに空隙がみられる。マクロ組織枠内部のEPMAによる組成像(COMP)には、灰色の粒状化合物ウスタイト(Wu)、やや暗灰色のFe-Mg-Si-O系化合物(Fa)、微細な結晶を内包する黒色領域(Ma)が観察された(図9)。No 12から摘出した試料もNo 10とほぼ同様の鉱物組成をとる。ただしNo 12にはやや暗色をした微細なFe-Al-O系化合物(Ha)が化合物Faの周縁に残存する(図10)。

No 11のマクロ組織枠内部はFe-Ti-Al-Mg-O系化合物(XT)と微細な化合物を内包するガラス化した領域(Ma)によって構成され、No 13領域R₁はFe-Ti-Al-Mg-O系化合物(XT)とガラス化した領域(G1)によって、領域R₂はやや暗灰色のFe-Ca-Mg-Si-O系化合物(Fa)、Fe-Ti-Al-Mg-O系化合物(XT)、および微細な化合物を内包するガラス化した領域(Ma)からなる。上記組織観察結果は表4右欄に整理される。

6 考察

6-1 鉄器の分類

後述するように、鉄器製作の素材となる地金は鍛鉄(現代の金属工学の定義に従えば炭素量が2%を上回る鉄)と鋼(現代の金属工学の定義に従えば炭素量2%以下の鉄)に分類される。金属考古学的調査を行った8点の鉄器はいずれも鋼を素材とし、No 6には炭素量0.6~0.7%の鋼が、No 2、No 3、No 5、およびNo 7には炭素量0.4%以下の鋼が配されていた。とりわけNo 6の刃部には焼き入れ組織が観察された。炭素量0.6~0.7%の鋼を使って鎌の形を整えた後、刃部に熱処理が施されたものと推定される。なお、調査に使用した試料は調査対象とした鉄器の一部であり、資料全体の断面構造は不明である。古墳出土刀剣の中に入為的に炭素量の異なる鋼を合わせ鍛えて作刀したと推定される資料がみられること⁶、奈良時代の直刀の中にも

炭素量の高い鋼を心金とその両側を炭素量の低い鋼で挟んだ断面構造を有するものが確認されていること⁷を加味すると、8点の調査対象とした鉄器についても炭素量の異なる鋼を合わせ鍛えて製作された可能性がある。この点については当該資料から広領域にわたる調査試料を抽出し確認する必要がある。

6-2で述べるように、古代には複数の鋼製造法があった可能性がある。いずれの方法が用いられたとしても、多段階の工程を経て目的とする鋼が製造されたことは確実である。出発物質として同一の製鉄原料が使用されたとしても、製造方法や製造条件に応じ、製造される鋼の組成にはばらつきが生じる。従って、表2の分析結果を単純に比較するという解析方法では、実態を反映した資料の分類結果を得ることは難しい。表2の中で、Cu、Ni、Coの三成分は鉄よりも鏽にくい金属のため、一度メタルに取り込まれた後はそのほとんどが鉄中にとどまる。従って、合金添加処理が行われていなかったとすると、その組成比は鋼製造法の如何に係わらず製鉄原料の組成比に近似すると推定される。図6aは銅製鉄器から抽出された13試料のうち、鏽化Niが100 ppm (0.1%) 未満にあるNo 2 Bs、No 6 Eg を除く11試料の (mass % Cu)/(mass % Ni) と (mass % Co)/(mass % Ni) を、図6bには調査した13試料すべての (mass % Cu)/(mass % Co) と (mass % Ni)/(mass % Co) を求め、その値をプロットしたものである。図6a・bでは非金属介在物中に主として酸化鉄と酸化チタンからなる化合物(XT)が見出されたものを黒丸(●)、そして酸化鉄と酸化チタンからなる化合物(XT)が見出されなかつたものを白丸(○)で示した。

図6aではNo 6 Bs、No 7 Eg・Bs、No 8 Eg・Bsはほぼ中央下にまとまって、No 3はその右方に近接して分布する。No 2 Egは中央下に、No 1およびNo 5は右方に、No 4 Eg・Rgは中央上方の離れた位置にプロットされる。図6bでは、No 6 Eg・Bs、No 7 Eg・Bs、No 8 Eg・Bsは左下右方にほぼまとめて分布し、その左方にNo 1、No 2 Eg・Rg、No 3、およびNo 5がプロットされる。No 4 Eg・Rgは図の右方に分布する。図6a・bから以下の2点を指摘できる。

- ① No 1およびNo 5、No 2およびNo 3、およびNo 6～No 8はそれぞれ組成が同じ製鉄原料を使って生産された鋼を用いて製作された可能性が高い。
- ② No 4は①とは組成が異なる鋼を用いて製作された可能性が高い。

6-2 古代における鋼の製造

古代の鋼製造法については幾つかの方法が提案されており見解の一致をみるにいたってはいない。その主因は、原料鉱石〔砂鉄もしくは鉄鉱石⁸〕を製錬して得られる主生成物の組成についての見解の相違にある。

製錬産物である鉄は炭素量に応じ、鋼と鉄鉄の2つに分類される。製錬炉で得られた鉄から極力鋼部分を抽出し、含有される不純物を除去するとともに、炭素量の増減を行って目的とする鋼を製造する。そのようにして製造された鋼を使って、製品鉄器が製作されたとする見方がある⁹。製錬炉で直接に鋼がつくり出されるという意味で、この方法は近世たら吹製鐵における錫押法¹⁰によって生産された鉄塊を純化する操作に近似する。また、この方法によって得られた鉄〔炭素量が不均一で鉄滓が混在した鉄（主に鋼からなるが鉄鉄も混在すると考えられている）〕を精製し目的とする鋼に変える操作は、精錬鍛冶¹¹と呼ばれている。

古代に鋼を溶融する技術は未確立であったと考えられるので（溶融温度は炭素量によって異なるが、炭素量0.1～0.2%の鋼を溶融するためには炉内温度を1550℃以上に保つ必要がある¹²）、主として鋼から成る鉄から鉄滓を分離・除去する際の基本操作は加熱・鍛打によったと推定される。組成が不均一な鉄から純化された鋼を得る操作に精錬鍛冶という用語が用いられたのは、上述によるものと推察される。

一方、おびただしい数の鉄仏や鉄鍋、鉄釜をはじめとする铸造鉄器の普及が示すように¹³、遅くとも9

世紀には銑鉄を生産する技術、すなわち銑鉄を炉外に流し出す製錬法が確立されていたとする見方が出されている¹⁶⁾。得られた銑鉄を溶解し鋳型に注ぎ込むことによって鋳造鉄器が製作される。また、生産された銑鉄を脱炭することにより鋼の製造も可能となる。この方法による鋼製造は、銑鉄を経由して鋼が製造されるという意味で、間接製鋼（鉄）法¹⁷⁾に位置づけられる。

銑鉄を脱炭する方法の一つとして、近世たら吹製鉄における大鍛冶¹⁸⁾がよく知られている。たら吹製鉄には銑押法と鋳押法の2つの方法がある。後者における生産の主目的物は銑鉄（主として鋼からなる鉄塊）、前者は炉外に流し出される銑鉄で、副生成物として炉内に銑鉄もできる。鋳押法において銑鉄は操業の妨げになるので、鉄塊をたえず炉内に入れ炉外に取り出すようつとめたという。このようにして生産された銑鉄は鍛冶場に運ばれる。そこではまず火床炉の炉底に木炭を積み、その上に銑鉄を羽口前にアーチ形に積み重ね、さらに小炭で覆った後底部に点火する。積み重ねられた銑鉄は内部にあるものから溶融し、滴下する。この時、羽口付近の酸化性火¹⁹⁾にふれ酸化され、鋼（左下鉄）となる。ここまで操作は「左下」と呼ばれる。左下鉄は製錬時の副生成物である鋳とともに再度同じ火床炉にアーチ状に積まれ、上述と同様にして脱炭が図られる。脱炭が十分に進んだところで金敷の上にのせ、加熱・鍛打によって鉄滓の除去と整形がなされる。後者は「本場」と呼ばれる。上記の「左下」と「本場」、2つの操作を経て包丁鉄を造る方法が大鍛冶といわれている²⁰⁾。上述から明らかなように、大鍛冶における「本場」の操作内容は出発物質こそ異なるものの、基本的に先に述べた精鍛鍛治とは同じとみることができる。

大鍛冶では空気酸化により局的に銑鉄の脱炭が図られるが、溶銅を準備し、大鍛冶と同じ原理によって脱炭する方法が古代に行われていたとする見方が出されている²¹⁾⁻²³⁾。この方法の場合、溶銅の確保とそれを脱炭するための設備・道具が不可欠であり、現在その点についての検討が進められている。

上記から明らかなように、鉄に関する生産設備として少なくとも①製錬炉、②溶解炉、③精鍛炉、④鍛冶炉の4つがあった可能性がある。さらに、製錬炉としては主として銑鉄を生産するための炉と鋼を生産するための炉が、精鍛炉については銑鉄を局的に溶融し脱炭するための炉と、溶銅または部分溶融した銑鉄を準備した後それを脱炭して鋼を製造する炉が、鍛冶炉については精鍛鍛治と小鍛冶があった可能性があり、検出された炉跡の残存状況と出土資料の形状でただちに機能を決定することはきわめて危険である。以下ではこの点に留意し、考古学的発掘調査結果と出土鉄滓の金属考古学的解析結果を基に、羽口の用途および鉄滓の成因について検討することとする。

6-3 推定される羽口の用途

No 9は黄褐色を呈する帯状領域が壁体に被着され、赤褐色を呈する領域が構造物の外側に、灰褐色を呈する部分が構造物にあたったと推定される。なお、構造物内で生じた反応については不明である。No14は軌道内径がほぼ一様で肉厚であるという点でNo 9とは形状が異なる。先端部分は一部溶損し、黒褐色を呈している。No 9および当該資料のもう一方の端部に比べ先端部は鉄に富むが、これは羽口先の反応サイトにおいて生成した酸化鉄に起因すると考えられる。No14については鉄に関する生産活動で使用された可能性が高い。

6-4 鉄滓の成因

金属考古学的調査を行った鉄滓は9世紀代に比定されるSI 22住居跡およびSX 02堅穴状遺構床面から検出された4点の純形滓である。これら2遺構において鉄関連炉跡は未検出ため、遺構に基づく成因推定は困難である。ここでは鉄滓の形状と組成を基に、その成因について検討する。

4点の鉄滓の凸部はいずれも青灰色を呈し、いたるところに溶融または部分溶融した粘土状物質が残存している。木炭の噛み込みや固着はみられない。表面形状と組織観察結果に基づけば、Si、Alを主成分とする粘土状物質に酸化鉄を主成分とする鉄滓が反応し生成した資料と推定され、外観形状の点からは、6-2で述べた精錬鍛冶または精錬に伴って生成した資料とみることができる。

精錬鍛冶における出発物質は、主として銅からなり、相当量の鉄滓が混在した組成が不均一な鉄である。木炭の燃焼熱による炉内到達可能温度を考慮すると、主として銅からなる鉄を溶融することは困難であり、純化の操作は基本的に加熱・鍛打によったとみなければならない。この操作では鉄塊に付着または鉄塊中に固着する鉄滓が破碎され除去される。その過程で飛散した鉄滓が炉内に入り、炉材粘土と反応しながら溶融もしくは部分溶融した後、炉底にたまり固化する。精錬鍛冶の立場に立った場合、4点の椀形滓はその形状から、炉底部において生成したと判断される。その場合、熱源である木炭が共存しているので、鉄滓中にある程度の木炭が噛み込まれるはずである。上記4点の鉄滓には木炭の噛み込みや固着はみられない。熱源である木炭と反応サイトとが分離された状況下において生成した鉄滓の可能性がある。

椀形を呈すること、木炭と反応サイトとが離れた位置にあった可能性が高いことを考え合わせると、粘土状物質を用いて製作された椀形容器の中に溶銅を準備し、主として空気酸化によって溶銅を脱炭して銅を製造する操作（精錬）が行われていた可能性が高いと筆者は考える。4点の椀形滓に残存する酸化鉄、鉄かんらん石、またはFe-Mg-Al-O系化合物は、溶銅の再酸化物質と粘土状物質との反応生成物とみることによってその説明が可能となる。6-3で確認された形状の異なる羽口のうち、軌道内径がほぼ同じ太さで肉厚のNo14については、銅鉄を脱炭するための空気送風に使用された可能性がある。

No11~14椀形滓において検出された酸化鉄は、銅鉄の一部が再酸化し粘土状物質と反応して生成したもの、No12・14鉄滓中の主として酸化鉄および酸化チタンからなる化合物は、粘土状物質中に残存するチタン鉱物と酸化鉄との反応生成物、あるいはチタン化合物を含む物質の造滓材として使用されたことのいずれかに起因し、炭素含有量の異なる銅の造り分けを行うために施された操作上の措置の可能性が考えられる。また、No14羽口先端部から摘出した試料中の酸化鉄は、銅浴の再酸化物が揮発し羽口先端に固着したものと思われる。これらの点については今後再現実験も含め吟味する必要がある。

精錬を想定した場合、銅鉄の入手方法が問題となる。精錬鍛冶の出発物質である組成が不均一な鉄はしばしば「荒鉄」と呼ばれる¹⁰が、文献資料の研究によってそれは「銅鉄」であることが指摘されている^{11,12}。東京都多摩市別所遺跡や岩手県平泉町柳之御所遺跡からは銅鉄塊が見いだされ、金属考古学的調査によってそれらは他地域からもたらされた可能性の高いとする見解が提示されている¹³。8世紀前葉に比定される茨城県つくば市島名八幡前遺跡では、鉄錫の中に銀化合物が点在した鉄滓が検出され、精錬過程で銀化合物を含む物質が使用された、あるいは精錬の出発物質として使用された原料銅鉄に銀化合物が含まれていた可能性のあることが指摘されている¹⁴。後者の場合、使用された原料銅鉄は特異な組成の鉄鉱石を始発原料とし、他地域から供給された可能性が高い。これらの調査結果は銅製造の素材となった原料銅鉄が8世紀段階に流通していた可能性があることを示している。

杉の堂遺跡では、製品銅器の他地域からの供給、銅製造の素材となった原料銅鉄の獲得、および使用不能となった銅製銅器の再利用を図りながら銅器の使用が図られたと思われる。これまで古代の銅造りは直接製銅法を基軸に検討されてきたくらいがあるが、銅の生産と流通、および銅を素材としての銅の製造と銅製銅器の製作を考慮に入れる古代の銅製造と銅器製作を考える必要がある。この問題意識の基に鉄関連遺構の発掘調査が進められ、生産設備の復元が図られれば、古代の銅製造法の実態に迫ることができるにちがい

ない。

註

- 1) 遺跡を発掘調査された財団法人岩手県文化振興事業団 丸山直美氏からのご教授による。
- 2) 佐々木稔、村田朋美「古墳出土鉄器の材質と泡金の製法」季刊考古学、8、1984、pp.27-33。
- 3) 佐々木稔、伊藤薫「川合遺跡出土の鉄斧、鐵鎌ならびに動先の金属学的調査」「静岡県埋蔵文化財調査研究所紀要」Ⅱ、1987、pp.63-73。
- 4) 「鉄鋼の顕微鏡写真と解説」丸善株式会社、1968年。
- 5) Knox, R. "Detection of carbide structure in the Oxide remains of ancient steel", Archaeometry, Vol. 6, 1963, pp.43-45.
- 6) 俄國一『日本刀の科学的研究』日立印刷、1982年。
- 7) 赤沼英男、木村克則「東北地方北部終末期古墳出土刀の材質と製法」岩手県立博物館研究報告、7、1989、pp.63-74。
- 8) 各種の岩石、とりわけ火成岩中の主として磁鐵鉱と含チタン磁鐵鉱を構成鉱物とする粒子が岩石の風化に伴って分離し、現地残留や風および水などの淘汰集積作用などで濃縮したものが砂鉄鉱床である。従って、砂鉄を構成する主要鉱物は磁鐵鉱であり、鉄鉱石と区別して使用することには岩石鉱物学上誤解を招く恐れがあるが、ここでは上述によって生成した鉱床から採取された磁鐵鉱および含チタン磁鐵鉱を主成分とする粒子を砂鉄、他の成因によって生成した鉄鉱床から採掘されたものを鉄鉱石と呼ぶ。
- 9) 「鉄鋼便覧」日本鉄鋼協会編、1981年。
- 10) 大澤正己「古墳供獻鐵滓からみた製鐵の開始時期」季刊考古学、8、1984、pp.36-40。
- 11) 河瀬正利「中國地方におけるたらたら製鐵の展開」「たらたら近代製鐵へ」平凡社、1990、p.11。
- 12) 五十川伸矢「古代・中世の鍛鉄譜物」国立歴史民俗博物館研究報告第46集、1992、pp.1-79。
- 13) 五十川伸矢「古代から中世前半における鍛鉄譜物生産」季刊考古学、57、1996、pp.57-60。
- 14) 関清「古代末の北陸・富山湾岸部の遺跡群」季刊考古学、57、1996、pp.30-32。
- 15) 空気酸化により鍛鉄中の炭素を脱炭した場合、操作方法によってはただちにαFeに近い組成の鉄が得られた可能性もある。古代の鋼製鋳物によく使用される亜共析鋼が脱炭を精緻してただちに得られたかどうか不明なため、本論では间接製鋼（鉄）法という表現をとった。
- 16) 村上英之助「村上・中澤の往復書簡」たらら研究、36・37、1996、p.78-88。
- 17) 福田豊彦「近世における『和鉄』とその技術－中世の『和鉄』解明のために－」「製鐵史論文集たらら研究会創立四十周年記念」たらら研究会、2000、pp.195-228。
- 18) 福田豊彦「近世前期、和鉄の生産と流通の基本形態」たらら研究、39、1999、pp.15-24。
- 19) 赤沼英男「みちのくの地から中世の鉄を見る」ふえらむ、Vol. 2 No.1、社団法人日本鉄鋼協会、1997、pp.44-51。
- 20) 福田豊彦「鉄を中心にみた北方世界一海を渡った鉄」「中世の風景を読む 第一巻 蝶夷の世界と北方交易」新人物往来社 1995、pp.154-198。
- 21) 赤沼英男、佐々木稔、伊藤薫「出土遺物からみた中世の原料鉄とその流通」「製鐵史論文集」たらら研究会編、2000、pp.553-576。
- 22) 「鳥名八幡前遺跡」財団法人茨城県教育財団、2003。

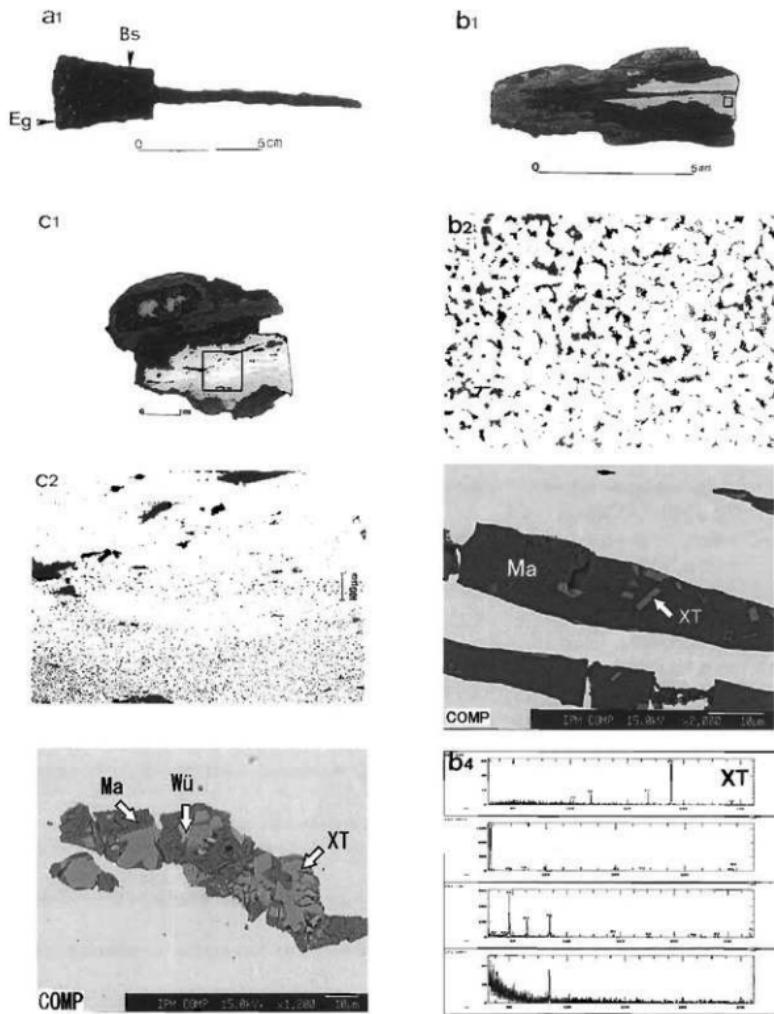


図1 No.2の外観と抽出した試料の組織観察結果

a₁: 外観。矢印は試料抽出位置。b₁: a₁: Eg部から抽出した試料のマクロエッティング組織、エッティングはナイタルによる。b₂: b₁棒内部のミクロエッティング組織、エッティングはナイタルによる。b₃: b₁メタルに残存する非金属介在物のEPMAによる組成像 (COMP) と定性分析結果。XT : Fe-Ti-Al-Mg-O系化合物、Ma : マトリックス。c₁: a₁のBsから抽出した試料のマクロエッティング組織。c₂: c₁棒内部のミクロエッティング組織、エッティングはナイタルによる。c₃: c₁メタルに残存する非金属介在物のEPMAによる組織像。Wü : ウスタイト、XT : Fe-Ti-Al-Mg-O系化合物、Ma : マトリックス。

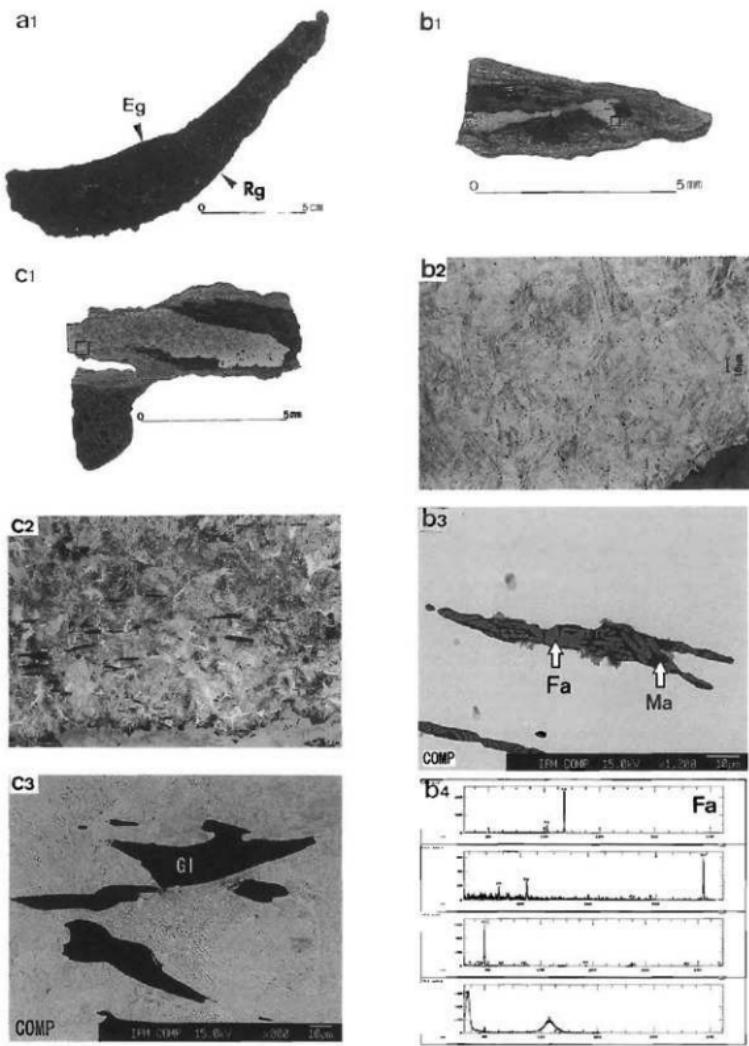


図2 No.6の外観と摘出した試料の組織観察結果

a₁: 外観、矢印は試料摘出位置。b₁: a₁Eg部から摘出した試料のマクロエッティング組織、エッティングはナイタールによる。b₂: b₁内部のミクロエッティング組織、エッティングはナイタールによる。b₃: b₁メタルに残存する非金属介在物のEPMAによる新成像(COMP)と定性分析結果。Fa: Fe-Mg-Si-O系化合物、Ma: マトリックス。c₁: a₁Rgから摘出した試料のマクロエッティング組織。c₂: c₁内部のミクロエッティング組織、エッティングはナイタールによる。c₃: c₁メタルに残存する非金属介在物のEPMAによる組織像。Gi: ガラス質ケイ酸塩。

	No. 3	No. 7	
外観		Bs	Eg
マクロエッティング組織			
ミクロエッティング組織			
組成像 EPMMAによる分析結果			
定性チャート			

図3 No. 3・7の外観と抽出した試料の組成観察結果

外観の矢印は試料抽出位置。ミクロまたはミクロエッティング組織はマクロまたはマクロエッティング組織の枠内部。エッティングはナイタールによる。Cmはセメンタイトまたはその欠落孔。XT: Fe-Ti-Al-Mg-O系化合物、G1: ガラス質ケイ酸塩。

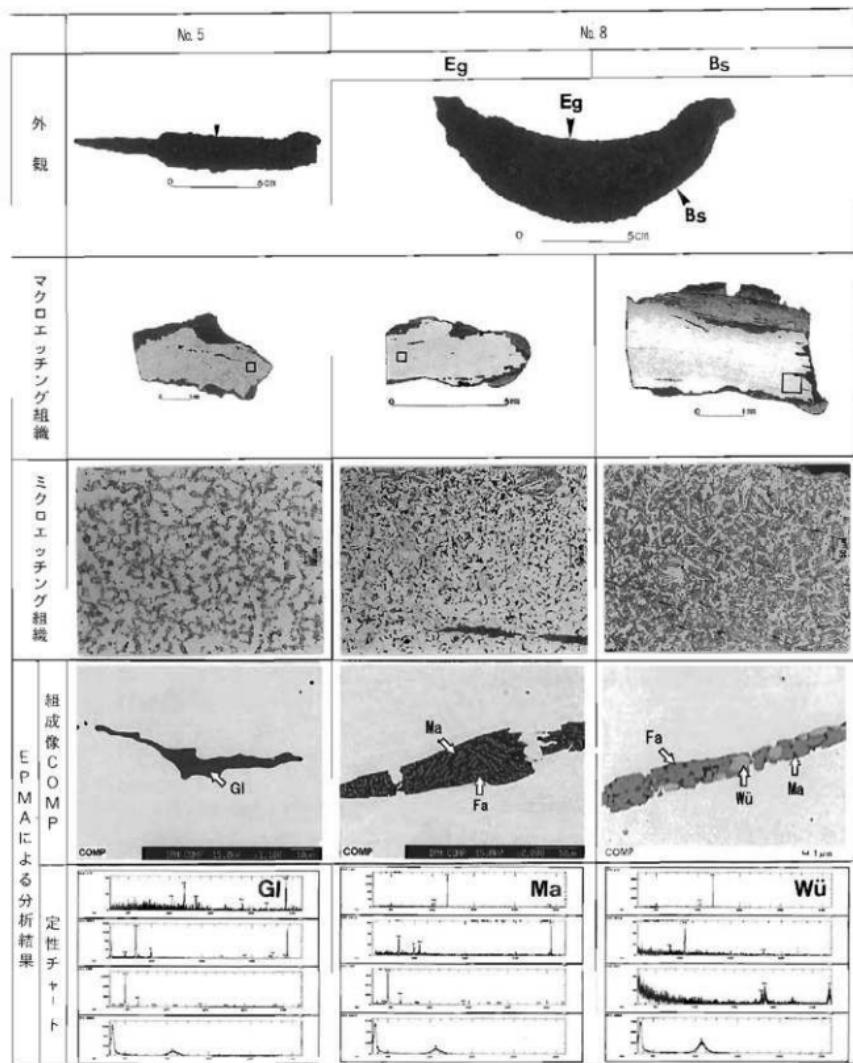


図4 No.5・8の外観と抽出した試料の組織観察結果

外観の矢印は試料抽出位置。ミクロエッティング組織はマクロエッティング組織の枠内部。エッティングはナイター
ルによる。Wü：ウスタイト、Fa：Fe-Mgi-Si-O系化合物、Gl：ガラス質ケイ酸塩、Ma：マトリックス。

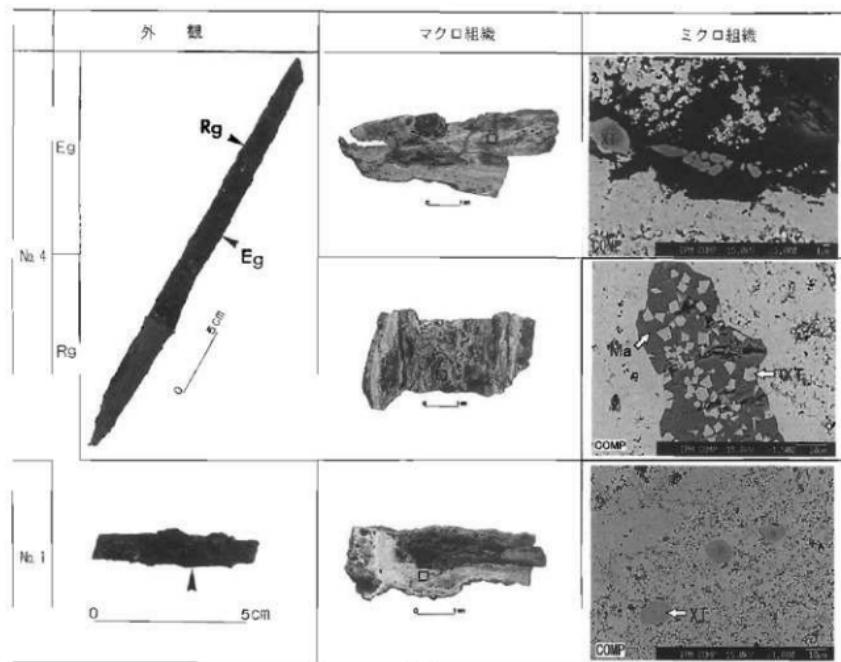


図5 No.1・4の外観と抽出した試料の組織観察結果

外観の矢印は試料抽出位置。ミクロ組織はマクロ組織の枠内部。XT: Fe-Ti-Al-Mg-O系化合物、Ma:マトリックス。

表1 調査資料の概要

No	分類	検出遺構		資料番号	資料名	推定年代
		遺構名	層位			
1	器	S I 0 8	カマド右袖	135	刀子	8世紀前半代
2		S I 1 5	床面	194	鉄鋤(方頭斧鎌式)	8世紀前半代
3		S I 0 7	床面直上	112	刀子	9世紀前半代
4		S I 1 8	床面	223	短刀	9世紀前半代
5		S D 0 1	埋土中位	435	刀子	—
6		X I B 9 d	Ⅱ層	436	鎌	—
7		X I B 9 d	Ⅱ層	437	鎌	—
8		X I B 9 d	Ⅱ層	438	鎌	—
9	鉄生産関連資料	S I 0 2	Q 1床面	27	羽口	8世紀代
10		S I 2 2	床面	—	鉄滓	9後~10世紀前半
11		S X 0 2	床面	—	鉄滓	9後~10世紀前半
12		S X 0 2	床直	—	鉄滓	9後~10世紀前半
13		S X 0 2	床直	—	鉄滓	9後~10世紀前半
14		X I B 6 e	Ⅱ層	440	羽口	—

注) Noは分析番号、検出遺構、資料番号、資料名、推定年代は岩手県埋蔵文化財調査センター
丸山真寛氏による。

表2 鉄器の分析結果

No	Sa	検出 遺構		資料名	化学組成 (mass%)										ミクロ組織	n.m.i.		
		遺構名	層位		T.Fe	Cu	Ni	Co	Mn	P	Ti	Si	Ca	Al	Mg			
1	-	SI08	カマド右袖	刀子	66.48	0.009	0.010	0.038	0.003	0.06	0.080	1.18	0.019	0.366	0.028	<0.001	no	XT
2	Eg	SI15	床面	鉄鎌	89.85	0.009	0.013	0.039	0.001	0.10	0.017	0.32	0.002	0.015	0.002	0.004	Pa(0.1-0.2)	XT, Ma
	Bs				83.07	0.007	0.009	0.030	0.005	0.13	0.033	0.81	0.014	0.225	0.017	0.002	Pa(≤0.1)	Wü, XT, Ma
3	-	SI07	床面直上	刀子	67.25	0.016	0.018	0.049	0.001	0.08	0.015	0.95	0.009	0.247	0.017	<0.001	Cm(0.2-0.3)	XT, Gi
4	Eg	SI18	床面	短刀	65.37	0.030	0.011	0.032	0.001	0.06	0.026	0.66	0.009	0.151	0.021	<0.001	no	XT
	Rg				67.15	0.066	0.020	0.042	0.002	0.08	0.078	0.67	0.008	0.217	0.014	<0.001	no	XT, Ma
5	-	SD01	埴土中位	刀子	98.57	0.004	0.003	0.012	0.001	0.03	0.001	0.30	<0.001	0.004	<0.001	<0.001	Pa(0.1-0.2)	Gi
6	Eg	X IB9d	II層	錆	76.85	0.009	0.009	0.020	0.001	0.16	0.001	0.92	0.029	0.108	0.005	0.001	Pa(不明)	Fa, Ma
	Bs				96.24	0.012	0.014	0.035	<0.001	0.04	0.000	0.34	0.007	0.015	<0.001	<0.001	Pa(0.6-0.7)	Gi
7	Eg	X IB9d	II層	錆	68.59	0.007	0.017	0.030	0.011	0.15	0.039	0.97	0.122	0.163	0.066	0.001	Cm(不明)	XT, Gi
	Bs				68.29	0.010	0.015	0.024	0.004	0.08	0.005	0.58	0.004	0.038	0.006	0.002	Pa(0.1-0.2)	Fe-O系, Fe-Si-O系
8	Eg	X IB9d	II層	錆	95.48	0.005	0.006	0.012	<0.001	0.03	0.001	0.27	<0.001	0.011	<0.001	0.001	Pa(0.1-0.2)	Fa, Ma
	Bs				96.00	0.009	0.015	0.028	<0.001	0.06	0.002	0.29	<0.001	0.015	<0.001	<0.001	Pa(0.3-0.4)	Wü, Fa, Ma

注1) Noは表1に対応。Saはサンプル採取位置。化学成分分析はICP-OES法による。

注2) Paはパーライト、Cuはゼンタイトまたはその欠落孔。括弧内の数値はミクロ組織またはミクロエッチング組織から推定される炭素量。noは見いだされず。

注3) n.m.i.は非金属介在物組成。Wü: ウスタイト(化学理屈組成 FeO)、XT: 主として酸化鉄および酸化チタンからなる化合物、Fa: Fe-O-Mg-O-SiO₄系化合物、Gi: ガラス質ケイ酸塩、Ma: マトリックス。

表3 烏羽の金属考古学的解析結果

No	Sa	検出 遺構		資料番号	化学成分 (mass%)										鉱物組成		
		遺構名	層位		T.Fe	Cu	Mn	Ni	Co	P	Ti	Si	Ca	Al	Mg		
9	1	SI02	Q1床面	27	9.00	0.003	0.051	0.003	0.004	0.10	0.478	20.3	2.33	8.48	0.661	<0.001	XT, Ha, Gi
	2				4.31	0.001	0.023	0.002	0.001	0.19	0.466	21.8	0.717	9.64	0.337	<0.001	Qz
14	1	X II B6e	II	435	4.24	0.001	0.023	0.003	0.001	0.01	0.510	18.9	0.523	10.4	0.553	<0.001	XT, Qz, Gi
	2				3.76	0.002	0.011	0.003	0.001	0.03	0.494	23.6	0.362	9.77	0.321	<0.001	Qz, Opl

注1) Noは表1に対応。Saはサンプル採取位置。化学成分分析はICP-OES法による。

注2) XT: 主として酸化鉄および酸化チタンからなる化合物、Ha: Fe-Mg-Al-O系化合物、Qz: 酸化ケイ素(石英と推定される)、Opl: 銛長石と推定される、Gi: ガラス質ケイ酸塩。

表4 鉄津の分析結果

No	検出 遺構	資料番号	化学成分 (mass%)										鉱物組成			
			T.Fe	Cu	Mn	Ni	Co	P	Ti	Si	Ca	Al	Mg			
10	SI22	床面	286	61.50	0.003	0.069	0.001	0.003	0.05	0.037	5.70	0.523	0.632	0.211	0.004	Wü, Fa, Ma
11	SX02	床面	361	47.61	0.003	0.365	0.002	0.023	0.09	9.73	5.73	1.23	1.78	0.894	0.077	XT, Ma
12	SX02	床面	362	59.81	0.018	0.056	0.003	0.008	0.11	0.215	6.74	0.587	2.50	0.301	<0.001	Wü, Ha, Fa, Ma
13	SX02	床面	363	42.32	0.003	0.184	0.001	0.018	0.08	7.61	7.00	1.57	3.09	0.925	0.086	(XT, Gi) (XT, Fa, Ma)

注1) Noは表1に対応。化学成分分析はICP-OES法による。

注2) Wü: ウスタイト(化学理屈組成 FeO)、XT: 主として酸化鉄および酸化チタンからなる化合物、Fa: Fe-O-Mg-O-SiO₄系化合物、Ha: Fe-Al-O系化合物、Q: 酸化ケイ素(石英と推定される)、Gi: ガラス質ケイ酸塩、Ma: マトリックス。

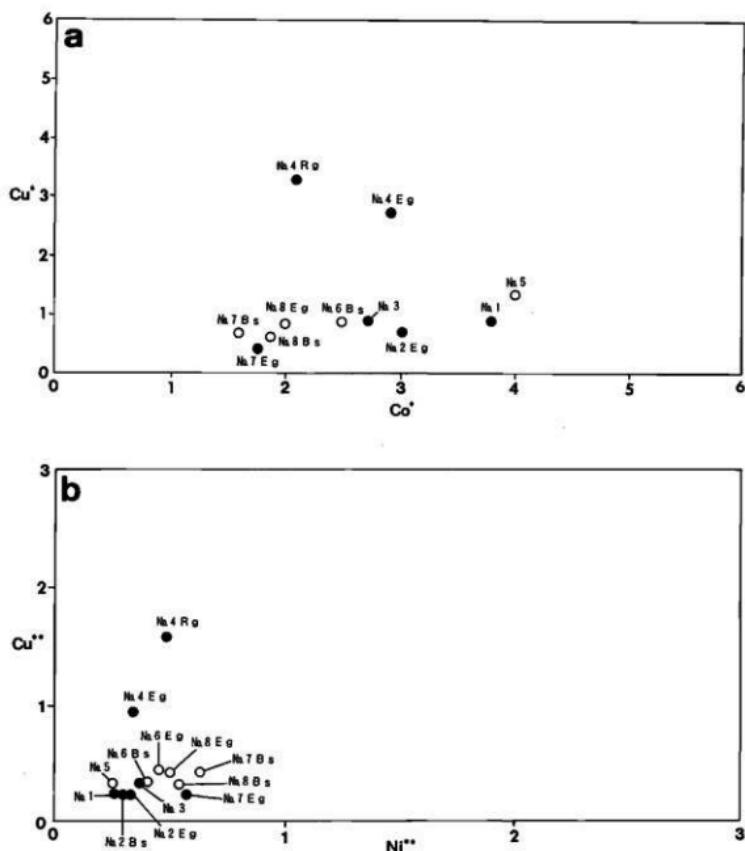


図6 鉄器に含有されるCu、Ni、Co三成分比

Co* : (mass % Co) / (mass % Ni)、Cu* : (mass % Cu) / (mass % Ni)。

Ni** : (mass % Cu) / (mass % Co)、Cu** : (mass % Ni) / (mass % Co)。

Noは表1に対応。白丸(○)：非金属介在物中にチタン化合物が見出されなかつたもの。黒丸(●)：非金属介在物中にチタン化合物が見出されたもの。

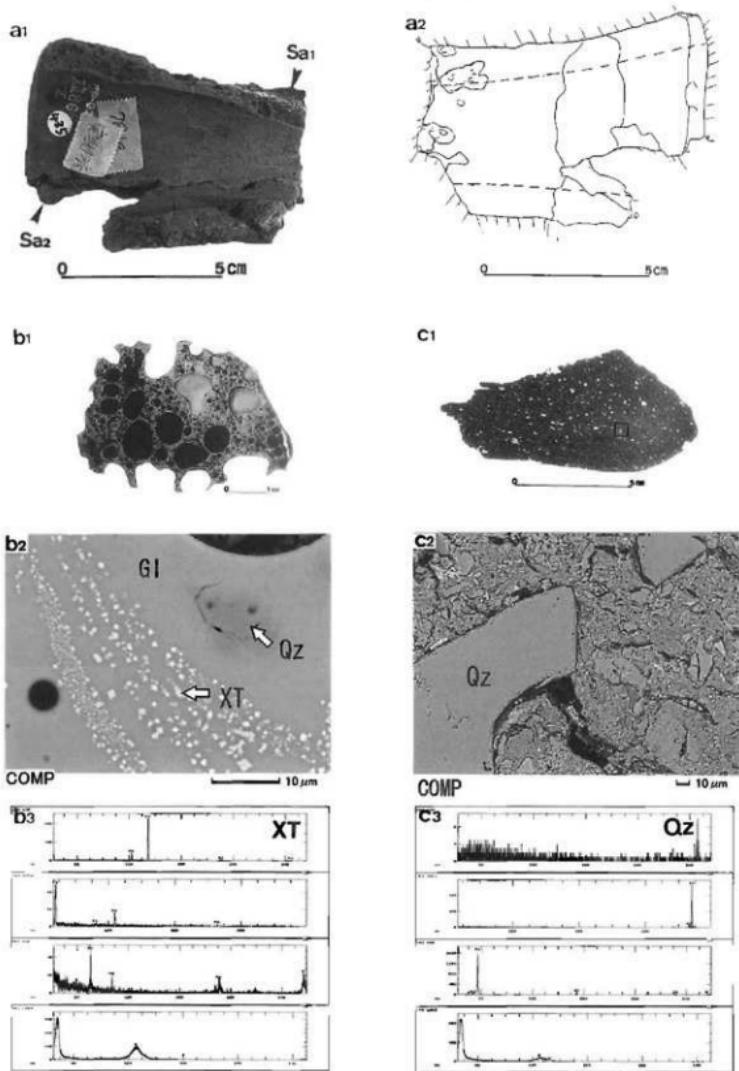


図7 No.9の外観と摘出した試料の組織観察結果

a₁: 外観、矢印は試料摘出位置。a₂: 実測図。b₁: a₁, Sa₁から摘出した試料のマクロ組織。b₂: b₁ 棒内部のEPMAによる組織像（COMP）と定性分析結果。XT: Fe-Ti-Al-Mg-O系化合物、GI: ガラス化した領域。c₁: a₁, Sa₂から摘出した試料のマクロ組織。c₂: c₁棒内部のEPMAによる組織像と定性分析結果。Qz: 酸化ケイ素（石英と推定される）。

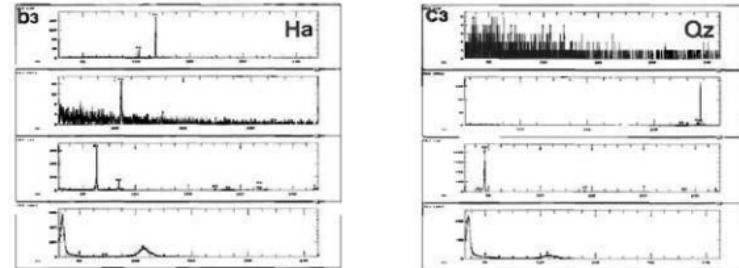
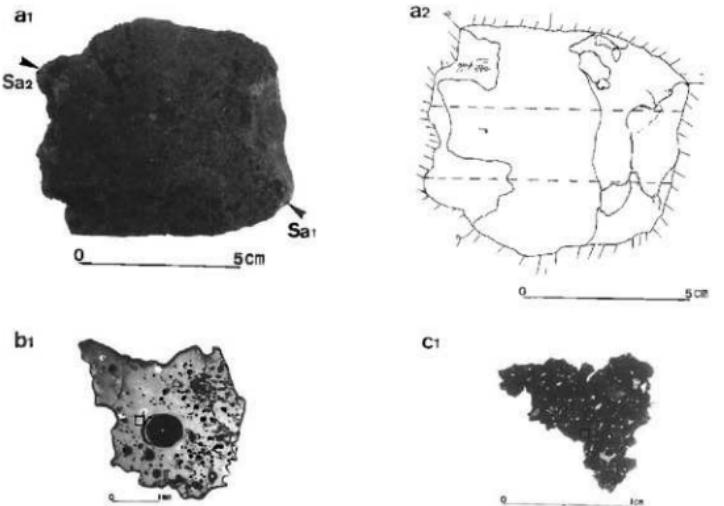


図8 No.14の外観と摘出した試料の組織観察結果

a₁: 外観と実測図。矢印は試料摘出位置。b₁: a₁Sa₂から摘出した試料のマクロ組織。b₂: b₁内部のEPMAによる組成像(COMP)と定性分析結果。XT: Fe-Ti-Al-Mg-O系化合物、Ha: Fe-Mg-Al-O系化合物、GI: ガラス化した領域。c₁: a₁Sa₂から摘出した試料のマクロ組織。c₂: c₁内部のEPMAによる組成像(COMP)と定性分析結果。Qz: 硅化ケイ素(石英と推定される)、Op1: 斜長石と推定される。

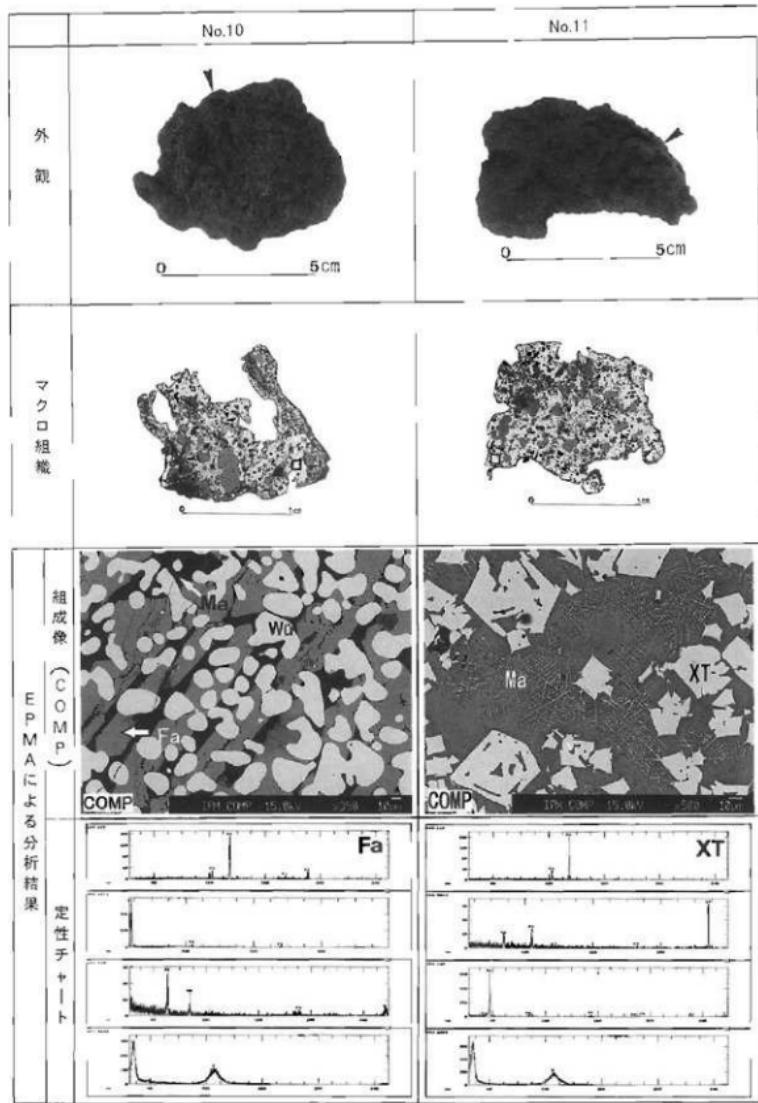


図9 No.10・No.11の外観と摘出した試料の組織観察結果

外側の矢印は試料摘出位置。EPMAによる分析位置はマクロ組織枠内部。Wu：ウスタイト、Fa：Fe-C-a-Mg-Si-O系化合物、XT：Fe-Ti-Al-Mg-O系化合物、Ma：マトリックス。

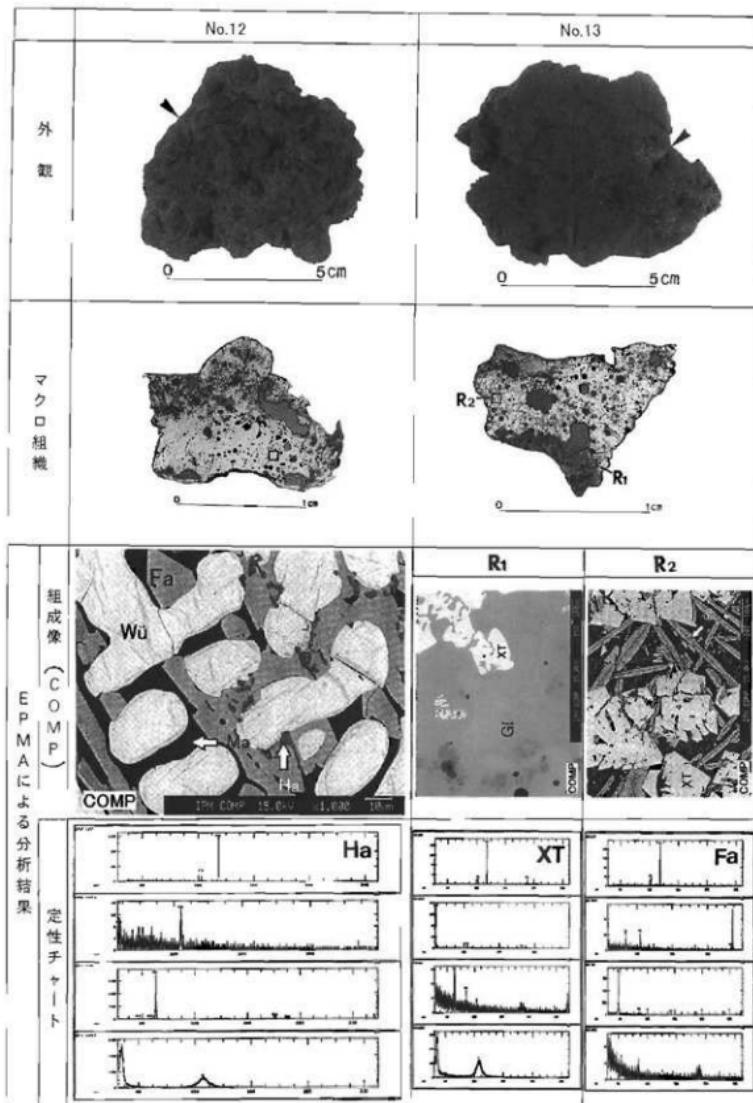


図10 No.12・No.13の外観と抽出した試料の組織観察結果

外観の矢印は試料抽出位置。No.12のEPMAによる分析位置はマクロ組織内部。No.13のEPMAによる分析位置はマクロ組織領域R₁, R₂内部。Wü:ウスタイト、Fa:Fe-Mg-Si-O系化合物、Ha:Fe-Al-O系化合物、XT:Fe-Ti-Al-Mg-O系化合物、GI:ガラス質ケイ酸塩、Ma:マトリックス。

写 真 図 版



遺跡遠景（南から）



調査区全景（北から）

写真図版 1 遺跡遠景・調査区全景



調査区近景（南から）



土層断面（東側）



土層断面（西側）

写真図版 2 調査区近景・土層断面



平面



断面



カマド断面（西から）



遺物出土状況

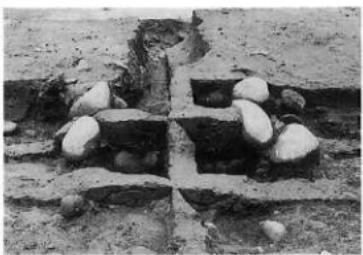
写真図版 3 S I O 1 窑穴住居跡



平面（南から）



断面（南から）



カマド断面（東から）



遺物出土状況

写真図版4 S102 穴住居跡



平面（南から）



断面（南から）



遺物出土状況



炭化材出土状況

写真図版5 S103竪穴住居跡



平面（南から）



断面（南から）



カマド断面（南から）



カマド断面（西から）

写真図版6 S 104 穴住居跡



平面（東から）



断面（西から）



遺物出土状況



遺物出土状況

写真図版 7 S I O 5 穹穴住居跡



平面（南から）



断面（西から）



カマド焼土路

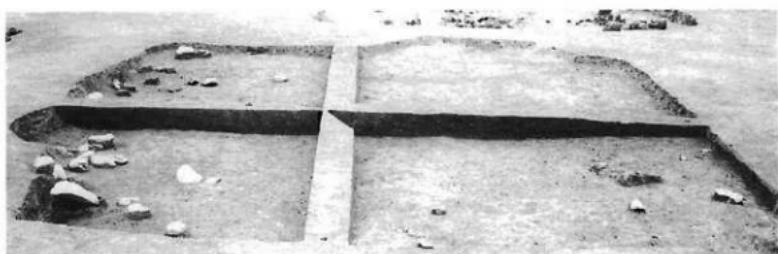


壁溝断面（南から）

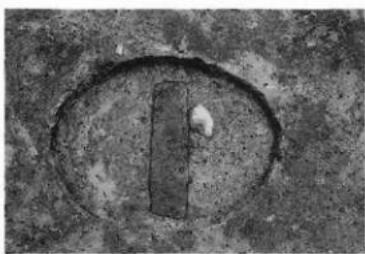
写真図版8 S I O 6 窓穴住居跡



平面（北から）



断面（東から）



柱穴平面



カマド断面（北から）

写真図版9 S107竪穴住居跡



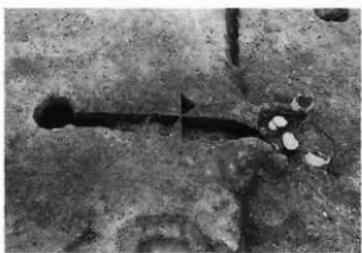
平面（南から）



断面（西から）



カマド使用状況



煙道断面（西から）

写真図版10 S 108 竪穴住居跡



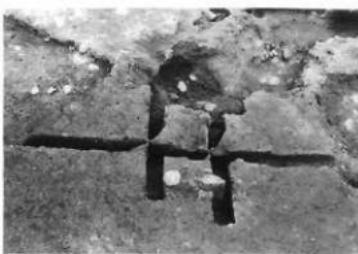
平面（北から）



断面（東から）



カマド断面（北から）

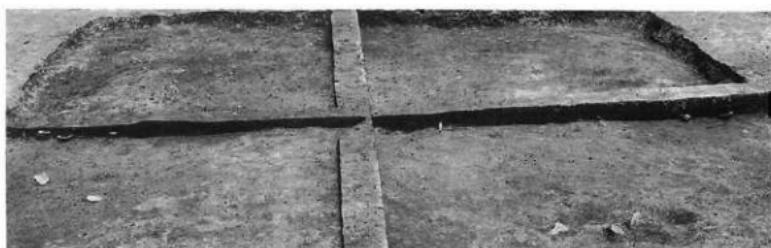


カマド断面（南から）

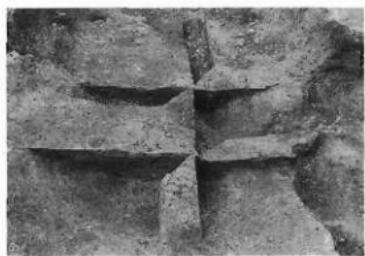
写真図版11 S 109 穹穴住居跡



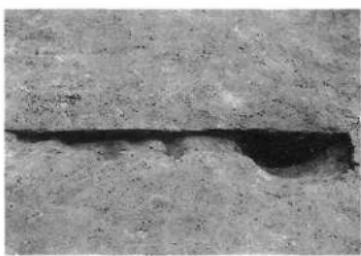
平面（北西から）



断面（南から）



カマド断面（西から）

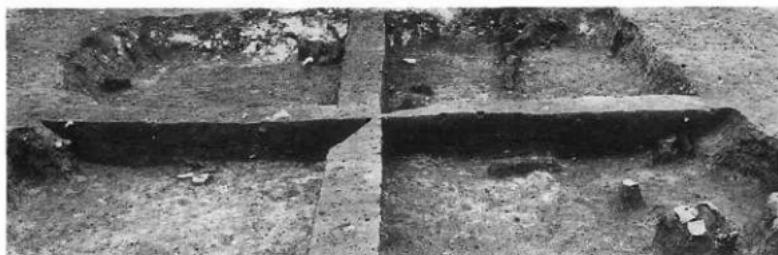


煙道断面（南から）

写真図版12 S I 10 窑穴住居跡



平面（東から）



断面（南から）



カマド断面（東から）

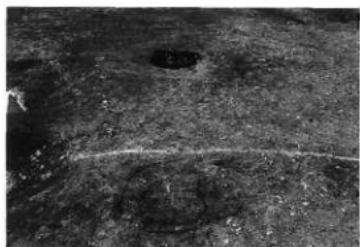


煙道断面（南から）

写真図版13 S 111 窑穴住居跡



平面（東から）



カマド跡焼土平面



焼土断面



柱穴断面



煙出し断面

写真図版14 S I 1 2 窑穴住居跡



平面（南から）



断面（西から）



焼土断面（西から）



焼土断面（南から）

写真図版15 S 13 穴住居跡



平面（南から）



断面（東から）



カマド断面（南から）

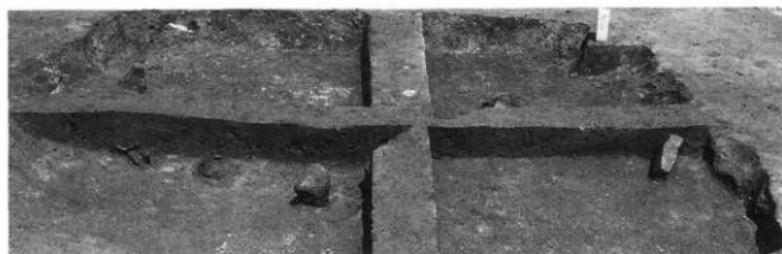


遺物出土状況

写真図版16 S I 14 穴住居跡



平面（南から）



断面（西から）



カマド断面（南から）

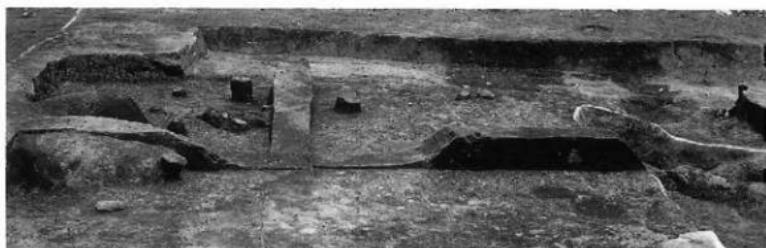


遺物出土状況

写真図版17 S I 15 堅穴住居跡



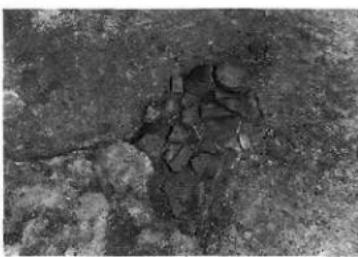
平面（南から）



断面（西から）

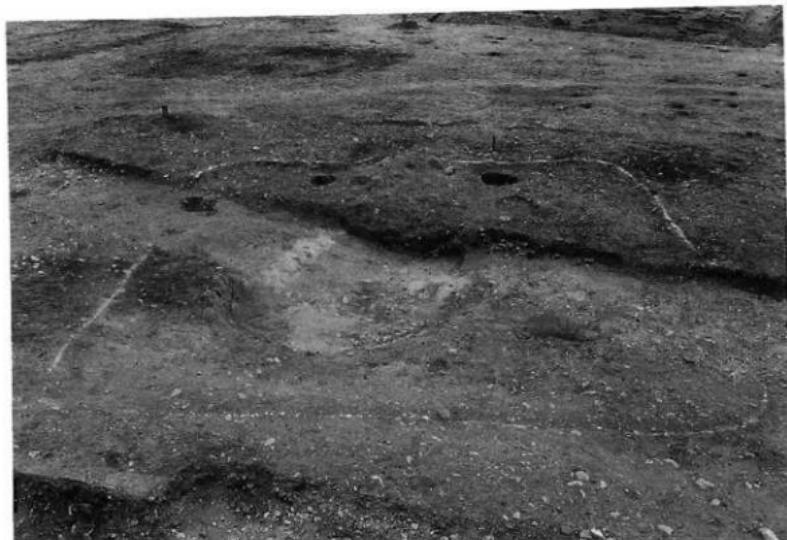


カマド断面（南から）



遺物出土状況

写真図版18 S I 16 窯穴住居跡



平面（西から）



断面（西から）



カマド断面（西から）

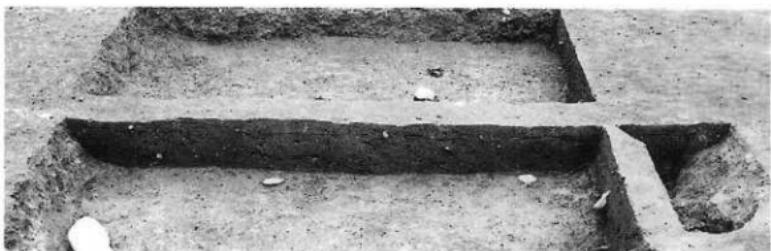


カマド断面（南から）

写真図版19 S I 17 窓穴住居跡



平面（南から）



断面（東から）



カマド断面（南から）

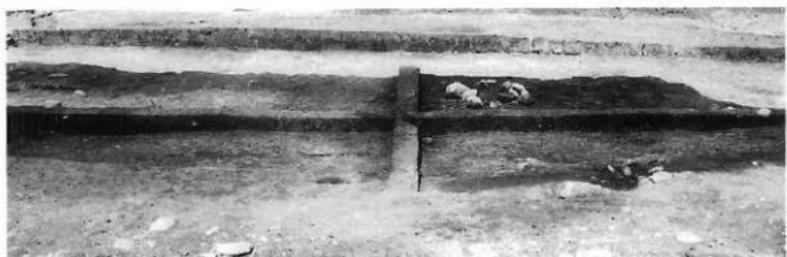


遺物出土状況

写真図版20 S I 18 穴住居跡



平面（南から）



断面（東から）

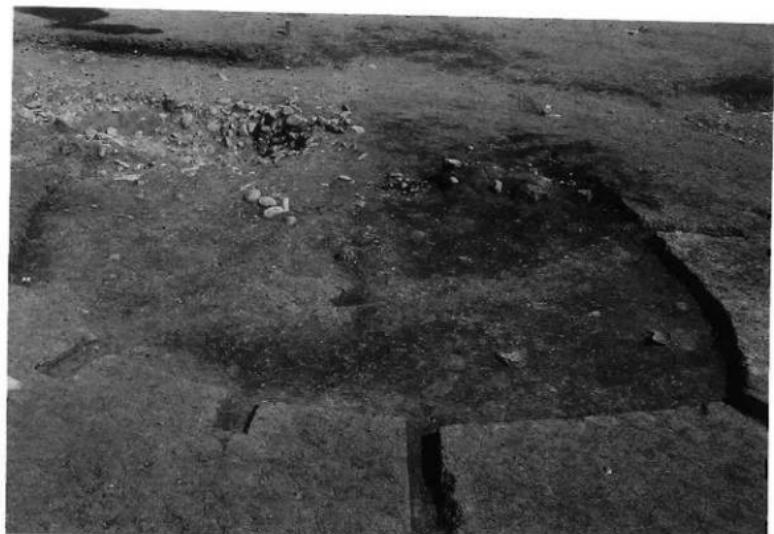


遺物出土状況



遺物出土状況

写真図版21 S 119 穹穴住居跡



平面（西から）



断面（東から）



カマド断面（西から）

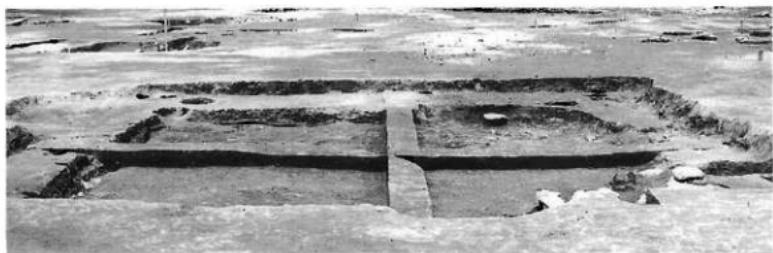


カマド断面（南から）

写真図版22 S 120 穹穴住居跡



平面（西から）



断面（南から）

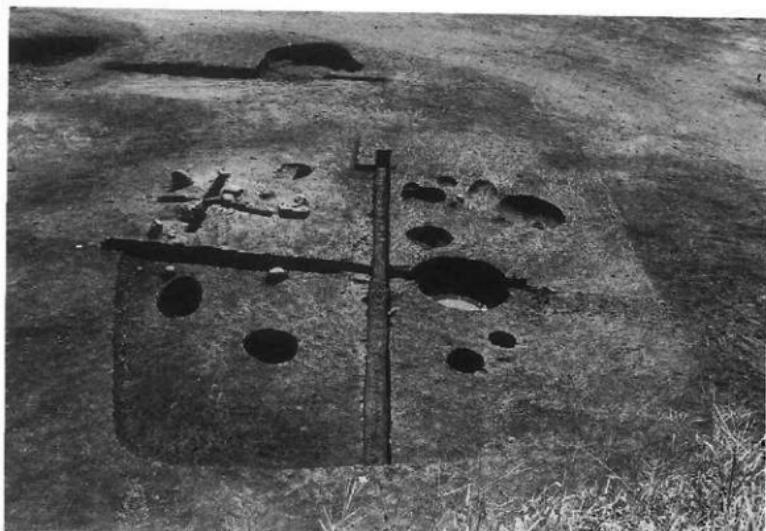


カマド断面（西から）



カマド煙道断面（南から）

写真図版23 S I 2 1 竪穴住居跡



平面（西から）



断面（南から）



カマド断面（西から）

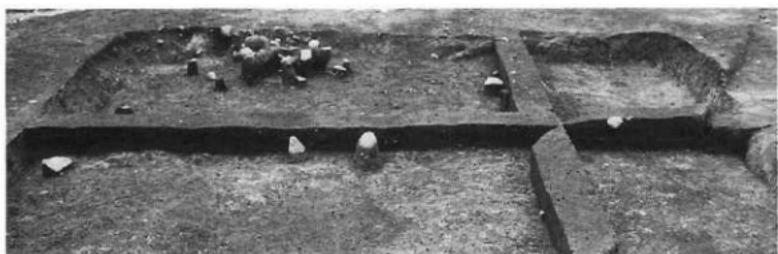


P 2 遺物出土状況

写真図版24 S 1 2 2 穩穴住居跡



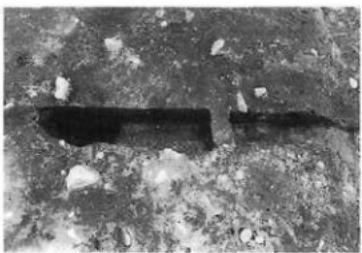
平面（南から）



断面（南から）



カマド（南から）

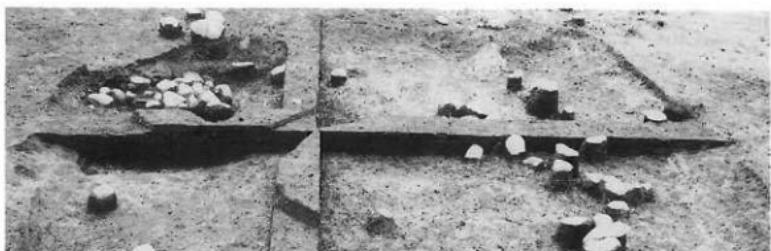


煙道断面（西から）

写真図版25 S 1 2 3 穴住居跡



平面（北西から）



断面（西から）



カマド焼土断面（西から）

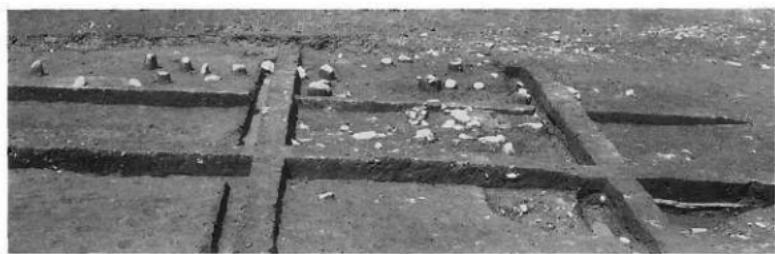


礎出土状況

写真図版26 S I 2 4 窓穴住居跡



平面（東から）



断面（東から）



遺物出土状況



作業風景

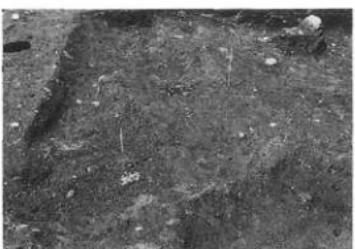
写真図版27 S X 0 1 遺物集中区



平面（東から）



断面（南から）



炭化種子出土状況



遺物出土状況

写真図版28 S X 0 2 穴状遺構



平面（南から）



断面（西から）



現地説明会風景

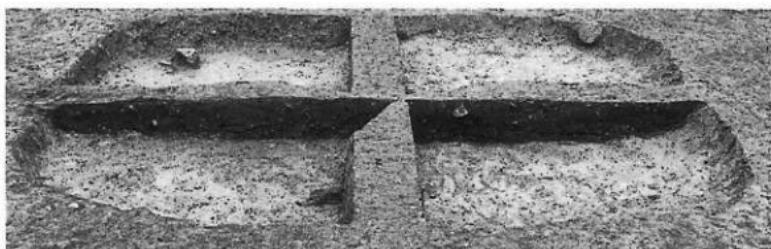
写真図版29 S X 0 3 穫穴状道樋・現地説明会風景



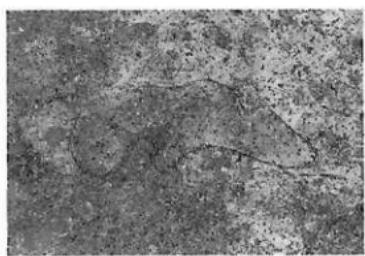
現地説明会風景



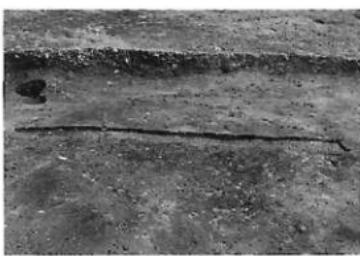
平面（南から）



断面（南から）

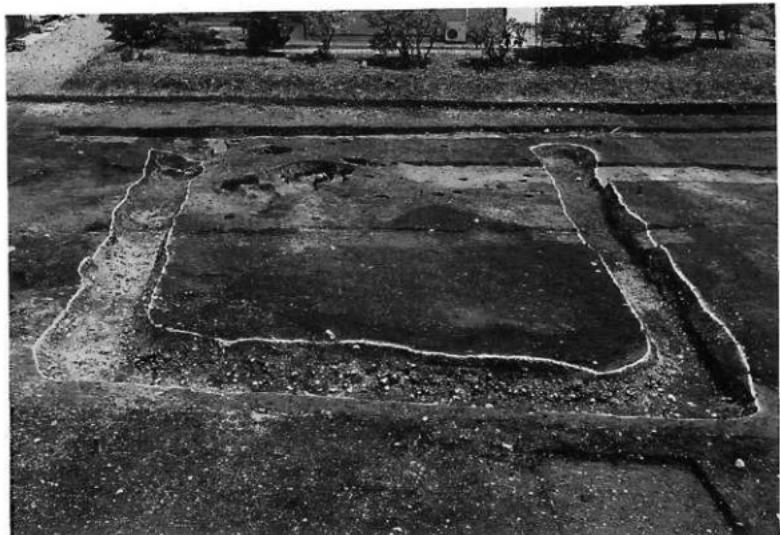


床面焼土平面



床面焼土平面（南から）

写真図版30 S X 0.4 竪穴状遺構



平面（西から）



断面①



断面②

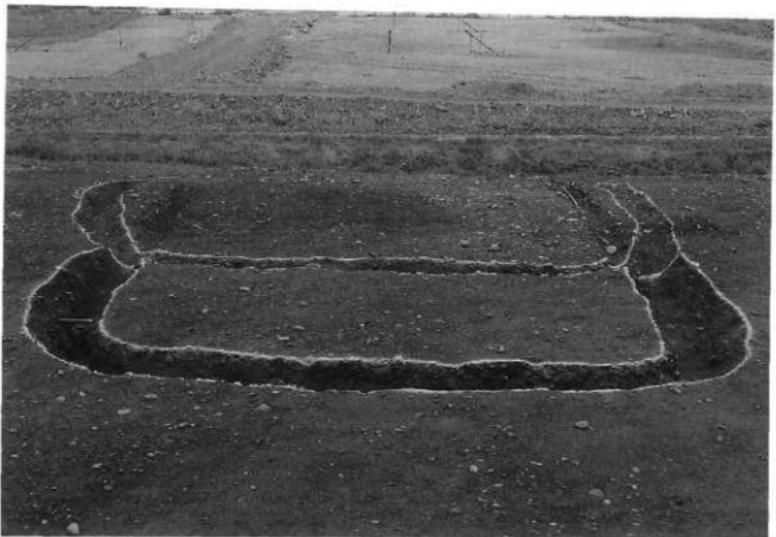


断面③



遺物出土状況

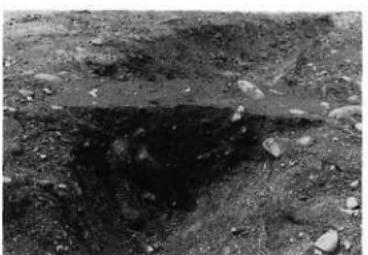
写真図版31 S D 0 1 方形周溝



平面



S D O 2 方形周溝 断面①



S D O 2 方形周溝 断面②



S D O 3 方形周溝 断面

写真回版32 S D O 2 · S D O 3 方形周溝



S D O 3 方形周溝 遺物出土状況



SD04溝跡 平面



SD04溝跡 断面③



SD04溝跡 断面①



作業風景



調査前現況

写真図版33 SD04溝跡・作業風景・調査前現況



SK 01 土坑 平面



SK 01 土坑 断面



SK 02 土坑 平面



SK 02 土坑 断面



SK 03 土坑 平面



SK 04 土坑 平面



SK 04 土坑 断面



作業風景

写真図版34 SK 01～04土坑



SK 05 土坑 平面



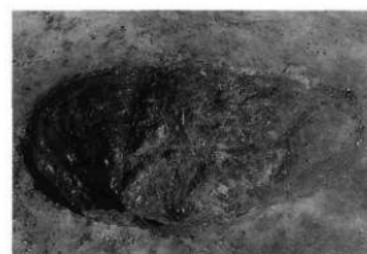
SK 05 土坑 断面



SK 06 土坑 平面



SK 06 土坑 断面



SK 07 土坑 平面



SK 07 土坑 断面



SK 08 土坑 平面



SK 08 土坑 断面

写真図版35 SK 05~08土坑



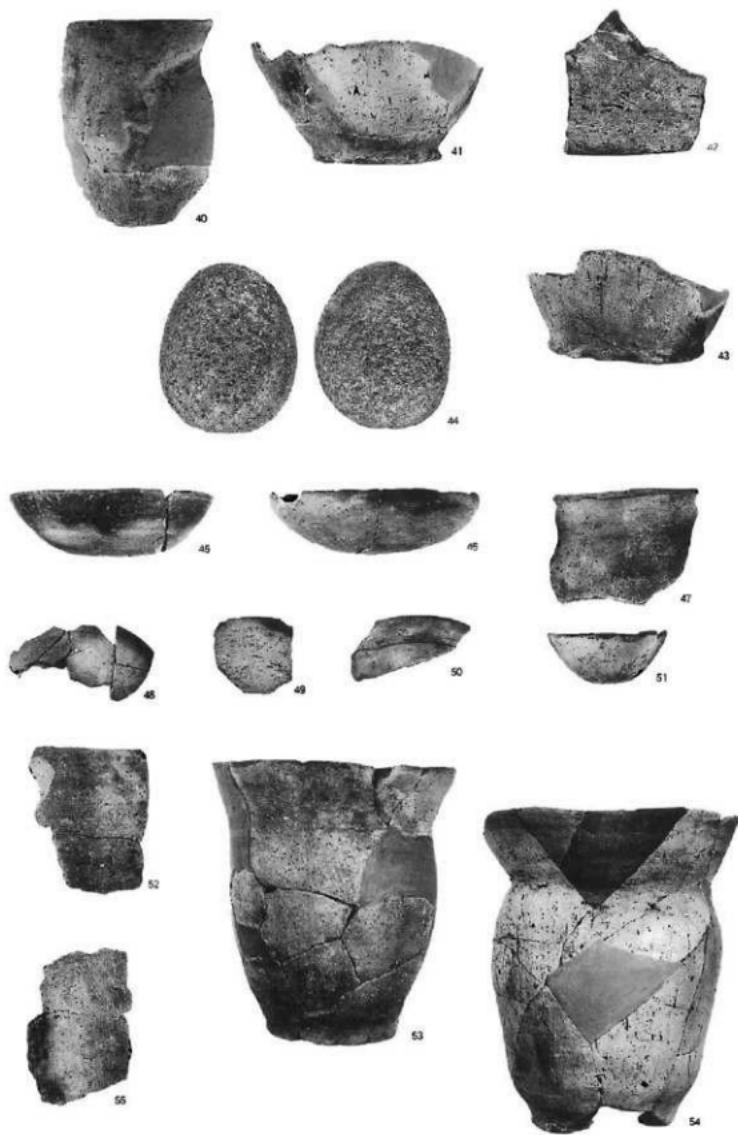
写真図版36 S 101 穴住居跡出土遺物



写真図版37 S101・02竪穴住居跡出土遺物



写真図版38 S 103 穩穴住居跡出土遺物



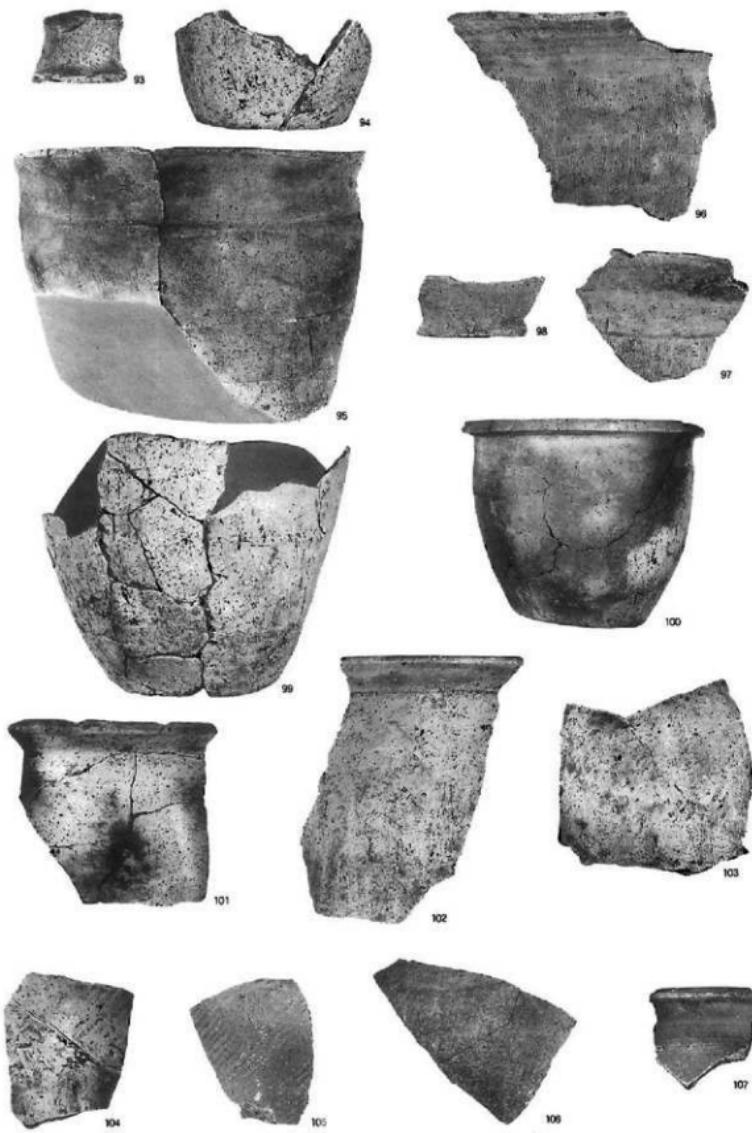
写真図版39 S103・04竪穴住居跡出土遺物



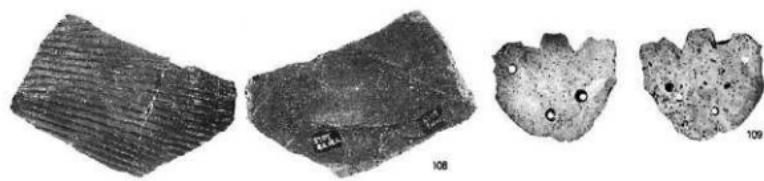
写真図版40 S104～06 穴住跡出土遺物



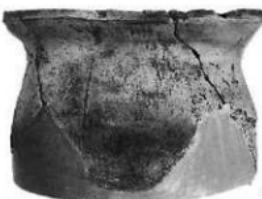
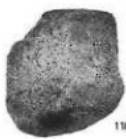
写真図版41 S106・07竪穴住居跡出土遺物



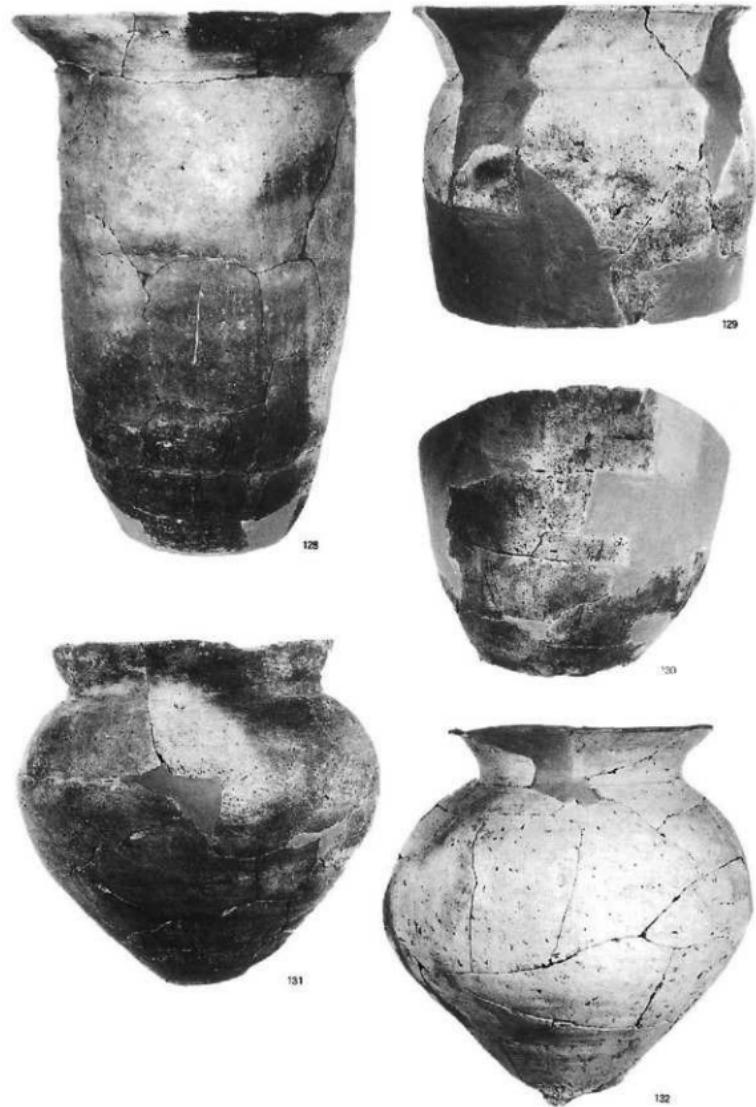
写真図版42 S 107 積穴住居跡出土遺物



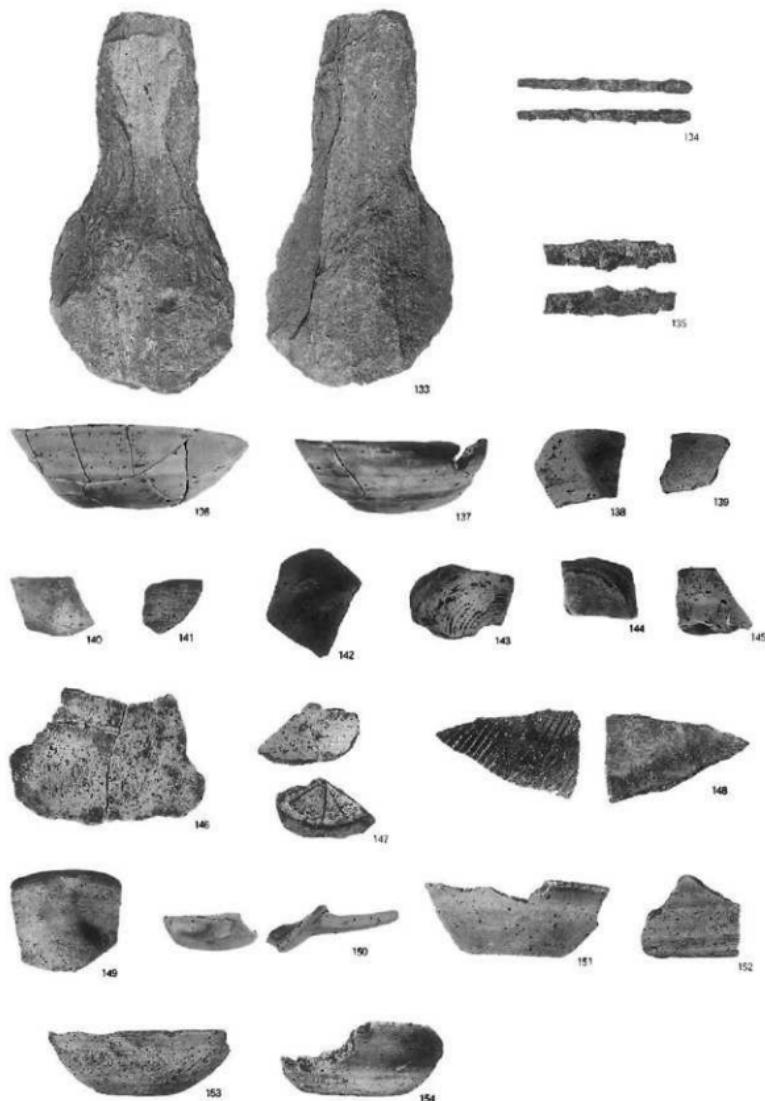
写真図版43 S107·08 穂穴住居跡出土遺物



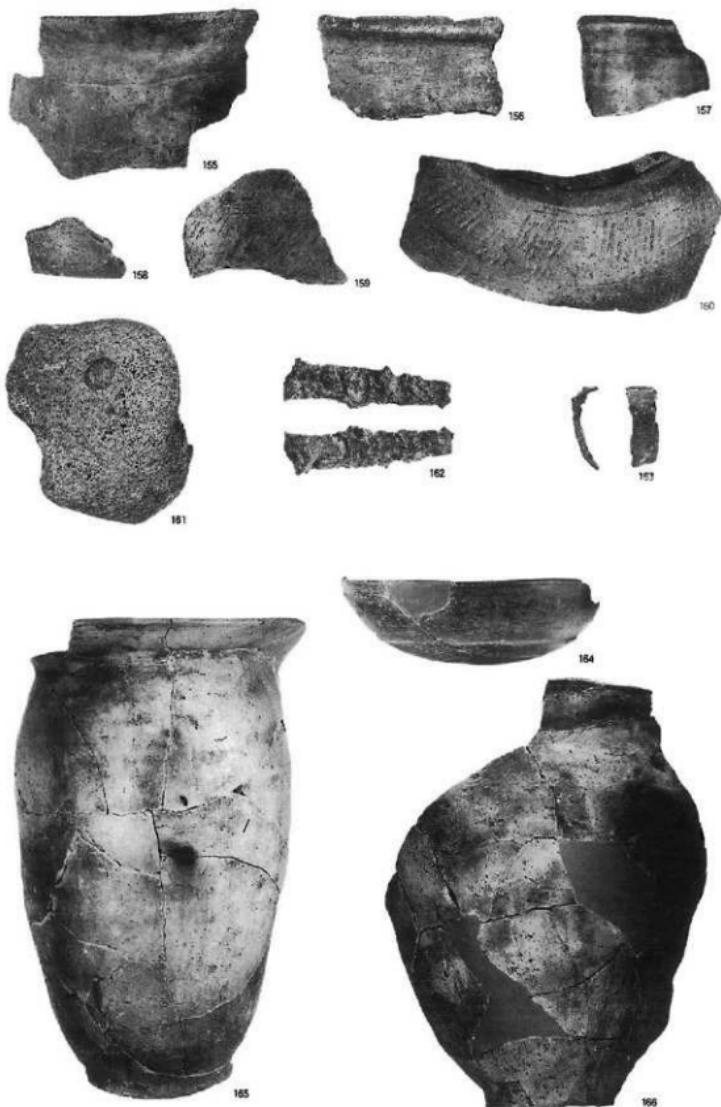
写真図版44 S I O 8 穴住居跡出土遺物



写真図版45 S I O 8 穴住居跡出土遺物



写真図版46 S108~10竪穴住居跡出土遺物



写真図版47 S I 10・11竪穴住居跡出土遺物



写真図版48 S 113・14 製穴住居跡出土遺物



177



178



179



180

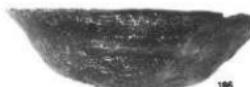
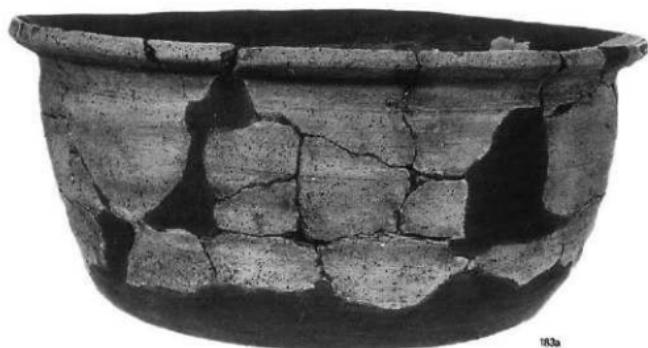


181



182

写真図版49 S I 1 4 竪穴住居跡出土遺物



写真図版50 S I 14・15 積穴住居跡出土遺物



190



191



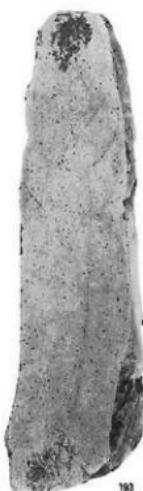
192



194



193



写真図版51 S I 1 5 穴住居跡出土遺物



195



196



197



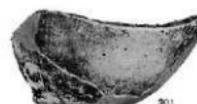
198



199



200



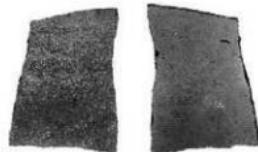
201



202-a



202-b



203



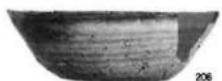
204



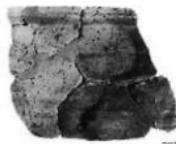
写真図版52 S I 15 積穴住居跡出土遺物



206



206



207



208



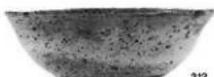
209



210



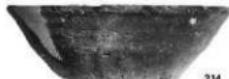
211



212



213



214



215



216



217

写真図版53 S I 17 - 18 穴住居跡出土遺物



218



219



220



221



222



223



224



225



226



227



228



229



230



231



232

写真図版54 S I 18・19竪穴住居跡出土遺物



写真図版55 S I 19 穴住居跡出土遺物



251



252



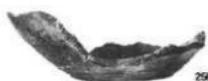
253



254



255



256



257



258



259



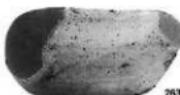
260



262



261



263



264

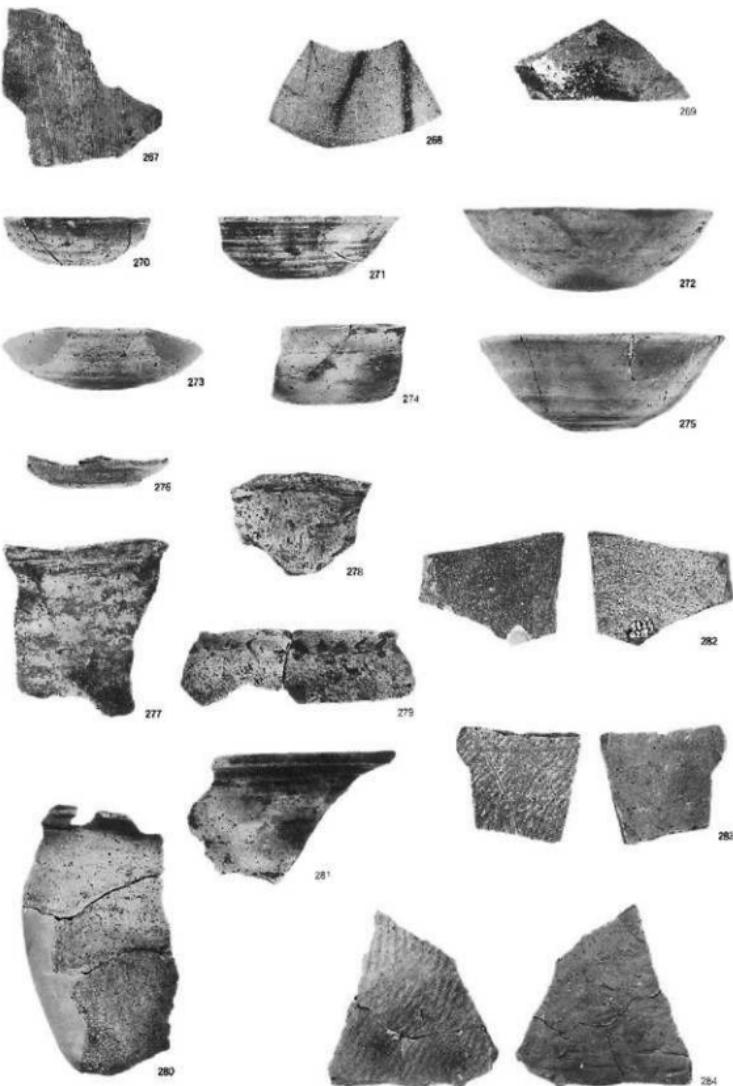


265

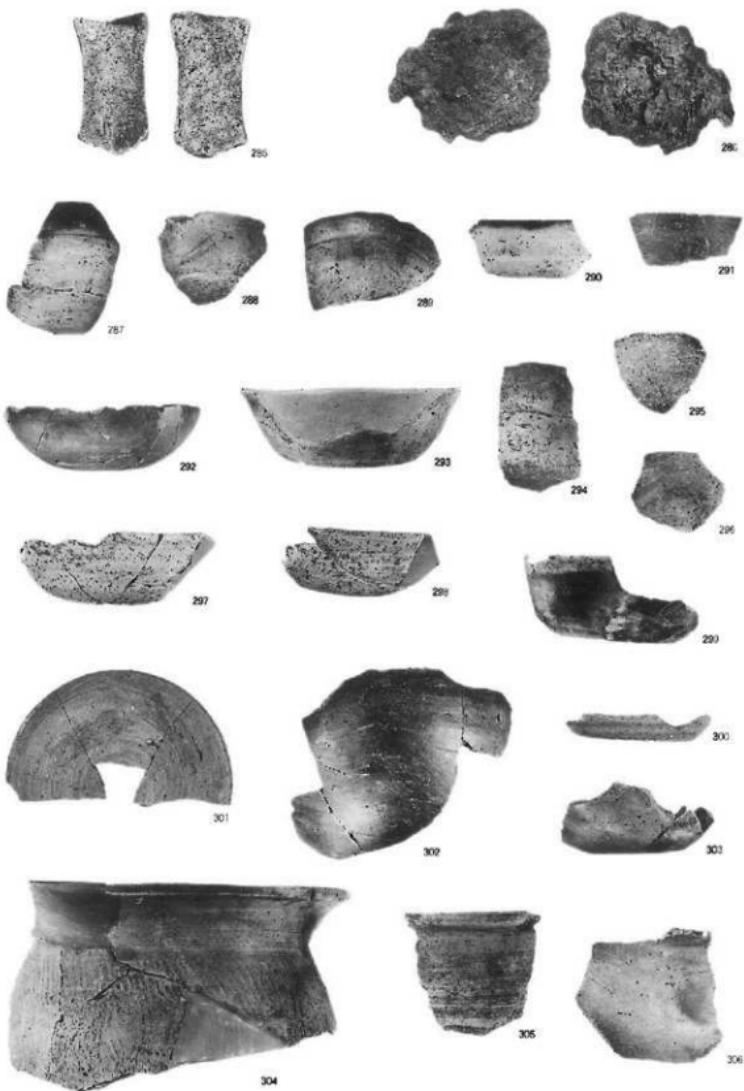


266

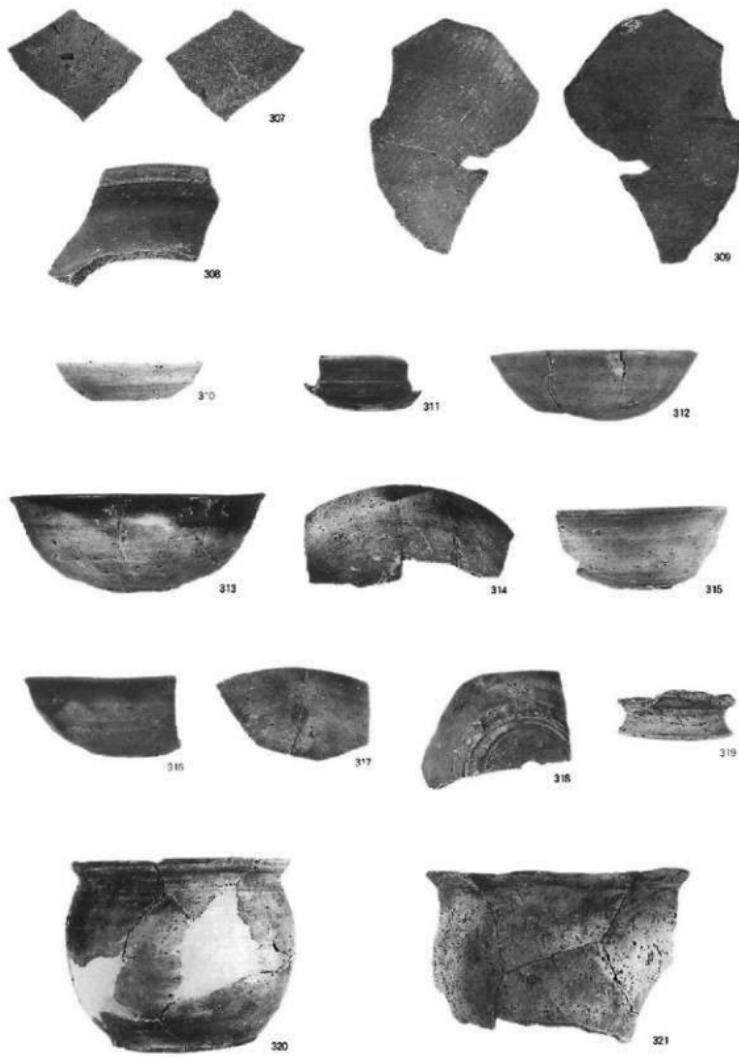
写真図版56 S 120・21竪穴住居跡出土遺物



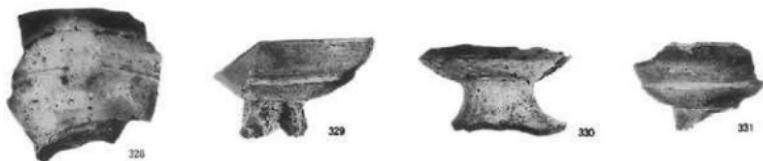
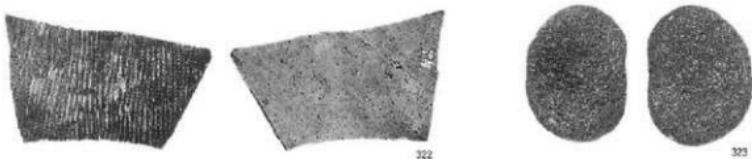
写真図版57 S I 2 1 + 2 2 穂穴住居跡出土遺物



写真図版58 S.I 2.2・2.3竪穴住居跡出土遺物



写真図版59 S 1 2 3 + 2 4 穹穴住居跡出土遺物



写真図版60 S I 2 4 穹穴住居跡・S X 0 1 遺物集中区出土遺物



341



343



342



344



345



346



347



348



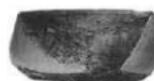
349



350



351



352



353



354



355



356

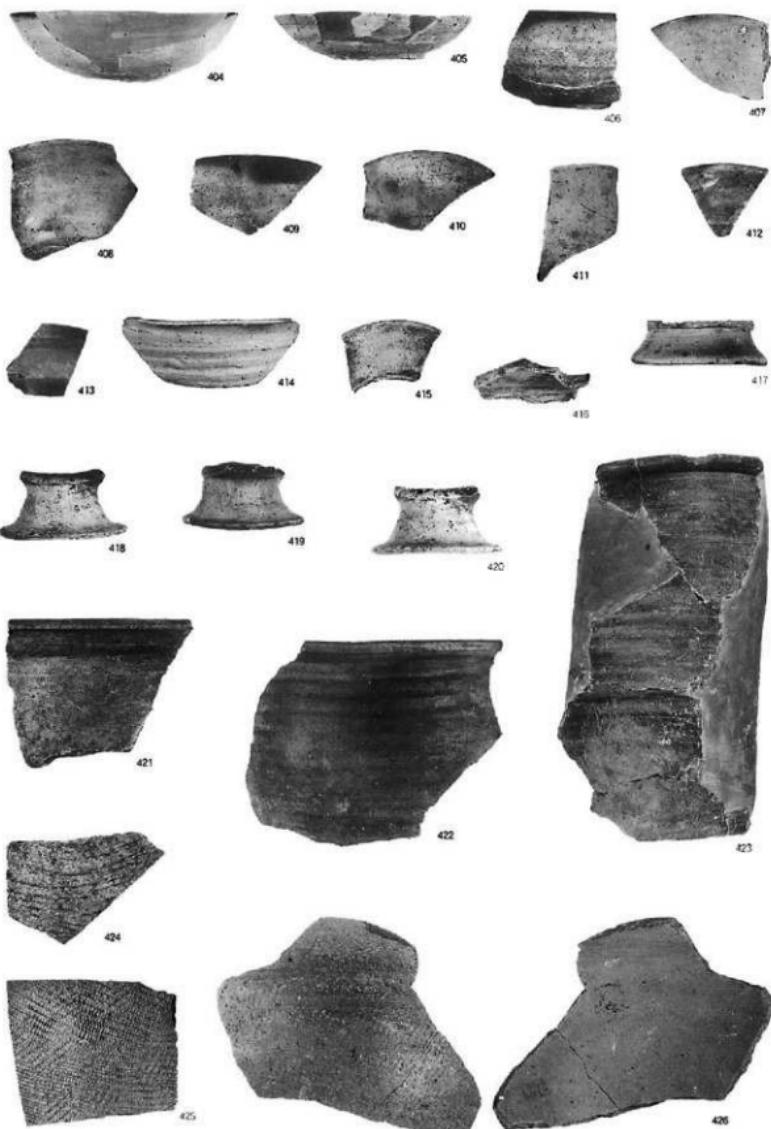
写真図版61 SX01遺物集中区・SX02竪穴状遺構出土遺物



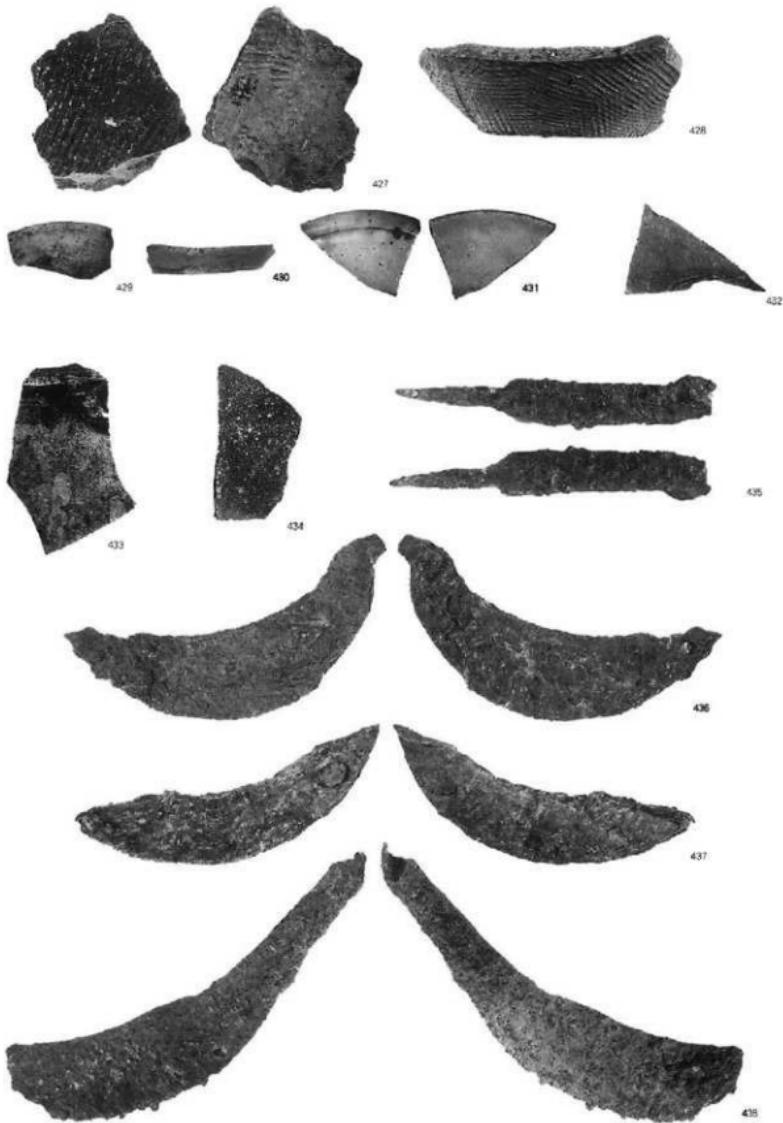
写真図版62 S X 0 2 穴状遺構出土遺物



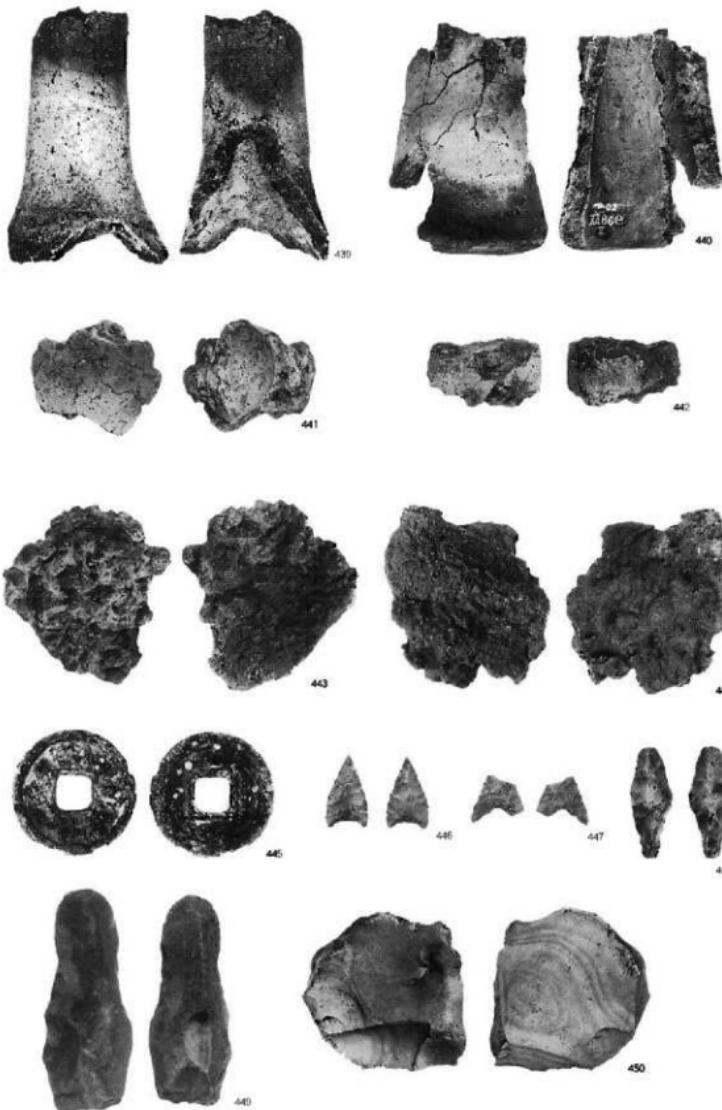
写真図版63 S D 0 1～0 3 方形周溝・遺構外出土遺物（1）



写真図版64 造構外出土遺物（2）



写真図版65 遺構外出土遺物（3）



写真図版66 遺構外出土遺物（4）

報告書抄録

ふりがな	すぎのどういせきはっくつちょうさほうこくしょ						
書名	杉の堂遺跡発掘調査報告書						
副書名	国道4号水沢東バイパス建設関連遺跡発掘調査						
巻次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第425集						
編著者名	丸山直美・齋藤麻紀子						
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下藤岡11地割185 TEL019-638-9001						
発行年月日	西暦2004年2月27日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度	東經 度	調査機関	調査面積	調査原因
杉の堂遺跡	岩手県水沢市 神明町2-58- 45ほか	03204 -0100	NE27 8分 21秒	39度 9分 45秒	2002.04.16 ~ 2002.09.04	6,626m ²	国道4号水沢東バイパス建設による緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
杉の堂遺跡	集落	古墳	竪穴住居跡	1棟	土師器 土製品(紡錘車)		
		奈良	竪穴住居跡 遺物集中区	8棟 1箇所	土師器		
		平安	竪穴住居跡	15棟	土師器・須恵器	平角材の柱を用いた 住居跡	
			竪穴状遺構	3棟	鉄製品(小刀・鉄鎌)		
		(12C後)	竪穴状遺構	1棟	土師器・須恵器 炭化種子	炭化種子が多量に出土した竪穴状遺構	
		時期不明	方形周溝 土坑 溝跡 柱穴状小ピット	3基 7基 1条 29基	かわらけ・常滑片		

* 緯度・経度は世界測地系による

平成15年度 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

所長	木村 異	副所長	平野 尤苗
〔管理課〕			
課長	並沢 正吾	嘱託	高橋 照雄
課長補佐	山岸 直美	ク	湯沢 邦子
主査	中嶋 賢一	ク	沼田 テル子
主事	猿橋 幸子	ク	伊藤 滋子
〔調査第一課〕			
課長	佐々木 勝	文化財調査員	北村 忠昭
課長補佐	佐々木 清文	ク	八木勝枝
文化財専門員	金子 昭彦	ク	丸山浩治
文化財調査員	吉田 充	ク	北田征熱
ク	亀 大二郎	ク	島原弘
ク	野 中真盛	期限付調査員	坂部恵造
ク	新妻伸也	ク	小林弘幸
ク	河部勝則	ク	藤原大輔
ク	杉沢 昭太郎	ク	小針大志
ク	西澤 正晴	ク	太田代一彦
ク	村木 敬	ク	新井田えり子
〔調査第二課〕			
課長	三浦 謙一	文化財調査員	星雅之
課長補佐	中川重紀	ク	佐藤淳一
ク	高橋義介	ク	星幸文
文化財専門員	小山内透	ク	溜浩二郎
ク	金子 佐知子	ク	本多準一郎
ク	濱田 宏	ク	九山直美
文化財調査員	赤石 登澄	ク	福田和正
ク	阿部 真博	ク	米須寛拓
ク	水上 明	ク	中川村絵晋
ク	阿部 慶淳	ク	又田淳拓
ク	早坂 則也	ク	上村高里
ク	小松 则也	ク	(村)麻紀子
ク	阿部 德幸	ク	斎石臣和
ク	窓岩 伸吾	ク	吉崎和裕
ク	亀澤 盛行	ク	立花敦
ク	飯坂 重明	ク	江駒木野智
ク	鈴木 肇	ク	野智寛
ク	林 熊明	ク	
ク	阿部 孝明	ク	
ク	羽柴 直人	ク	

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第425集

杉の堂遺跡発掘調査報告書

国道4号水沢東バイパス建設関連遺跡発掘調査

印刷 平成16年2月20日

発行 平成16年2月27日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185

電話 (019) 638-9001

FAX (019) 638-8563

印刷 永代印刷株式会社

〒020-0811 岩手県盛岡市川町23-10

電話 (019) 623-0111

FAX (019) 625-5454

